

# 上村池遺跡発掘調査報告書Ⅰ

2020

加古川市教育委員会





写真 1 遺跡上空から城山を望む（南東から）



写真 2 遺跡上空から加古川上流を望む（南西から）



写真 3 調査区① (写真下が西)



写真 4 調査区② (写真下が南)



写真 5 調査区③北側 (写真下が南西)



写真 6 調査区③南側 (写真下が南西)



写真7 掘立柱建物3 (写真下が西)



写真8 掘立柱建物3 検出 (南から)



写真 9 掘立柱建物 3 P9 断面 (南から)



写真 10 掘立柱建物 3 出土遺物



写真 11 竪穴建物 1 (北東から)



写真 12 竪穴建物 1 出土遺物





写真 13 墓壙 1 (南から)



写真 14 墓壙 1 出土遺物



写真 15 溝2 (南から)



写真 16 溝2 出土遺物

## 序 文

加古川市は、播磨平野の東部を流れる一級河川加古川の恵みにより、古くから人々が暮らす豊かな場所です。発掘調査を行うと、その確かな軌跡が地中から姿を現します。

このたび完成した本書は、八幡町上西条に所在する上村池遺跡の発掘調査報告書です。

上村池遺跡は、奈良時代の古窯跡として登録されていたものの、これまで本格的な発掘調査は行われたことがなく、このたびの調査で奈良時代を中心とする集落跡であることが初めて明らかになりました。

本書の刊行が、市民の方々にとって郷土の歴史・文化を理解する資料として、また文化財保護へのご理解を深めていただく一助となれば幸いです。

最後になりましたが、現地での発掘調査実施及び報告書作成にあたり、多大なご協力を賜りました地元住民の方々や関係機関、関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和2年3月

加古川市教育委員会  
教育長 小南克己



## 例 言

- ・ 本書は、兵庫県加古川市八幡町上西条地内に所在する上村池遺跡の発掘調査報告書である。
- ・ 今回調査地は、遺跡分布地図上では「上村池遺跡」と「古堂廃寺」の2つにまたがるが、遺構・遺物の内容から、すべて上村池遺跡として報告する。
- ・ この調査は、兵庫県北播磨県民局が進める雁戸井地区ほ場整備事業に伴うものとして平成28年度及び29年度に実施した。
- ・ 雁戸井地区ほ場整備事業のうち、埋蔵文化財に関する調査は、加古川市教育委員会が主体となって実施した。
- ・ 発掘調査は2回に分けて実施し、平成28年度は、平成28(2016)年11月17日から平成29(2017)年3月10日まで、平成29年度は、平成29(2017)年11月1日から同年12月8日までの期間において実施した。
- ・ 整理作業及び報告書作成は、平成29(2017)年5月1日に開始し、以後数度の中断をはさみながら継続し、令和2(2020)年3月31日の報告書刊行をもって終了した。
- ・ 本調査は、加古川市教育委員会が実施し、安西工業株式会社、株式会社島田組及び株式会社文化財サービスの協力を得た。
- ・ 調査期間中(平成28年度から令和元年度まで)における調査体制は以下のとおりである。

### 加古川市教育委員会

教育長	田渕博之(平成30年度まで)、小南克己(令和元年度から)
教育指導部	
部長	日浦明彦(平成28年度まで)、大西隆博(平成29・30年度)、山本照久(令和元年度から)
調整担当部長	井部浩司(平成29年度)
次長	谷池正春(平成28年度まで)、平田喜昭(平成30年度)、杉本達之(令和元年度から)

### 文化財調査研究センター

所長	梶浦 匠(平成28年度まで)、沼田好博(平成29年度から)
副所長	宮本佳典
庶務担当係長	由井 章(平成28年度まで)、安田啓一郎(平成29・30年度)、吉岡和誠(令和元年度から)
主査	藤原典子(庶務事務担当)、高下 寛(令和元年度から)
学芸員	山中リュウ(調査担当)、平尾英希(調査補佐) 李 聖子(平成28年度)、浅井達也(平成29年度から)
埋蔵文化財専門員	西岡巧次(平成29・30年度)、岡田美穂(令和元年度から)

- ・ 遺物の水洗・注記・接合・復元は、加古川市臨時職員 井上かおり、窪田美佳、佐藤 薫、前川博子  
が実施した。
- ・ 遺物の実測及びトレースは、株式会社文化財サービスが実施した。
- ・ 遺構図トレースは、加古川市臨時職員 園原悠斗(立命館大学大学院)、林 弘幸(大手前大学大  
学院)、吉村慎太郎(立命館大学大学院)及び株式会社文化財サービスが実施した。

- ・遺物観察表の作成は平尾が行った。
- ・遺構写真の整理は井上が行った。
- ・本書に掲載の遺構写真は山中が撮影し、空中写真撮影は安西工業株式会社及び株式会社島田組が実施した。遺物写真は株式会社文化財サービスが撮影した。
- ・挿図の作成は、加古川市臨時職員 西村秀子及び株式会社文化財サービスが実施した。
- ・本書の執筆・編集は山中が行った。
- ・本調査において得られた諸資料・出土遺物は、加古川市教育委員会が保管・管理している。
- ・発掘調査から報告書の作成に至るまで、下記の方々や諸機関からご指導、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます（五十音順、敬称略）。

池田征弘 大北 浩 大本朋弥 岡田章一 岡本一士 奥山 貴 垣内拓郎 上月昭信  
 上月香澄 篠宮 正 清水一文 鈴木貴久美 田路 守 田中幸夫 永恵陽子 中川 涉  
 西森忠幸 藤木 海 藤田 淳 萬代和明 森内秀造 森下章司 安田 滋 山本祐作  
 加古川市雁戸井土地改良区事務所 加古川市文化財審議委員会 昌岩寺 成福寺  
 東播磨地域史懇話会 兵庫県教育委員会

## 凡 例

- ・本文中ならびに挿図中における標高は、東京湾平均海面（T.P）を用いた。また、遺構全体図中の座標値は、世界測地系（第Ⅴ系）に基づき、作図段階で設定したものである。
- ・上記の座標を基準とし、調査区全域に5m間隔のグリッドを設定した。なお、今回の調査区は3か所に分散しているため、グリッドの表記は統一した大グリッドを用いず、調査区毎に番号とアルファベットを設定している。
- ・本書に掲載の遺構番号は、整理作業時に掲載遺構として抽出したもののみについて、遺構種別ごとに通し番号を付した（例：掘立柱建物1、溝1など）。
- ・本書中の挿図の縮尺は、遺構図は1/40を基本とし、掘立柱建物跡のみ1/80とした。遺物実測図は1/4を基本とした。なお、上記と縮尺が異なる場合は個別に明示した。
- ・遺構図における線種・線号は以下のとおりである。
  - 調査区（実線・0.4mm）、遺構の上端（実線・0.3mm）、遺構の中端（実線・0.2mm）、遺構の下端（実線・0.1mm）、攪乱（実線・0.1mm）、復元線・隠れ線（破線）
- ・本書に掲載の遺物実測図は、出土した遺構にかかわらず通し番号を付している。
- ・遺物実測図中の線種は、外形線・中心線・区画線及びケズリによる稜線は実線、ナデによる稜線は破線で示した。また、須恵器の断面は黒塗り、青磁・白磁の断面は網掛け、それ以外の遺物の断面は白抜きで表現している。
- ・土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所『新版標準土色帖』（2014年版）に準じた。
- ・遺物観察表の計測値で用いている「\*」は復元値、「>」は残存値を表す。
- ・出土遺物のうち、土師器・須恵器の分類や年代観については『古代の土器1 都城の土器集成』古代の土器研究会（1992）を参照した。

# 目 次

巻頭図版

序文

例言・凡例

目次

第Ⅰ章 はじめに	1
第1節 遺跡の位置	1
第2節 調査に至る経緯と経過	1
第3節 地理的環境	7
第4節 歴史的環境	8
第Ⅱ章 遺構と遺物	25
第1節 概要	25
第2節 基本層序	25
第3節 竪穴建物跡	32
第4節 掘立柱建物跡	32
第5節 柱穴列	59
第6節 土坑・ピット	63
第7節 溝状遺構	76
第8節 墓壇	82
第9節 その他の遺構	82
第10節 包含層・表土出土遺物	86
第Ⅲ章 まとめ	107

図版

報告書抄録

# 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置	2	第18図 掘立柱建物3	36
第2図 は場整備事業予定範囲	3	第19図 掘立柱建物4	37
第3図 遺跡の範囲	4	第20図 掘立柱建物5	38
第4図 発掘調査時の調査区分	5	第21図 掘立柱建物6	39
第5図 調査地周辺の旧地形	7	第22図 掘立柱建物7	40
第6図 周辺の遺跡	10	第23図 掘立柱建物8	41
第7図 調査区①遺構配置図	15	第24図 掘立柱建物9	41
第8図 調査区②遺構配置図	17	第25図 掘立柱建物10	42
第9図 調査区③遺構配置図(全体)	18・19	第26図 掘立柱建物11	43
第10図 調査区③遺構配置図(北側)	21	第27図 掘立柱建物12	44
第11図 調査区③遺構配置図(南側)	23	第28図 掘立柱建物13	44
第12図 調査区①基本層序	26・27	第29図 掘立柱建物14	45
第13図 調査区②基本層序	28・29	第30図 掘立柱建物15	46
第14図 調査区③基本層序	30・31	第31図 掘立柱建物16	47
第15図 竪穴建物1	33	第32図 掘立柱建物17	48
第16図 掘立柱建物1	35	第33図 掘立柱建物18	48
第17図 掘立柱建物2	35	第34図 掘立柱建物19	49

第 35 図	掘立柱建物 20	50	第 65 図	ビット 4	74
第 36 図	掘立柱建物 21	51	第 66 図	ビット 5	74
第 37 図	掘立柱建物 22	52	第 67 図	ビット 6	76
第 38 図	掘立柱建物 23	53	第 68 図	ビット 7	76
第 39 図	掘立柱建物 24	54	第 69 図	ビット 8	77
第 40 図	掘立柱建物 25	55	第 70 図	溝 1	77
第 41 図	掘立柱建物 26	56	第 71 図	溝 2	78
第 42 図	掘立柱建物 27	56	第 72 図	溝 3	80
第 43 図	掘立柱建物 28	57	第 73 図	溝 4	81
第 44 図	掘立柱建物 29	58	第 74 図	墓塚 1	83
第 45 図	掘立柱建物 30	59	第 75 図	粘土探掘坑 1	84
第 46 図	柱穴列 1	60	第 76 図	性格不明遺構 1	85
第 47 図	柱穴列 2	61	第 77 図	性格不明遺構 2	86
第 48 図	柱穴列 3	62	第 78 図	竪穴建物 1・掘立柱建物 1～3 出土遺物	88
第 49 図	土坑 1	64	第 79 図	掘立柱建物 4・12・17・20・土坑 1～3 出土遺物	89
第 50 図	土坑 2	64	第 80 図	土坑 4～9・12 出土遺物	90
第 51 図	土坑 3	64	第 81 図	土坑 13・ビット 1～8 出土遺物	91
第 52 図	土坑 4	66	第 82 図	溝 1・2-①出土遺物	92
第 53 図	土坑 5	66	第 83 図	溝 2-②出土遺物	93
第 54 図	土坑 6	66	第 84 図	溝 2-③出土遺物	94
第 55 図	土坑 7	68	第 85 図	溝 3 出土遺物	95
第 56 図	土坑 8	68	第 86 図	溝 4・墓塚 1・性格不明遺構 2・包含層・表土-①出土遺物	96
第 57 図	土坑 9	68	第 87 図	包含層・表土-②出土遺物	97
第 58 図	土坑 10	70	第 88 図	包含層・表土-③出土遺物	98
第 59 図	土坑 11	70	第 89 図	包含層・表土-④出土遺物	99
第 60 図	土坑 12	71	第 90 図	包含層・表土-⑤出土遺物	100
第 61 図	土坑 13	72	第 91 図	遺構配置図 (7 世紀代)	109
第 62 図	ビット 1	72	第 92 図	遺構配置図 (8 世紀代)	111
第 63 図	ビット 2	72	第 93 図	遺構配置図 (12 世紀後半～13 世紀前半)	115
第 64 図	ビット 3	74			

## 表 目 次

表 1	周辺の遺跡	11	表 6	遺物観察表 (5)	105
表 2	遺物観察表 (1)	101	表 7	遺物観察表 (6)	106
表 3	遺物観察表 (2)	102	表 8	金属製品観察表	106
表 4	遺物観察表 (3)	103	表 9	石器観察表	106
表 5	遺物観察表 (4)	104			

## 図 版 目 次

写真 1	遺跡上空から城山を望む (南東から)	巻頭図版 1	写真 30	竪穴建物 1 竪穴西断面 (南東から)	図版 5
写真 2	遺跡上空から加古川上流を望む (南西から)	巻頭図版 1	写真 31	竪穴建物 1 竪穴道断面 (南東から)	図版 5
写真 3	調査区① (写真下が西)	巻頭図版 2	写真 32	竪穴建物 1 上層出土遺物 (東から)	図版 5
写真 4	調査区② (写真下が南)	巻頭図版 2	写真 33	竪穴建物 1 竪穴内出土遺物 (東から)	図版 5
写真 5	調査区③北側 (写真下が南西)	巻頭図版 3	写真 34	掘立柱建物 1 (南東から)	図版 6
写真 6	調査区③南側 (写真下が南西)	巻頭図版 3	写真 35	掘立柱建物 1 P1 断面 (南東から)	図版 6
写真 7	掘立柱建物 3 (写真下が西)	巻頭図版 4	写真 36	掘立柱建物 2 P1 (南から)	図版 6
写真 8	掘立柱建物 3 検出 (南から)	巻頭図版 4	写真 37	掘立柱建物 2 P1 断面 (南から)	図版 6
写真 9	掘立柱建物 3 P9 断面 (南から)	巻頭図版 5	写真 38	掘立柱建物 3 (南から)	図版 6
写真 10	掘立柱建物 3 出土遺物	巻頭図版 5	写真 39	掘立柱建物 3 北面側 (南から)	図版 7
写真 11	竪穴建物 1 (北東から)	巻頭図版 6	写真 40	掘立柱建物 3 P3 (南東から)	図版 7
写真 12	竪穴建物 1 出土遺物	巻頭図版 6	写真 41	掘立柱建物 3 P6 (北から)	図版 7
写真 13	墓塚 1 (南から)	巻頭図版 7	写真 42	掘立柱建物 3 P6 断面 (北から)	図版 7
写真 14	墓塚 1 出土遺物	巻頭図版 7	写真 43	掘立柱建物 3 P7 (南から)	図版 7
写真 15	溝 2 (南から)	巻頭図版 8	写真 44	掘立柱建物 3 P7 断面 (南東から)	図版 7
写真 16	溝 2 出土遺物	巻頭図版 8	写真 45	掘立柱建物 3 P8 (南から)	図版 7
写真 17	遺跡上空から西条方面を望む (南東から)	図版 1	写真 46	掘立柱建物 3 P8 断面 (北から)	図版 7
写真 18	上村池と調査区 (南東から)	図版 1	写真 47	掘立柱建物 4 P3 (東から)	図版 8
写真 19	調査区① (北から)	図版 2	写真 48	掘立柱建物 4 P4 断面 (西から)	図版 8
写真 20	調査区②部分 (写真下が北東)	図版 2	写真 49	掘立柱建物 5 P1 (南から)	図版 8
写真 21	調査区③北側 (南東から)	図版 3	写真 50	掘立柱建物 5 P1 断面 (南から)	図版 8
写真 22	調査区③北寄り (写真下が北東)	図版 3	写真 51	掘立柱建物 5 P2 断面 (東から)	図版 8
写真 23	調査区③南側 (写真下が北東)	図版 3	写真 52	掘立柱建物 5 P3 断面 (東から)	図版 8
写真 24	調査区①遺構検出 (南から)	図版 4	写真 53	掘立柱建物 7 P1 (東から)	図版 8
写真 25	調査区③遺構検出 (南東から)	図版 4	写真 54	掘立柱建物 7 P1 断面 (北から)	図版 8
写真 26	竪穴建物 1 (写真下が東)	図版 5	写真 55	掘立柱建物 8 (写真下が北東)	図版 9
写真 27	竪穴建物 1 土層断面 (北東から)	図版 5	写真 56	掘立柱建物 8 P3 断面 (南西から)	図版 9
写真 28	竪穴建物 1 竪穴掘 (東から)	図版 5	写真 57	掘立柱建物 8 P4 断面 (西から)	図版 9
写真 29	竪穴建物 1 竪穴北断面 (東から)	図版 5	写真 58	掘立柱建物 8 P5 断面 (西から)	図版 9



写真 59	掘立柱建物 9 (写真下が南東)	図版 9
写真 60	掘立柱建物 9 P1 (南から)	図版 9
写真 61	掘立柱建物 9 P2 断面 (西から)	図版 9
写真 62	掘立柱建物 9 P4 断面 (西から)	図版 9
写真 63	掘立柱建物 10 P1 (西から)	図版 10
写真 64	掘立柱建物 10 P1 断面 (南から)	図版 10
写真 65	掘立柱建物 11 (写真下が西)	図版 10
写真 66	掘立柱建物 11 P1 断面 (西から)	図版 10
写真 67	掘立柱建物 11 P2 断面 (南から)	図版 10
写真 68	掘立柱建物 11 P5 (西から)	図版 10
写真 69	掘立柱建物 12 P1 (北から)	図版 10
写真 70	掘立柱建物 12 P3 断面 (南から)	図版 10
写真 71	掘立柱建物 13 (写真下が西)	図版 11
写真 72	掘立柱建物 13 P2 断面 (南から)	図版 11
写真 73	掘立柱建物 13 P3 断面 (南から)	図版 11
写真 74	掘立柱建物 13 P4 断面 (南から)	図版 11
写真 75	掘立柱建物 14 (写真下が南西)	図版 11
写真 76	掘立柱建物 14 (南西から)	図版 12
写真 77	掘立柱建物 14 P1 (南から)	図版 12
写真 78	掘立柱建物 14 P2 (南東から)	図版 12
写真 79	掘立柱建物 14 P3 (西から)	図版 12
写真 80	掘立柱建物 14 P1 断面 (南東から)	図版 12
写真 81	掘立柱建物 14 P2 断面 (南から)	図版 12
写真 82	掘立柱建物 15 P1 (北から)	図版 12
写真 83	掘立柱建物 15 P3 断面 (南から)	図版 12
写真 84	掘立柱建物 16 P3 (東から)	図版 13
写真 85	掘立柱建物 16 P2 断面 (南東から)	図版 13
写真 86	掘立柱建物 17 P2 (南から)	図版 13
写真 87	掘立柱建物 17 P2 断面 (北から)	図版 13
写真 88	掘立柱建物 17 P3 断面 (南西から)	図版 13
写真 89	掘立柱建物 17 P4 断面 (南東から)	図版 13
写真 90	掘立柱建物 18 P4 (北から)	図版 13
写真 91	掘立柱建物 18 P4 断面 (西から)	図版 13
写真 92	掘立柱建物 19 P1 (東から)	図版 14
写真 93	掘立柱建物 19 P3 断面 (西から)	図版 14
写真 94	掘立柱建物 20 P2 (南から)	図版 14
写真 95	掘立柱建物 20 P4 断面 (西から)	図版 14
写真 96	掘立柱建物 21 (写真下が西)	図版 14
写真 97	掘立柱建物 21 検出 (西から)	図版 15
写真 98	掘立柱建物 21 断面 (南から)	図版 15
写真 99	掘立柱建物 21 P1 断面 (北から)	図版 15
写真 100	掘立柱建物 21 P5 断面 (南から)	図版 15
写真 101	掘立柱建物 22 P1 (南から)	図版 15
写真 102	掘立柱建物 22 P3 断面 (東から)	図版 15
写真 103	掘立柱建物 23 P1 (南から)	図版 15
写真 104	掘立柱建物 23 P1 断面 (東から)	図版 15
写真 105	掘立柱建物 24 P2 (南から)	図版 16
写真 106	掘立柱建物 24 P2 断面 (北西から)	図版 16
写真 107	掘立柱建物 25 P3 (南から)	図版 16
写真 108	掘立柱建物 25 P3 断面 (南から)	図版 16
写真 109	掘立柱建物 26 (北から)	図版 16
写真 110	掘立柱建物 26 P1 断面 (西から)	図版 16
写真 111	掘立柱建物 26 P2 断面 (南から)	図版 16
写真 112	掘立柱建物 26 P3 断面 (西から)	図版 16
写真 113	掘立柱建物 27 P2 断面 (北東から)	図版 17
写真 114	掘立柱建物 27 P4 断面 (南東から)	図版 17
写真 115	掘立柱建物 28 P1 断面 (南東から)	図版 17
写真 116	掘立柱建物 28 P2 断面 (南から)	図版 17
写真 117	掘立柱建物 29・30 (写真下が南)	図版 17
写真 118	掘立柱建物 29 P1 断面 (北西から)	図版 18
写真 119	掘立柱建物 30 P3 (南から)	図版 18
写真 120	掘立柱建物 30 P4 (南から)	図版 18
写真 121	掘立柱建物 30 P3 検出 (北から)	図版 18
写真 122	柱穴列 1 と掘立柱建物 8 (写真下が北東)	図版 18
写真 123	柱穴列 1 P2 断面 (南東から)	図版 18
写真 124	柱穴列 2 P3 (南から)	図版 18
写真 125	柱穴列 2 P1 断面 (南東から)	図版 18
写真 126	柱穴列 3 P1 (南から)	図版 19
写真 127	柱穴列 3 P3 (南から)	図版 19
写真 128	柱穴列 3 P1 検出 (西から)	図版 19
写真 129	柱穴列 3 P1 断面 (南から)	図版 19

写真 130	土坑 1 (南から)	図版 19
写真 131	土坑 1 断面 (北から)	図版 19
写真 132	土坑 2 断面 (東から)	図版 19
写真 133	土坑 2 遺物出土状況 (北から)	図版 19
写真 134	土坑 3 (東から)	図版 20
写真 135	土坑 3 断面 (西から)	図版 20
写真 136	土坑 4 (南東から)	図版 20
写真 137	土坑 5 (西から)	図版 20
写真 138	土坑 5 断面 (西から)	図版 20
写真 139	土坑 6 断面 (北西から)	図版 20
写真 140	土坑 8 (南から)	図版 20
写真 141	土坑 8 断面 (南から)	図版 20
写真 142	土坑 9 検出 (北から)	図版 21
写真 143	土坑 9 断面 (南から)	図版 21
写真 144	土坑 9 出土遺物	図版 21
写真 145	土坑 10 (南から)	図版 21
写真 146	土坑 10 断面 (南西から)	図版 21
写真 147	土坑 10 被熱面と遺構内ピット断面 (南西から)	図版 22
写真 148	土坑 11 (東から)	図版 22
写真 149	土坑 11 断面 (北東から)	図版 22
写真 150	土坑 11 被熱面 (東から)	図版 22
写真 151	土坑 12 (西から)	図版 22
写真 152	土坑 12 断面 (西から)	図版 22
写真 153	土坑 13 (北から)	図版 22
写真 154	土坑 13 断面 (北東から)	図版 22
写真 155	ピット 1 (南から)	図版 23
写真 156	ピット 1 断面 (南から)	図版 23
写真 157	ピット 2・掘立柱建物 2 (P2) 断面 (南東から)	図版 23
写真 158	ピット 3 (南から)	図版 23
写真 159	ピット 4 (南から)	図版 23
写真 160	ピット 4 断面 (北から)	図版 23
写真 161	ピット 6 (南から)	図版 23
写真 162	ピット 7 断面 (南から)	図版 23
写真 163	ピット 8 (南東から)	図版 24
写真 164	ピット 8 断面 (東から)	図版 24
写真 165	ピット 8 遺物出土状況 (南から)	図版 24
写真 166	溝 1 断面 (南から)	図版 24
写真 167	溝 2 検出 (南東から)	図版 24
写真 168	溝 2 断面 (北から)	図版 24
写真 169	溝 3 (南西から)	図版 24
写真 170	溝 3 断面 (南から)	図版 24
写真 171	溝 4 (南東から)	図版 25
写真 172	溝 4 断面 (西から)	図版 25
写真 173	墓壇 1 (東から)	図版 25
写真 174	墓壇 1 東西断面 (南から)	図版 25
写真 175	墓壇 1 南北断面 (東から)	図版 25
写真 176	墓壇 1 遺物出土状況 (南東から)	図版 25
写真 177	粘土探掘坑 1 (北から)	図版 25
写真 178	粘土探掘坑 1 断面 (北から)	図版 25
写真 179	性格不明遺構 1 (西から)	図版 26
写真 180	性格不明遺構 1 断面 (南東から)	図版 26
写真 181	性格不明遺構 2 (西から)	図版 26
写真 182	性格不明遺構 2 断面 (北から)	図版 26
写真 183	調査区①南側基本層序 (南東から)	図版 26
写真 184	調査区②地形の傾斜 (東から)	図版 26
写真 185	調査区②北側基本層序 (北東から)	図版 26
写真 186	調査区③南寄り基本層序 (南から)	図版 26
写真 187	実測遺物 1～11	図版 27
写真 188	実測遺物 12～24	図版 28
写真 189	実測遺物 25～35	図版 29
写真 190	実測遺物 36～46	図版 30
写真 191	実測遺物 47～56	図版 31
写真 192	実測遺物 57～68	図版 32
写真 193	実測遺物 69～82	図版 33
写真 194	実測遺物 83～96	図版 34
写真 195	実測遺物 97～109	図版 35
写真 196	実測遺物 110～118	図版 36
写真 197	実測遺物 119～129	図版 37
写真 198	実測遺物 130～142	図版 38
写真 199	実測遺物 143～151・162	図版 39
写真 200	実測遺物 152～161	図版 40



# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 遺跡の位置

上村池遺跡は、加古川市八幡町上西条地内に所在する弥生・奈良・平安時代の複合遺跡である（第1図）。

遺跡の所在する八幡町は、加古川市域の東端にあり、東を三木市、南を加古郡稲美町と接している。西側は市域の神野町と接しており、北側は上荘町との間に一級河川加古川が北東から南西へ向けて流下している。八幡町域の中央部には、加古川の支流である草谷川が西流している。近年都市化が進む加古川左岸地域の中では、現在でも農村の風景をよく残している地域と言えるが、南に位置する中心市街地近くを起点とする東播磨南北道路が上西条まで開通し、継続して三木市域へ向けて延伸工事が続けられていることなどから、徐々に開発が増えてきている場所である。

## 第2節 調査に至る経緯と経過

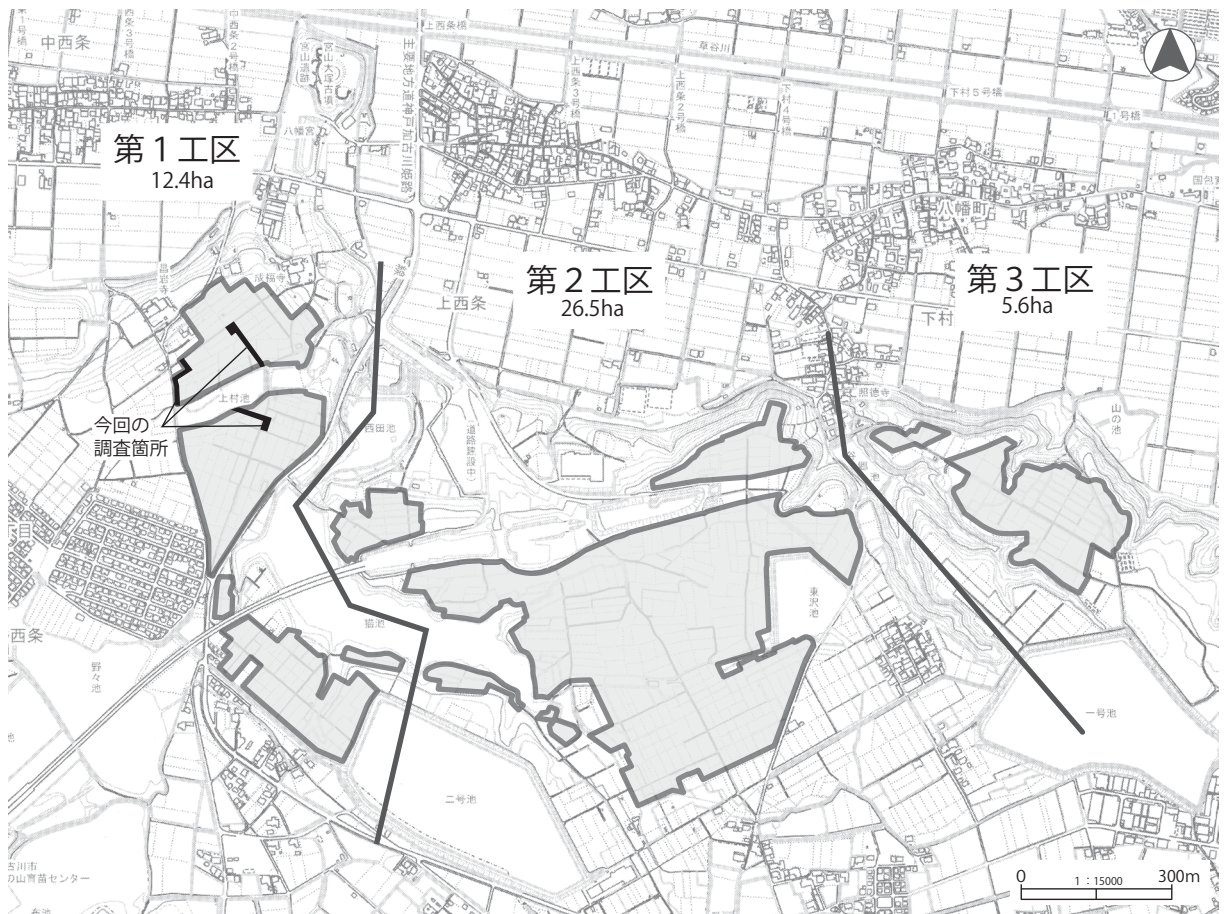
**調査に至る経緯** 平成25（2013）年5月、加古川市教育委員会（以下「市教委」という。）は、加古川市農林水産課から八幡町上西条及び下村の南側台地上に広がる農地におけるほ場整備事業計画について説明を受け、土地利用等の協議依頼を受けた。事業の計画範囲は56.4haと広大なもので、市教委は、計画地内に文化財保護法（以下「法」という。）第94条第1項の規定に基づく周知の埋蔵文化財包蔵地が複数含まれていることを伝え、工事着手前に法に基づく通知を市教委経由で兵庫県教育委員会（以下「県教委」という。）へ提出する必要がある旨の回答を行うとともに、包蔵地外を含めた事業対象地について、分布調査や確認・試掘調査を行い、埋蔵文化財の適切な把握と保護に努めることへの協力を依頼した。

その後、直接の事業主体である兵庫県北播磨県民局加古川流域土地改良事務所や地元の土地所有者等で構成される加古川市雁戸井土地改良区事務所などの関係機関を含めた協議、調整を経て、平成26年度に計画地全体に対する分布調査を実施した（第2図）。分布調査は、田植え前の平成26（2014）年4月から5月にかけてと、稲刈り後の平成27（2015）年1月から2月にかけての合計2回実施し、計画地全域を踏査し、地表面に散布する遺物の採集を行った。

続く平成27年度は、分布調査結果から得られた情報をもとに、遺物が多く散布していた場所を中心に確認・試掘調査を実施することとし、合計272か所の掘削調査計画を立てた。確認・試掘調査は、主に農閑期にあたる11月以降の実施となるため、ほ場整備の工事計画に合わせて2か年に分けて行うこととし、平成27年度は上西条西側エリアの「第1工区」と下村に所在する「第3工区」の一部を中心に112か所の確認・試掘調査を行うこととした。こうして、平成27年9月に調査対象となる土地の所有者や地元住民に対する説明会を経て、12月から翌年2月にかけて確認・試掘調査を実施した。このうち、第1工区の上西条西側エリアには、上村池の北側を中心に周知の埋蔵文化財包蔵地として奈良時代の古窯跡とされる「上村池遺跡」が知られ、その北側隣接地には奈良時代の古代寺院として「古堂廃寺」が登録されていた。調査の結果、これらの遺跡周辺は従来登録されていた範囲より広く遺構・遺物が展開していることが新たにわかり、掘立柱建物を中心とする集落遺跡であることがわかった。この成果をもとに、市教委は平成28（2016）年4月に埋蔵文化財包蔵地の変更届を県教委へ提出し、上村池遺跡の範囲拡大と遺跡の種類に「集落跡」を追加した（第3図）。



第1図 遺跡の位置



第2図 ほ場整備事業予定範囲

こうした動きを経て、平成28(2016)年5月17日付けで北播磨県民局から上村池遺跡・古堂廃寺の発掘届が市教委へ提出され、6月30日付けで県教委から本発掘調査を実施する必要がある旨の通知があった。その後、市教委と北播磨県民局は協議を重ね、遺跡範囲のうち大部分は盛土保護等によって遺跡を地中に保存することとし、水路工事などで破壊されてしまう約1,500㎡について本発掘調査を実施することとした。同年9月には、本発掘調査に向けての地元住民説明会を開催した。

発掘調査を実施する調査区は大きく3区画に分かれ、当初はすべて平成28年度に実施する予定であったが、古堂廃寺側の一部に農作業用の施設や小屋が残されていたためその範囲は次年度に実施することとし、平成28年度に約1,300㎡(上村池遺跡及び古堂廃寺の一部)、平成29年度に残りの200㎡(古堂廃寺の一部)の発掘調査を実施した。発掘調査期間は、平成28年度については平成28(2016)年11月17日から翌年3月22日まで、平成29年度については平成29(2017)年11月1日から12月8日までである。

なお、平成28・29年度には先述した確認・試掘調査の残り160か所(「第2工区」と「第3工区」の一部)も実施しており、同時期に隣接地で進められていた県教委による東播磨南北道路建設に伴う試掘調査の成果と併せて、「西田池南遺跡」「東沢5号墳」「前谷遺跡」「皿辻遺跡」「片山遺跡」「宗佐南遺跡」「宗佐遺跡」を新規発見の遺跡として県教委へ申請した。



第3図 遺跡の範囲

### 調査の経過

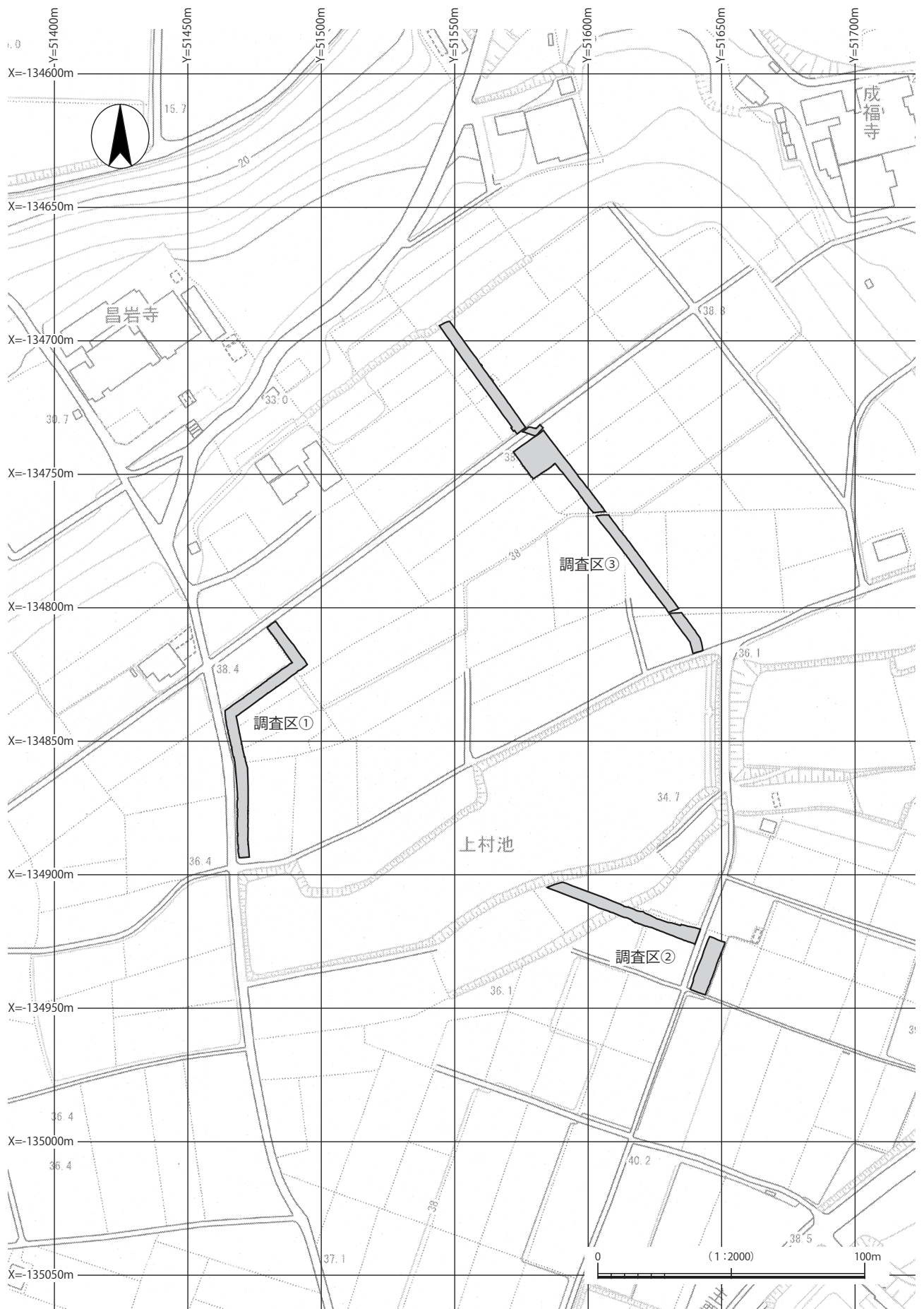
<平成 28 年度調査>

平成 28 (2016) 年

- 11月17日：工事計画に合わせて3か所（調査区①～調査区③）の調査区を設定して発掘調査に着手（第4図）。調査区①の北側から表土掘削を開始。
- 11月18日：表土掘削と並行して遺構検出作業開始。掘立柱建物に伴うと考えられる柱穴を多数検出。
- 11月29日：調査区①について遺構検出状況の全景写真撮影を実施。
- 11月30日：調査区①遺構精査開始。
- 12月2日：各遺構の断面図化作業開始。随時記録写真撮影。
- 12月6日：方形の柱掘方が並ぶ柱穴群を大型建物跡と認定（掘立柱建物3）。各遺構の平面図化作業開始。
- 12月16日：調査区①と並行して調査区②の表土掘削開始。
- 12月19日：調査区①においてカマド付の竪穴建物跡を検出（竪穴建物1）。調査区②の遺構検出作業開始。調査区②は遺構が非常に少ない。

平成 29 (2017) 年

- 1月12日：調査区①と並行して調査区②の遺構検出状況の全景写真撮影を実施し、遺構精査開始。
- 1月13日：調査区②について各遺構の断面及び平面の図化作業開始。随時記録写真撮影。



第4図 発掘調査時の調査区分

- 1月 17日：調査区①と並行して調査区③の調査範囲の位置測量。調査区②はほぼ終了。
- 1月 18日：調査区①と並行して調査区③の表土掘削開始。
- 1月 19日：調査区①と並行して調査区③の遺構検出作業開始。調査区①と同様に掘立柱建物に伴うと考えられる柱穴を多数検出。
- 1月 24日：調査区①と並行して調査区③南側の遺構検出状況について全景写真撮影を実施。
- 1月 26日：調査区①と並行して調査区③南側の遺構精査開始。
- 1月 27日：調査区①と並行して調査区③北側の遺構検出状況について全景写真撮影を実施。調査区③について各遺構の断面図化作業開始。随時記録写真撮影。
- 2月 1日：調査区①と並行して調査区③について各遺構の平面図化作業開始。
- 2月 3日：調査区①③と並行して調査区②について完掘後の空中写真撮影を実施。
- 2月 8日：調査区②の埋戻し作業開始。調査区①は竪穴建物 1 以外ほぼ終了。
- 2月 15日：調査区①について竪穴建物 1 以外の完掘全景写真撮影を実施。
- 2月 16日：調査区①について空中写真撮影を実施。
- 2月 23日：調査区③と並行して調査区①の竪穴建物 1 のカマド調査開始。
- 2月 28日：調査区①について竪穴建物 1 以外の範囲を埋戻し開始。調査区③について完掘後の空中写真撮影を実施。
- 3月 1日：調査区①について埋戻しを中断し、竪穴建物 1 の調査を継続。調査区③について完掘後の全景写真撮影を実施。以後、完掘後の平面図化作業等を継続。
- 3月 4日：発掘調査現地説明会開催（188 名参加）。
- 3月 6日：調査区①について竪穴建物 1 の調査終了。埋戻し再開。調査区③について下層確認のための深掘りを開始し、随時記録作業を実施。
- 3月 8日：調査区①について埋戻し終了。調査区③について調査終了。埋戻し開始。
- 3月 10日：調査区③の埋戻し終了。資材等の片づけ開始。
- 3月 17日：仮設ハウス等撤去。
- 3月 22日：資材等撤去。調査完了。

<平成 29 年度調査>

平成 29（2017）年

- 11月 1日：昨年度実施した調査区③の北側延長部分に調査区を設定。昨年度部分と接する南側から表土掘削を開始。
- 11月 2日：表土掘削と並行して遺構検出作業開始。遺構は北へ行くほど少ない傾向。
- 11月 10日：全体清掃後、遺構検出状況について全景写真撮影を実施。
- 11月 11日：遺構精査開始。
- 11月 15日：各遺構の断面及び平面の図化作業開始。随時記録写真撮影。
- 11月 17日：長方形の土坑内から完形の青磁碗や土師器皿出土（墓壙 1）。
- 11月 29日：全体清掃実施。完掘後の空中写真撮影を実施。
- 11月 30日：完掘後の全景写真撮影を実施。遺構の平面図化作業完了後、下層確認のための深掘りを開始し、随時記録作業を実施。
- 12月 6日：下層確認部分の記録終了。
- 12月 7日：埋戻し開始。
- 12月 8日：埋戻し終了。仮設ハウス・資材等撤去。調査完了。

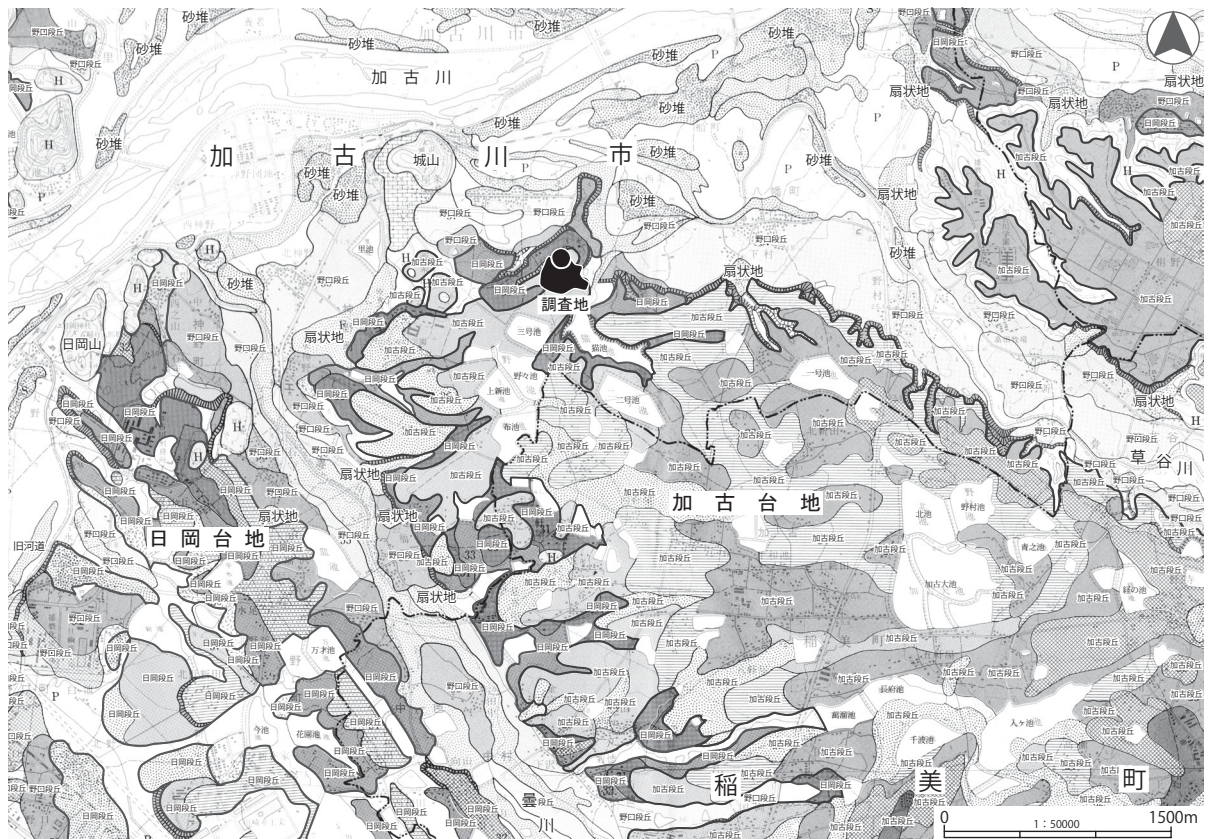


### 第3節 地理的環境

上村池遺跡や古堂廃寺は、八幡町上西条の西端付近の台地上に位置している。現在の地図上では、JR 加古川駅から北東へ5.5km、加古川河口からは北東約10kmの場所にあたる（第1図）。

地理的には、市名の由来ともなっている一級河川加古川の下流域に含まれ、加古川左岸の沖積平野を見下ろす段丘上に立地している（第5図）。加古川は、兵庫県丹波市青垣町を源として南流し、加古川市内の日岡山と升田山という2つの岩山の間を通過する。その後播磨灘へ流れ込むが、現在のよう流路が固定される以前は、この岩山の間を通過した先は幾筋もの流路に分かれて流れていた。その結果、下流域には大規模な沖積平野（氾濫原）が形成されることとなった。この沖積平野の東側は、六甲山塊によって形成された隆起扇状地となっており、神戸市垂水区神出町に所在する雌岡山付近を頂点とする広大な「いなみの台地」を形成している。『加古川市史第1巻』では、加古川と明石川の間に形成されたこの台地について細分し、加古川の支流である草谷川と曇川で限られた河岸段丘部分を「加古台地」、曇川より南側の海岸段丘部分を「日岡台地」と呼称している（田中1989）。

上村池遺跡や古堂廃寺は、上記加古台地の北西部に位置し、北側の沖積平野との境にあたる段丘崖縁辺からやや内陸寄りの場所に立地している。現在の周辺台地上の標高は約30mであり、標高約14mを測る沖積平野上とは約16mの比高差がある。また、遺跡周辺の細部の地形を見ると、上村池遺跡範囲の中央には近世以降に谷部の東側を塞いで造り出した農業用のため池「上村池」があり、遺跡の北側と南側はそれぞれ池に向かって下る緩やかな傾斜地となっている。田畑は、その斜面を削平あるいは盛土することで平坦面を造りだしており、池に向かって段々に下がる棚田状となっている。



第5図 調査地周辺の旧地形

## 第4節 歴史的環境

加古川下流域は、河川や海上交通のほか山陽道に代表される陸上交通の要衝でもあり、多くの遺跡が密集している場所である。加古川市内には、旧石器時代から中世にかけてその時々の特徴的な遺跡が残されている。以下に、上村池遺跡の立地する加古台地とその周辺について、時代ごとに変化する遺跡の様相を概観し、当該地における歴史的環境について述べる。

**旧石器時代・縄文時代** 旧石器時代・縄文時代の遺跡は、それ以後の時代に比べて調査例や発見例が少ない。また、「石器」や「縄文土器」など遺物のみが確認されている場合がほとんどである。

旧石器時代の遺跡としては、今回調査地の北西 1.2kmの位置に神野城山遺跡（第6図2、以下括弧内の番号は第6図及び表1に対応）がある。上村池遺跡と同じ台地上の、加古川に向けて舌状に大きく張り出した先端に位置する城山（標高約 85 m）の南側斜面にある遺跡で、石器の散布が報告されている。また、城山の南西、加古川支流の曇川を挟んだ対岸の日岡台地上には、同じく加古川へ向けて張り出した日岡山（標高約 60 m）があり、その南側斜面に日岡山遺跡（4）がある。加古川を超えた北側丘陵地帯には、観音堂遺跡（484）や西山遺跡（498）をはじめ多くの散布地が認められる。市域以外では、上村池遺跡と同じ加古台地の南東側奥部にあたる稲美町域において、千波池遺跡（稲7）やヶ池遺跡（稲35）、琴池遺跡（稲2）など複数の旧石器散布地が登録されている。

加古川市、稲美町いずれの遺跡についても、表面採集の遺物が中心で原位置を留めた状態での出土例はないものの、いくつかの遺跡で石器製品だけでなく剥片や碎片（チップ）が採集されていることから、地中にユニットやブロックを形成するような文化層が残されている可能性も考えられる。

縄文時代の遺跡としては、今回調査地の北側に宮山遺跡（5）がある。後期の竪穴建物跡や集石遺構が検出されたとして、隣接する古墳群とともに昭和 43（1968）年に市の指定文化財となっているが、具体的な調査内容の情報は少ない（上田 1983、松下 1984）。南西の加古川沖積地や低位段丘上には溝之口遺跡（10）、坂元遺跡（634）がある。溝之口遺跡では古墳時代の溝に混入した晩期の土器片が確認されたのみであるが、坂元遺跡では晩期の埋甕土坑が複数調査されており、微高地上に埋甕を用いた墓が展開していたと考えられている（渡辺 2009）。その他、加古川右岸側の沖積地にある砂部遺跡（東神吉町砂部）、その北側の段丘上にある岸遺跡（西神吉町岸）などにおいて晩期の土器出土例があるが、現在のところ遺構は確認されていない。市域外では、旧石器時代と同様に千波池遺跡や琴池遺跡が散布地として登録されている。

今回の調査では、遺物包含層中から数点の縄文土器が出土している。

**弥生時代** 弥生時代になると市域全体で遺跡の数が大幅に増加する。

前期の遺跡は、今回調査地付近を含めて発見例は少ないが、北東側の草谷川南岸の低位段丘上に位置する下村遺跡（289）は、『加古川市史第1巻』において弥生時代の全期間の遺物が出土する拠点集落として紹介されている（置田 1989）。ほかに、調査地からは離れるが、溝之口遺跡の北側に隣接する美乃利遺跡（218）では、溝や土坑とともに広範囲に広がる水田跡が検出されており、溝之口遺跡の東側の別府川を挟んだ低位段丘上に立地する坂元遺跡でも土器の出土が認められる。

その他の市域の前期遺跡をみると、加古川右岸側の沖積地においてより充実した調査成果が得られている。東神吉町に所在する砂部遺跡と東神吉遺跡は、現在の加古川右岸沖積地上に隣りあって所在する集落遺跡である。両者を同一の集落と考える見方もあり、前期における拠点的な集落と考えられ

ている。砂部遺跡では、全国的に発見例の少ない土器焼成土坑が複数検出されており注目される。

今回調査地付近の中期遺跡としては、東側の加古台地縁辺にある望塚<sup>ぼんづか</sup>（12）において扁平鈕式6区袈裟襷文の銅鐸1点が発見されている。大正期の耕地整理の際に塚の下から出土したと伝えられているが、平成19（2007）年に行われた兵庫県教育委員会による「通称望塚」の発掘調査では、銅鐸を埋納した痕跡等は確認されず、耕地整理後に造られたものであることが明らかとされた（山田 2012）。そのため、正確な出土地点は不明とされている。なお、大正期の耕地整理の際には上部の塚から古墳時代の遺物が出土したとの言い伝えもあり、塚と銅鐸に直接的な関連性はないと考えられている。発掘調査後の望塚は、発掘現場の北側に新設され残されている。望塚よりさらに東の台地縁辺部には片山遺跡（644）がある。近年の発掘調査において方形周溝墓が複数調査されている。両遺跡とも北側の低位段丘に位置する下村遺跡に近いので、集落の後背にある高台を祭祀空間や墓域として利用していた可能性がある。その他、加古台地の集落遺跡としては、今回調査地西側の台地上に西条廃寺下層遺跡（226）がある<sup>1)</sup>。古代寺院の下層から検出された円形の竪穴建物が調査されている。

加古川下流の沖積地や低位段丘では、前期から継続する溝之口遺跡、美乃利遺跡、坂元遺跡が代表的である。特に、溝之口遺跡は中期において飛躍的に規模が拡大し、この時期における拠点集落と考えられている。開発に伴う調査も多く実施されたことから、竪穴建物が密集する居住域、方形周溝墓を主体とする墓域、水田が営まれた生産域という集落景観が徐々に明らかにされつつある。また、溝之口遺跡出土の豊富な土器群は、東播磨の中期弥生土器の基準資料として紹介されることも多い。加古川の右岸側では、沖積地内に前期から継続する砂部遺跡があり、丘陵上には中期のみ短期的に存続した集落と考えられる平山遺跡（11）などがある。

今回調査地付近の後期遺跡としては、上村池南東側の台地縁辺部で甕棺墓が検出された播磨堂遺跡（20）があり、さらに東側の台地縁辺にある大日山遺跡（19）では壺棺墓が検出されている。また、前出の片山遺跡では竪穴建物跡が調査され、草谷川右岸側で近年新たに発見された宗佐遺跡（638）の調査でも竪穴建物跡が複数棟検出されている。西側では、加古台地が加古川へ向かって北へ張り出した段丘上に西条52号墓（89）がある。開発によりすでに消滅しているが、工事直前に行われた緊急発掘によって、円丘部と突出部によって構成された弥生時代終末期の墳丘墓であることがわかっている。石槨に囲まれた埋葬施設からは、内行花文鏡などが出土している。その西側の低位段丘上には西条遺跡（485）や手末遺跡（249）があり<sup>2)</sup>、竪穴建物跡が検出されている。手末遺跡の調査では、平面六角形の竪穴建物から大量の土器が投棄された状態で出土した。

加古川下流左岸の沖積地や低位段丘では、引き続き溝之口遺跡が集落として継続しているとともに、隣接する坂元遺跡や美乃利遺跡において、より多くの遺構・遺物が確認されるようになる。美乃利遺跡では、工房跡とも考えられる六角形の竪穴建物跡や祭祀に関連すると考えられる土坑が調査され、土坑からは特殊な形態と文様を持つ器台などが出土している。これらの遺跡の周辺には、栗津遺跡（294）、北在家遺跡（292）など小規模な集落遺跡が点在しており、上記拠点集落からの分村集落とも考えられている。一方、加古川右岸側では、今回調査地の北側対岸の丘陵上に八ツ塚3号墓（上荘町井坂八ツ塚山）がある。溝に囲まれた隅丸方形の墳丘墓とされ、溝から後期の土器口縁部が出土している。また、下流の沖積地には引き続き砂部遺跡があり、段丘上の岸遺跡でもまとまった土器の出土が認められるが、いずれも遺構は乏しい。

**古墳時代** 古墳時代は、集落遺跡の発見例や調査事例が少なく詳細な検討は進んでいない。対して、加古川流域一帯に築かれた豊富な古墳群の様相について多くの研究や報告がなされている。



『兵庫県遺跡地図第3分冊遺跡分布地図』兵庫県教育委員会2011年より作成

第6図 周辺の遺跡

遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代	遺跡番号	遺跡名	時代
002	神野城山遺跡	旧石器	142～149	池尻5号墳～12号墳	古墳	481	石守3号墳	古墳
004	日岡山遺跡	旧石器	150	池尻13号墳	古墳	484	観音堂遺跡	旧石器
005	宮山遺跡	縄文～平安	151	池尻14号墳	古墳	485	西条遺跡(旧神野遺跡)	縄文～平安
010	溝之口遺跡	弥生～平安	152	升田山15号墳	古墳	488	古代山陽道	奈良
011	平山遺跡	弥生	153	池尻16号墳	古墳	490	上村池遺跡	奈良
012	望塚(盆塚)	弥生	154	池尻17号墳	古墳	498	西山遺跡	古墳
019	大日山遺跡	弥生	155	池尻19号墳	古墳	508	石守古墳群4号墳	古墳
020	播磨堂遺跡	弥生	156	池尻20号墳	古墳	509	石守古墳群5号墳	古墳
022	東車塚古墳	古墳	157	池尻21号墳	古墳	512	野村古窯跡1号窯	奈良
024	狐塚古墳	古墳	158	池尻22号墳	古墳	513	野村古窯跡2号窯	奈良
025	勅使塚古墳	古墳	159	池尻23号墳	古墳	518	升田山11号墳	古墳
026	ひれ墓古墳	古墳	160	池尻24号墳	古墳	519	升田山12号墳	古墳
027	西車塚古墳	古墳	161～163	池尻25号墳～27号墳	古墳	550	野村古窯跡3号窯	奈良
028	南大塚古墳	古墳	164～166	池尻28号墳～31号墳 (29号墳欠番)	古墳	551	野村古窯跡4号窯	奈良
029	西大塚古墳	古墳	167～171	池尻32号墳～36号墳	古墳	607	升田山13号墳	古墳
030	北大塚古墳	古墳	172～182	池尻37号墳～47号墳	古墳	608	升田山14号墳	古墳
031	行者塚古墳	古墳	183～189	池尻48号墳～54号墳	古墳	611	天神前遺跡	中世
032	尼塚古墳	古墳	190	升田山1号墳	古墳	615	猫池遺跡	弥生
033	人塚古墳	古墳	191	升田山2号墳	古墳	616	野村遺跡	弥生
034	宮山大塚古墳	古墳	192～198	升田山3号墳～9号墳	古墳	617	良野遺跡	弥生
042	里古墳	古墳	199	升田山10号墳	古墳	618	天王山遺跡	古墳
043	西山大塚古墳	古墳	200	天下原古墳	古墳	621	教信寺	平安～中世
044	池尻2号墳	古墳	214	野新村古窯跡1号窯	古墳	623	天王山1号窯	中世
045	カンス塚古墳	古墳	215	野新村古窯跡2号窯	古墳	624	天王山2号窯	中世
046	野村1号墳	古墳	216	野新村古窯跡3号窯	古墳	625	天王山1号墳	古墳
047	野村2号墳	古墳	218	美乃利遺跡	弥生～中世	626	天王山2号墳	古墳
048	野村3号墳	古墳	219	升田遺跡	奈良	627	天王山3号墳	古墳
049	池ノ尻古墳	古墳	220	古大内遺跡	奈良	628	東沢2号墳	古墳
050	成福寺1号墳	古墳	223	野口廃寺	奈良	629	東沢中遺跡	弥生
051	成福寺2号墳	古墳	224	溝之口廃寺	奈良	630	東沢1号墳	古墳
052	西田池1号墳	古墳	225	石守廃寺	奈良	631	神野大林古窯跡1号窯	古墳
053	西田池2号墳	古墳	226	西条廃寺	奈良	632	神野大林古窯跡2号窯	古墳
054	西田池3号墳	古墳	227	古堂廃寺	奈良	633	神野大林古窯跡3号窯	古墳
055	宮山1号墳	古墳	229	西条蔵骨器群	中世	634	坂元遺跡	縄文～中世
056	宮山2号墳	古墳	230	西条土壙墓	中世	635	神野北山遺跡	古墳
057	宮山3号墳	古墳	231	日岡山壺棺墓	弥生	636	大野遺跡	平安～中世
058	宮山4号墳	古墳	233	野新村古墳	古墳	638	宗佐遺跡	弥生～中世
059	宮山5号墳	古墳	234	日岡遺跡	弥生～古墳	639	宗佐南遺跡	中世
060	宮山6号墳	古墳	235	野新村1号墳	古墳	641	前谷遺跡	奈良～平安
061	城山1号墳	古墳	238	下村古墳	古墳	644	片山遺跡	弥生～中世
062～072	西条1号墳～14号墳 (8・11号墳欠番)	古墳	241	古大内城跡	中世	645	皿辻遺跡	中世
073～079	西条21号墳～31号墳 (22・33号墳欠番)	古墳	242	西条城跡	中世	三001	下石野5号墳(愛宕山古墳)	古墳
080～092	西条32号墳～59号墳 (33・41～50・54～57号墳欠番)	古墳	245	横倉城跡	中世	三002	下石野1号墳	古墳
093	西条61号墳	古墳	248	石守構居跡	中世	三003	下石野2号墳	古墳
094	西条61・2号墳	古墳	249	手末構居跡	中世	三004	下石野3号墳	古墳
095	二塚1号墳	古墳	250	高田構居跡	中世	三005	下石野4号墳	古墳
096	二塚2号墳	古墳	251	中津構居跡	中世	三006	下石野上畑遺跡	奈良～平安
097	若神社古墳	古墳	252	国包構居跡	中世	三007	下石野高田散布地	弥生・平安
098	日岡山1号墳	古墳	253	宗佐構居跡	中世	三008	下石野西角散布地	中世
099	日岡山2号墳	古墳	254	野村構居跡	中世	三009	下石野和田ノ上散布地	奈良～平安
100	日岡山3号墳	古墳	259	野口城跡	中世	三010	王子山1号墳～14号墳	古墳
101～117	日岡山4号墳～20号墳	古墳	260	長砂構居跡	中世	～023		
118	石守1号墳	古墳	261	細田構居跡	中世	三024	王子神社経塚	平安～中世
119	水足1号墳	古墳	277	池尻18号墳	古墳	三025	下石野坂芝遺跡	奈良
129	飯盛山4号墳	古墳	279	地藏寺6号墳	古墳	三026	石野田中散布地	奈良
130	飯盛山5号墳	古墳	282	水足2号墳	古墳	三027	石野氏館跡	中世
131	飯盛山6号墳	古墳	287	成福寺3号墳	古墳	稲002	琴池遺跡	旧石器～近世
132～136	地藏寺1号墳～5号墳	古墳	288	成福寺4号墳	古墳	稲007	千波池遺跡	旧石器～縄文 平安～中世
137	平山1号墳	古墳	289	下村遺跡	弥生～平安	稲035	入ヶ池遺跡	旧石器
138	平山2号墳	古墳	292	北在家遺跡	弥生～古墳	稲038	中村窯跡	その他
139	平山3号墳	古墳	294	粟津遺跡	弥生～古墳			
140	池尻3号墳	古墳	299～303	池尻55号墳～59号墳	古墳			
141	池尻4号墳	古墳	305	具平塚古墳	古墳			
			333	平山4号墳	古墳			
			357	平野遺跡	弥生			
			478	佐伯寺跡	平安			
			480	石守2号墳	古墳			

\* 遺跡番号の「三」は三木市、「稲」は稲美町の遺跡

表1 周辺の遺跡

今回調査地周辺の古墳としては、北側の台地先端部に宮山大塚古墳（34）を中心とする宮山古墳群がある。宮山大塚古墳は前期の円墳として紹介された例があるが（上田 1983）、本格的な発掘調査が行われたことはなく詳細は不明である。大塚周辺の小古墳は横穴式石室を伴う後期の円墳である（55～60）。ほかに、今回調査地の北側隣接地には成福寺古墳群（50・51・287・288）があり、やはり詳細は不明なものの、方墳や円墳で構成され、中期まで遡る可能性が指摘されている。

市域全体としては、前期の代表的な古墳として、今回調査地から西へ約 3km の場所に位置する日岡山古墳群が著名である。これまで本格的な調査は行われていないものの、宮内庁が所管するひれ墓古墳（26）をはじめ合計 8 基の大型古墳が確認されている<sup>③</sup>。そのうち、ひれ墓古墳、勅使塚古墳（25）、西大塚古墳（29）、南大塚古墳（28）、北大塚古墳（30）の 5 基は前方後円墳で、残る西車塚古墳（27）、東車塚古墳（22、すでに消滅）、狐塚古墳（24）の 3 基は円墳もしくは前方後円墳と考えられている。ひれ墓古墳は、宮内庁により景行天皇皇后にあたる「稲日大郎姫命」の陵墓に比定され管理されている。古墳群中から採集された遺物としては、南大塚古墳や勅使塚古墳から三角縁神獸鏡、東車塚古墳から三角縁神獸鏡・方格 T 字文鏡・獸文鏡及び石釧 2 点、北大塚古墳から埴輪片や短甲片などがある。海岸部に目を向けると、いなみの台地南端部にあたる低位段丘上に聖陵山古墳（野口町長砂）が単独で所在しており、特異な位置を占めていることで注目される。前方後円墳もしくは前方後方墳と伝えられるが、これまで発掘調査が行われたことはなく前方部はすでに失われている。集落遺跡としては、溝之口遺跡内の南半部において竪穴建物などが検出されており、日岡山古墳群の母体となる集落の可能性が指摘されている。

中期になると、日岡山でみられたような首長墓墳が東側の西条地区の丘陵地において築かれるようになる。行者塚古墳（31）、人塚古墳（33）、尼塚古墳（32）という 3 基の大型古墳が西条古墳群として国史跡に指定され保存整備されている。整備に伴う基礎調査として行われた行者塚古墳の発掘調査では、墳頂部や造り出しへのトレンチ調査が行われ、墳頂部から大量の舶載品を納めた副葬品箱が検出され、造り出しの調査では祭祀跡の様子が良好な状態で発見されるなど数々の重要な成果があった。また、中期後半には加古川右岸で平荘湖古墳群が新たに築かれる。平荘湖古墳群は、カンス塚古墳（45）や池尻 2 号墳（44）に代表される竪穴式石室ないし竪穴系横口式石室を埋葬施設とする段階から、升田山 15 号墳（152）や池尻 16 号墳（153）に代表される横穴式石室を埋葬施設とする段階まで合計 68 基の古墳が確認されており、後期まで連続する市内最大規模の古墳群である。ダム建設による緊急発掘において、馬具や金製耳飾などの渡来系遺物が多く副葬されていることが明らかにされた。現在は、古墳の多くが昭和 41（1966）年に造られた人工湖である平荘湖の湖底へと没し墳丘を確認することはできない。中期の集落遺跡としては、引き続き溝之口遺跡が存続し、その南側の沖積地に立地する北在家遺跡でも竪穴建物が検出されている。溝之口遺跡では、竪穴建物跡から複数の韓式系土器が出土している。加古川右岸側では、砂部遺跡で掘立柱建物跡や溝、土坑が検出され、韓式系土器が複数出土している。

後期の古墳は、平荘湖古墳群が代表的であるが、市内各所に円墳や方墳が数多く残されている。また、生産遺跡として須恵器の窯跡が出現するようになる。今回調査地の南西側の曇川沿岸には神野大林窯跡群（631～633）、南東側の草谷川沿岸には野村古窯跡群（512・513・550・551）が知られている。集落遺跡としては、溝之口遺跡で引き続き竪穴建物跡の調査事例がある。また、東隣の坂元遺跡では、竪穴建物跡のほか、集落と古墳群の間において火を用いた祭祀土坑が調査されている。さらに、古墳群のすぐ南側では、石見型盾形埴輪をはじめ、古墳群に用いるための各種の埴輪を焼成した窯跡なども検出されており、集落北側の高台に古墳が築かれ、その隣接地において祭祀や埴輪製作が行われた

様子をよく伝えている。

**奈良時代・平安時代** 奈良時代は、律令制の導入により新たな行政単位が設けられた時代であり、『播磨国風土記』などを参考にすると、今回調査地周辺は播磨国賀古郡のうち「望理里」の範囲に含まれる。この時代の特徴的な遺跡としては、いなみの台地南側の縁あたりを通過していたとされる古代山陽道（488）や、坂元遺跡の南東部の山陽道沿いに比定されている賀古駅家<sup>④</sup>などがある。県教委により、賀古駅家の入口付近が発掘調査されている。また、古墳に替わって古代寺院が出現することも大きな変化である。

今回調査地周辺の奈良時代遺跡としては、西側の西条古墳群と同じ台地上に西条廃寺（226）がある。発掘調査の結果、この地域で産出される竜山石（流紋岩質凝灰岩）製の心礎を持つ塔跡を確認したほか、金堂・講堂なども検出され、法隆寺式の伽藍配置をもつ古代寺院であることがわかった。昭和44（1969）年に兵庫県の指定史跡となっており、平成6（1994）年に史跡公園としての整備が完了している。その他の古代寺院としては、賀古駅家に比定される古大内遺跡の北東側に野口廃寺（223）がある。発掘調査の結果、瓦積基壇で構築された塔・講堂・小堂宇が確認されている。日岡山古墳群の東側に位置する曇川沿岸には石守廃寺（225）があり、法隆寺式の伽藍配置を基準とし、竜山石製の心礎を持つ塔跡や瓦積基壇で構築された金堂跡などが調査されている。加古川右岸側では、沖積地を望む段丘上に中西廃寺（西神吉町中西）がある。発掘調査は行われていないが、採集された瓦から平安時代後期まで存続したことがわかっている。

郡役所などの官衙的な遺構としては、溝之口遺跡において、遺跡範囲の北側を中心に柵や溝に囲まれて「コ」字形に配置された建物群や、倉庫群と考えられる多数の掘立柱建物跡、井戸などが調査されている。「大穀」と記された墨書土器や銅製・石製の銚帯具などが出土したことから「賀古郡衙」の候補地となっており、北側に隣接する美乃利遺跡からは、「郡」と記された墨書土器なども出土している。さらに、溝之口遺跡にほど近い坂元遺跡、大野遺跡（636）からも同時期の遺構・遺物が多数確認されており、今後の調査の進展によって、郡衙や駅家と、それを取り巻く集落の様相が明らかにされることが期待される。また、溝之口遺跡の範囲内北端は、古代瓦が表面採取されたことを理由に「溝之口廃寺（224）」として遺跡登録されているが詳細は不明であり、古代寺院というよりは郡衙との関連で解釈すべきかもしれない。

平安時代は、先述した古代寺院の多くが9世紀までにいったん廃絶する傾向にあり、『日本三大実録』において、播磨諸郡の官舎・諸定額寺の堂塔が悉く倒壊したことが載る、貞観10（868）年の播磨国大地震との関連が指摘されている。後期までには、新たな寺院として鶴林寺（加古川町北在家）、佐伯寺跡（478）、教信寺（621）などが成立したと考えられる。鶴林寺は、聖徳太子の建立という縁起を持つが、本尊の薬師如来像や法華堂（太子堂）・常行堂の年代観から、この時期に伽藍が整えられたとする説が有力となっている。

今回調査地周辺の遺跡としては、南東0.4kmの台地上に天王山窯跡群（623・624）がある。平安時代後期に須恵器や瓦などを焼成していた小規模な窯跡群と考えられている。

**鎌倉時代・室町時代** 市内全域で調査事例が少なく、内容のわかる遺跡は僅かである。今回調査地周辺では、西側の台地先端部に位置する城山の中腹に西条蔵骨器群（229）や西条土壙墓（230）が鎌倉時代の遺跡として登録されている。

ほかに、加古川左岸側では下流域の沖積地に調査事例がいくつかあり、美乃利遺跡においては鎌倉

時代の掘立柱建物跡や屋敷墓が検出され、坂元遺跡では掘立柱建物跡や水田跡などが検出されている。美乃利遺跡に接する大野遺跡では、やはり鎌倉時代の掘立柱建物跡や墓が検出されている。また、同じ沖積地上に立地する粟津大年遺跡（加古川町粟津字大年）では、室町時代まで続く掘立柱建物跡や木棺墓などが検出されている。いずれの遺跡も集落跡と考えられる。加古川右岸側では、中西台地遺跡において方形居館に付属する堀が調査されている。

ほかに、具体的な調査事例は乏しいものの、室町時代に築かれたとされる城や構居<sup>かまい</sup>が数多く存在したことが文献資料の分析などからわかっている。戦国期の羽柴秀吉による播磨平定に深く関わる加古川城跡（加古川町本町）、野口城跡（259）、神吉城跡（東神吉町神吉）をはじめ、今回調査地周辺にも西条城（242）、手末構居跡（249）、高田構居跡（250）、野村構居跡（254）、宗佐構居跡（253）、国包構居跡（252）などが遺跡登録されている。なお、加古川城跡については、鎌倉時代を通じて播磨守護所が置かれていた可能性があり、城として活用される以前の様相にも注意を払う必要がある。

**江戸時代以降** 今回調査地周辺は、江戸時代をとおして姫路藩領の農村地域であった。一方、現在の加古川町寺家町周辺は、京都から下関を通り長崎に至る西国街道（中国路）の重要な宿場町として栄え、加古川には舟運の高瀬舟が往来し内陸部との物流の拠点であった。

江戸時代の遺跡は、中期に俳人として活躍した松岡青蘿の墓所が「松岡青蘿墓」（加古川町寺家町）として登録されている。また、平成 16（2004）年に実施された坂元遺跡の発掘調査では、道路側溝と考えられる溝が検出され、西国街道の一部と推定されている（岸本 2011）。

明治時代になると、加古川には橋が架けられ、明治 21（1888）年に山陽鉄道（現 J R 山陽本線）が開通し、明治 31（1898）年には日本毛織工場の操業が始まるなど近代化が進む一方、宿場町としての機能は衰えていった。大正 2（1913）年には播州鉄道（現 J R 加古川線）が開通したことで高瀬舟も姿を消した。現在の加古川市は、播磨灘沿岸の工業地帯や神戸・大阪方面のベッドタウンとして栄えている。

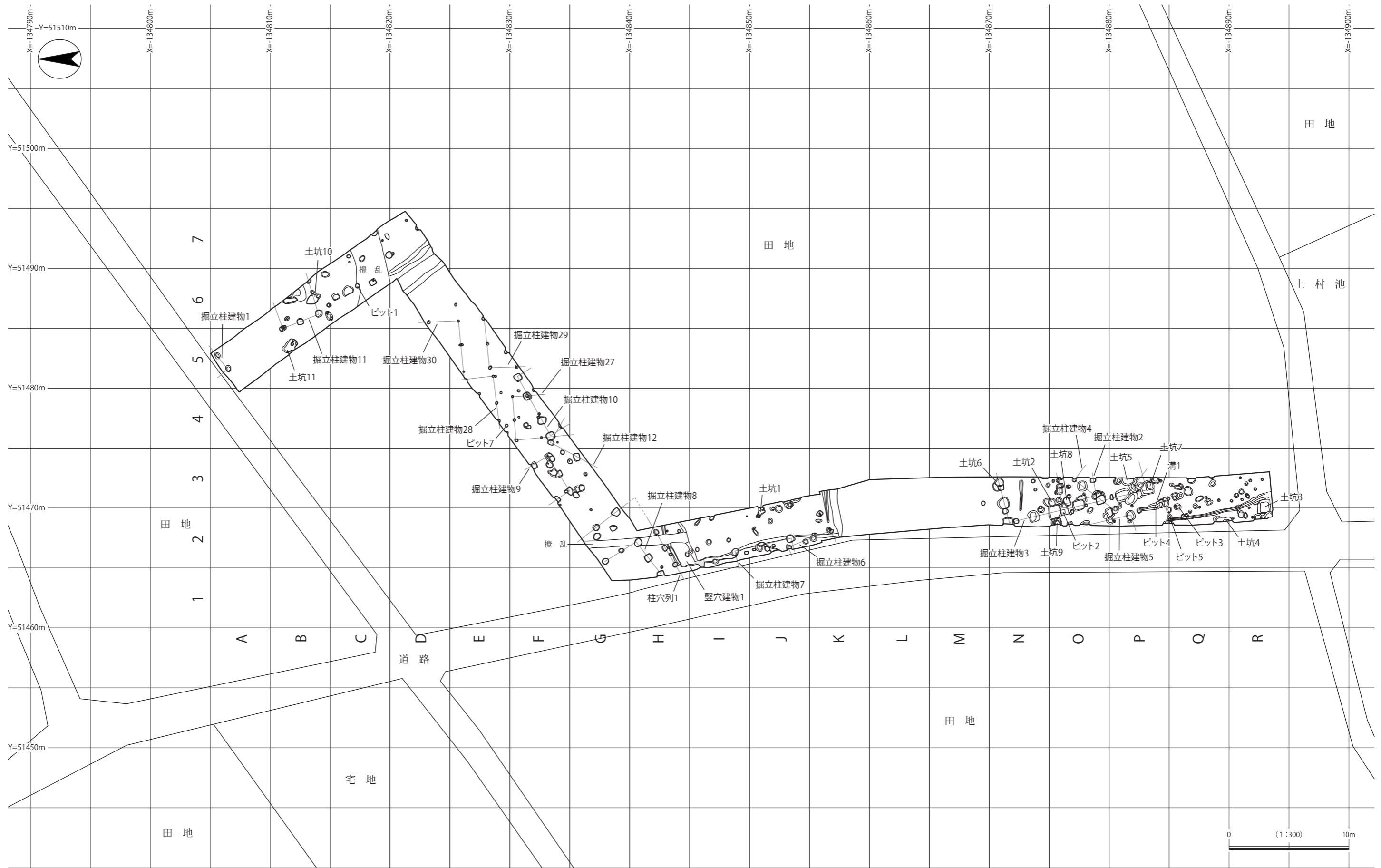
註 1) 現在登録されている遺跡名称は「西条廃寺」だが、古代寺院と区別するため表記の遺跡名を通称として用いている。

註 2) 西条遺跡は、平成 31 年度に「神野遺跡」から名称変更した遺跡である。手末遺跡は、現在登録されている遺跡名称は「手末構居跡」だが、中世城館と区別するため表記の遺跡名を通称として用いている。

註 3) ひれ墓古墳は、「日岡陵古墳」「日岡御陵」と呼称されることも多いが、本報告書では遺跡台帳に登録されている遺跡名称を用いている。

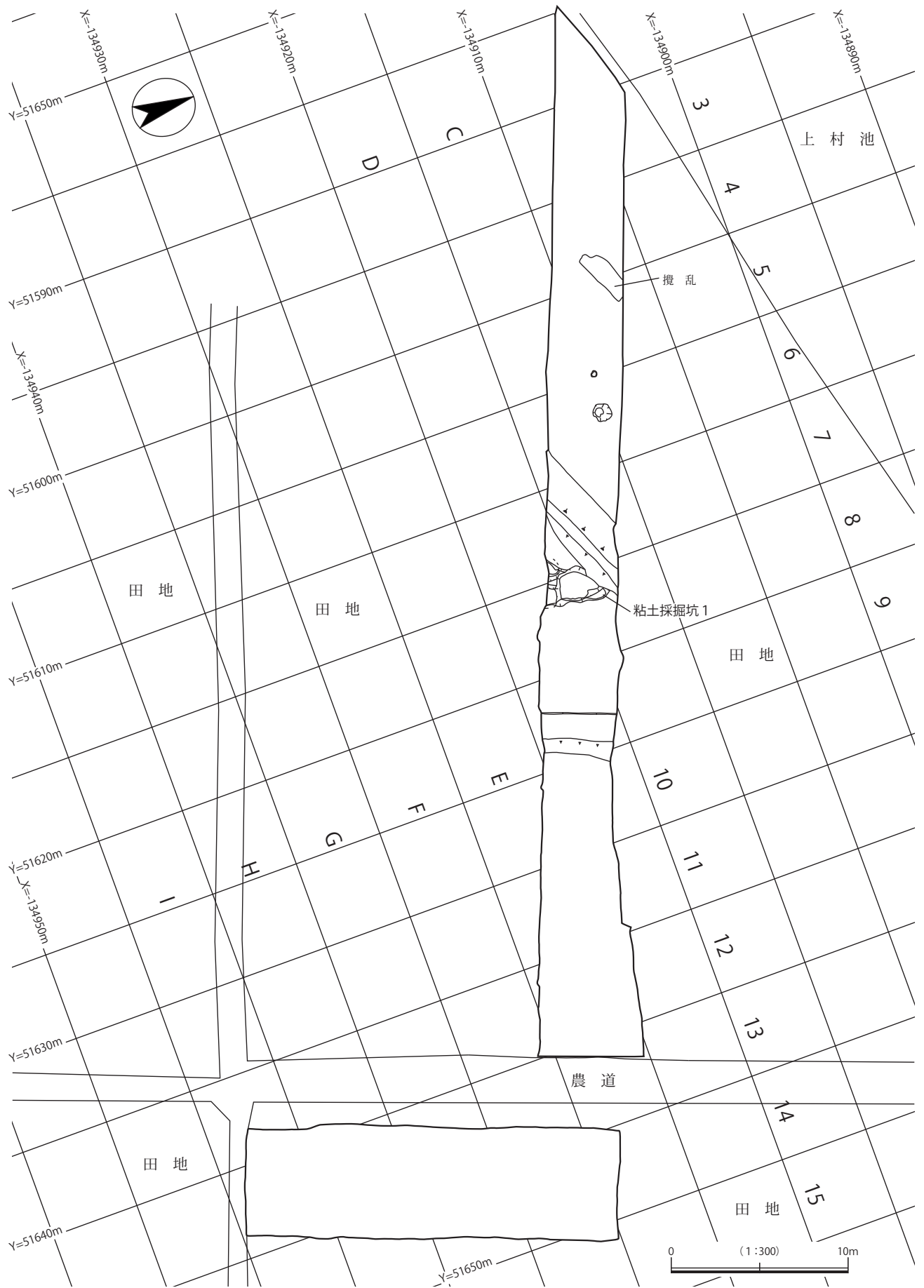
註 4) 遺跡名称は古大内遺跡（220）



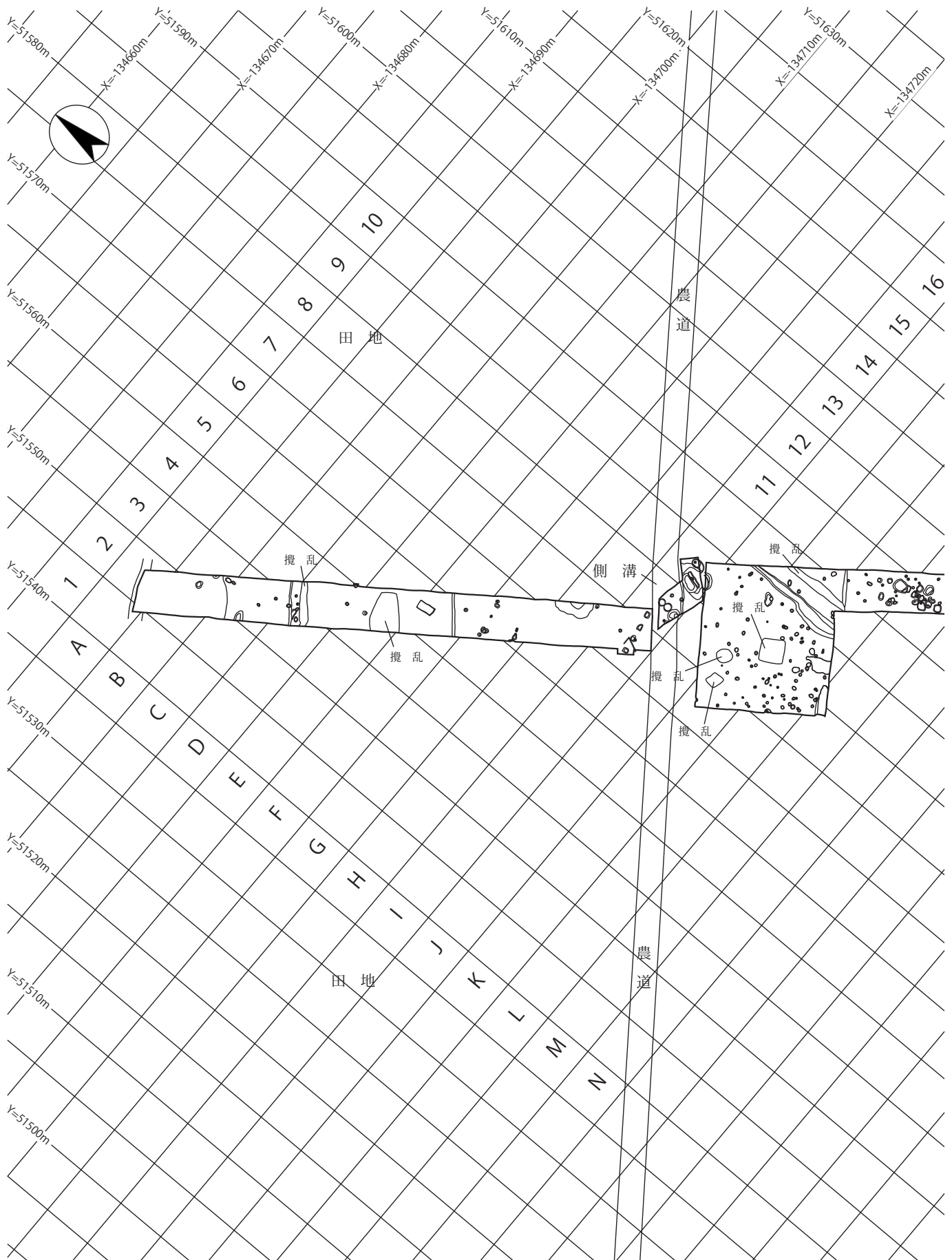


第7図 調査区①遺構配置図

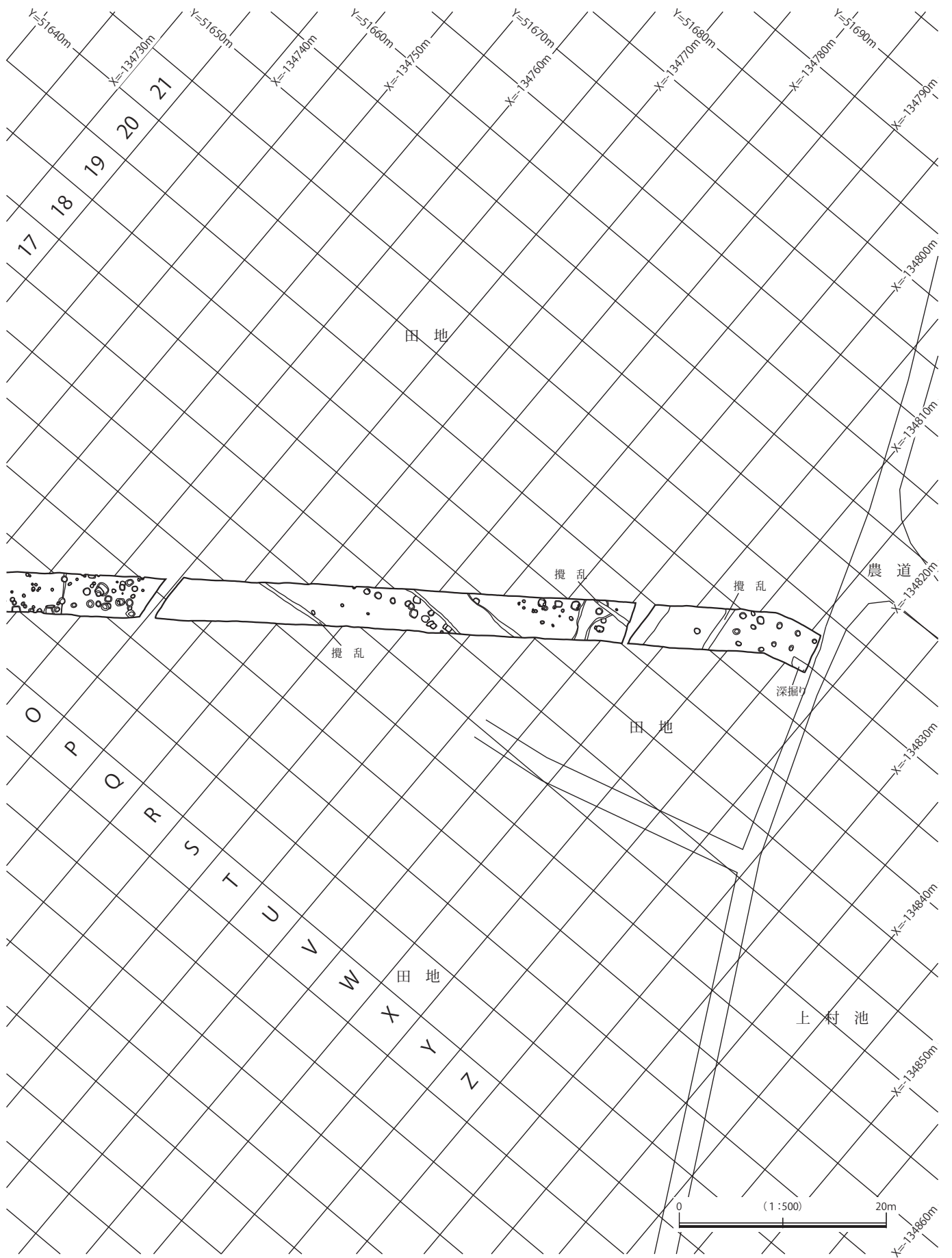




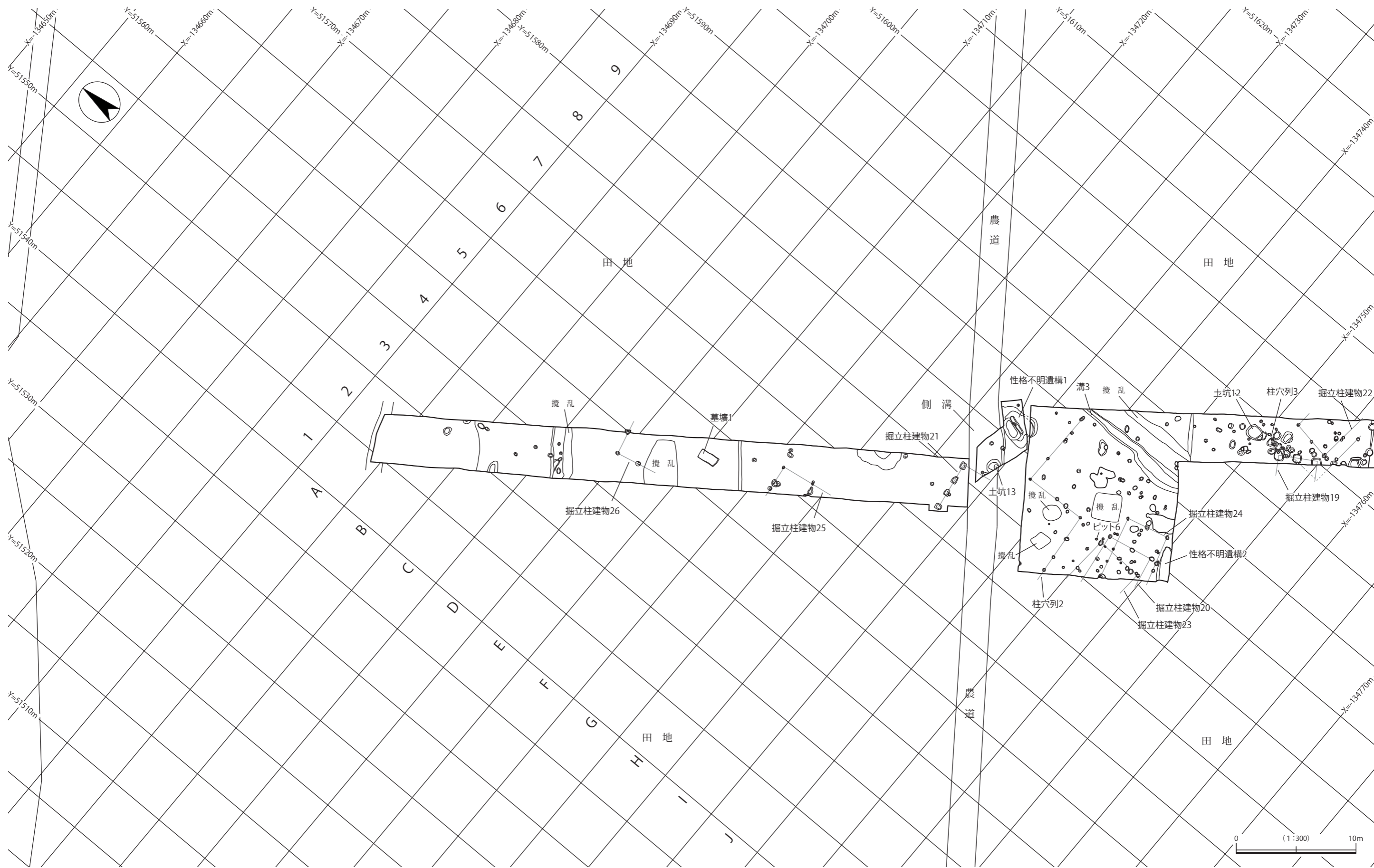
第8図 調査区②遺構配置図



第9図 調査区③遺構配置図(全体)



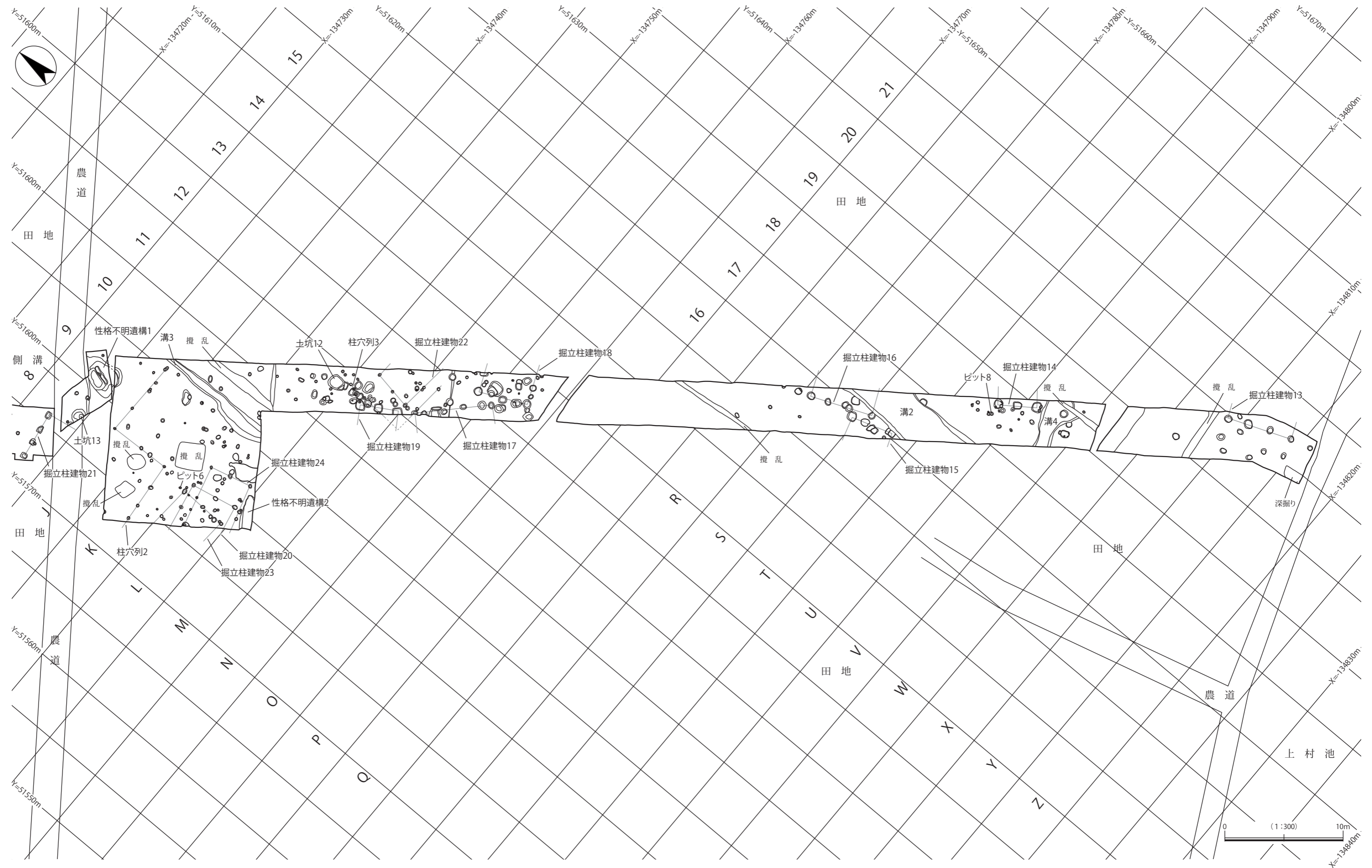




第 10 図 調査区③遺構配置図 (北側)







第11図 調査区③遺構配置図(南側)



## 第Ⅱ章 遺構と遺物

### 第1節 概要

上村池遺跡は、第Ⅰ章第2節で述べたとおり、奈良時代の古窯跡とされてきたが、試掘調査の結果から、集落遺跡としての性格が強いことがわかった。また、上村池遺跡の北側には奈良時代の寺院跡として「古堂廃寺」が登録されており、今回の調査範囲は上村池遺跡範囲を中心としながら一部古堂廃寺の遺跡範囲まで及んでいる。しかし、確認調査や本発掘調査を通して古代寺院と断定できる遺構や遺物は認められなかったため、本報告ではすべて上村池遺跡の調査成果として報告を行う。

今回の調査では、3か所に分かれる調査区（第4図）で合計1,493㎡の発掘調査を実施し、縄文時代から鎌倉時代までの遺構・遺物を確認した。

遺構は合計409基検出した（第7～11図）。内訳は、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡30棟、柱穴列3列、単独で検出された柱穴を含む土坑・ピット362基、溝状遺構8条、墓壙1基、粘土採掘坑1基、性格不明遺構3基である。このうち本報告書では、竪穴建物跡1棟、掘立柱建物跡30棟、柱穴列3列、土坑13基、ピット8基、溝状遺構4条、墓壙1基、粘土採掘坑1基、性格不明遺構2基を選定し、次節以降にその詳細を述べる。なお、各遺構の位置を示すグリッド表記については、調査区毎に設定したグリッド番号を用いているため番号の重複があることを留意願いたい。

遺物は遺物収納コンテナ17箱分が出土した。調査面積に比して少ないといえるが、須恵器・土師器を中心に縄文土器、弥生土器、舶載磁器、瓦など多様な遺物が遺構埋土や遺物包含層中、表土・攪乱から出土した。このうち本書では、縄文土器2点、弥生土器1点、須恵器81点、舶載磁器2点、土師器31点、土製品3点、瓦39点、石器1点、金属製品3点を抽出し、次節以降にその詳細を述べる。

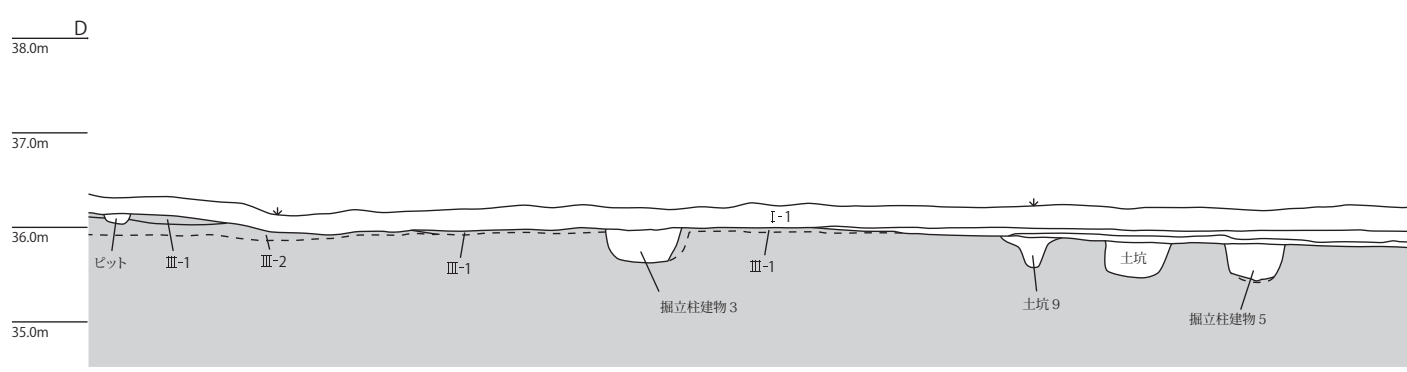
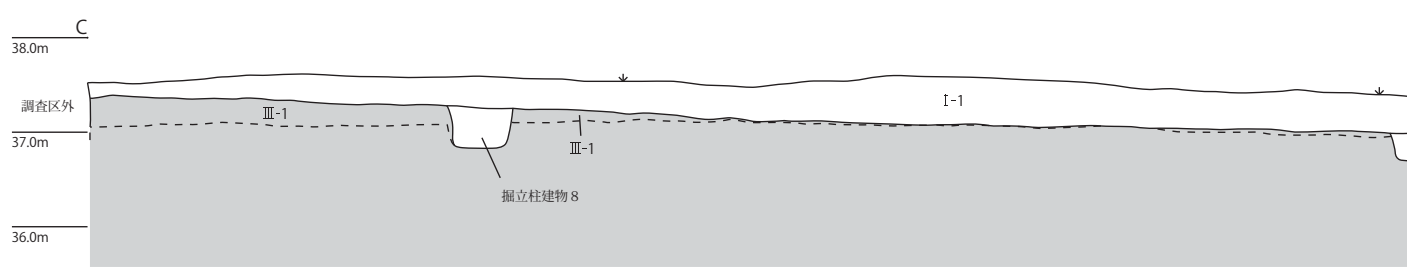
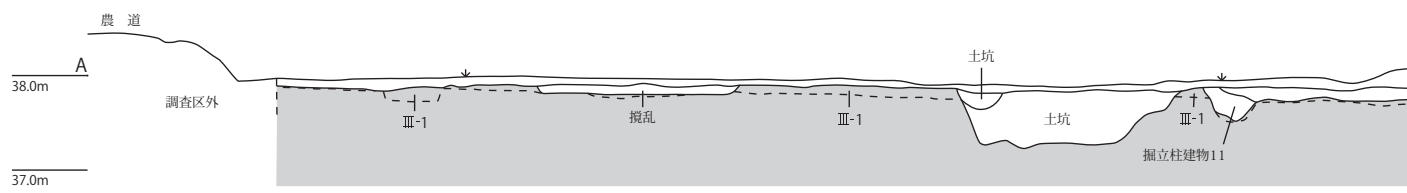
### 第2節 基本層序

今回の調査地点は、調査区が3か所に分かれ、現在はすべて田畑として利用されている農地である。基本層序は、大きく3段階（第Ⅰ～Ⅲ層）の堆積により成り立っている（第12～14図）。

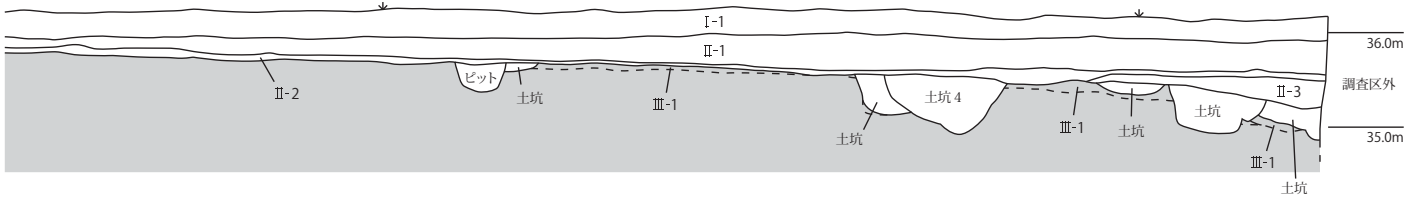
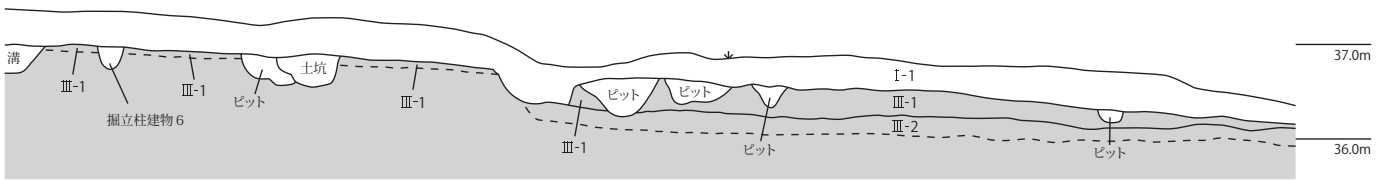
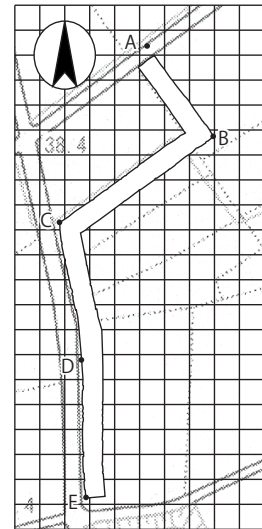
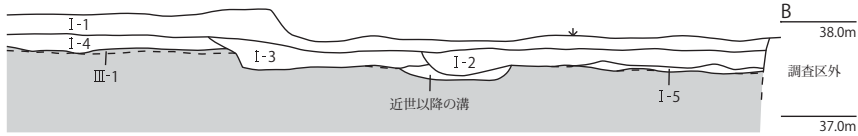
第Ⅰ層は、調査前まで耕作地として利用されていた表層及び近世以降の水田開発に伴う盛土層である。盛土層に含まれる近世陶磁器類から、当該地は近世以降に上村池へ向かって下る緩やかな斜面を棚状に造成し農地として土地利用してきたことがわかる。地表面の標高で比較すると、今回調査区のうち最も高所に位置するのは調査区②の東側で、標高39.1mを測る。最も低い場所は、上村池に最も近くなる調査区②の西側で、標高35.4mを測る。

第Ⅱ層は、調査区①と③で確認された縄文時代から中世までの土器等を含む遺物包含層である。斜面の下方に残されており、それ以外の大部分は農地を開拓する際に削平されたものと考えられる。出土する遺物はさまざまな時代のものが混在しており時期差等は検討できなかった。

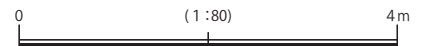
第Ⅲ層は、シルトや砂礫で構成された自然堆積層（いわゆる「地山」）である。調査区の大部分で第Ⅰ層の直下がシルト質の地山となっており、後世に斜面を大きく削りこんで耕作地を造り出した場所では、現代耕作土の直下で基盤となる砂礫層が確認された。また、上村池の南側に位置する調査区②では、斜面の上方が凝灰岩の岩盤となっており、池へ向かって下る斜面の一部に粘土層が認められた。

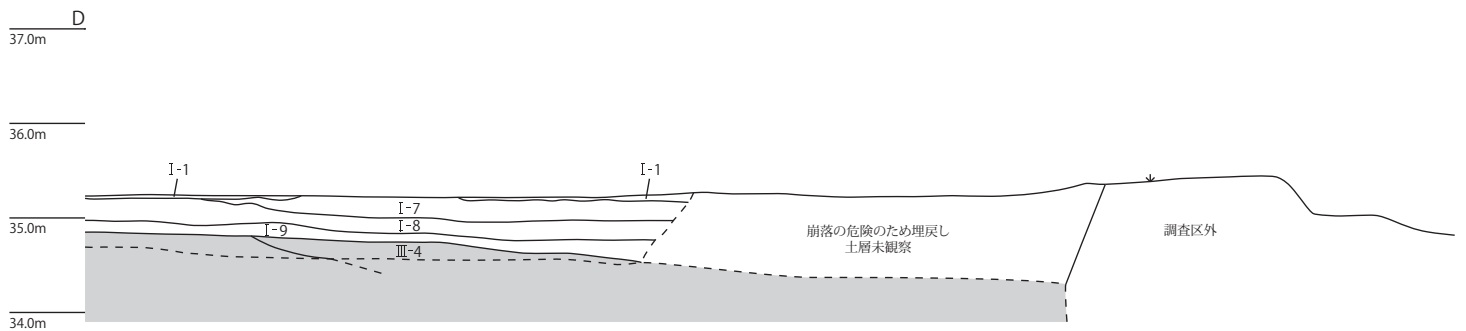
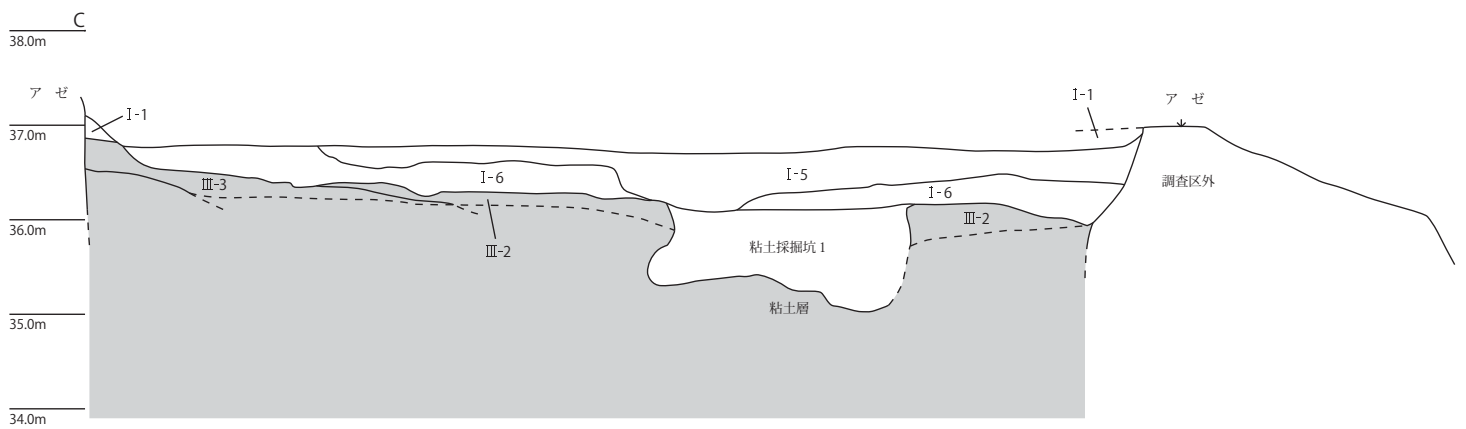
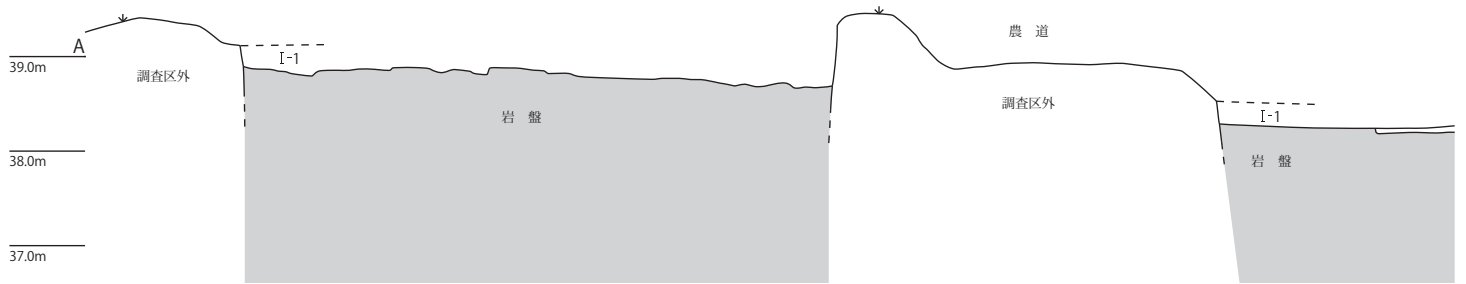


第 12 図 調査区①基本層序



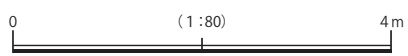
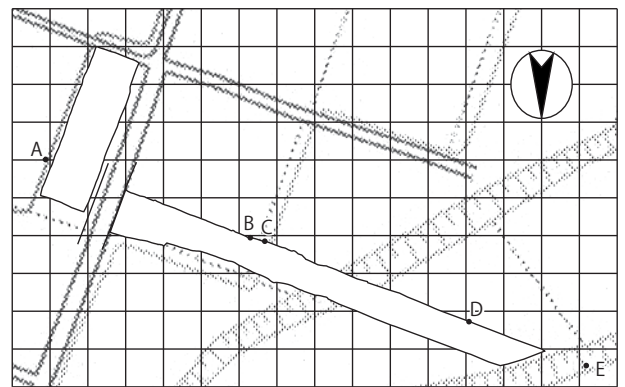
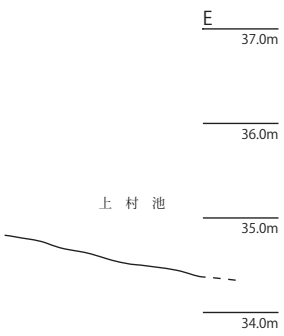
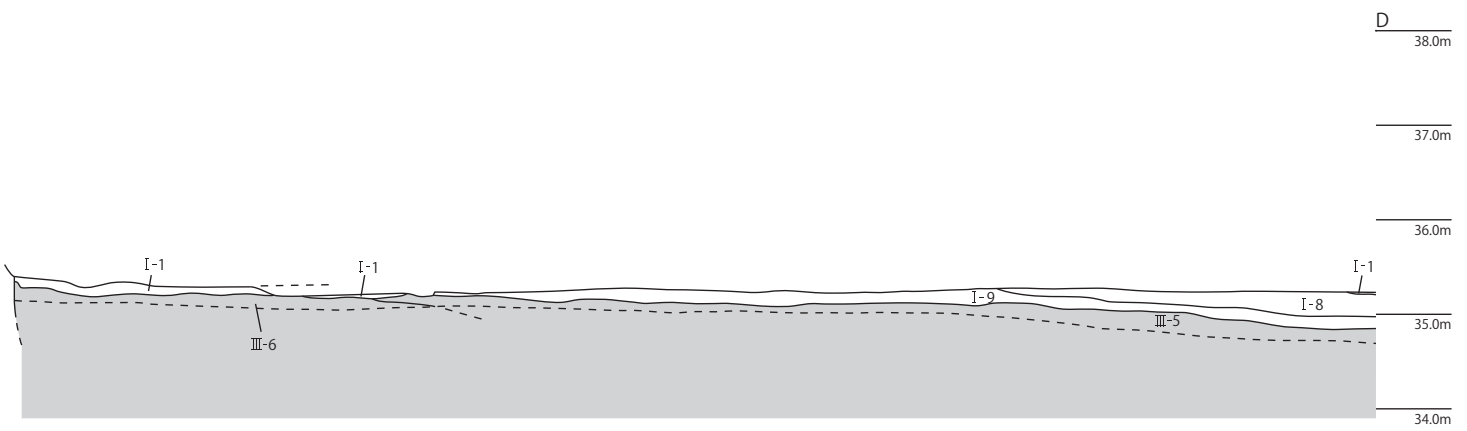
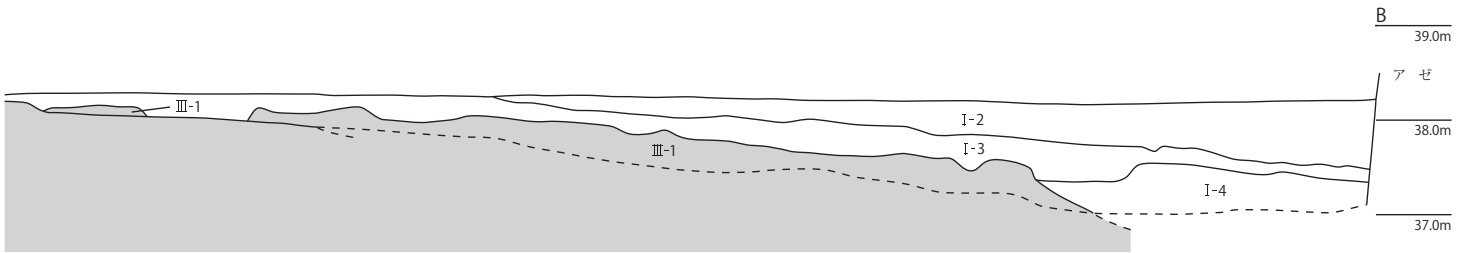
- I-1 (耕作土)
- I-2 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土少量、炭化物微量含む (盛土)
- I-3 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (盛土)
- I-4 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量、マンガング粒少量含む (盛土)
- I-5 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土微量含む (盛土)
- II-1 10YR6/8 明黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (遺物包含層)
- II-2 10YR4/4 褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む (遺物包含層)
- II-3 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む (遺物包含層)
- III-1 10YR5/8 黄褐色シルト (地山)
- III-2 7.5YR5/8 明褐色砂礫 (地山)

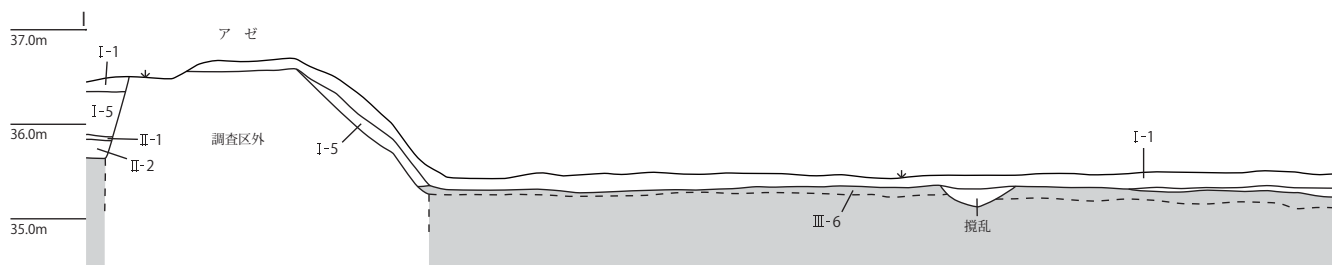
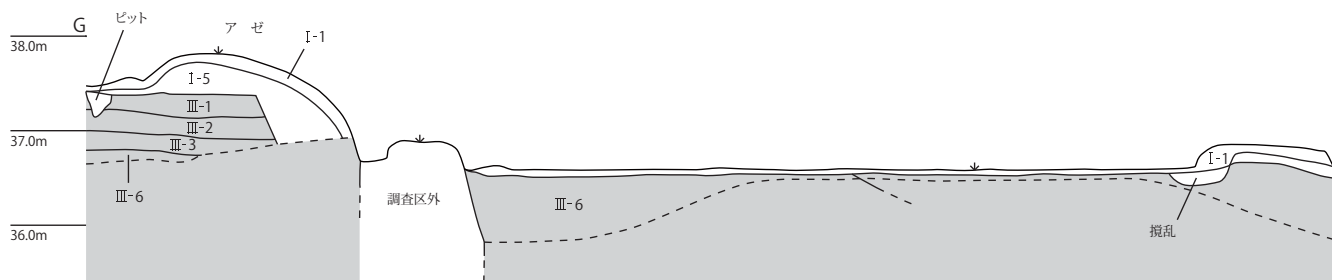
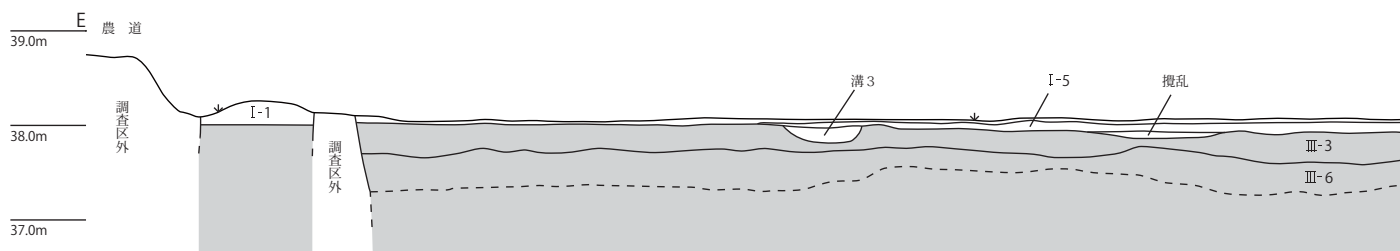
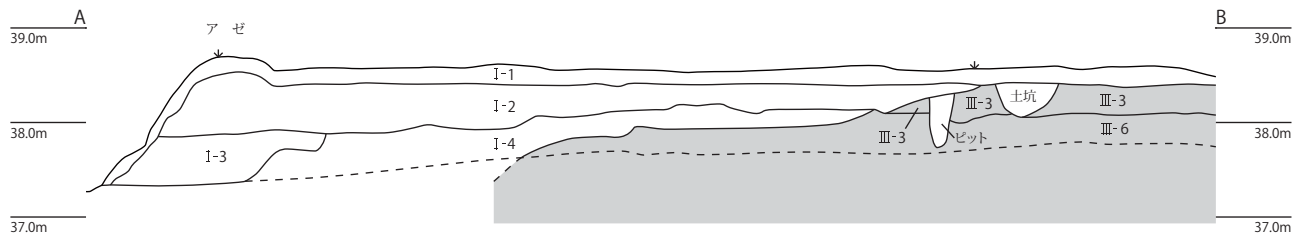




- |                                      |                                      |
|--------------------------------------|--------------------------------------|
| I-1 10YR4/4 褐色シルト (耕作土)              | III-1 10YR6/6 明黄褐色シルト 自然礫中量含む (漸移層か) |
| I-2 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土微量、自然礫中量含む (盛土) | III-2 7.5YR6/8 橙色砂質シルト (地山)          |
| I-3 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土微量含む (盛土)      | III-3 10YR6/8 明黄褐色粘土質シルト (地山)        |
| I-4 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・自然礫微量含む (盛土)   | III-4 10YR6/6 明黄褐色シルト (地山)           |
| I-5 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 炭化物微量 (盛土)     | III-5 7.5YR6/8 橙色砂質シルト (地山)          |
| I-6 7.5YR6/8 橙色シルト 焼土・炭化物微量含む (盛土)   | III-6 7.5YR7/3 にぶい橙色粘土質シルト (地山)      |
| I-7 10YR6/8 明黄褐色シルト 炭化物微量含む          |                                      |
| I-8 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 炭化物微量含む (盛土)   |                                      |
| I-9 10YR6/6 明黄褐色シルト 地山ブロック少量含む (盛土)  |                                      |

第 13 図 調査区②基本層序

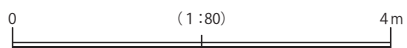
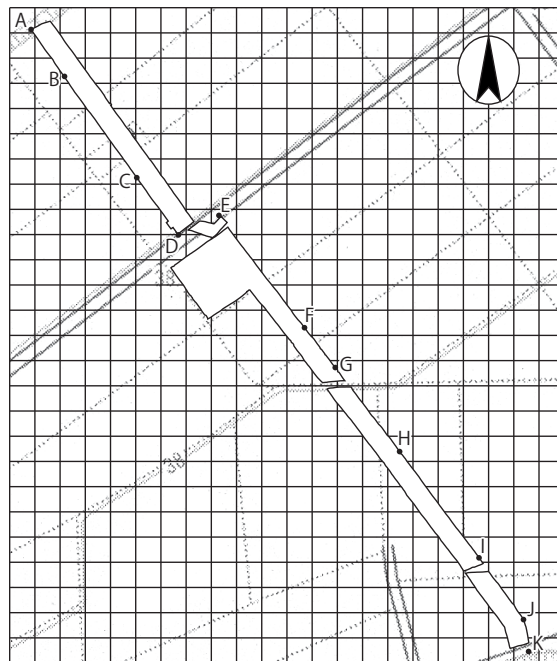
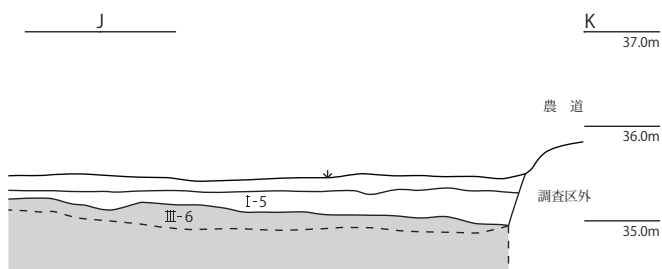
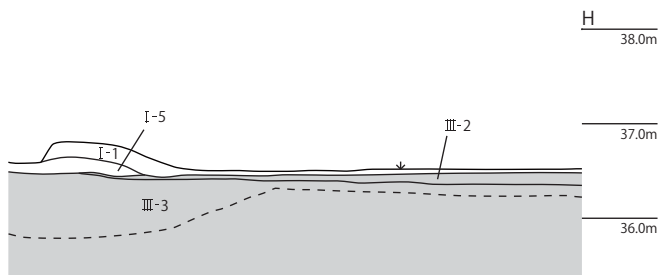
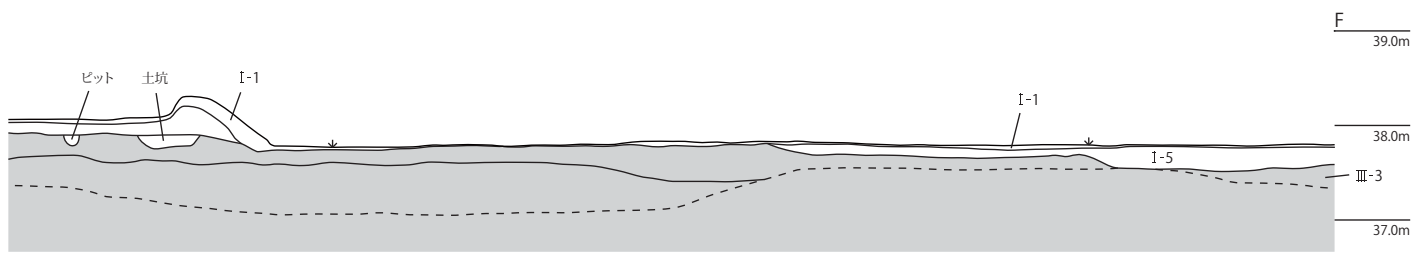
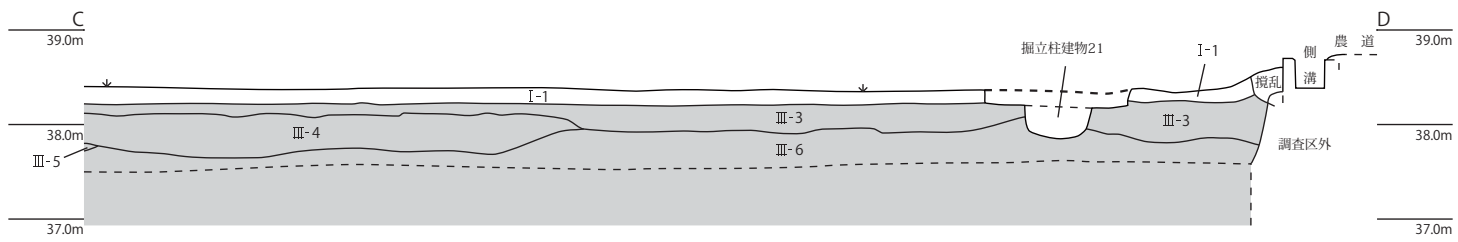




- I-1 (耕作土)
- I-2 10YR4/6 褐色シルト (盛土)
- I-3 10YR4/6 褐色シルト 礫中量含む (盛土)
- I-4 7.5YR4/6 褐色シルト 礫中量含む (盛土)
- I-5 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (盛土)
- II-1 10YR4/6 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (遺物包含層)
- II-2 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (遺物包含層)
- III-1 10YR6/6 明黄褐色シルト 赤色土・鉱物由来の黒色粒少量含む (地山)
- III-2 10YR6/8 明黄褐色シルト 赤色土・鉱物由来の黒色粒少量、粘土(シルト)をラミナ状に含む(地山)
- III-3 7.5YR5/8 明褐色シルト 赤色土に粘土(シルト)をラミナ状に含む(地山)
- III-4 5YR5/8 明赤褐色シルト(地山)
- III-5 10YR5/6 黄褐色砂質シルト 粘土ブロック少量、礫微量含む(地山)
- III-6 7.5YR6/8 橙色砂礫層(地山)

第 14 図 調査区③基本層序





今回検出された遺構は、すべて第Ⅲ層上面においてである。第Ⅲ層面での標高は、最高所で 38.8 m (調査区②東側)、最低所で 34.3 m (調査区②西側) を測る。

### 第3節 竪穴建物跡

#### ■竪穴建物1 (第15・78図、表2、写真11・12・26～33・187)

**位置**：調査区①の H・I2 グリッドに位置する。掘立柱建物7や柱穴列1に切られている上、水田造成の際に南側を中心に大きく削平されており、建物の西壁と北壁付近がわずかに検出されたのみである。また、遺構の東側は調査区外に及んでいる。遺構確認面の高さは標高 37.1 m で、現地表面から約 0.4 m 下に位置する。竈を基準とした軸方位は、N-75° -E を示す。

**形態**：平面形は隅丸方形と推定され、西側壁面に竈が設けられている。

**規模**：南北辺は約 5 m を測る。東西辺は、検出した範囲で 3.5 m 以上を測る。床面までの深さは 0.22 m を測る。検出した範囲での建物面積は 17.5㎡以上となる。

**付帯施設**：一部に周壁溝が見られ、西壁には竈がある。主柱穴や貯蔵穴は確認できなかった。

周壁溝は、北壁沿いで確認し、幅 0.24 m、床面からの深さ 0.07 m を測る。

竈は、西壁の中央やや北寄りの位置で検出し、造成等によって削平を受けているものの、両袖と燃烧部を確認することができた。袖は粘土で構築され、両袖の中心間の距離は 0.6 m を測る。燃烧部は床面から 0.06 m ほど高い位置で確認され、その周囲は被熱の影響により硬化し変色していた。竈の奥壁側は煙道が続いていたものと考えられるが、すでに崩落し明瞭ではなかった。

**土層**：建物内の埋土は3層に区分できる。地山ブロックを含むシルト層を主体とし、南西から北東へ緩やかに下る斜め堆積である。北側の第1層中からイイダコ壺が出土した(第78図3)。

竈の土層は12層に区分される。第1層から第5層までは、遺構廃絶後に煙道部分が崩落した際の堆積と考えられ、第1層は天井の地山が塊となって落ち込んでいる。第6層から第8層までは、竈を使用する過程で堆積したものと考えられ、第6層は燃烧の影響により焼土化している。第7層から須恵器の高杯(第78図2)などが出土した。第9層から第12層は袖の構築粘土と考えられるが、被熱の影響で粘性はほとんどない。

**出土遺物**：須恵器杯・甕・高杯や土師器甕・イイダコ壺が出土した。

1は須恵器の杯である。ロクロ成形され、口縁部の立ち上がりはやや低い。

2は須恵器の高杯である。竈内から出土した。内外面ともロクロ成形され、脚部の内側はナデ調整されている。

3は土師器のイイダコ壺である。釣鐘形で、内外面ともナデ調整されている。

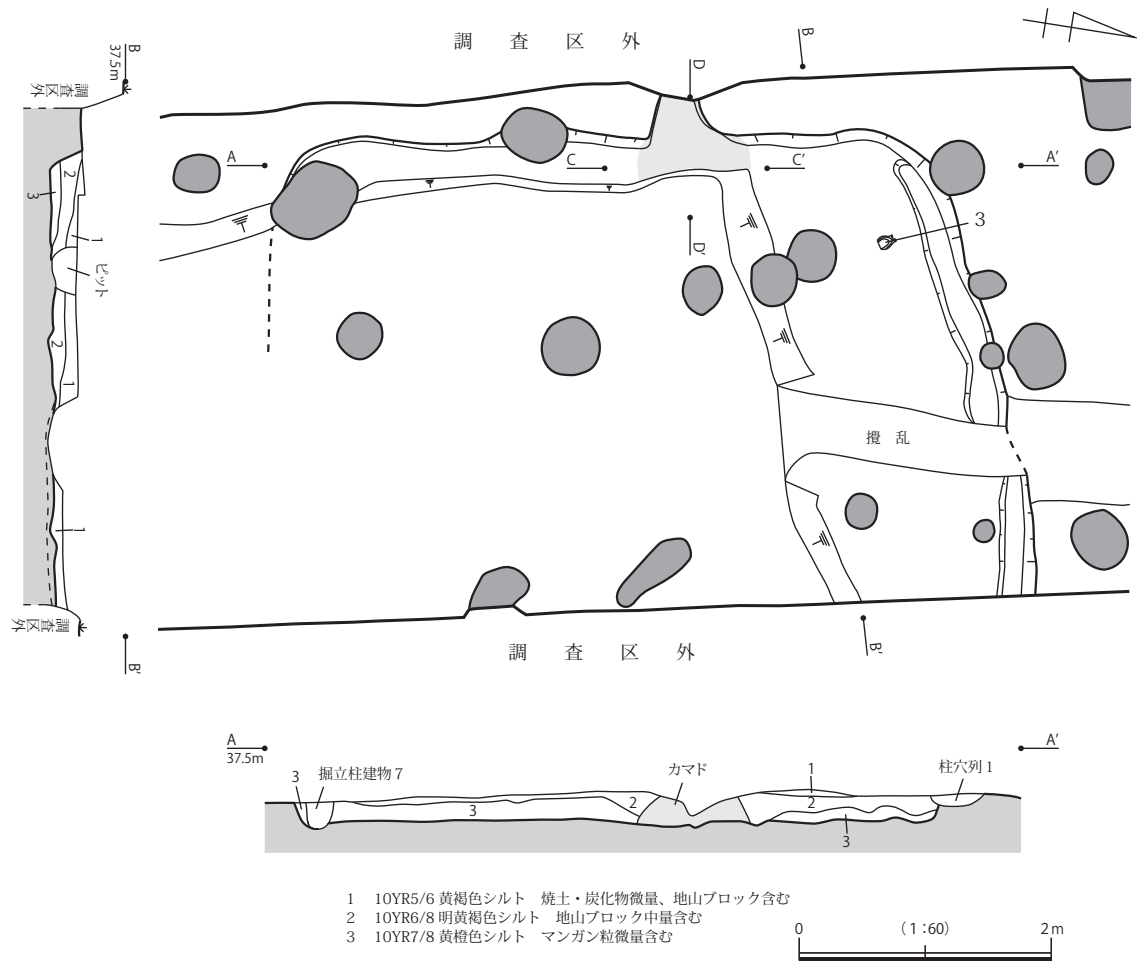
**遺構時期**：出土した遺物から、遺構の時期は7世紀前半頃と判断した。

### 第4節 掘立柱建物跡

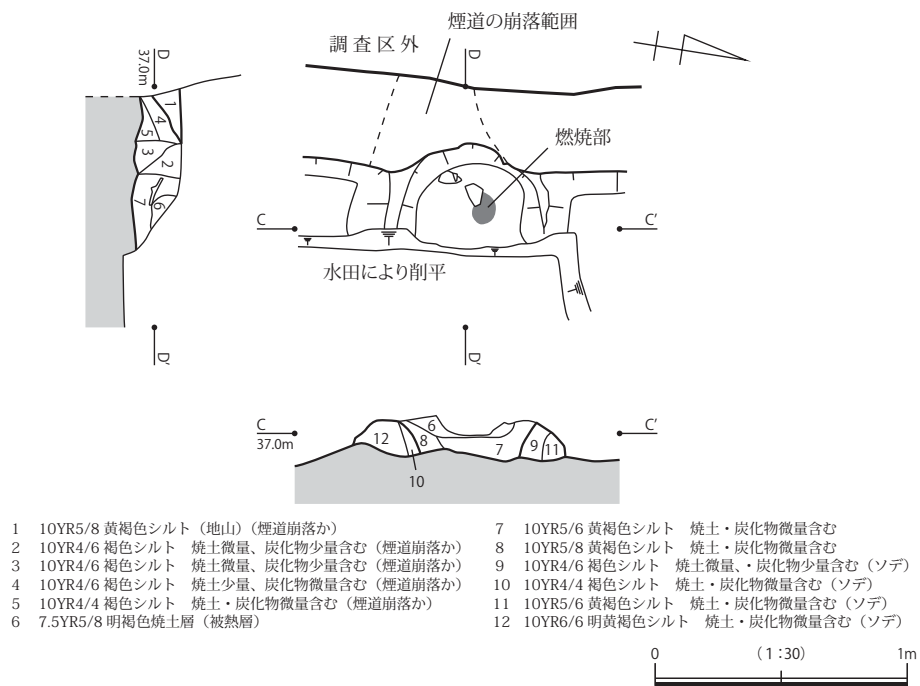
#### ■掘立柱建物1 (第16・78図、表2、写真34・35・187)

**位置**：調査区①の A5 グリッドに位置する。大部分が調査区外へ及んでおり、検出されたのは南面に並ぶ2基の柱穴のみである。遺構確認面の高さは標高 37.9 m で、現地表面から約 0.4 m 下に位置する。柱穴の並ぶ方位は N-52° -E を示す。

**形態**：柱穴2基のみのため全体の形態は不明である。柱穴の平面は両者とも不整円形を呈する。



(竈図面)



第 15 図 竪穴建物 1

規 模：柱穴2基のみのため全体の規模は不明である。柱穴の直径は約0.5 mを測り、柱間は約1.4 mである。P1では柱痕跡を確認した。深さは0.14～0.23 mを測る。

土 層：合計4層に区分できる。黄褐色シルトを主体とし、P1の第2層から須恵器の杯が出土した(第78図4)。

出土遺物：須恵器の杯・甕や土師器片が出土した。

4は、須恵器の杯である。ロクロ成形され、底部付近はヘラケズリされている。

遺構時期：出土遺物から、遺構の時期は7世紀前半頃と判断した。

### ■掘立柱建物2 (第17・78図、表2、写真36・37・187)

位 置：調査区①のO3グリッドに位置する。掘立柱建物3・4、土坑8、ピット2に切られており、遺構の東側は調査区外へ及んでいる。検出されたのはコ字形に並ぶ柱穴5基である。遺構確認面の高さは標高35.8～36.0 mで、現地表面から約0.2 m下に位置する。桁行を基準とした建物方位はN-74°-Eを示す。

形 態：桁行2間以上、梁行2間の側柱建物である。各柱穴は、他の遺構に切られているため形状が不明瞭であるが、おおよそ隅丸長方形を呈する。断面形は凹字状をしている。底面は平坦で西側に並ぶP3・4には柱痕跡が認められた。

規 模：柱痕跡を基準とした柱間は1.3 mで、検出した範囲での床面積は7.8㎡以上となる。各柱穴は、長軸約0.9 m、短軸0.5～0.6 mを測り、深さは0.11～0.56 mと差が大きい。

土 層：合計13層に区分できる。柱痕跡を含めすべてシルト質の埋土を主体としている。P1は2段に掘り込まれており、柱の抜き取りが行われた可能性がある。

出土遺物：須恵器の杯蓋・杯・甕・平瓶、土師器の甕などが出土した。

5～7は、須恵器の杯蓋と杯である。5・6は蓋で、両者とも器高が低く天井部が平坦に成形されている。7は杯で、底部はやや丸みがあり、底部外面はヘラ切り後ナデ調整されている。いずれも加古川市上荘町に所在する白沢6号窯<sup>①</sup>の製品のうち古い段階のものと特徴がよく似ている。

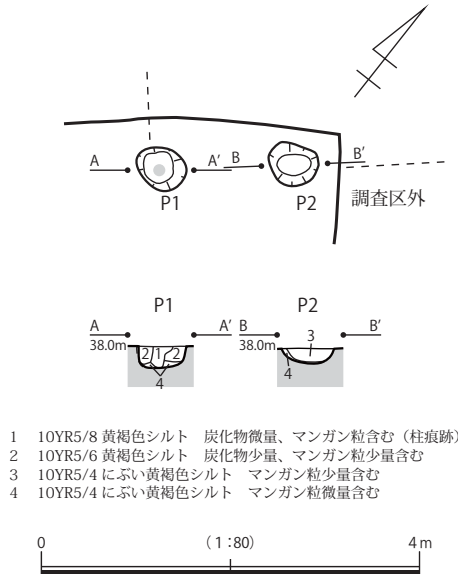
遺構時期：出土遺物や他遺構との切合い関係から、遺構の時期は7世紀後半～末頃と判断した。

### ■掘立柱建物3 (第18・78図、表2・8、写真7～10・38～46・187・188)

位 置：調査区①のN～P2・3グリッドに位置する大型の建物跡である。掘立柱建物4、土坑6・7・9に切れ、掘立柱建物2、土坑2、ピット2を切っている。検出されたのは建物の西辺と北辺の一部のみで、大部分は東側の調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高35.8～36.0 mで、南側へ傾斜する斜面に建てられている。現地表面からは0.2～0.5 m下に位置する。桁行を基準とした建物方位はN-15°-Wを示す

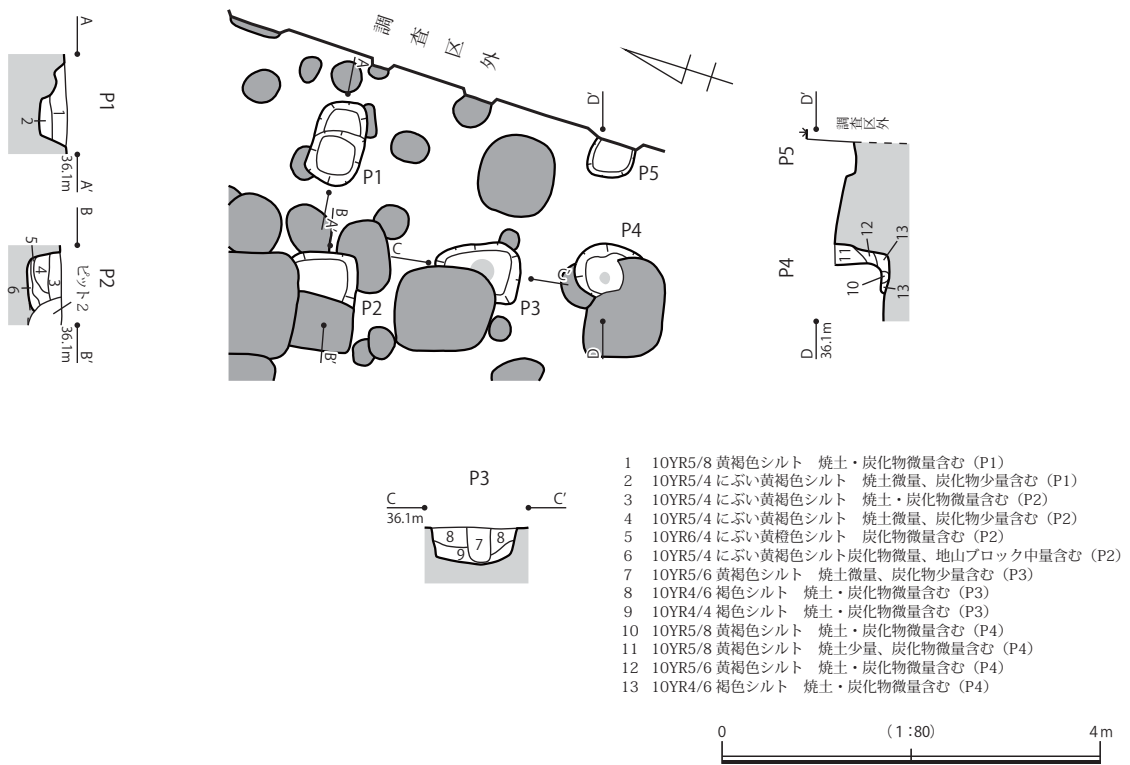
形 態：桁行6間、梁行2間以上の大型建物である。各柱穴は、他の遺構に切られているため形状が不明瞭なものもあるが、方形もしくは長方形を呈する。断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、検出された9基の柱穴のうち7基に柱痕跡が認められた。なお、P7の柱痕跡については、他の柱列より東側に逸れており、柱穴内の一段高いテラス上にあることから東柱と考えられる。

規 模：柱痕跡を基準とした柱間は1.6～1.8 mで、検出した範囲での床面積は48㎡以上となる。各柱穴は、長軸1.0～1.2 m、短軸0.8～1.0 mを測る。深さは0.28～0.56 mと大きな差があり、近世以降の水田造成の際に北側の斜面上方側が著しく削平されたことによって、斜面の上方(北側)にあるものは浅く、下方(南側)に行くほど深い。また、各柱穴の底面標高も下方(南側)へ向けて順次



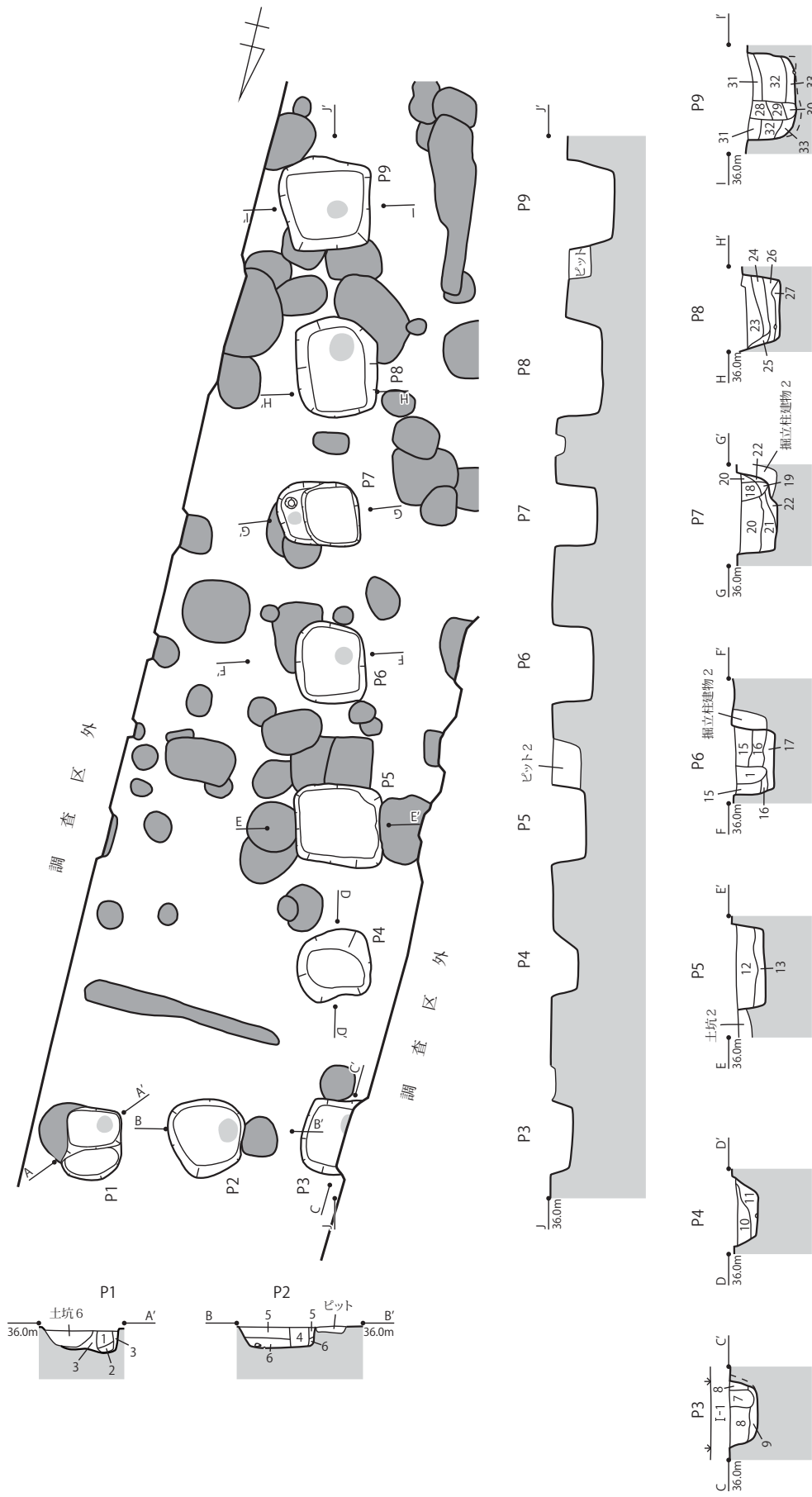
- 1 10YR5/8 黄褐色シルト 炭化物微量、マンガン粒含む (柱痕跡)
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト 炭化物少量、マンガン粒少量含む
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト マンガン粒少量含む
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト マンガン粒微量含む

第 16 図 掘立柱建物 1



- 1 10YR5/8 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P1)
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む (P1)
- 3 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P2)
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む (P2)
- 5 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 炭化物微量含む (P2)
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 炭化物微量、地山ブロック中量含む (P2)
- 7 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む (P3)
- 8 10YR4/6 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P3)
- 9 10YR4/4 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P3)
- 10 10YR5/8 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P4)
- 11 10YR5/8 黄褐色シルト 焼土少量、炭化物微量含む (P4)
- 12 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P4)
- 13 10YR4/6 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P4)

第 17 図 掘立柱建物 2



- 1 10YR5/4 にぶい、黄褐色シルト 焼土少量含む (P1)
- 2 10YR6/4 にぶい、黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P1)
- 3 10YR6/4 にぶい、黄褐色シルト 炭化物少量含む (P1)
- 4 10YR4/6 褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P2)
- 5 10YR5/8 黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P2)
- 6 10YR6/8 明黄褐色シルト 焼土少量、炭化物少量含む (P2)
- 7 10YR4/6 褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P3)
- 8 10YR4/4 褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P3)
- 9 10YR5/8 黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P4)
- 10 10YR6/4 にぶい、黄褐色シルト 焼土少量、炭化物少量含む (P4)
- 11 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P4)
- 12 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土少量、炭化物少量含む (P5)
- 13 10YR6/8 明黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P5)
- 14 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P6)
- 15 10YR6/8 明黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P6)
- 16 10YR7/8 黄褐色シルト (P6)
- 17 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P7)
- 18 10YR5/4 にぶい、黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P7)
- 19 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土少量、炭化物少量含む (P7)
- 20 10YR5/6 明黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P7)
- 21 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P7)
- 22 10YR6/8 明黄褐色シルト 焼土少量、炭化物少量含む (P7)
- 23 10YR4/6 褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P8)
- 24 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土少量、炭化物少量含む (P8)
- 25 10YR5/4 にぶい、黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P8)
- 26 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土少量、炭化物少量含む (P8)
- 27 10YR6/8 明黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P8)
- 28 10YR6/4 にぶい、黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P9)
- 29 10YR4/6 褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P9)
- 30 10YR5/3 にぶい、黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P9)
- 31 10YR5/8 黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P9)
- 32 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む (P9)
- 33 10YR6/8 明黄褐色シルト 焼土少量、炭化物少量含む (P9)

第18図 掘立柱建物3

低くなることから、建物建築の際には斜面を平坦に造成することなく、床面で水平を調節していた可能性がある。ただし、調査ではP7の束柱と考えられる柱痕跡以外、建物範囲内に高床構造を裏付けるような明確な柱穴配置は確認できなかった。

**土 層**：合計33層に区分できる。柱痕跡を含めすべてシルト質の埋土を主体とし、地山の砂礫層上に柱を据えたのち、2～3段階に分けて柱掘方を埋めて固定している様子が見てとれる。

**出土遺物**：須恵器の杯蓋・杯・甕・鉢、土師器の杯・甕・イイダコ壺、瓦、金属製品などが出土した。

8～15は須恵器である。8は杯蓋で、器高は低く、天井部は平坦である。口縁部は内側に鋭く折り返している。9～14は杯で、9～12は底部をヘラ切り後、ナデ調整している。15は鉢で、尖底のいわゆる鉄鉢形と考えられる。外面はヘラミガキされている。加古川市志方町に所在する志方窯跡群の中谷古窯跡4号窯に類品がみえる。

16・17は土師器の甕である。16は頸部の破片で、外面と内面口縁部付近はハケ調整され、胴部の内面は板ナデ調整されている。17は把手付甕の把手部分の破片である。

18は丸瓦である。凸面はナデ仕上げ、凹面は布目圧痕に糸切りの痕跡が認められる。

19は鉄製の刀子である。錆化が著しく3つに割れていたが、ほぼ完形である。柱穴P8から出土した。

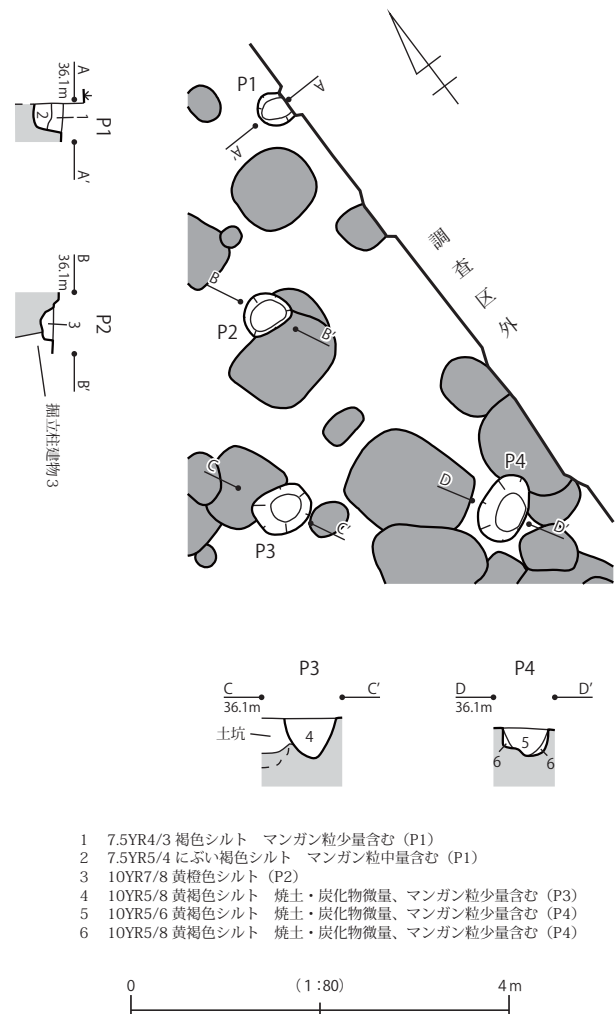
**遺構時期**：出土遺物や他遺構との切合い関係から、遺構の時期は7世紀末～8世紀前半頃と判断した。

■掘立柱建物4（第19・79図、表2、写真47・48・188）

**位 置**：調査区①のO・P3グリッドに位置する。土坑5に切られ、掘立柱建物2・3を切っている。建物の西側部分を検出し、東側は調査区外へ及んでいる。検出されたのはL字形に並ぶ柱穴4基である。遺構確認面の高さは標高35.8～36.0mで、現地表面から0.2～0.5m下に位置する。桁行を基準とした建物方位はN-54°-Wを示す

**形 態**：桁行2間以上、梁行2間の建物跡である。遺構の大部分が調査区外にあるため、側柱か総柱かの判別はできない。柱穴の平面形状はおおむね楕円形を呈する。断面形はおおむねU字状をしている。底面は湾曲し、外側へ広がりながら立ち上がる。柱痕跡は認められなかった。いずれも水田造成の際に上部を削平されており、浅いピット状である。

**規 模**：各柱穴中心部を基準とした柱間は2.2～2.4mで、検出した範囲での床面積は14.3㎡以上となる。各柱穴は、長軸0.5～0.66m、短軸約0.4mを測り、深さは0.14～0.44mと差が大きい。



第19図 掘立柱建物4

土 層：合計6層に区分できる。黄褐色シルトを主体とし、P1・3・4から遺物が出土した。

出土遺物：須恵器の杯蓋・杯、土師器の杯・甕などが出土した。

20～22は須恵器である。20は杯蓋で、器高は低く、口縁部は内側へ折り返している。21・22は杯である。21は平底の杯Aで、底部にヘラ切りの痕跡を残す。22は杯Bで、底部はヘラケズリされている。いずれも白沢6号窯の製品のうち新しい段階のものと特徴がよく似ている。

23は土師器の杯である。やや高い高台が付いている。表面は磨滅が著しくミガキ等の痕跡は確認できない。

遺構時期：出土遺物や他遺構との切合い関係から、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

### ■掘立柱建物5（第20図、写真51・52）

位 置：調査区①のO・P2グリッドに位置する。大部分が調査区外へ及んでおり、検出されたのは東面に並ぶ3基の柱穴のみである。遺構確認面の高さは標高35.8～35.9mで、現地表面から0.3～0.4m下に位置する。柱穴の並ぶ方位はN-13°-Wを示す。

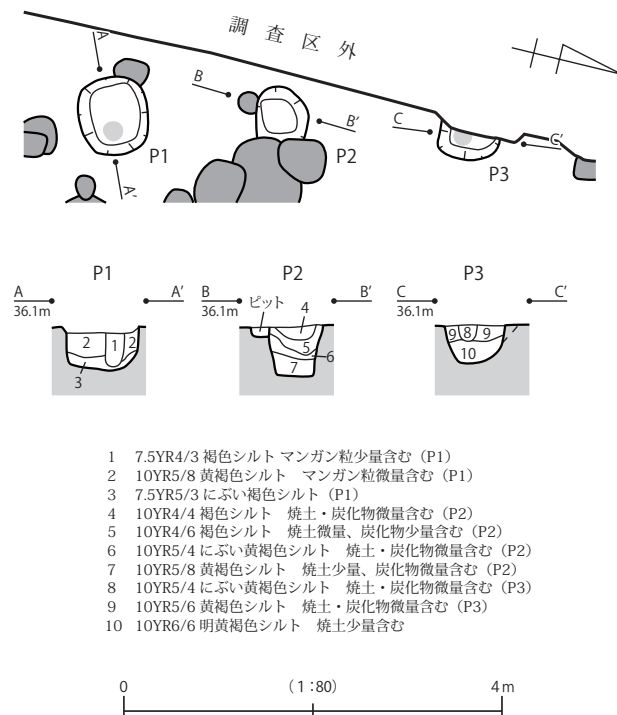
形 態：柱穴3基のみのため、全体の形態は不明である。各柱穴の平面は、隅丸方形又は長方形をしている。断面形は凹字状である。

規 模：柱穴3基のみのため、全体の規模は不明である。柱穴の規模は、長軸約0.8m、短軸0.6～0.7mを測る。柱間は約1.8mを測り、P1・3で柱痕跡を確認した。各柱穴の深さは0.4～0.5mを測る。

土 層：合計10層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

出土遺物：須恵器杯や土師器甕の小片が出土した。また、P2から被熱した礫やスサ混じりの焼土塊が出土し、建物内に竈が設置されていたことを窺わせる。

遺構時期：遺物は小片であるものの8世紀代のものと考えられ、隣接する掘立柱建物3と方位がほぼ同じであることなどから、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。



第20図 掘立柱建物5



## ■掘立柱建物6（第21図）

**位 置**：調査区①のJ・K2グリッドに位置する。大部分が調査区外へ及んでおり、検出されたのは東面に並ぶ3基の柱穴のみである。掘立柱建物7と建物範囲が重複するが、切合い関係がないため新旧は不明である。遺構確認面の高さは標高36.6～36.9mで、現地表面から約0.4m下に位置する。柱穴の並ぶ方位はN-19°-Wを示す。

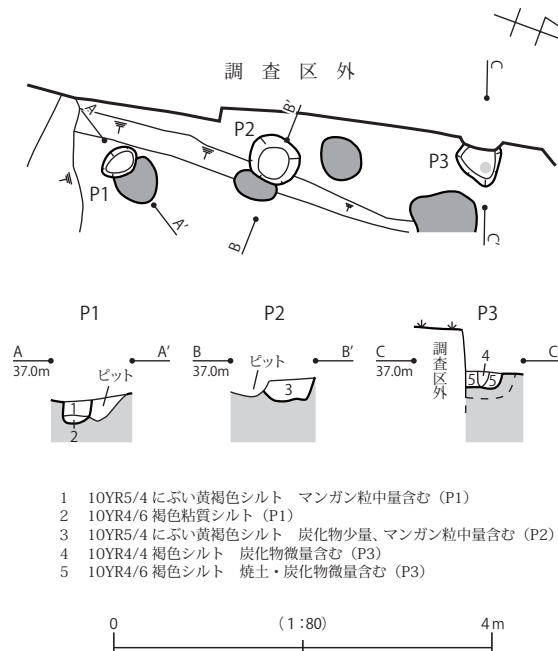
**形 態**：柱穴3基のみのため、全体の形態は不明である。各柱穴の平面は、円形又は不整な楕円形をしている。断面形は凹字状である。

**規 模**：柱穴3基のみのため、全体の規模は不明である。柱穴の規模は、長軸0.4～0.5m、短軸0.3～0.5mを測る。柱間は1.8～2.1mを測り、P3で柱痕跡を確認した。各柱穴の深さは0.18～0.24mを測る。

**土 層**：合計5層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

**出土遺物**：須恵器甕や土師器の小片が出土した。

**遺構時期**：遺物から時期の推定は困難であるが、掘立柱建物3と建物方位が類似することから、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。



第21図 掘立柱建物6

## ■掘立柱建物7（第22図、写真53・54）

**位 置**：調査区①のI・J2グリッドに位置する。大部分が調査区外へ及んでおり、検出されたのは東面に並ぶ3基の柱穴のみである。竪穴建物1を切っている。また、掘立柱建物6と建物範囲が重複するが、切合い関係がないため新旧は不明である。遺構確認面の高さは標高36.9～37.0mで、現地表面から約0.4m下に位置する。柱穴の並ぶ方位はN-15°-Wを示す。

**形 態**：柱穴3基のみのため、全体の形態は不明である。各柱穴の平面は、不整な楕円形をしている。断面形は凹字状である。

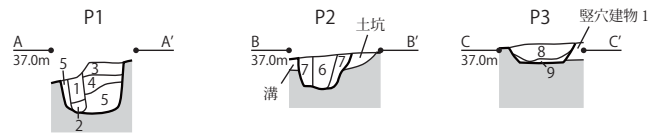
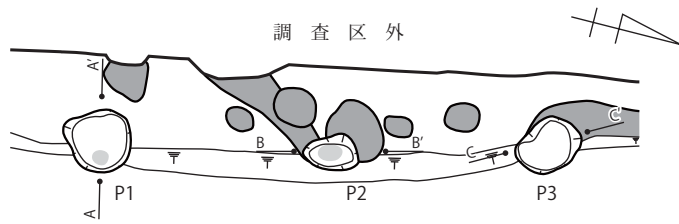
**規 模**：柱穴3基のみのため、全体の規模は不明である。長軸0.60～0.72m、短軸0.38～0.66m

を測る。柱間は約 2.4 m を測り、P1・2 で柱痕跡を確認した。各柱穴の深さは 0.22 ~ 0.54 m と差が大きい。

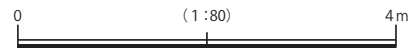
土 層：合計 9 層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

出土遺物：土師器甕の小片などが出土した。

遺構時期：遺物から時期の推定は困難であるが、掘立柱建物 3 と建物方位がほぼ同じであることから、遺構の時期は 8 世紀前半頃と判断した。



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 焼土・炭化物微量、マンガン粒少量含む (P1)
- 2 10YR4/4 褐色シルト 焼土微量・炭化物少量含む (P1)
- 3 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P1)
- 4 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P1)
- 5 10YR4/6 褐色シルト 焼土少量、炭化物微量含む (P1)
- 6 10YR4/6 褐色シルト マンガン粒中量含む (P2)
- 7 10YR5/6 黄褐色粘質シルト マンガン粒微量含む (P2)
- 8 10YR4/6 褐色シルト 炭化物少量、マンガン粒中量含む (P3)
- 9 10YR5/4 にぶい黄褐色粘質シルト (P3)



第 22 図 掘立柱建物 7

### ■掘立柱建物 8 (第 23 図、写真 55 ~ 58)

位 置：調査区①の G・H1・2 グリッドに位置する。建物の東側と南側を検出し、西側・北側は調査区外へ及んでいる。検出されたのは L 字形に並ぶ柱穴 5 基である。遺構確認面の高さは標高 37.1 m で、現地表面から約 0.4 m 下に位置する。東側に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は N-32° -W を示す。

形 態：桁行 2 間以上、梁行 2 間以上の側柱建物である。建物の西側と北側が調査区外にあたるため桁と梁の判別が明確ではないが、南側に並ぶ柱穴は平面方形で東側の柱穴よりやや大きいことから、南面・北面が梁である可能性が高い。柱穴の平面形状は、方形のものと円形のものがある。断面形はおおむね凹字状をしている。底面は平坦で、やや外側へ広がりながら急斜に立ち上がる。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。

規 模：柱痕跡を基準とした柱間は 1.6 ~ 1.7 m で、検出した範囲での床面積は 12.2m<sup>2</sup>以上となる。各柱穴は、長軸 0.46 ~ 0.68 m、短軸 0.38 ~ 0.62 m を測り、深さは 0.14 ~ 0.3 m である。

土 層：合計 10 層に区分できる。褐色、黄褐色、黄橙色シルトを主体としている。

出土遺物：なし。

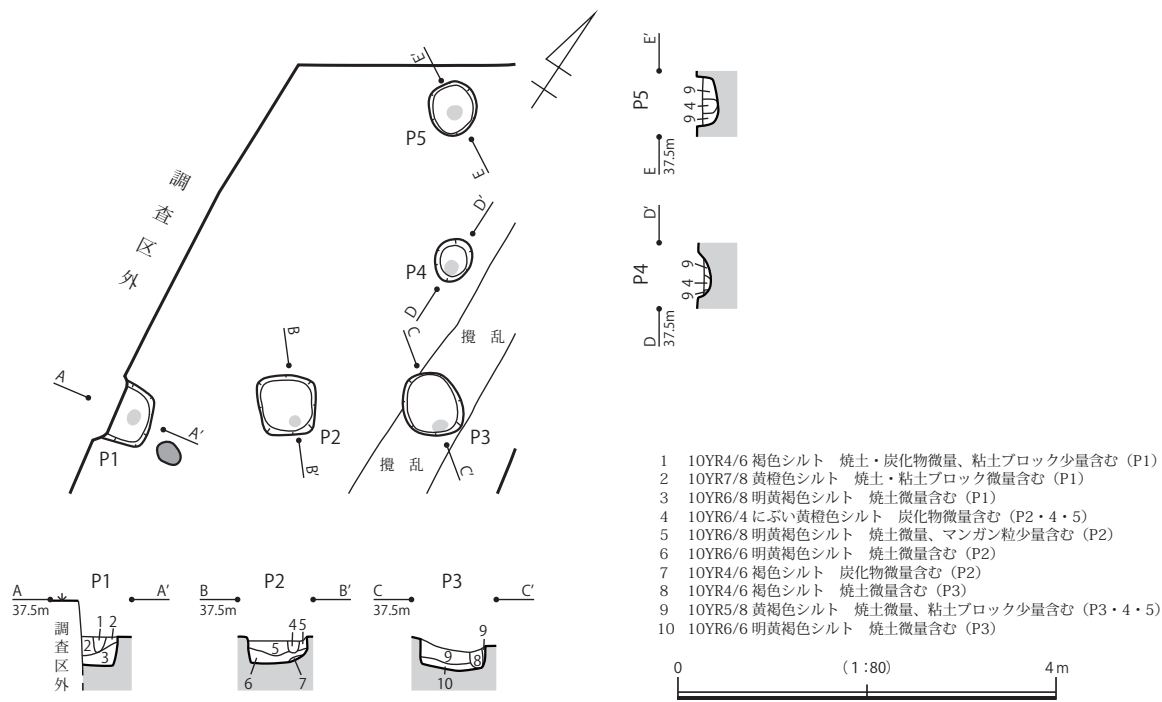
遺構時期：不明。

### ■掘立柱建物 9 (第 24 図、写真 59 ~ 62)

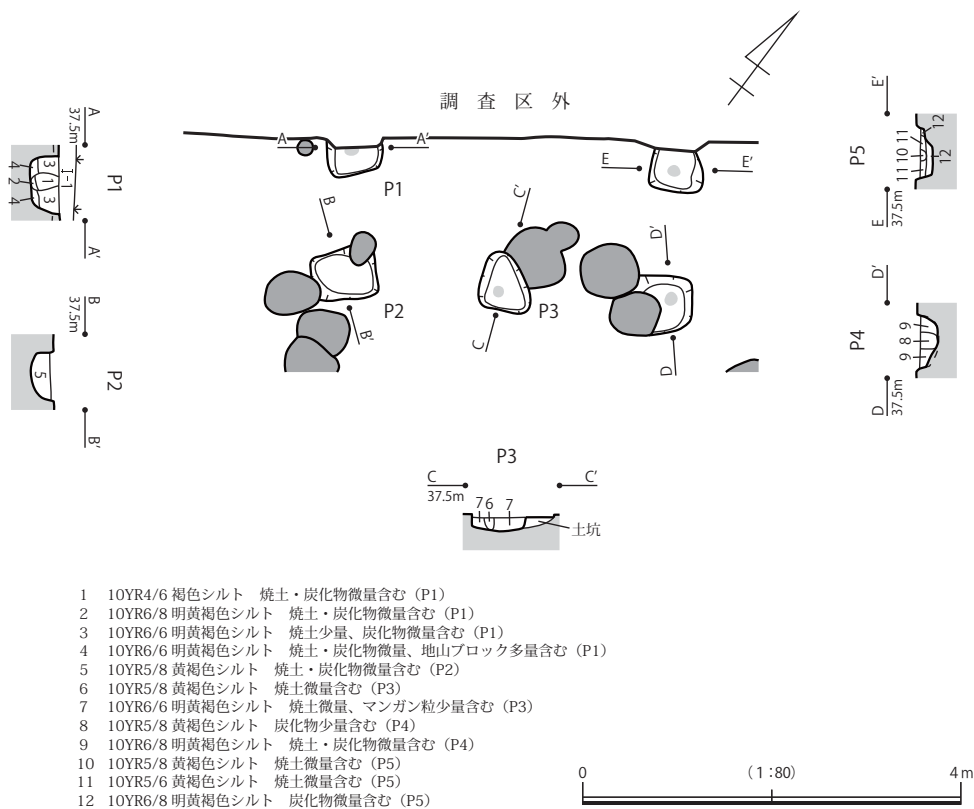
位 置：調査区①の F・G3 グリッドに位置する。遺構の北側は調査区外へ及んでおり、検出されたのはコ字形に並ぶ柱穴 5 基である。遺構確認面の高さは標高 37.1 ~ 37.2 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。桁行を基準とした建物方位は N-37° -W を示す。

形 態：桁行 2 間以上、梁行 2 間の側柱建物である。各柱穴は、他の遺構に切られているため形状が不明瞭であるが、おおよそ方形を呈する。断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、P2 以外の柱穴で柱痕跡を確認した。いずれも水田造成の際に上部を削平されており、底面付近での検出である。

規 模：柱痕跡を基準とした柱間は 1.4 ~ 1.8 m で、検出した範囲での床面積は 5.8m<sup>2</sup>以上となる。各柱穴は、長軸 0.62 ~ 0.7 m、短軸約 0.6 m を測り、深さは 0.2 ~ 0.3 m である。



第 23 図 掘立柱建物 8



第 24 図 掘立柱建物 9

土 層：合計12層に区分できる。柱痕跡を含め褐色や黄褐色シルトを主体としている。

出土遺物：須恵器甕の小片1点が出土した。

遺構時期：不明。

### ■掘立柱建物 10 (第 25 図、写真 63・64)

位 置：調査区①の F4・5 グリッドに位置する。建物の北面のみが検出され、大部分は調査区外へ及んでいる。掘立柱建物 12 の柱穴を切っている。また、掘立柱建物 27 と建物範囲が重複するが、切合い関係がないため新旧は不明である。遺構確認面の高さは標高 37.2 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。北面桁行を基準とした建物方位は N-60° -E を示す。

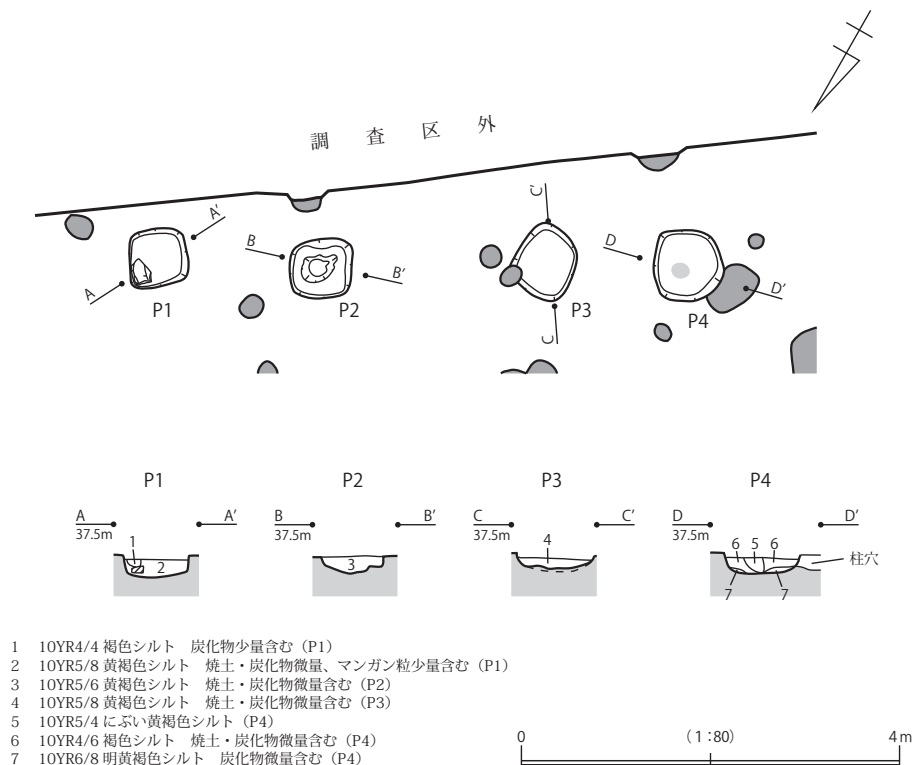
形 態：桁行3間、梁行1間以上の建物跡である。遺構の大部分が調査区外にあるため、側柱か総柱かの判別はできない。各柱穴の平面はおおよそ方形を呈し、断面形は凹字状である。P1・4 にて柱痕跡を確認した。いずれの柱穴も水田造成の際に上部を削平されており、底面付近での検出である。

規 模：柱痕跡を基準とした柱間は 1.6 ～ 2.0 m である。柱穴の規模は、方形の一辺 0.6 ～ 0.7 m を測る。深さは約 0.2 m を測る。P1 の柱痕跡の直下には、20cm 大の角礫が置かれていた。

土 層：合計7層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

出土遺物：須恵器杯蓋や土師器の小片などが出土した。

遺構時期：遺物が少なく明確な時期は不明だが、8世紀前半頃と考えられる掘立柱建物 12 を切っているため、それ以降の時期と考えられる。



第 25 図 掘立柱建物 10

■掘立柱建物 11 (第 26 図、写真 65～68)

位置：調査区①の B5・6 グリッドに位置する。建物の西側と南側を検出し、東側・北側は調査区外へ及んでいる。検出されたのは L 字形に並ぶ柱穴 5 基である。柱穴 P4 が土坑 10 に切られている。遺構確認面の高さは標高 37.8 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。桁行を基準とした建物方位は N-73° -E を示す。

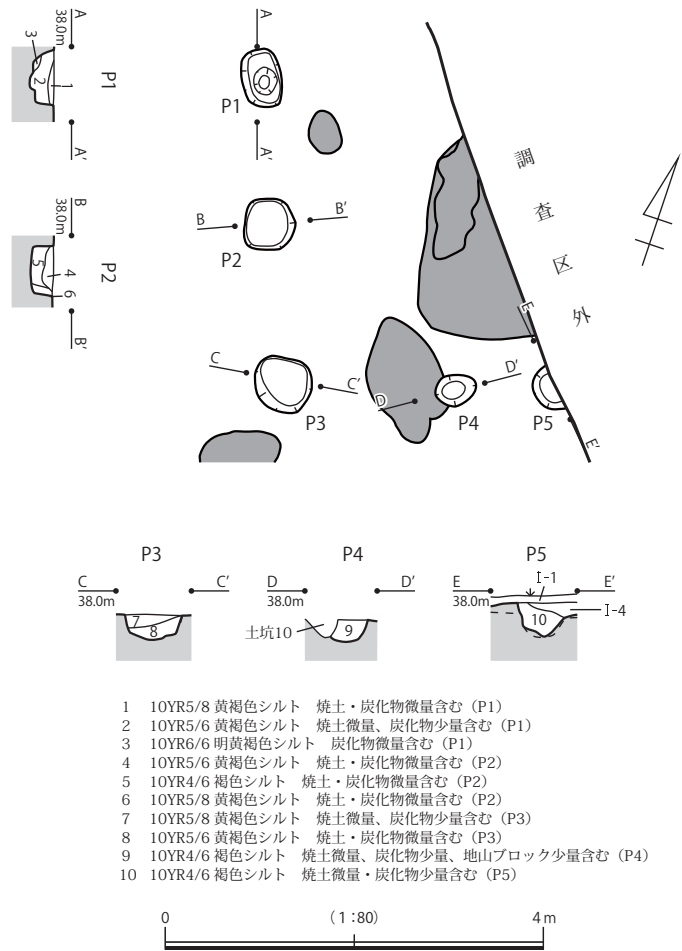
形態：桁行 2 間以上、梁行 2 間の側柱建物である。柱穴の平面形状は、円形もしくは楕円形を呈する。断面形はおおむね凹字状をしているが、底面は平坦なものや中央付近が窪むものがある。柱痕跡は確認されなかった。

規模：各柱穴の中心を基準とした柱間は 1.2～1.7 m で、検出した範囲での床面積は 9 m<sup>2</sup> 以上となる。各柱穴は、長軸 0.44～0.6 m、短軸 0.34～0.56 m を測り、深さは 0.26 m である。

土層：合計 10 層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

出土遺物：なし。

遺構時期：遺物は出土しなかったものの、掘立柱建物 3 と直行する建物方位であることから、遺構の時期は 8 世紀前半頃と判断した。



第 26 図 掘立柱建物 11

■掘立柱建物 12 (第 27・79 図、表 2、写真 69・70・188)

位置：調査区①の F・G3・4 グリッドに位置する。建物の北側隅を検出し、それ以外の大部分は調査区外へ及んでいる。検出されたのは L 字形に並ぶ柱穴 3 基である。掘立柱建物 10 の柱穴に切られている。遺構確認面の高さは標高 37.2 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。北西面に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は N-31° -E を示す。

形態：柱穴 3 基のみのため、全体の形態は不明である。柱穴の平面形はおおむね長方形で、断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、やや外側へ広がりながら急斜に立ち上がる。P1・3 で柱痕跡を確認した。

規模：柱痕跡を基準とした柱間は 1.7～2.2 m である。各柱穴は、長軸 0.56～0.66 m、短軸 0.42～0.52 m を測り、深さは 0.16～0.28 m である。

土 層：合計12層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

出土遺物：須恵器杯や土師器片が出土した。

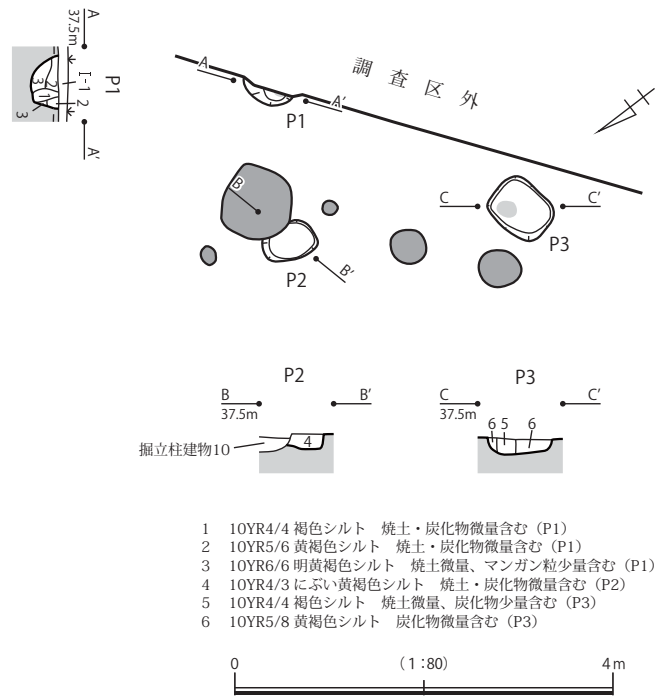
24は須恵器の杯である。ロクロ成形され、底部はヘラ切りされている。

遺構時期：出土遺物や、建物方位が掘立柱建物4と類似することなどから、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

### ■掘立柱建物13（第28図、写真71～74）

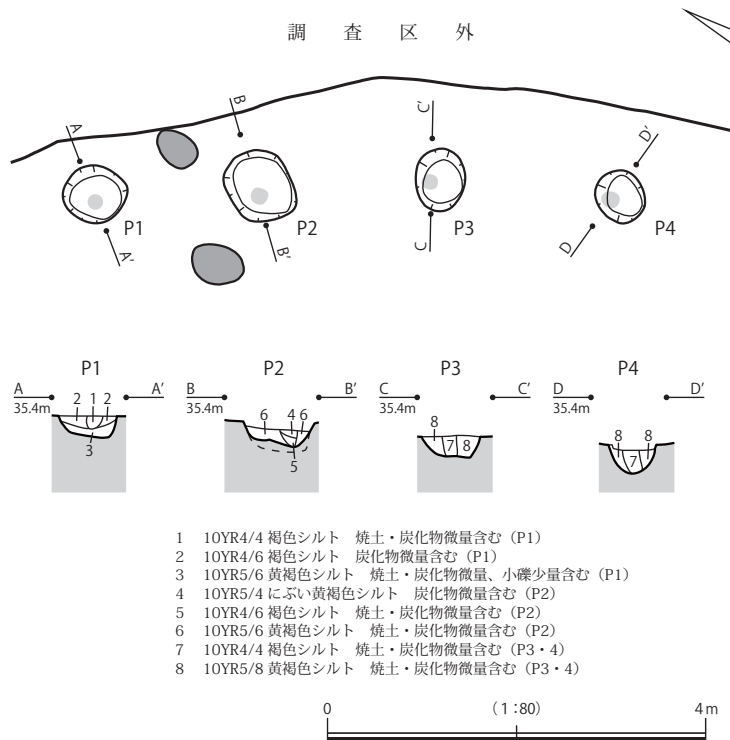
位 置：調査区③のX・Y20・21グリッドに位置する。建物の西面のみが検出され、大部分は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高34.9～35.2mで、現地表面から約0.2～0.4m下に位置する。西面桁行を基準とした建物方位はN-23°-Wを示す。

形 態：桁行3間、梁行1間以上の建物跡である。遺構の大部分が調査区外にあるため、側柱か総柱かの判別はできない。各柱穴の平面は、円形または楕円形を呈し、断面形はおおむね凹字状である。



- 1 10YR4/4 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P1)
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P1)
- 3 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土微量、マンガン粒少量含む (P1)
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P2)
- 5 10YR4/4 褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む (P3)
- 6 10YR5/8 黄褐色シルト 炭化物微量含む (P3)

第27図 掘立柱建物12



- 1 10YR4/4 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P1)
- 2 10YR4/6 褐色シルト 炭化物微量含む (P1)
- 3 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量、小礫少量含む (P1)
- 4 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 炭化物微量含む (P2)
- 5 10YR4/6 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P2)
- 6 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P2)
- 7 10YR4/4 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P3・4)
- 8 10YR5/8 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P3・4)

第28図 掘立柱建物13

る。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。

規 模：柱痕跡を基準とした柱間は1.8～1.9 mである。柱穴の規模は、長軸0.56～0.76 m、短軸0.5～0.64 m、深さ0.2～0.3 mを測る。

土 層：合計8層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体とし、基盤となる砂礫層を掘り込んで築かれている。

出土遺物：なし。

遺構時期：不明。

### ■掘立柱建物 14 (第 29 図、写真 75～81)

位 置：調査区③のU・V18・19グリッドに位置する。大部分が調査区外へ及んでおり、検出されたのは南西面に並ぶ3基の柱穴のみである。遺構確認面の高さは標高35.9～36.0 mで、現地表面から0.5～0.6 m下に位置する。柱穴の並ぶ方位はN-38°-Wを示す。

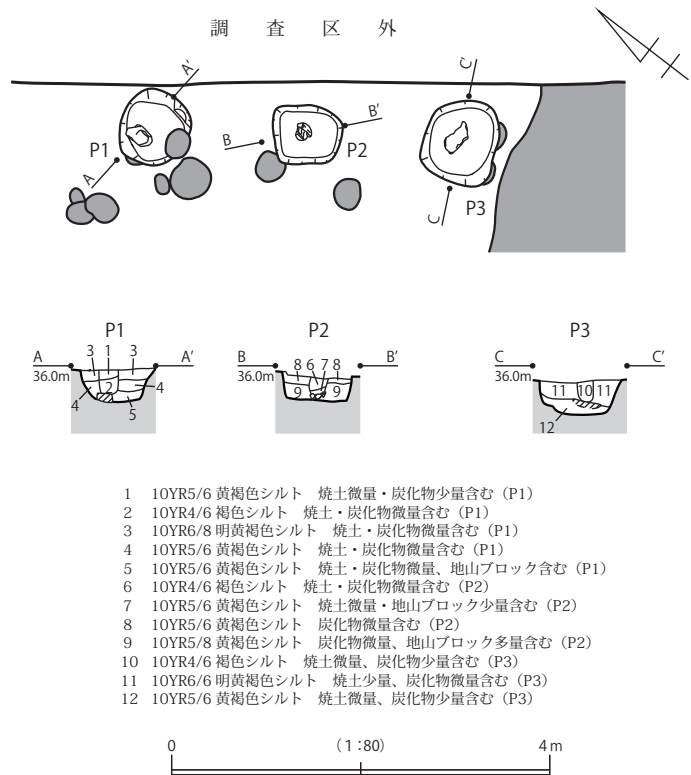
形 態：柱穴3基のみのため、全体の形態は不明である。各柱穴の平面は、おおむね隅丸方形をしている。断面形は凹字状である。

規 模：柱穴3基のみのため、全体の規模は不明である。柱穴の規模は、一辺約0.7～0.8 mを測り、深さは0.28～0.52 mである。すべての柱穴から柱痕跡を確認し、断面の観察から柱は柱穴底面付近に置かれた角礫や円礫の上に据えられていた。柱痕跡を基準とした柱間は1.7～1.8 mを測る。

土 層：合計12層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

出土遺物：なし。

遺構時期：不明



第 29 図 掘立柱建物 14

### ■掘立柱建物 15 (第 30 図、写真 82・83)

位 置：調査区③のS・T16・17グリッドに位置する。大部分が調査区外へ及んでおり、検出されたのは東面に並ぶ3基の柱穴のみである。溝2に切られている。また、掘立柱建物16の柱穴と上端が一部重複するが、重複範囲がごくわずかなため新旧関係は不明である。遺構確認面の高さは標高36.1～36.2 mで、現地表面から約0.2 m下に位置する。柱穴の並ぶ方位はN-19°-Wを示す。

形 態：柱穴3基のみのため、全体の形態は不明である。各柱穴の平面は方形や楕円形を呈し、断面形は凹字状である。いずれの柱穴も水田造成の際に上部を大きく削平されており、底面付近での

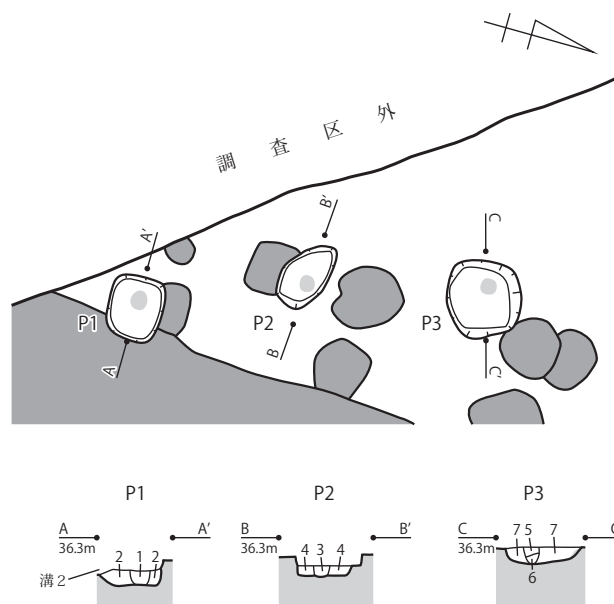
検出である。

**規模**：柱穴3基のみのため、全体の規模は不明である。柱穴の規模は、長軸0.68～0.8 m、短軸0.48～0.8 mを測り、深さは約0.2 mである。すべての柱穴から柱痕跡を確認した。柱痕跡を基準とした柱間は1.8～1.9 mを測る。

**土層**：合計7層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

**出土遺物**：須恵器甕、土師器などの小片が出土した。

**遺構時期**：遺物は少ないものの、調査区①の掘立柱建物3と建物方位が類似していることから、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。



- 1 10YR4/6 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P1)
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P1)
- 3 10YR4/4 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P2)
- 4 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P2)
- 5 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土・炭化物微量、地山ブロック少量含む (P3)
- 6 10YR4/6 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P3)
- 7 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P3)

第30図 掘立柱建物15

### ■掘立柱建物16 (第31図、写真84・85)

**位置**：調査区③のS・T16・17グリッドに位置する。建物の西面のみが検出され、大部分は調査区外へ及んでいる。溝2に切られている。また、掘立柱建物15の柱穴と上端の一部重複するが、重複範囲がごくわずかなため新旧関係は不明である。遺構確

認面の高さは標高36.1～36.3 mで、現地表面から約0.2 m下に位置する。西面桁行を基準とした建物方位はN-19° -Wを示す。

**形態**：桁行3間、梁行1間以上の建物跡である。遺構の大部分が調査区外にあるため、側柱か総柱かの判別はできない。各柱穴の平面は、円形または楕円形を呈し、断面形はおおむね凹字状である。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。いずれの柱穴も水田造成の際に上部を削平されており、底面付近での検出である。

**規模**：柱痕跡を基準とした柱間は1.5～2.0 mである。柱穴の規模は、長軸0.6～0.7 m、短軸0.5～0.64 m、深さ0.16～0.26 mを測る。

**土層**：合計11層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

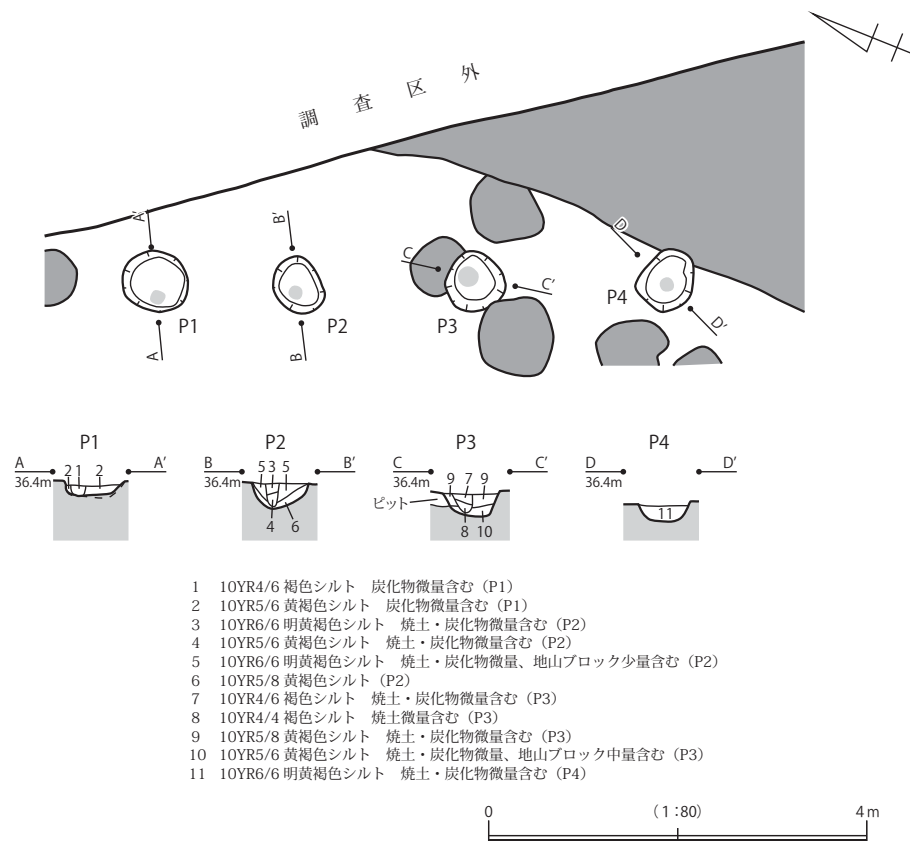
**出土遺物**：須恵器甕、土師器などの小片が出土した。

**遺構時期**：遺物は少ないものの、調査区①の掘立柱建物3と建物方位が類似していることから、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

### ■掘立柱建物17 (第32・79図、表2、写真86～89・189)

**位置**：調査区③のN・O12・13グリッドに位置する。建物の北東面を検出し、南西側の大部分は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高37.4～37.6 mで、現地表面から約0.3 m下に位置する。桁行を基準とした建物方位はN-49° -Wを示す。





第 31 図 掘立柱建物 16

**形態：**桁行 3 間、梁行 1 間以上の建物跡である。遺構の大部分が調査区外にあるため、側柱か総柱かの判別はできない。柱穴の平面形状は、おおむね楕円形を呈する。断面形は U 字状をしている。底面はゆるやかに湾曲し、外側へ広がりながら立ち上がる。P4 で柱痕跡を確認した。

**規模：**柱痕跡を基準とした柱間は 18 ～ 24 m である。各柱穴は、長軸約 0.6 m、短軸 0.46 ～ 0.52 m を測り、深さは 0.22 ～ 0.3 m である。

**土層：**合計 10 層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体とし、P2 第 3 層の下部から平瓦が出土した。

**出土遺物：**須恵器杯、土師器片、土製品、瓦などが出土した。

25 は、土師質の棒状土錘である。片側は欠損している。

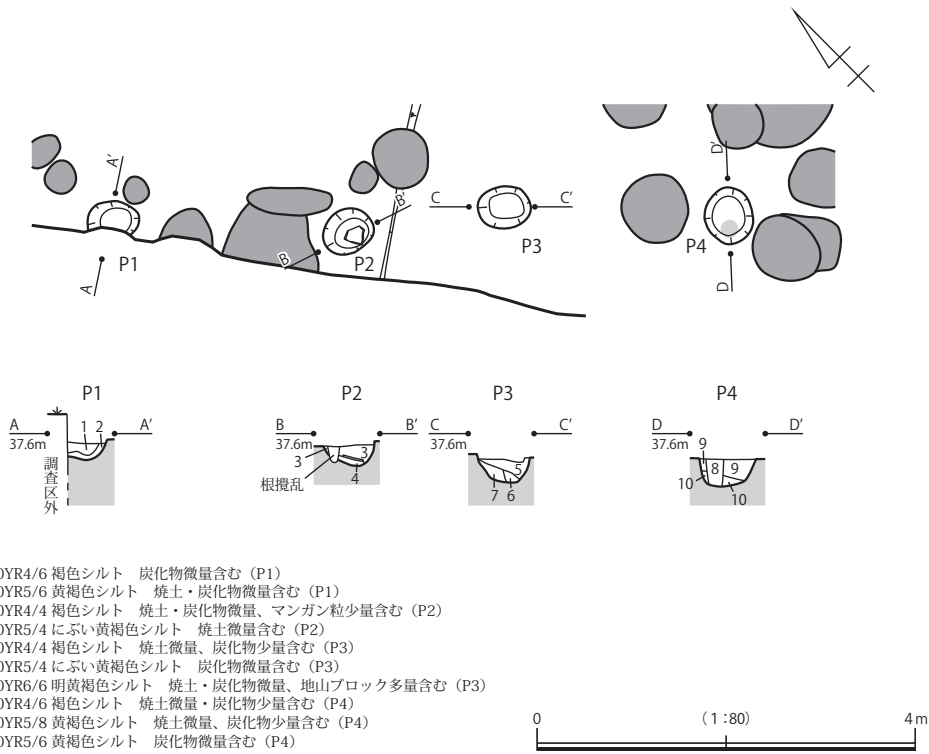
26・27 は、平瓦である。26 の凸面は全面ナデ仕上げ、27 は縄目叩きの痕跡が残っている。凹面はともに布目圧痕が残っている。端部はヘラケズリされている。

**遺構時期：**出土遺物や、建物方位が調査区①の掘立柱建物 4 と類似していることから、遺構の時期は 8 世紀前半頃と判断した。

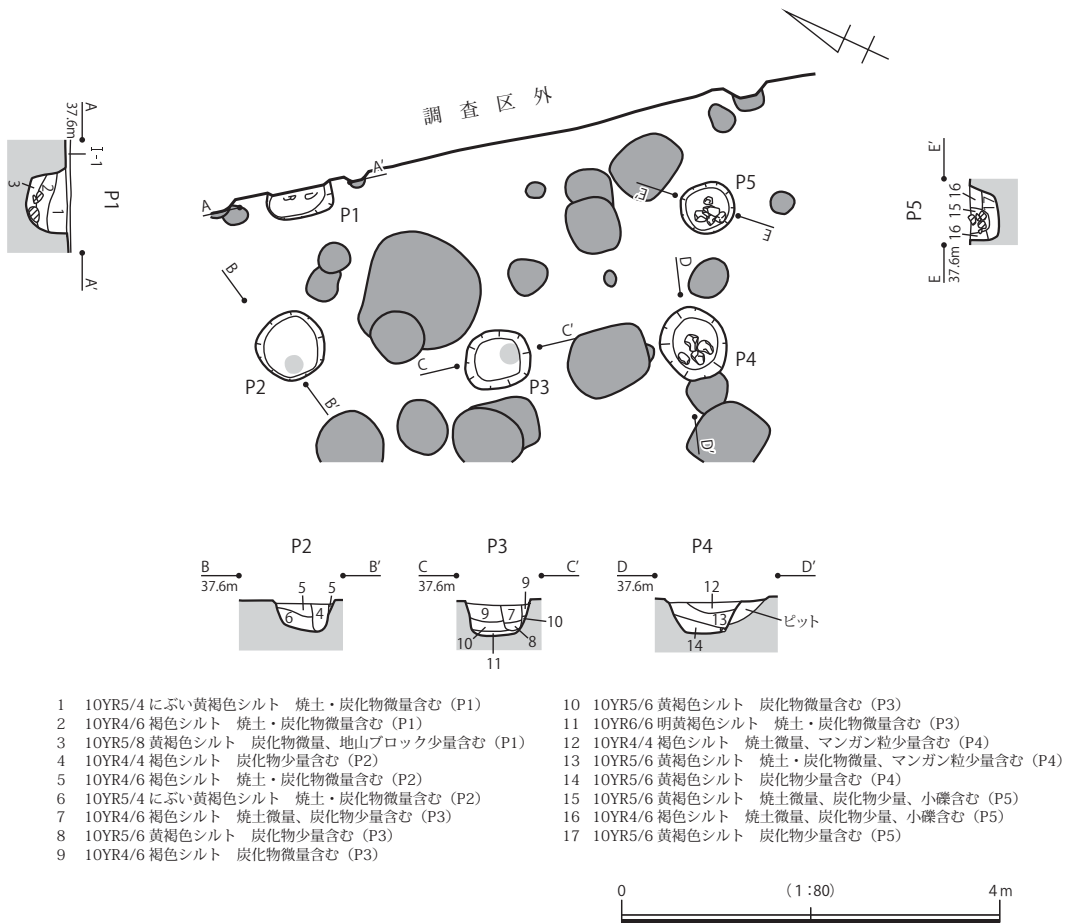
### ■掘立柱建物 18 (第 33 図、写真 90・91)

**位置：**調査区③の N・O13 グリッドに位置する。遺構の東側は調査区外へ及んでいる。検出されたのはコ字形に並ぶ柱穴 5 基である。遺構確認面の高さは標高 37.4 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。桁行を基準とした建物方位は N-75° -E を示す。

**形態：**桁行 2 間以上、梁行 2 間の側柱建物である。各柱穴の平面形はおおむね円形を呈する。



第 32 図 掘立柱建物 17



第 33 図 掘立柱建物 18

断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、P2・3・5において柱痕跡を確認した。

**規 模**：柱痕跡を基準とした柱間は1.6～2.1 mで、検出した範囲での床面積は12㎡以上となる。各柱穴は、長軸0.6～0.78 m、短軸0.56～0.7 mを測り、深さは0.3～0.44 mである

**土 層**：合計17層に区分できる。主に柱痕跡に褐色シルト、掘方埋土に黄褐色シルトが堆積している。P1・4・5の底面付近からは複数の円礫が確認され、P5では柱痕跡内にも小礫が混入していた。

**出土遺物**：土師器甕などの小片が出土した。

**遺構時期**：遺物から時期の推定は困難なもの、建物方位が調査区①の掘立柱建物3と直行する関係にあることから、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

### ■掘立柱建物 19 (第 34 図、写真 92・93)

**位 置**：調査区③の M11・12 グリッドに位置する。大部分が調査区外へ及んでおり、検出されたのは東面に並ぶ3基の柱穴のみである。柱穴 P2 が柱穴列 3 に切られている。遺構確認面の高さは標高 37.6 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。柱穴の並ぶ方位は N-30° -W を示す。

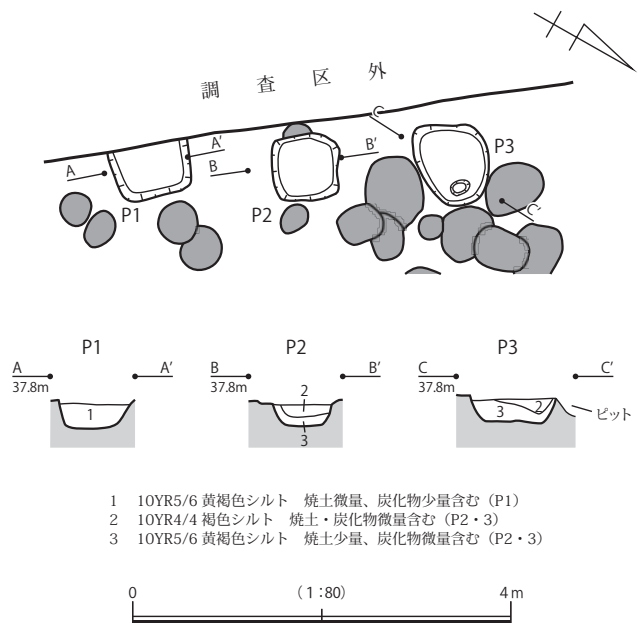
**形 態**：柱穴 3 基のみのため、全体の形態は不明である。各柱穴の平面はおおむね隅丸方形をしている。断面形は凹字状である。いずれの柱穴も水田造成の際に上部を削平されており、底面付近での検出である。

**規 模**：柱穴 3 基のみのため、全体の規模は不明である。柱穴の規模は、一辺 0.7～0.8 m を測り、深さは約 0.3 m である。柱痕跡は確認されなかった。柱穴の中心を基準とした柱間は約 1.6 m を測る。

**土 層**：合計 3 層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

**出土遺物**：須恵器杯などの小片が出土した。

**遺構時期**：不明。



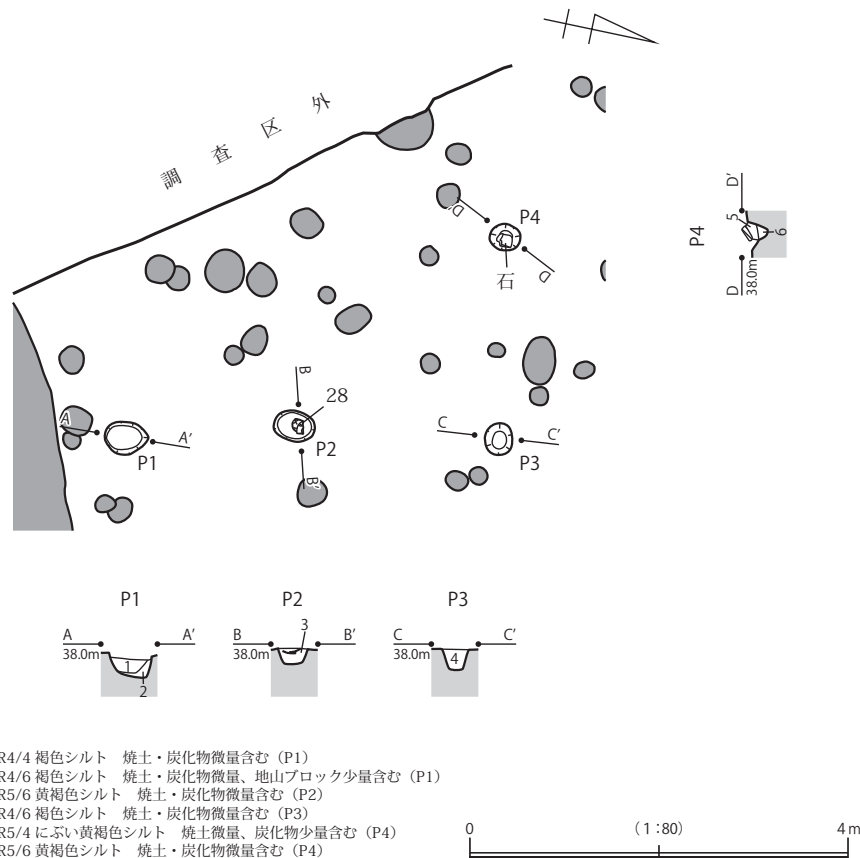
第 34 図 掘立柱建物 19

### ■掘立柱建物 20 (第 35・79 図、表 2、写真 94・95・189)

**位 置**：調査区③の L8 グリッドに位置する。建物範囲が掘立柱建物 23・24 と重複するが、柱穴同士の切合い関係はないため新旧は不明である。遺構の西側は調査区外へ及んでおり、検出されたのは L 字形に並ぶ柱穴 4 基である。遺構確認面の高さは標高 37.9 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。東西に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は N-80° -E を示す

**形 態**：桁行 2 間以上、梁行 2 間の側柱建物である。各柱穴の平面は楕円形を呈し、断面形はおおむね凹字状をしている。底面は平坦で、外側に開きながら立ち上がる。柱痕跡は確認されていない。

**規 模**：柱穴の中心を基準とした柱間は 1.9～2.1 m で、検出した範囲での床面積は 16㎡以上と



第 35 図 掘立柱建物 20

なる。各柱穴は、長軸 0.34～0.46 m、短軸 0.28～0.36 mを測り、深さは約 0.2 mである

土 層：6層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体とする。

出土遺物：須恵器の椀・甕、土師器片、瓦などが出土した。

28は、柱穴 P2の上層から出土した須恵器の椀である。体部下半はやや内湾して立ち上がり、上半は外側へ直線的に開いている。口縁端部は丸くおさめ、内面側にナデによる凹線状の窪みが巡っている。

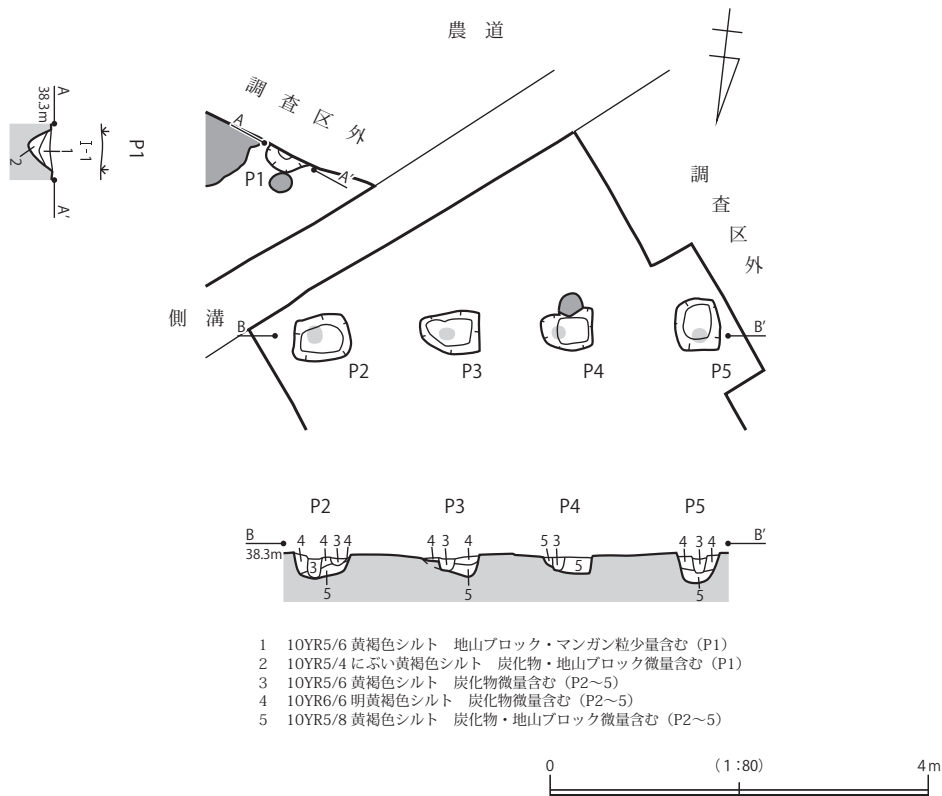
遺構時期：出土した遺物から、遺構の時期は 12～13 世紀頃と判断した。

### ■掘立柱建物 21 (第 36 図、写真 96～100)

位 置：調査区③の I7・8 グリッドに位置する。遺構の南側は調査区外へ及んでおり、検出されたのは L 字形に並ぶ柱穴 5 基である。遺構確認面の高さは標高 38.2～38.3 mで、現地表面から 0.2～0.5 m下に位置する。桁行を基準とした建物方位は N-84°-E を示す。

形 態：桁行 3 間以上、梁行 2 間以上の側柱建物である。遺構の過半が調査区外にあるため、側柱か総柱かの判別はできない。各柱穴の平面は長方形を呈し、断面形はおおむね凹字状をしている。底面は平坦で、外側に開きながら立ち上がる。P3・4の底面は東側がやや高く勾配がついている。P1以外の柱穴において柱痕跡を確認した。

規 模：柱痕跡を基準とした柱間は 1.2～1.5 mで、検出した範囲での床面積は 8 m<sup>2</sup>以上となる。各柱穴は、長軸 0.54～0.62 m、短軸 0.4～0.48 mを測り、深さは 0.18～0.32 mである。



第 36 図 掘立柱建物 21

土 層：合計 5 層に区分できる。黄褐色のシルトを主体としている。P2 の土層観察では、底面まで及ぶ柱痕跡のほか、第 5 層上面までの別の柱痕跡が認められ、束柱の可能性はある。

出土遺物：なし。

遺構時期：遺物は出土しなかったものの、掘立柱建物 20 と建物方位が類似することから、遺構の時期は 12 ～ 13 世紀頃と判断した。

■掘立柱建物 22 (第 37 図、写真 101・102)

位 置：調査区③の M・N12 グリッドに位置する。遺構の東側は調査区外へ及んでおり、検出されたのは L 字形に並ぶ柱穴 4 基である。遺構確認面の高さは標高 37.6 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。南北に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は N-8°-E を示す。

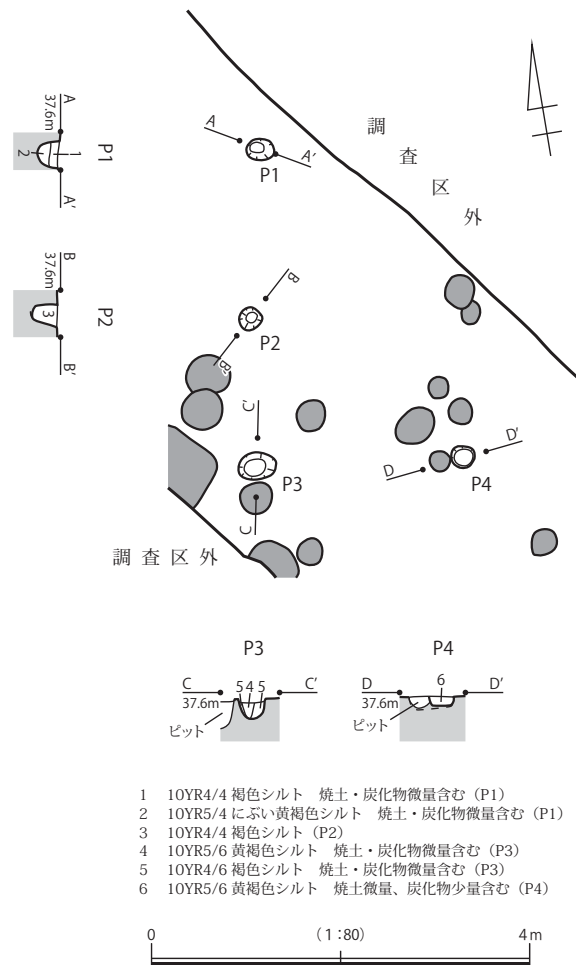
形 態：桁行 2 間以上、梁行 2 間の側柱建物跡である。各柱穴の平面は円形や楕円形を呈し、断面形は U 字状をしている。底面は湾曲し、外側に開きながら立ち上がる。P3 で柱痕跡を確認した。

規 模：柱痕跡を基準とした柱間は 1.6 ～ 2.2 m で、検出した範囲での床面積は 14㎡以上となる。各柱穴は、長軸 0.24 ～ 0.4 m、短軸 0.22 ～ 0.3 m を測り、深さは 0.1 ～ 0.26 m である。水田造成の際に上端を大きく削平されている。

土 層：合計 6 層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

出土遺物：土師器の杯片などが出土した。

遺構時期：遺物は少ないものの、建物方位が掘立柱建物 23 と類似することなどから、遺構の時期は 12 ～ 13 世紀頃と判断した。



第 37 図 掘立柱建物 22

### ■掘立柱建物 23 (第 38 図、写真 103・104)

**位 置**：調査区③の L8 グリッドに位置する。掘立柱建物 20・24 と建物範囲が重複しているが、柱穴同士の切合いがないため新旧は不明である。遺構の西側は調査区外へ及んでおり、検出されたのは L 字形に並ぶ柱穴 4 基である。遺構確認面の高さは標高 37.9 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。南北に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は N-3°-E を示す。

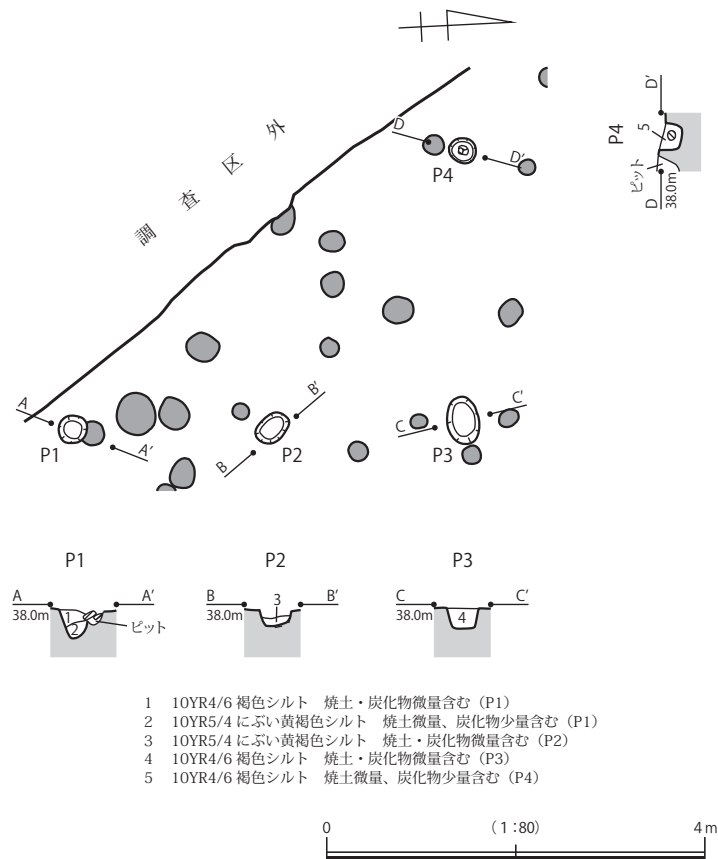
**形 態**：桁行 2 間以上、梁行 2 間の建物跡である。遺構の過半が調査区外にあるため、側柱か総柱かの判別はできない。各柱穴の平面は円形や楕円形を呈し、断面形はおおむね凹字状をしている。底面は平坦で、外側に開きながら立ち上がる。柱痕跡は確認されなかった。

**規 模**：柱穴の中心を基準とした柱間は 1.9 ～ 2.1 m で、検出した範囲での床面積は 15㎡以上となる。各柱穴は、長軸 0.3 ～ 0.5 m、短軸 0.28 ～ 0.34 m を測り、深さは 0.16 ～ 0.3 m である。

**土 層**：合計 5 層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

**出土遺物**：須恵器の椀・甕などの小片が出土した。

**遺構時期**：遺物は少ないものの、重複する掘立柱建物 20 と同様の時期のものと考えられることから、遺構の時期は 12 ～ 13 世紀頃と判断した。



第 38 図 掘立柱建物 23

■掘立柱建物 24 (第 39 図、写真 105・106)

位 置：調査区③の L・M8・9 グリッドに位置する。掘立柱建物 20・23 と建物範囲が重複しているが、柱穴同士の切合いがないため新旧は不明である。遺構の西側一部が調査区外へ及んでおり、検出されたのはコ字形に並ぶ柱穴 6 基である。遺構確認面の高さは標高 37.9 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。東西に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は N-84° -E を示す。

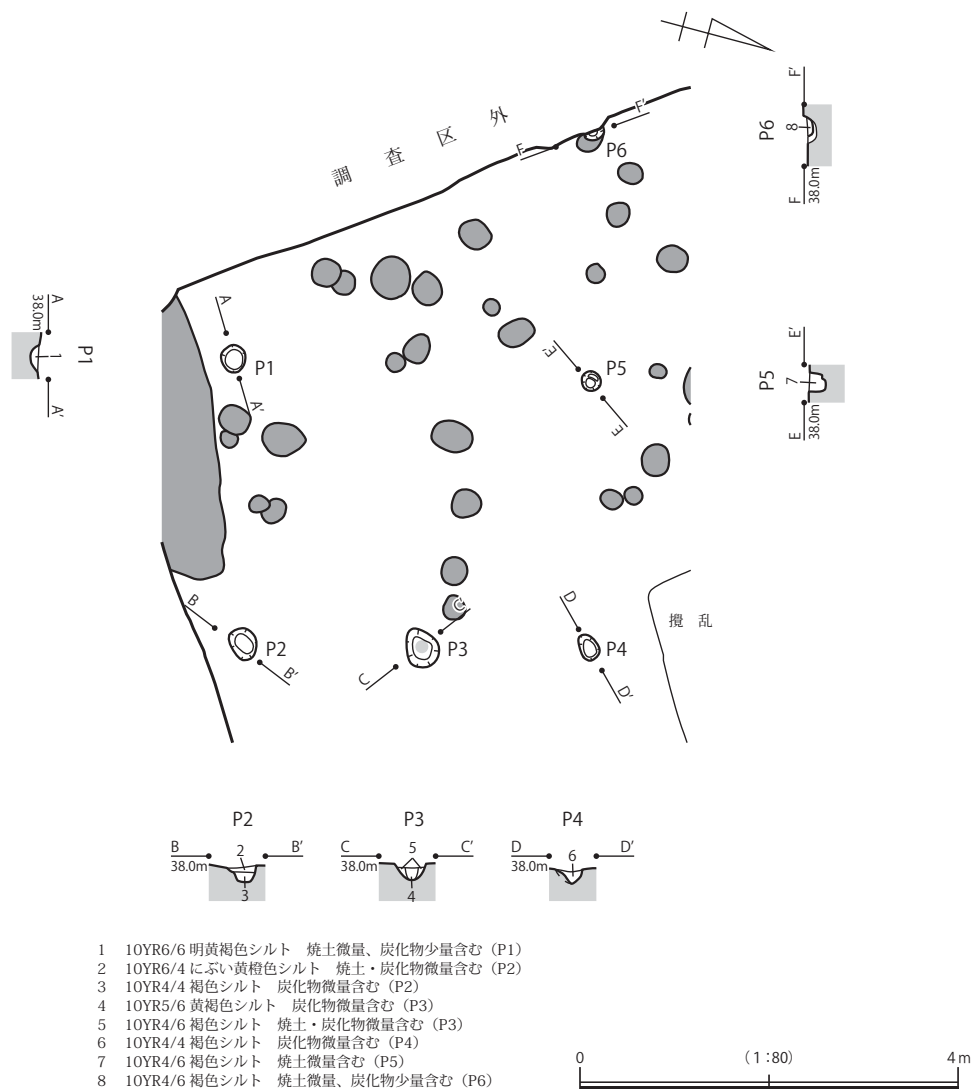
形 態：桁行 2 間以上、梁行 2 間の側柱建物跡である。各柱穴の平面は円形や楕円形を呈し、断面形はおおむね U 字状をしている。底面は湾曲し、外側に開きながら立ち上がる。P3 で柱痕跡を確認した。

規 模：柱痕跡を基準とした梁行の柱間は 1.8 ～ 1.9 m で、桁行の柱間は 2.7 ～ 3.0 m である。検出した範囲での床面積は 20㎡以上となる。各柱穴は、長軸 0.22 ～ 0.44 m、短軸 0.2 ～ 0.36 m を測り、深さは 0.1 ～ 0.18 m と非常に浅い。

土 層：合計 8 層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

出土遺物：土師器の小片が出土した。

遺構時期：遺物から時期の推定は困難であるが、建物方位が重複する掘立柱建物 20 と類似することから、遺構の時期は 12 ～ 13 世紀頃と判断した。



第 39 図 掘立柱建物 24

### ■掘立柱建物 25 (第 40 図、写真 107・108)

**位 置**：調査区③の G5・6 グリッドに位置する。遺構の西側、南側は調査区外へ及んでおり、検出されたのは L 字形に並ぶ柱穴 3 基である。どの柱穴も後世の水田開発のため上端を大きく削平されており非常に浅い。遺構確認面の高さは標高 38.2 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。南北に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は N-10° -W を示す。

**形 態**：桁行 2 間以上、梁行 2 間以上の建物跡である。遺構の過半が調査区外にあるため、側柱か総柱かの判別はできない。各柱穴の平面は円形で、断面形は U 字状をしている。柱痕跡は確認されなかった。

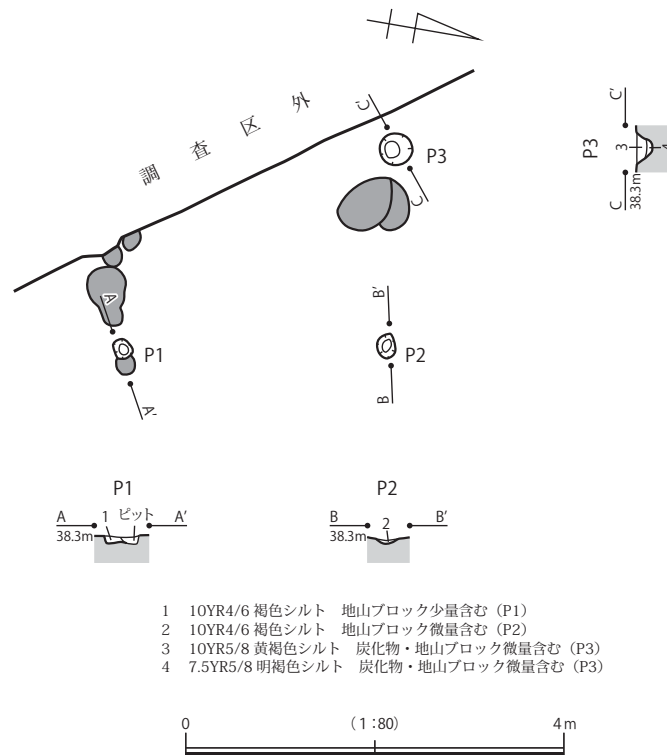
**規 模**：柱穴の中心を基準とした柱間は 2.1 ～ 2.8 m で、検出した範囲での床面積は 14㎡以上となる。各柱穴は、直径約 0.22 ～ 0.34 m を測り、深さは 0.06 ～ 0.16 m である。

**土 層**：合計 4 層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

**出土遺物**：なし。

**遺構時期**：遺物は出土していないものの、建物方位が掘立柱建物 20 とほぼ同じであることから、





第 40 図 掘立柱建物 25

遺構の時期は 12 ～ 13 世紀頃と判断した。

■掘立柱建物 26 (第 41 図、写真 109 ～ 112)

位 置：調査区③の D・E4・5 グリッドに位置する。遺構の南側は樹木による攪乱で壊され、東側は調査区外へ及んでいる。検出されたのは L 字形に並ぶ柱穴 3 基のみである。遺構確認面の高さは標高 38.1 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。南北に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は N-12° -W を示す。

形 態：桁行 2 間以上、梁行 2 間以上の側柱建物跡である。各柱穴の平面は円形で、断面形は U 字状をしている。P2・3 で柱痕跡を確認した。

規 模：柱痕跡を基準とした柱間は 1.9 m を測る。各柱穴は、直径約 0.32 ～ 0.42 m を測り、深さは 0.2 ～ 0.4 m である。

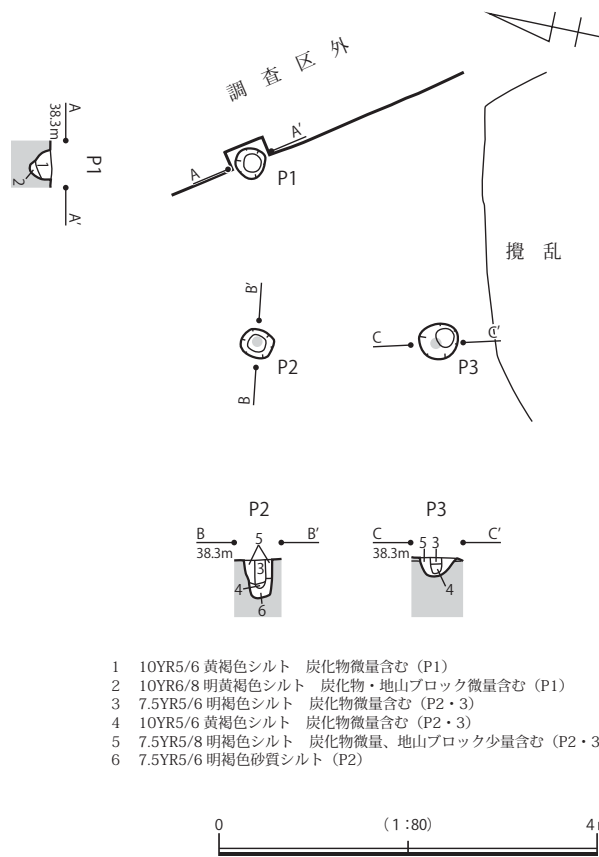
土 層：合計 6 層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

出土遺物：須恵器椀、土師器などの小片が出土した。

遺構時期：遺物から時期の推定は困難であるが、建物方位が掘立柱建物 20 と類似することなどから、遺構の時期は 12 ～ 13 世紀頃と判断した。

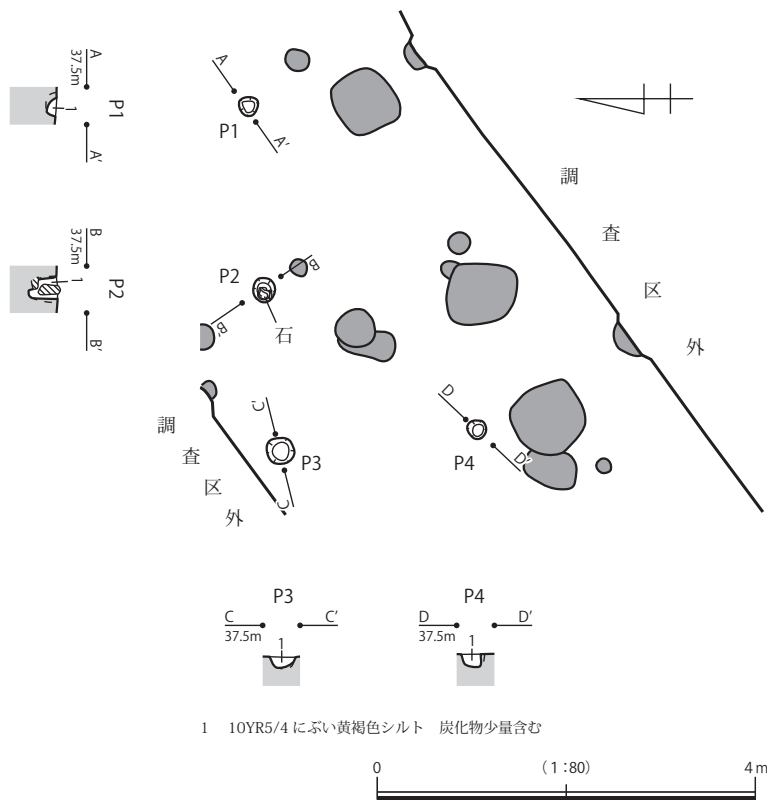
■掘立柱建物 27 (第 42 図、写真 113・114)

位 置：調査区①の F4 グリッドに位置する。掘立柱建物 10・12 と建物範囲が重複するが、柱穴同士の直接的な切合い関係はないため新旧は不明である。遺構の南側は調査区外へ及んでおり、検出されたのは L 字形に並ぶ柱穴 4 基のみである。どの柱穴も後世の水田開発のため上端を大きく削平さ



- 1 10YR5/6 黄褐色シルト 炭化物微量含む (P1)
- 2 10YR6/8 明黄褐色シルト 炭化物・地山ブロック微量含む (P1)
- 3 7.5YR5/6 明褐色シルト 炭化物微量含む (P2・3)
- 4 10YR5/6 黄褐色シルト 炭化物微量含む (P2・3)
- 5 7.5YR5/8 明褐色シルト 炭化物微量、地山ブロック少量含む (P2・3)
- 6 7.5YR5/6 明褐色砂質シルト (P2)

第 41 図 掘立柱建物 26



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 炭化物少量含む

第 42 図 掘立柱建物 27

れており非常に浅い。遺構確認面の高さは標高 37.2 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。東西に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は N-84° -E を示す。

**形態**：桁行 2 間以上、梁行 2 間以上の側柱建物跡である。各柱穴の平面は円形で、断面形はおおむね U 字状をしている。柱痕跡は確認されなかった。

**規模**：柱穴の中心を基準とした柱間は 1.8 ～ 2.1 m で、検出した範囲での床面積は 16㎡以上となる。各柱穴は、直径 0.2 ～ 0.28 m を測り、深さは 0.1 ～ 0.3 m である。

**土層**：すべてにぶい黄褐色シルトを主体とする単層である。P2 には柱穴とほぼ同じサイズの礫が落ち込んでいた。

**出土遺物**：須恵器甕の小片などが出土した。

**遺構時期**：遺物から時期の推定は困難であるが、建物方位が掘立柱建物 20 と類似することから、遺構の時期は 12 ～ 13 世紀頃と判断した。

### ■掘立柱建物 28 (第 43 図、写真 115・116)

**位置**：調査区①の E4・5 グリッドに位置する。遺構の北側は調査区外へ及んでおり、検出されたのは L 字形に並ぶ柱穴 4 基のみである。どの柱穴も後世の水田開発のため上端を大きく削平されており非常に浅い。遺構確認面の高さは標高 37.2 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。東西に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は N-82° -E を示す。

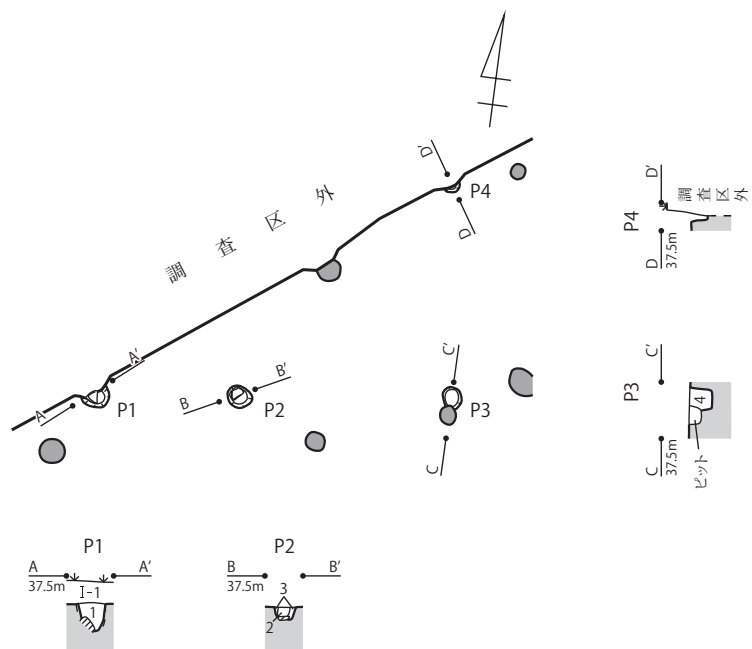
**形態**：桁行 2 間以上、梁行 2 間以上の建物跡である。遺構の過半が調査区外にあるため、側柱か総柱かの判別はできない。各柱穴の平面は円形で、断面形はおおむね凹字状をしている。P2 において柱痕跡を確認し、底面に置かれた扁平な角礫上に柱を据えたようである。

**規模**：柱痕跡を基準とした柱間は 1.6 ～ 2.2 m で、検出された範囲での床面積は 8㎡以上となる。各柱穴は、直径約 0.2 m を測り、深さは 0.16 ～ 0.3 m である。

**土層**：合計 4 層に区分できる。黄褐色のシルトを主体としている。

**出土遺物**：なし。

**遺構時期**：遺物は出土していないものの、建物方位が掘立柱建物 20 とほぼ同じであることから、遺構の時期は 12 ～ 13 世紀頃と判断した。



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む (P1)
- 2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 炭化物微量含む (P2)
- 3 10YR5/8 黄褐色シルト 炭化物微量含む (P2)
- 4 10YR5/6 黄褐色シルト 地山ブロック少量含む (P3)

### ■掘立柱建物 29 (第 44 図、写真 117・118)

**位置**：調査区①の E・F5・6 グリッドに位置する。遺

第 43 図 掘立柱建物 28

構の東側と南側は調査区外へ及んでおり、検出されたのはL字形に並ぶ柱穴4基のみである。遺構確認面の高さは標高37.2mで、現地表面から約0.2m下に位置する。東西に並ぶ柱穴を基準とした建物方位はN-84°-Eを示す。

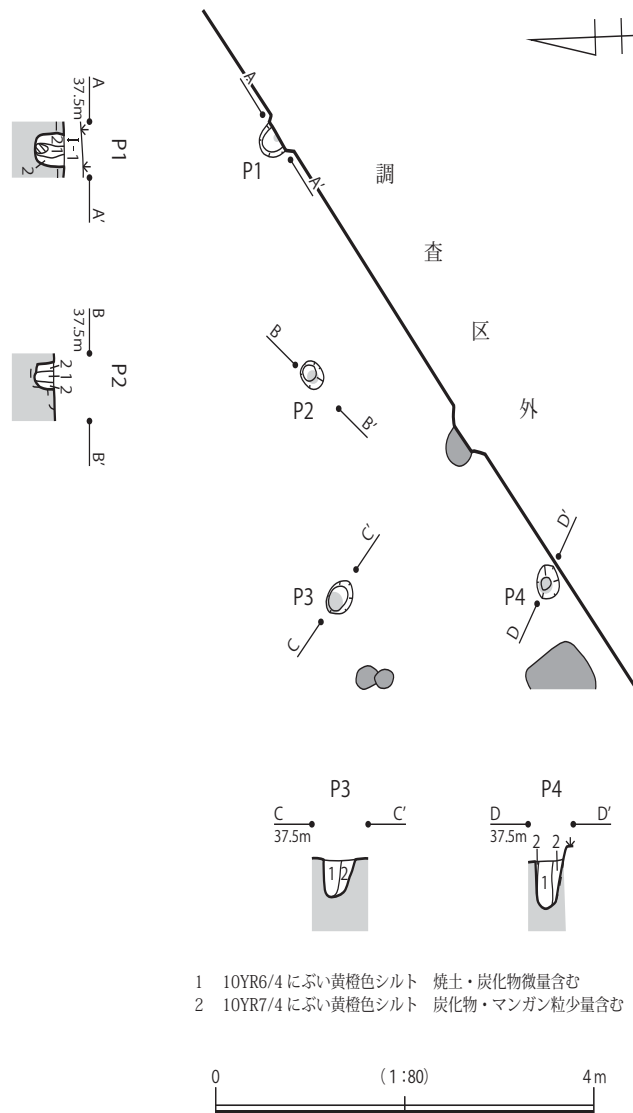
**形態**：桁行2間以上、梁行2間以上の建物跡である。遺構の過半が調査区外にあるため、側柱か総柱かの判別はできない。各柱穴の平面は楕円形で、断面形はおおむね凹字状をしている。すべての柱穴で柱痕跡を確認した。P1では柱痕跡の直下に礫が置かれていた。

**規模**：柱痕跡を基準とした柱間は2.0～2.2mで、検出された範囲での床面積は11㎡以上となる。各柱穴は、長軸0.26～0.34m、短軸0.22～0.26mを測り、深さは0.2～0.42mである。

**土層**：すべての柱穴が黄橙色シルトを主体とした共通の土層であった。

**出土遺物**：須恵器の小片などが出土した。

**遺構時期**：遺物から時期の推定は困難であるが、建物方位が掘立柱建物20と類似することから、遺構の時期は12～13世紀頃と判断した。



第44図 掘立柱建物29

■掘立柱建物 30 (第 45 図、写真 117・119～121)

位 置：調査区①の D・E5・6 グリッドに位置する。遺構の西側と北側は調査区外へ及んでおり、検出されたのは L 字形に並ぶ柱穴 4 基のみである。遺構確認面の高さは標高 37.2 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。東西に並ぶ柱穴を基準とした建物方位は N-84° -E を示す。

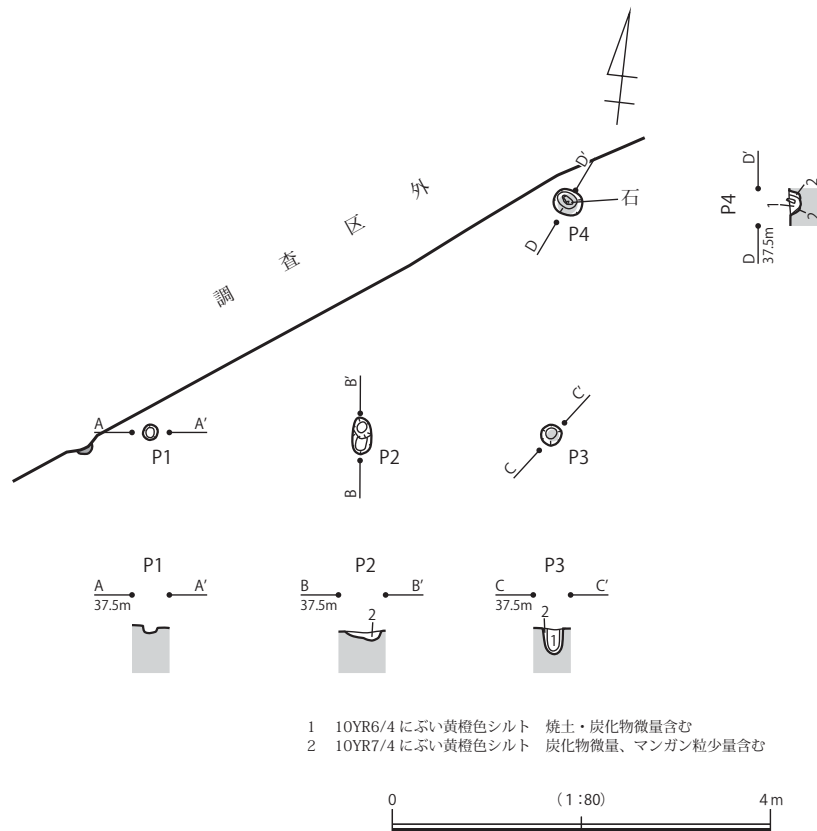
形 態：桁行 2 間以上、梁行 2 間以上の建物跡である。遺構の過半が調査区外にあるため、側柱か総柱かの判別はできない。各柱穴の平面は円形や楕円形で、断面形はおおむね U 字状をしている。P3・4 で柱痕跡を確認した。

規 模：柱穴の中心を基準とした柱間は 2.0 ～ 2.4 m で、検出された範囲での床面積は 12㎡以上となる。各柱穴は、長軸 0.16 ～ 0.38 m、短軸 0.16 ～ 0.26 m を測り、深さは 0.08 ～ 0.24 m である。

土 層：すべての柱穴がにぶい黄橙色シルトを主体とした共通の土層であった。

出土遺物：なし。

遺構時期：遺物は出土していないものの、建物方位が掘立柱建物 20 と類似することから、遺構の時期は 12 ～ 13 世紀頃と判断した。

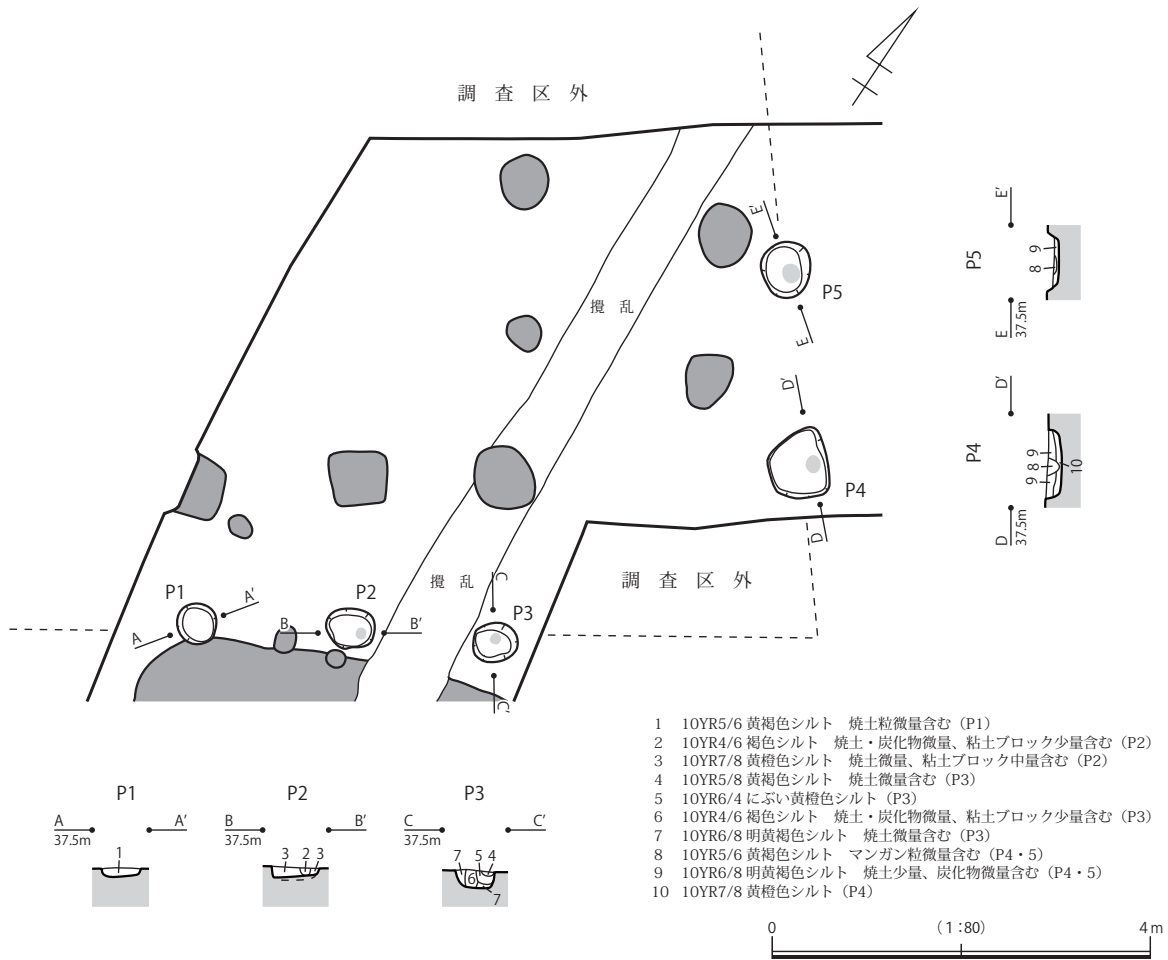


第 45 図 掘立柱建物 30

第 5 節 柱穴列

■柱穴列 1 (第 46 図、写真 122・123)

位 置：調査区①の G・H2 グリッドに位置する。掘立柱建物 8 の周囲を L 字形に並ぶ柱穴列である。竪穴建物 1 を切っている。検出されたのは、東側に並ぶ 2 基と南側に並ぶ 3 基であるが、等間



第46図 柱穴列1

隔に調査区外まで続くものと考えられる。遺構確認面の高さは標高37.1mで、現地表面から約0.4m下に位置する。南側に並ぶ柱穴を基準とした方位はN-60°-Eを示す。

**形態：**掘立柱建物8の外側を囲うように配置されている。P1以外の柱穴で柱痕跡を確認した。建物に伴う外周柱穴の可能性もあるが、柱筋が対応しないことや、東側と南側で建物との距離が異なり、方位も若干ずれることから塀や柵と解釈した。各柱穴の平面形は、円形や楕円形を呈し、断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、やや外側へ広がりながら立ち上がる。

**規模：**柱痕跡を基準とした柱間は1.4～2.0mである。各柱穴は、長軸0.46～0.68m、短軸0.4～0.62mを測り、深さは0.1～0.18mである。水田造成の際に上部を大きく削平され底面付近での検出であり、同じ条件の掘立柱建物8の柱穴に比べ、規模が小さく非常に浅い。

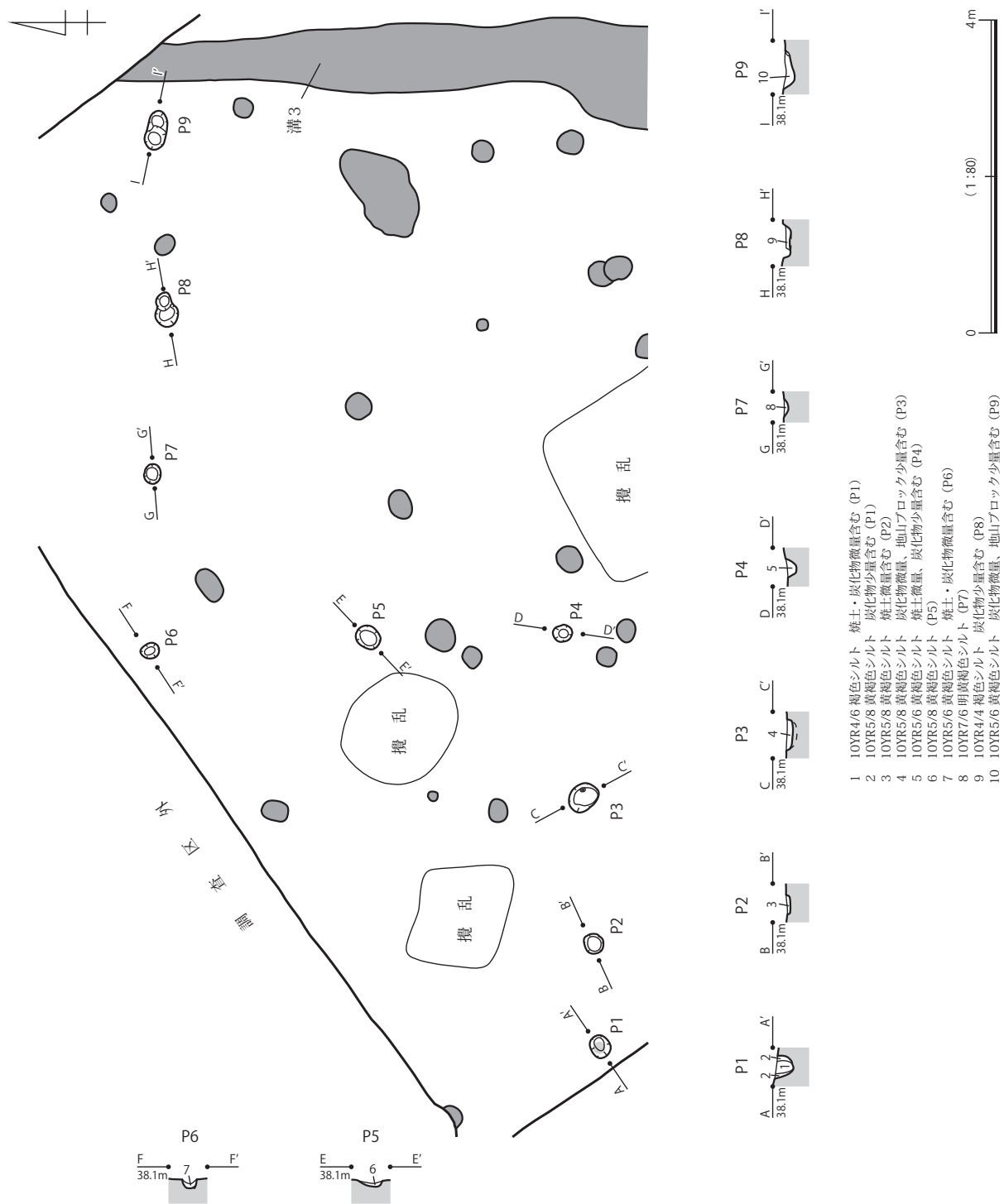
**土層：**合計10層に区分できる。褐色、黄褐色、黄橙色シルトを主体としている。

**出土遺物：**なし。

**遺構時期：**不明。

### ■柱穴列2 (第47図、写真124・125)

**位置：**調査区③のJ・K7～10グリッドに位置する。溝3の西側から掘立柱建物20の北側まで続く柱穴列である。9基の柱穴が並び、西側の調査区外まで続くものと考えられる。遺構確認面の高



第47図 柱穴列2

さは標高 37.9 ~ 38.1 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。東西に並ぶ柱穴を基準とした方位は N-85° -E を示す。

**形態**：各柱穴の規模は小さいものの、南北を間仕切りするように広範囲に配置されており、塀や柵と考えられる。P1 で柱痕跡を確認した。各柱穴の平面形は、円形や楕円形を呈し、断面形はおおむね凹字状をしている。底面は平坦で、やや外側へ広がりながら立ち上がる。

**規模**：柱穴の中心を基準とした柱間は 1.4 ~ 2.8 m とばらつきがある。各柱穴は、長軸 0.24 ~ 0.5 m、短軸 0.2 ~ 0.32 m を測り、深さは 0.06 ~ 0.22 m である。いずれも水田造成の際に上部を大きく削平され底面付近での検出である。

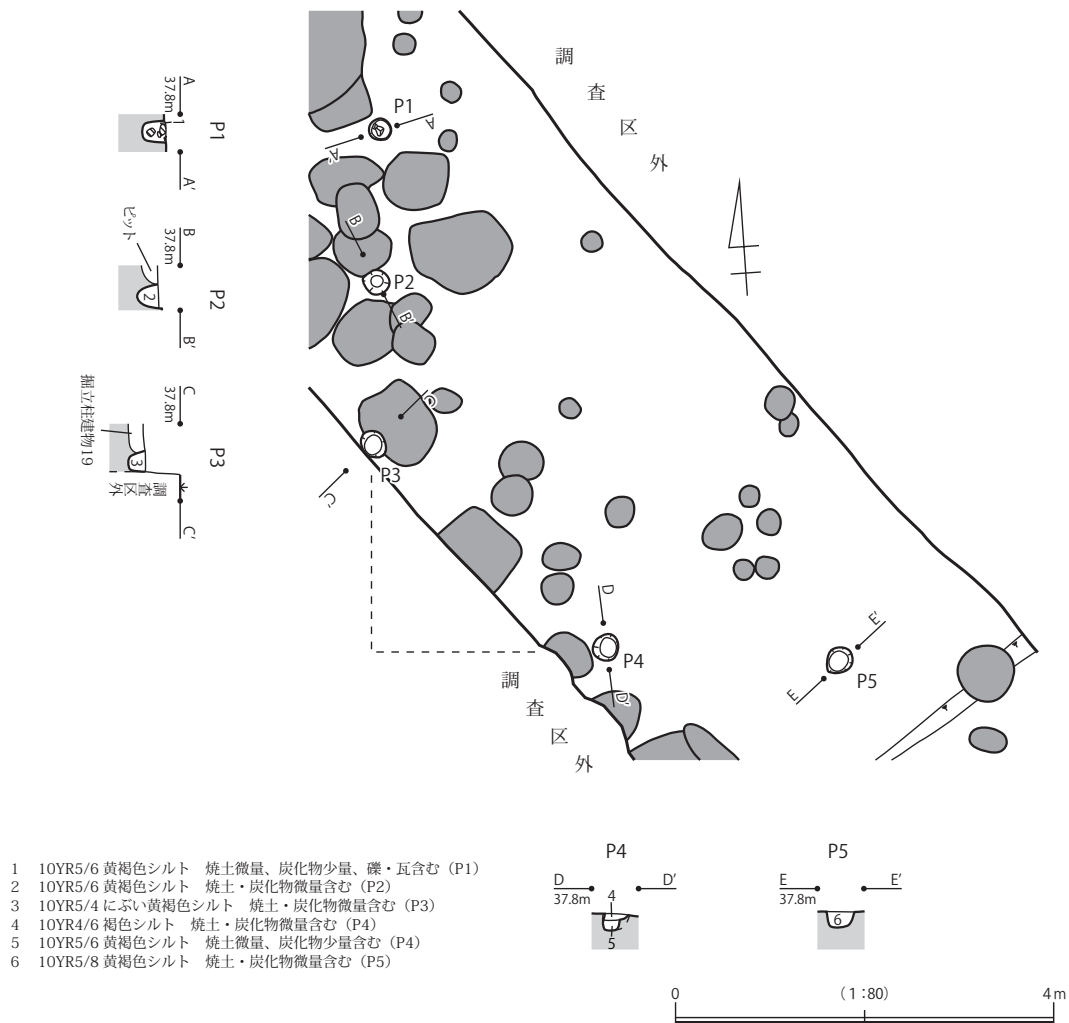
**土層**：合計 10 層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

**出土遺物**：須恵器甕などの小片が出土した。

**遺構時期**：遺物から時期の推定は困難であるが、柱穴列の方位が掘立柱建物 20 と類似していることから、遺構の時期は 12 ~ 13 世紀頃と判断した。

### ■柱穴列 3 (第 48 図、写真 126 ~ 129)

**位置**：調査区③の M・N11・12 グリッドに位置する。掘立柱建物 22 の周囲を L 字形に並ぶ柱穴列である。掘立柱建物 19 の柱穴を切っている。検出されたのは、南側に並ぶ 2 基と西側に並ぶ 3 基で、



第 48 図 柱穴列 3



調査区外の南西側で直角に交わるものと考えられる。遺構確認面の高さは標高 37.6 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。西側に並ぶ柱穴を基準とした方位は N-5°-E を示す。

**形態**：検出された柱穴は合計 5 基で、柱痕跡は確認されていない。掘立柱建物 22 の外側を囲うように配置されていることから、建物に伴う外周柱穴の可能性もあるが、柱筋が対応しないことや、西側列と南側列で建物との距離が異なり、方位も若干ずれることから塀や柵と解釈した。各柱穴の平面形は円形で、断面形は U 字状をしている。底面はゆるやかに湾曲し、やや外側へ広がりながら立ち上がる。

**規模**：柱穴の中心を基準とした柱間は 1.6 ～ 2.4 m とばらつきがある。各柱穴は、直径約 0.25 m を測り、深さは 0.18 ～ 0.26 m である。周辺は水田造成の際に上部を大きく削平されており、底面付近での検出である。

**土層**：合計 6 層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

**出土遺物**：須恵器皿や瓦などの小片が出土した。須恵器皿は破片のため全体形がわからないが、段皿の可能性はある。

**遺構時期**：遺物から時期の推定は困難であるが、掘立柱建物 23 とほぼ同一の方位であることから、遺構の時期は 12 ～ 13 世紀頃と判断した。

## 第 6 節 土坑・ピット

### ■土坑 1 (第 49・79 図、表 2、写真 130・131・189)

**位置**：調査区①の J2・3 グリッドに位置する。上端の一部を別のピットに切られている。遺構確認面の高さは標高 36.8 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。

**形態**：平面形は不整形で、断面形は U 字状をしている。底面は湾曲しており、緩やかに外反しながら立ち上がる。

**規模**：平面の最大長は約 0.7 m である。下端は楕円形となり、長軸 0.56 m、短軸 0.32 m を測る。深さは 0.24 m である。

**土層**：埋土は黄褐色シルトの単層である。上層から須恵器杯が出土した (第 79 図 29)。

**出土遺物**：須恵器杯・甕や土師器片が出土した。

29 は須恵器の杯である。ロクロ成形され、底部はヘラ切りされている。

30 は須恵器甕の口縁部破片である。外面に櫛描列点文が施され、頸部には縦方向に施された櫛描条線がわずかに観察できる。加古川市神野町に所在する神野大林古窯跡 2 号窯に類品がみえる。

**遺構時期**：出土した遺物から、遺構の時期は 7 世紀前半頃と判断した。

### ■土坑 2 (第 50・79 図、表 2、写真 132・133・189)

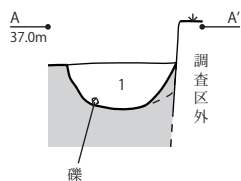
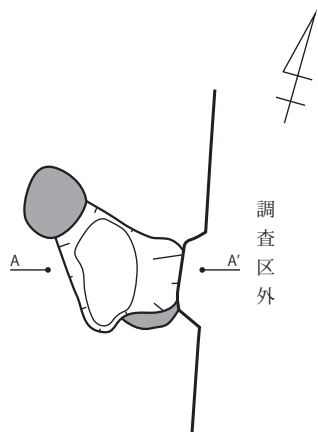
**位置**：調査区①の N・O3 グリッドに位置する。掘立柱建物 3 に切られている。遺構確認面の高さは標高 35.9 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。

**形態**：平面形は円形で、断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、急斜に立ち上がる。

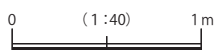
**規模**：平面の直径は 0.64 m を測る。深さは 0.31 m である。

**土層**：2 層に区分できる。明黄褐色シルトを主体とし、第 1 層からイイダコ壺が出土した (第 79 図 31)。

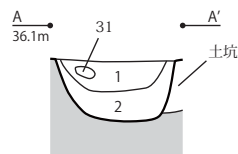
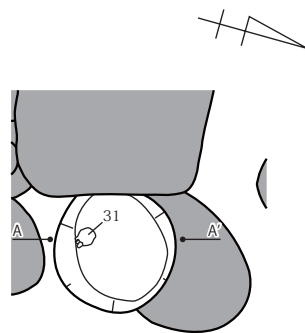
**出土遺物**：土師器のイイダコ壺 1 点が出土した。



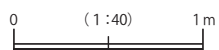
1 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・炭化物少量含む



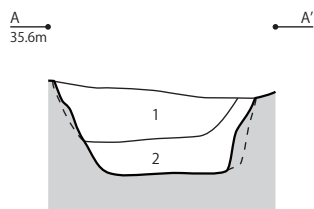
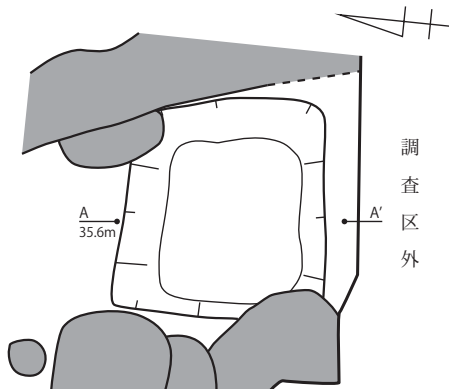
第49図 土坑1



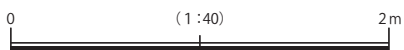
1 10YR6/8 明黄褐色シルト 焼土・炭化物微量、マンガング粒含む  
2 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む



第50図 土坑2



1 10YR5/8 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む  
2 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む



第51図 土坑3

31は土師器のイイダコ壺である。釣鐘形で、外面と内面の下端部はナデ調整され、内面の天井部にかけては成形時のユビオサエが明瞭に残っている。

遺構時期：他遺構との切合い関係や、竪穴建物1・ピット1出土のイイダコ壺と類似するイイダコ壺が出土したことなどから、遺構の時期は7世紀代と判断した。

#### ■土坑3（第51・79図、表2、写真134・135・189）

位置：調査区①のR2・3グリッドに位置する。重複するすべての遺構に切られている。遺構確認面の高さは標高35.3mで、現地表面から約0.7m下に位置する。

形態：平面形は方形で、断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、外側へ向けて急斜に立ち上がる。形態的には、掘立柱建物3で見られるような方形の大型の柱穴に類似するが、調査区の南端部にあるため柱筋の検討ができず、柱痕跡も確認されなかったため今回は土坑として報告する。

規模：平面の規模は一辺約1.1mを測る。深さは0.45mである。

土層：2層に区分できる。黄褐色、黄橙色のシルトを主体としている。

出土遺物：須恵器の杯蓋・杯、土師器の甕などが出土した。

32は須恵器の杯蓋である。扁平な宝珠形のつまみを持ち、天井部外面はヘラケズリされている。

33は須恵器の杯である。平底で、ヘラ切り痕跡の残る底部外面に「×」印と考えられるヘラ記号がある。

遺構時期：出土遺物から、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

#### ■土坑4（第52・80図、表3、写真136・189）

位置：調査区①のQ2グリッドに位置する。調査区の際で検出され、遺構の過半は西側の調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高35.5mで、現地表面から約0.7m下に位置する。

形態：遺構の過半が調査区外へ及ぶため平面形は不明である。断面形は歪なV字状をしている。底面は湾曲し、外側へ向けて急斜に立ち上がる。

規模：長軸1.3m、検出した範囲での短軸0.31mを測る。深さは0.61mである。

土層：4層に区分できる。暗褐色や黄橙色のシルトがレンズ状に堆積している。

出土遺物：須恵器杯、土師器杯・甕・製塩土器などが出土した。土師器の杯は内面にわずかに暗文が認められる。

34は須恵器の杯である。平底で、底部外面はヘラ切り後ナデ調整されている。

35は土師器の製塩土器である。体部はややくびれ、口縁はやや内湾している。内面には付着物が認められる。

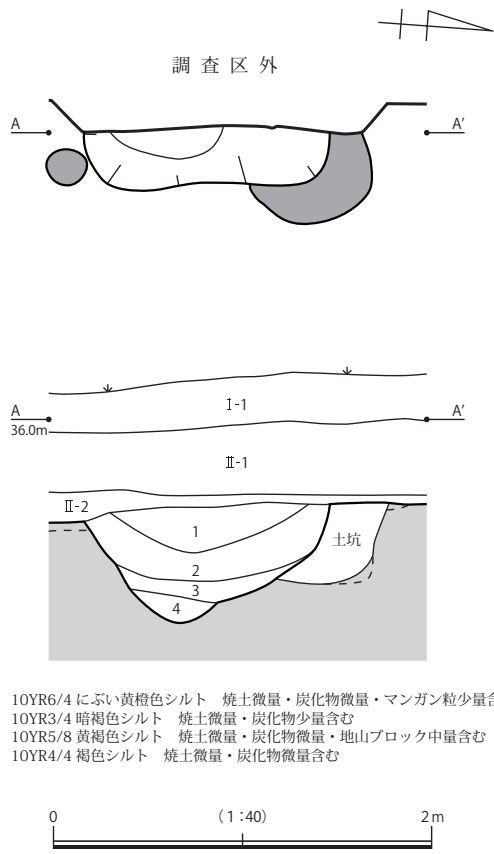
遺構時期：出土遺物から、遺構の時期は8世紀代と判断した。

#### ■土坑5（第53・80図、表3、写真137・138・190）

位置：調査区①のP3グリッドに位置する。調査区の際で検出され、遺構は東側の調査区外へ及んでいる。掘立柱建物4の柱穴を切っている。遺構確認面の高さは標高35.8mで、現地表面から約0.5m下に位置する。

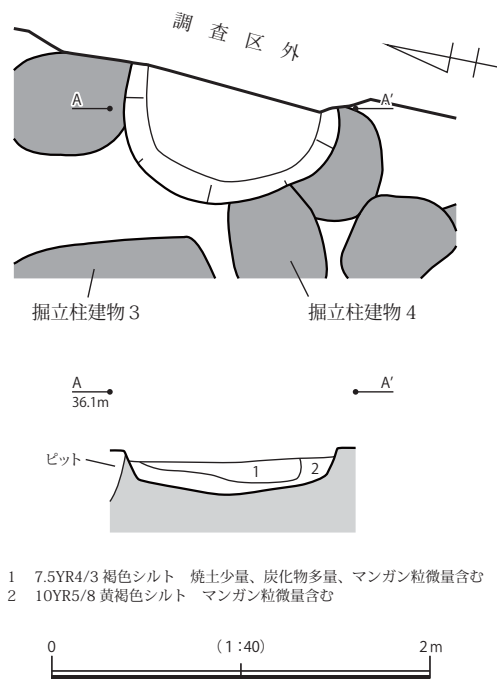
形態：遺構は調査区外へ及んでいるものの、平面形は円形と推測される。断面形は皿状をしている。底面はゆるやかに湾曲し、外側へ向けて立ち上がる。

規模：長軸1.13m、検出した範囲での短軸0.63mを測る。深さは0.17mである。



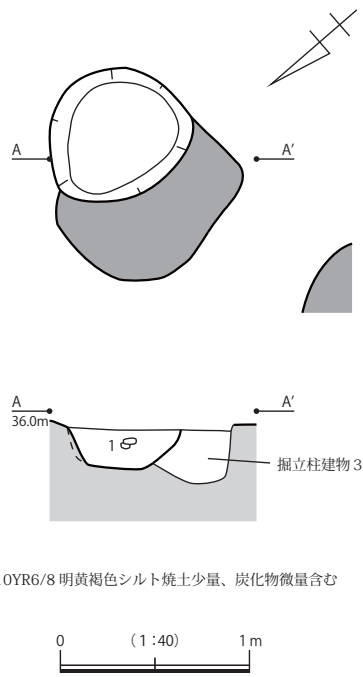
- 1 10YR6/4 にふい黄褐色シルト 焼土微量・炭化物微量・マンガン粒少量含む
- 2 10YR3/4 暗褐色シルト 焼土微量・炭化物少量含む
- 3 10YR5/8 黄褐色シルト 焼土微量・炭化物微量・地山ブロック中量含む
- 4 10YR4/4 褐色シルト 焼土微量・炭化物微量含む

第 52 図 土坑 4



- 1 7.5YR4/3 褐色シルト 焼土少量、炭化物多量、マンガン粒微量含む
- 2 10YR5/8 黄褐色シルト マンガン粒微量含む

第 53 図 土坑 5



- 1 10YR6/8 明黄褐色シルト焼土少量、炭化物微量含む

第 54 図 土坑 6

土 層：2層に区分できる。第1層は褐色のシルトを主体とし、多量の炭化物が含まれていた。

出土遺物：須恵器杯蓋・杯・甕・脚部片、土師器甕片などが出土した。

36は須恵器の杯蓋である。器高は低く、天井部は平坦である。口縁端部は内側へ折りこむ。天井部外面はヘラケズリされている。

37は須恵器の杯である。体部と腰部の境に明瞭な稜線がみられ、いわゆる稜椀形である。表面は磨滅のためミガキ等の痕跡は確認できなかった。

遺構時期：出土遺物や他遺構との切合い関係から、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

#### ■土坑6（第54・80図、表3、写真139・190）

位 置：調査区①のN3グリッドに位置する。掘立柱建物3の柱穴を切っている。遺構確認面の高さは標高35.9mで、現地表面から約0.2m下に位置する。

形 態：平面形は円形で、断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、外側へ向けて立ち上がる。

規 模：直径約0.75mを測る。深さは0.2mである。

土 層：明黄褐色シルトを主体とする単層である。

出土遺物：須恵器の杯蓋・杯・甕、土師器の甕片などが出土した。

38は須恵器の杯蓋である。器高は低く、口縁端部は内側へ折りこむ。ケズリの痕跡は確認できない。

39～41は須恵器の杯である。39は平底の杯A、40は杯Bである。両者とも底部外面はヘラ切り後ナデ調整されている。41は杯Hである。器壁は薄く、口縁部の立ち上がりは短く内傾している。当該遺物のみ时期的に古いため、混入品と考えられる。

遺構時期：出土遺物や他遺構との切合い関係から、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

#### ■土坑7（第55・80図、表3、写真190）

位 置：調査区①のP3グリッドに位置する。掘立柱建物3の柱穴を切っている。遺構確認面の高さは標高35.8mで、現地表面から約0.5m下に位置する。

形 態：平面形は方形で、断面形は浅い皿状をしている。底面には凹凸があり、外側へ向けて緩やかに立ち上がる。

規 模：一辺0.67mを測る。深さは0.08mである。

土 層：褐色シルトを主体とする単層である。

出土遺物：須恵器杯や土師器の小片などが出土した。

42は須恵器の杯である。底部をヘラ切り後、高台を貼付している。

遺構時期：出土遺物や他遺構との切合い関係から、遺構の時期は8世紀代と判断した。

#### ■土坑8（第56・80図、表3、写真140・141・190）

位 置：調査区①のO3グリッドに位置する。掘立柱建物2の柱穴を切っている。遺構確認面の高さは標高36.0mで、現地表面から約0.2m下に位置する。

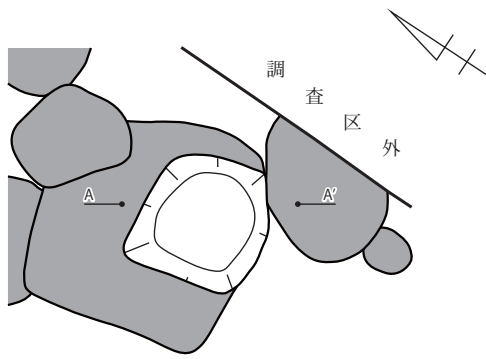
形 態：平面形は楕円形で、断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、外側へ向けて立ち上がる。

規 模：長軸0.78m、短軸0.54mを測る。深さは0.19mである。

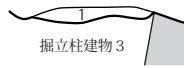
土 層：褐色シルトを主体とする単層である。

出土遺物：須恵器杯・甕、土師器杯・甕などが出土した。

43は須恵器の杯である。口径の小さい杯Aである。



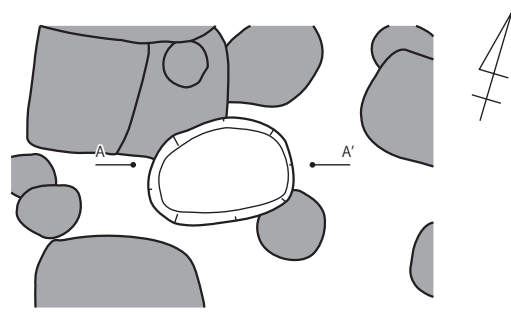
A 36.1m A'



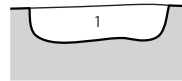
1 10YR4/6 褐色シルト 焼土・炭化物微量、マンガン粒少量含む

0 (1:40) 2m

第55図 土坑7



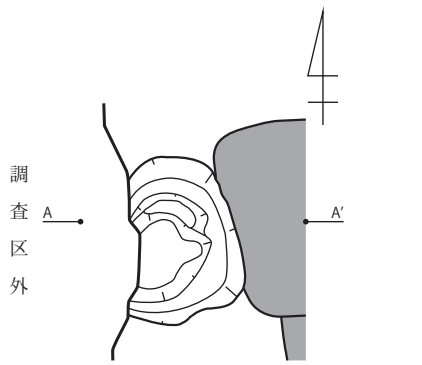
A 36.1m A'



1 7.5YR4/4 褐色シルト マンガン粒中量含む

0 (1:40) 2m

第56図 土坑8



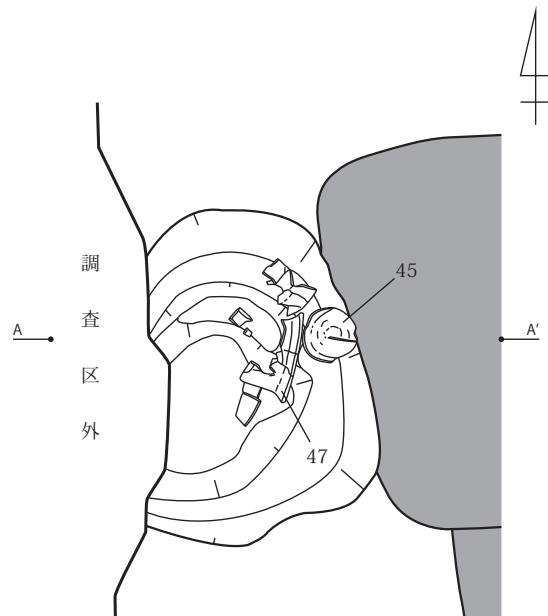
A 36.0m A'



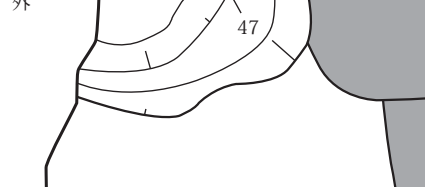
- 1 10YR4/6 褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む
- 2 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む
- 4 10YR7/4 にぶい黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む

0 (1:40) 1m

第57図 土坑9



A A'



0 (1:20) 1m

44 は土師器の杯である。内外面とも磨滅や剝離が著しく調整は不明瞭であるが、ミガキの痕跡がわずかに確認できる。

遺構時期：出土遺物や他遺構との切合い関係から、遺構の時期は8世紀代と判断した。

#### ■土坑9（第57・80図、表3、写真142～144・190・191）

位 置：調査区①のN・O2グリッドに位置する。掘立柱建物3の柱穴を切っており、遺構の西側は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高36.0mで、現地表面から約0.2m下に位置する。

形 態：平面形は不整な円形で、断面形は皿状をしている。底面は緩やかに湾曲している。

規 模：直径約0.9m、深さ0.23mを測る。

土 層：4層に区分できる。褐色、黄褐色、黄橙色のシルトを主体とする。第1層の上面から遺物が集中して出土した。また、第2層の外周部は赤化しており、火を用いる行為が行われたものと考えられる。

出土遺物：須恵器杯・甕、土師器杯・鍋などが出土した。

45・46は須恵器の杯である。両者とも杯Bで、底部切り離し後ナデ調整されている。

47は土師器の鍋である。内外面とも磨滅のため調整は不明瞭である。口縁端部は上方にわずかにつまみあげている。

遺構時期：出土遺物や他遺構との切合い関係から、遺構の時期は8世紀代と判断した。

#### ■土坑10（第58図、写真145～147）

位 置：調査区①のB6グリッドに位置する。掘立柱建物11の柱穴を切っている。遺構確認面の高さは標高37.8mで、現地表面から約0.2m下に位置する。長軸方向を基準とした方位はN-33°-Wを示す。

形 態：平面形は不整な楕円形を呈する。断面形は浅い皿状で、一部がピット状に窪む。遺構の上部は後世の水田開発によって大きく削平されている。遺構底面に地山が焼土化した範囲を確認したことから、遺構内で火を用いた行為が行われたものと考えられる。

規 模：長軸1.36m、短軸0.77m、深さ0.06mを測る。ピット状の窪みは、長軸0.4m、短軸0.34m、深さ0.18mを測る。

土 層：6層に区分できる。黒褐色、褐色、黄褐色のシルトを主体とする。第6層は、遺構底面で確認された被熱の痕跡である。

出土遺物：須恵器杯や土師器甕などの小片が出土した。

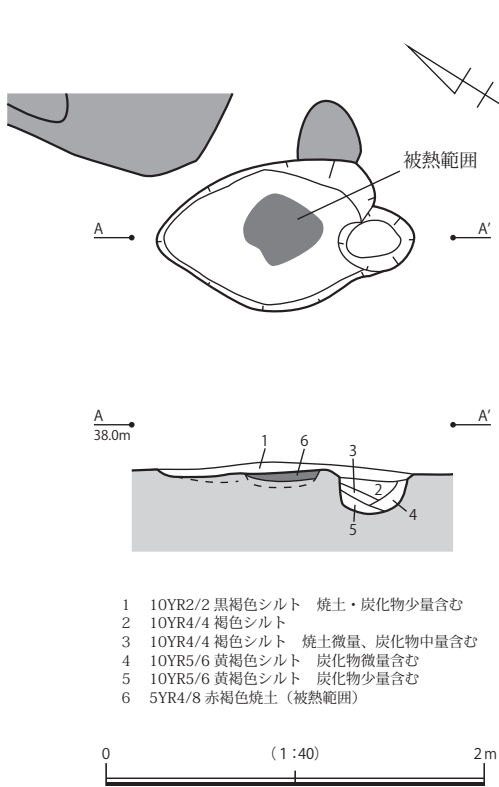
遺構時期：不明。

#### ■土坑11（第59図、写真148～150）

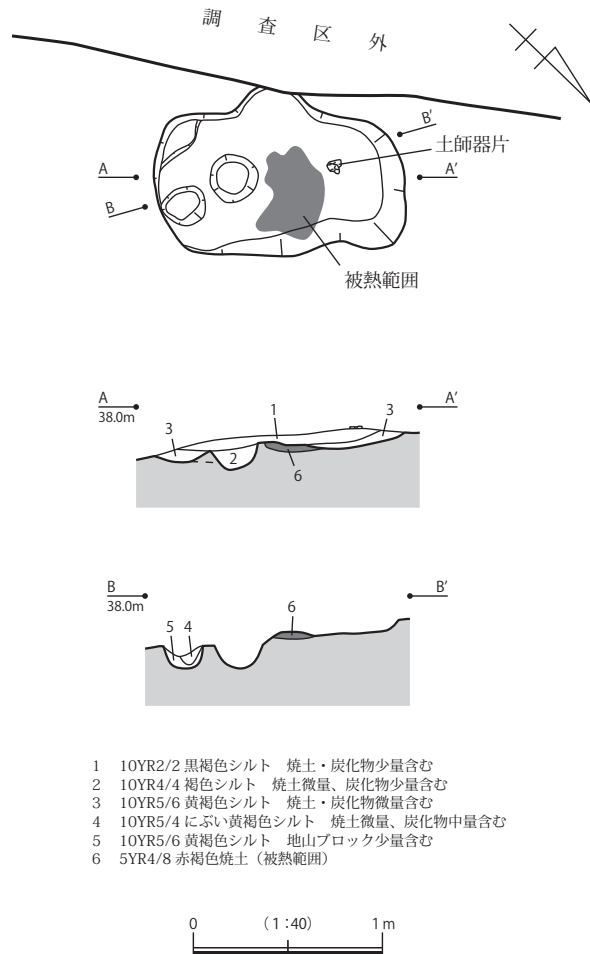
位 置：調査区①のB5グリッドに位置する。遺構西側の一部が調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高37.9mで、現地表面から約0.2m下に位置する。長軸方向を基準とした方位はN-43°-Wを示す。

形 態：平面形は不整な楕円形を呈する。断面形は浅い皿状で、ピット状の窪みが2箇所ある。遺構の上部は後世の水田開発によって大きく削平されている。遺構底面に地山が焼土化した範囲を確認したことから、遺構内で火を用いた行為が行われたものと考えられる。

規 模：長軸1.33m、短軸0.87m、深さ0.1mを測る。ピット状の窪みは、直径約0.25mの円形



第 58 図 土坑 10



第 59 図 土坑 11

で、深さ約 0.1 m を測る。

土 層：6 層に区分できる。黒褐色、褐色、黄褐色のシルトを主体とする。第 6 層は、遺構底面で確認された被熱の痕跡である。

出土遺物：土師器甕などの小片が出土した。

遺構時期：不明。

### ■土坑 12 (第 60・80 図、表 3、写真 151・152・191)

位 置：調査区③の L11 グリッドに位置する。重複する土坑を切っている。遺構確認面の高さは標高 37.7 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。

形 態：平面形は楕円形であるが、南側のテラス状の段掘り部分を除くと隅丸方形となる。断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、外側へ向けて急斜に立ち上がる。土層の観察で柱痕跡が確認され、形態的には掘立柱建物 3 で見られるような大型の柱穴と考えられるが、調査区内に対応する柱穴が検出されなかったため、本報告では土坑として扱う。

規 模：長軸 1.48 m、短軸 1.17 m を測る。深さは 0.65 m である。南側のテラス状平坦面の深さは 0.26 m を測る。

土 層：8 層に区分できる。黄褐色シルトを主体としている。



出土遺物：須恵器杯・甕、土師器片、瓦などが出土した。

48は須恵器の杯である。体部はやや丸みを帯び、口縁端部はわずかに外反している。

49・50は平瓦である。49の凸面は縄目叩きが明瞭に残り、50は叩き後ナデ仕上げしている。凹面は両者とも布目圧痕が残る。

遺構時期：出土遺物から、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

■土坑13（第61・81図、表3・8、写真153・154・191）

位置：調査区③のI8グリッドに位置する。遺構の南側は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高38.2mで、現地表面から約0.5m下に位置する。

形態：平面形は不整な円形もしくは楕円形と考えられる。断面形は歪なU字状をしている。

規模：長軸1.22m、検出した範囲での短軸0.81m以上、深さ0.28mを測る。

土層：明黄褐色シルトを主体とする単層である。

出土遺物：須恵器杯、土師器片、金属製品などが出土した。

51は鉄製の釘である。断面は方形で、頭部を折り曲げている。

遺構時期：出土遺物から、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

■ピット1（第62・81図、表3、写真155・156・191）

位置：調査区①のC6グリッドに位置する。上端の一部が攪乱により削られている。遺構確認面の高さは標高37.6mで、現地表面から約0.2m下に位置する。

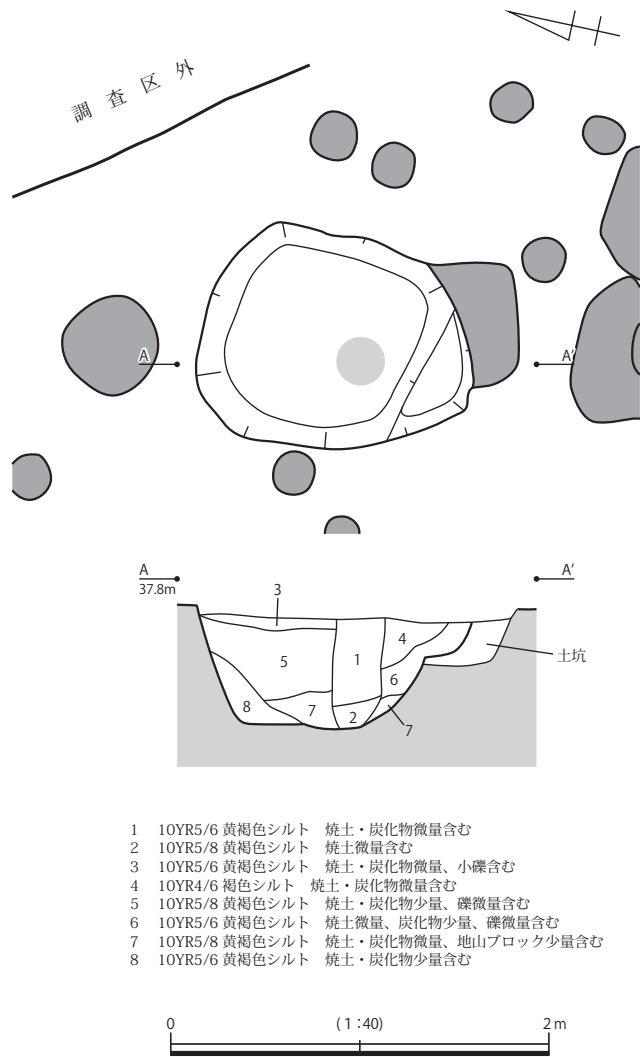
形態：平面形は円形で、断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、やや急斜に立ち上がる。

規模：平面の直径は約0.4mを測る。深さは0.2mである。

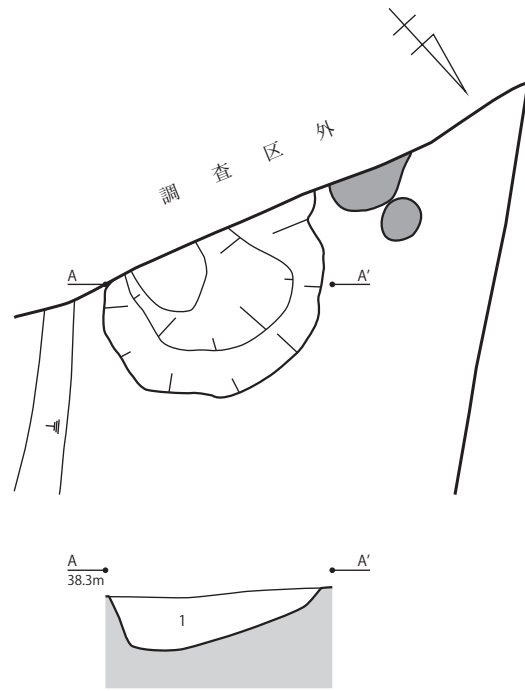
土層：2層に区分できる。明黄褐色シルトを主体とし、第2層からイイダコ壺が出土した（第81図53）。

出土遺物：須恵器高杯、土師器イイダコ壺、土製品が出土した。

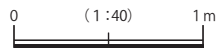
52は須恵器の高杯脚部である。脚端部は折り返して面を作っている。破片上端の一部に透かし孔の



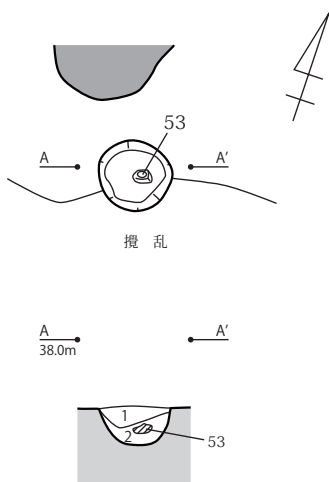
第60図 土坑12



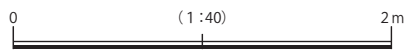
1 10YR6/6 明黄褐色シルト 炭化物・地山ブロック微量、マンガン粒少量含む



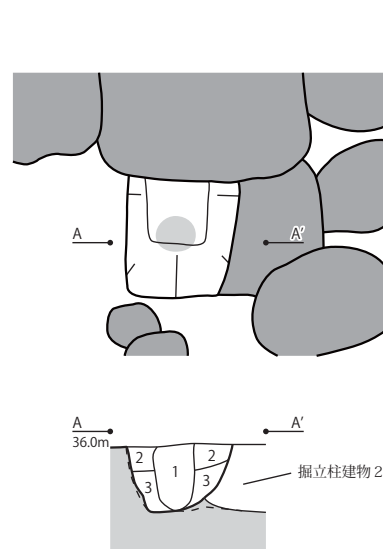
第 61 図 土坑 13



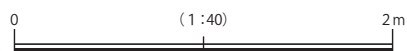
1 10YR6/8 明黄褐色シルト 焼土・炭化物・マンガン粒微量含む  
2 10YR6/6 明黄褐色シルト マンガン粒微量含む



第 62 図 ピット 1



1 10YR4/4 褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む  
2 10YR4/6 褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む  
3 10YR4/4 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む



第 63 図 ピット 2

痕跡が認められる。

53は土師器のイイダコ壺である。釣鐘形で、器壁は厚いが、端部はヨコナデして整えている。

54は土師質の棒状土錘である。片側の穿孔部付近のみ出土した。

遺構時期：出土した遺物から、遺構の時期は7世紀代と判断した。

#### ■ピット2（第63・81図、表3、写真157・191）

位置：調査区①のO2・3グリッドに位置する。掘立柱建物2の柱穴を切り、掘立柱建物3の柱穴に切られている。遺構確認面の高さは標高35.9mで、現地表面から約0.2m下に位置する。

形態：平面形は長方形と推測される。断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、外側へ向けて急斜に立ち上がるが、南側はやや緩やかである。遺構の中央付近で柱痕跡を確認したことから建物等の柱穴であったと考えられるが、掘立柱建物3など後続する遺構の掘削によって対応する柱穴等は確認できなかった。このため今回はピットとして報告する。

規模：検出した範囲での長軸は0.61m、短軸は0.59mを測る。深さは0.34mである。

土層：3層に区分できる。褐色シルトを主体とする。

出土遺物：須恵器甕、土師器杯・甕などが出土した。

55は須恵器の広口甕である。短く直立する口縁をもち、口縁端部は内側へ傾斜している。口縁外面には凹線が1条巡っている。白沢古窯跡3号窯に類品がある。

56は土師器の杯破片である。内面に放射状にめぐる暗文の一部がみえる。口縁部はやや外反している。

遺構時期：出土遺物や他遺構との切合い関係から、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

#### ■ピット3（第64・81図、表3、写真158・192）

位置：調査区①のQ3グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高35.7mで、現地表面から約0.6m下に位置する。

形態：平面形は楕円形で、断面形は歪な凹字状をしている。遺構内北寄りでは柱痕跡を確認したことから建物等の柱穴であったと考えられるが、今回調査範囲では対応する柱穴等は確認できなかった。このため今回はピットとして報告する。底面はおおむね平坦であるが、柱が据わっていた場所は窪んでいる。立ち上がりは急斜である。

規模：長軸0.64m、短軸0.55mを測る。深さは、柱が食い込んでいた窪み部分で0.55m、底面の平坦部で0.43mを測る。

土層：3層に区分できる。褐色や橙色のシルトを主体とする。

出土遺物：須恵器杯蓋・杯、土師器片などが出土した。

57は須恵器の杯蓋である。低いボタン状のつまみをもち、内外面ともにナデ調整されている。

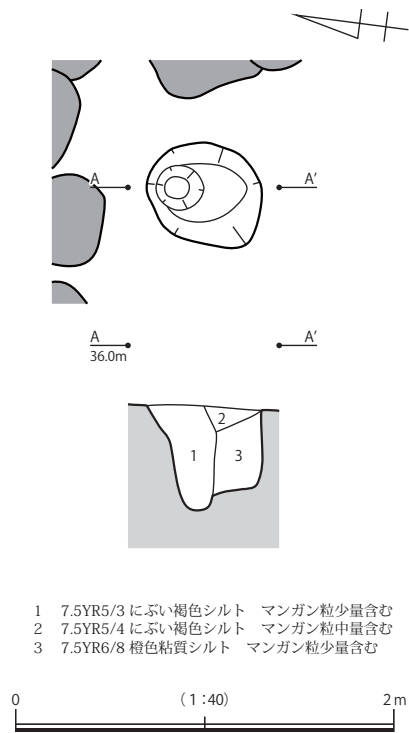
58は須恵器の杯である。底部は丸みを帯び、ヘラ切りの痕跡が明瞭に観察できる。

遺構時期：出土遺物から、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

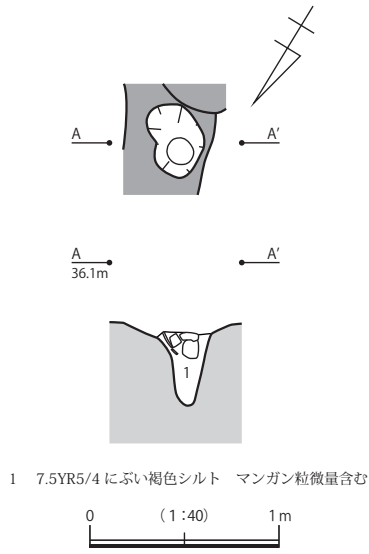
#### ■ピット4（第65・81図、表3、写真159・160・192）

位置：調査区①のP3グリッドに位置する。溝1と重複しており、溝の底面から検出したピットである。遺構確認面の高さは標高35.7mで、現地表面から約0.6m下に位置する。

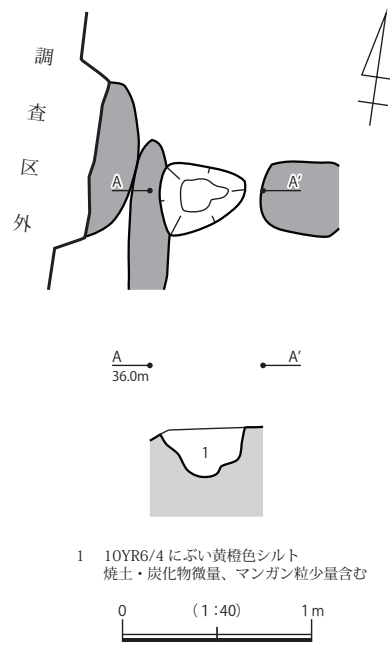
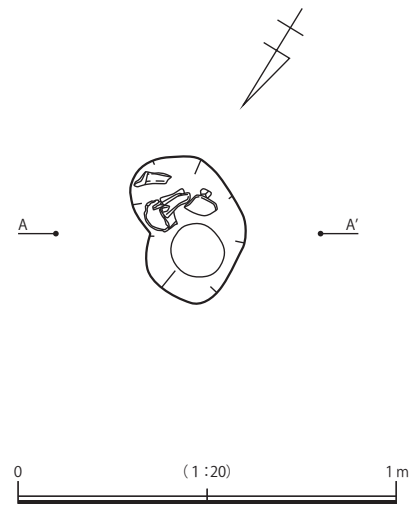
形態：平面形は不整な楕円形で、断面形はV字状をしている。底面は湾曲し、外側へ向け急斜



第64図 ピット3



第65図 ピット4



第66図 ピット5

に立ち上がる。

規 模：長軸 0.39 m、短軸 0.24 mを測る。深さは 0.38 mを測る。

土 層：にぶい褐色シルトを主体とする単層である。上層から中層にかけて土師器甕の破片が集中して出土した。

出土遺物：須恵器片、土師器甕などが出土した。

59は土師器の長胴甕である。頸部は「く」字形に屈曲し、口縁端部はナデにより凹線状の窪みが巡っている。

遺構時期：出土遺物や、他遺構との切合い関係から、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

#### ■ピット5（第66・81図、表3、写真192）

位 置：調査区①のP2グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高 35.7 mで、現地表面から約 0.6 m下に位置する。

形 態：平面形は隅丸三角形で、断面形はU字状をしている。底面は湾曲し、外側へ向けて立ち上がる。

規 模：長軸 0.44 m、短軸 0.38 mを測る。深さは 0.25 mを測る。

土 層：にぶい黄橙色シルトを主体とする単層である。

出土遺物：須恵器杯、土師器杯・甕などが出土した。

60は須恵器の杯である。平底で器高の低い杯Aである。軟質で、表面は磨滅のため調整等は不明である。

61は土師器の皿破片である。口縁端部はやや外反している。内外面とも磨滅のためミガキの痕跡等は確認できなかった。

遺構時期：出土遺物から、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。

#### ■ピット6（第67・81図、表3、写真161・192）

位 置：調査区③のK8グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高 37.9 mで、現地表面から約 0.2 m下に位置する。

形 態：平面形は楕円形で、断面形はU字状をしている。底面は湾曲し、外側へ向けて急斜に立ち上がる。

規 模：長軸 0.22 m、短軸 0.17 mを測る。深さは 0.3 mを測る。

土 層：褐色や黄褐色のシルトを主体とする。

出土遺物：須恵器杯が出土した。

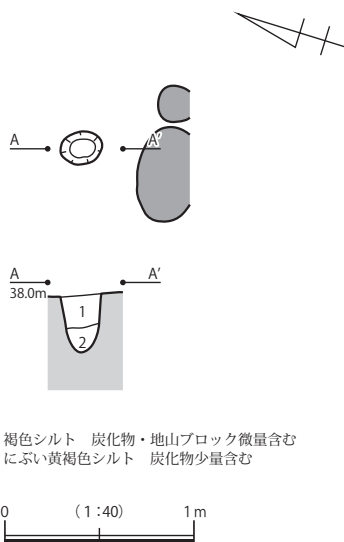
62は須恵器の杯である。平底で、内外面に火嚢が確認できる。底部外面にはヘラ切り痕跡が残っている。

遺構時期：出土遺物から、遺構の時期は8世紀代と判断した。

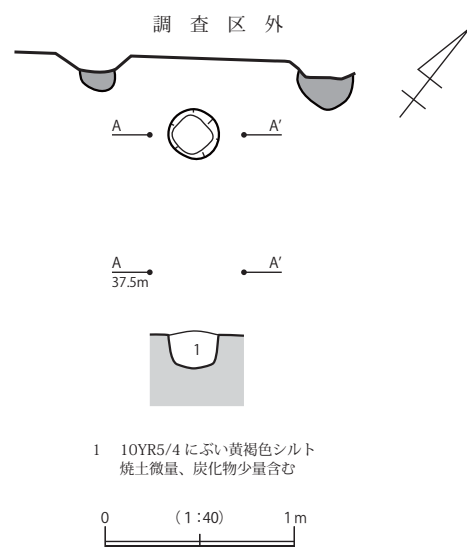
#### ■ピット7（第68・81図、表3、写真162・192）

位 置：調査区①のE4グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高 37.2 mで、現地表面から約 0.2 m下に位置する。

形 態：平面形は円形で、断面形は凹字状をしている。底面はやや湾曲し、外側へ向けて急斜に立ち上がる。



- 1 10YR4/6 褐色シルト 炭化物・地山ブロック微量含む  
2 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 炭化物少量含む



- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 焼土微量、炭化物少量含む

第 67 図 ピット 6

第 68 図 ピット 7

規 模：直径 0.27 m を測り、深さは 0.19 m である。

土 層：にぶい黄褐色シルトの単層である。

出土遺物：須恵器椀・鉢、土師器片などが出土した。

63 は須恵器の椀である。体部は外側へ直線的に開き、口縁端部は丸くおさめている。

64 は須恵器の鉢口縁部片である。端部を上方に拡張し肥厚させている。

遺構時期：出土遺物から、遺構の時期は 12 ～ 13 世紀頃と判断した。

#### ■ピット 8 (第 69・81 図、表 3、写真 163 ～ 165・192)

位 置：調査区③の U18 グリッドに位置する。他のピットに切られている。遺構確認面の高さは標高 36.0 m で、現地表面から約 0.5 m 下に位置する。

形 態：平面形は不整な楕円形で、断面形は U 字状をしている。底面はやや湾曲し、外側へ向けて急斜に立ち上がる。

規 模：長軸 0.35 m、短軸 0.31 m を測り、深さは 0.35 m である。

土 層：褐色シルトの単層である。上層から須恵器椀の完形品が出土した。

出土遺物：須恵器椀や土師器片が出土した。

65 は須恵器の椀である。体部は外側へ直線的に開き、口縁端部は丸くおさめている。底部は糸切りされ、縁の部分は切り離した後ナデ調整されている。

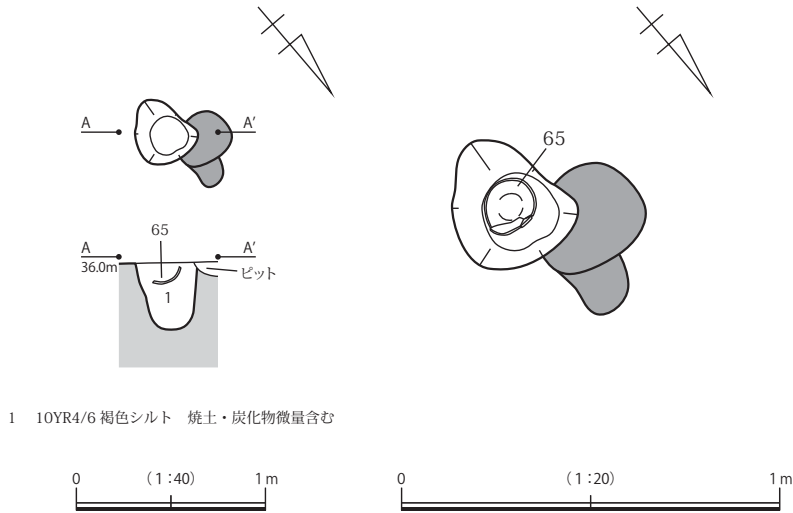
遺構時期：出土遺物から、遺構の時期は 12 ～ 13 世紀頃と判断した。

## 第 7 節 溝状遺構

#### ■溝 1 (第 70・82 図、表 3、写真 166・192)

位 置：調査区①の P2・3 グリッドに位置する。重複するピット 4 を切っている。遺構確認面の高さは標高 35.8 m で、現地表面から約 0.5 m 下に位置する。主軸方位は N-15° -W を示す。

形 態：南北に細長い溝状の遺構である。幅は、北側が細く、南側がやや太い。断面形は浅い皿



1 10YR4/6 褐色シルト 焼土・炭化物微量含む

第69図 ピット8

状で、底面は緩やかに湾曲している。北側が細くなっていることから、元来北側に続いていた溝が後世の水田等によって削平され失われた可能性がある。

規 模：長さ 2.31 m、最大幅 0.53 m を測る。深さは 0.08 m を測る。

土 層：褐色シルトを主体とする単層である。

出土遺物：須恵器杯・甕、土師器甕などが出土した。

66 は土師器の長胴甕である。頸部は「く」字形に屈曲し、口縁端部はナデにより凹線状の窪みが巡っている。

遺構時期：出土遺物や、掘立柱建物 3 と主軸方位がほぼ同じであることなどから、遺構の時期は 8 世紀前半頃と判断した。

■ 溝 2 (第 71・82～84 図、表 4・5・9、写真 15・16・167・168・192～196)

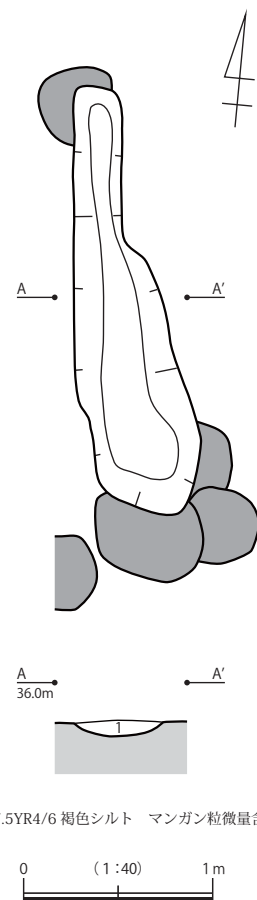
位 置：調査区③の S・T・U17 グリッドに位置する。掘立柱建物 15・16 の柱穴を切っており、溝の両端は調査区外へ続いている。遺構確認面の高さは標高 36.1 m で、現地表面から約 0.2 m 下に位置する。主軸方位は N-4°-E を示す。

形 態：幅広で浅い溝状遺構である。周辺は水田造成の際に上部を大きく削平されており、底面付近での検出と考えられる。断面形は皿状で緩やかに立ち上がり、底面には筋状の凹凸が複数みられる。

規 模：検出した範囲での長さ 6.8 m 以上、最大幅は 3.68 m を測る。深さは 0.23 m を測る。

土 層：2 層に区分できる。黄褐色シルトを主体としている。第 1 層から多くの遺物や 24～70cm 大の岩石などが出土した。

出土遺物：須恵器・土師器・瓦・石器など様々な遺物が多数



1 7.5YR4/6 褐色シルト マンガン粒微量含む

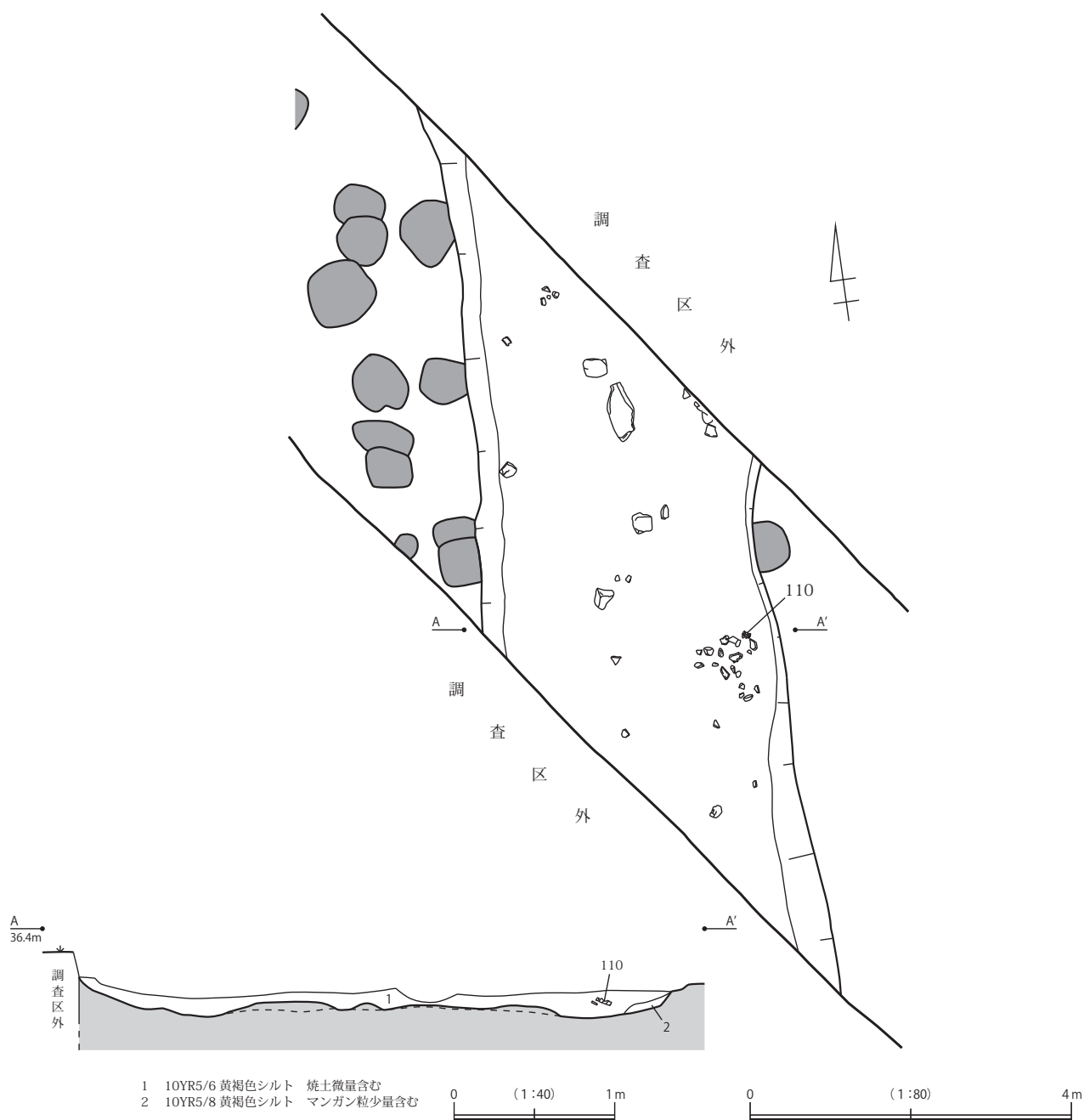
第70図 溝1

出土した。

67は須恵器の杯である。底部はヘラ切り後ナデ調整されており、高台の周辺のみヘラケズリされている。

68～77は須恵器の椀である。68は高台が付き、降灰のため調整は不明瞭なもの、底部はヘラケズリされている。底部を含め外面に自然釉がみられることから、焼成時に伏せて置かれたことがわかる。69・70・73～77はすべて平底で、底部は回転糸切によって切り離されている。底部を欠損している71・72も同様と思われる、体部は外側に直線的に開き、口縁端部は丸くおさめている。

78～81は須恵器の小皿である。すべて回転糸切によって切り離され、79以外は口縁に重ね焼きの痕跡がみられる。



第71図 溝2



82は須恵器の壺底部片である。回転糸切によって切り離され、外に踏ん張る高台が付く。体部は外へ直線的に立ち上がっている。

83・84は須恵器の鉢である。83は片口で、体部内面は斜め上方向や横方向の板ナデで仕上げられている。口縁端部は上方に拡張され、外側端面はほぼ垂直となる。底部外面には繊維痕がみられる。84は、内外面ともロクロ回転ナデによって成形され、底部外面にはヘラおこしの痕跡がみられる。

85～87は須恵器の甕である。85・86は広口の甕で、85は丸みのある体部から緩やかに外反して口縁部に至る。86は、体部から短く外反して口縁部に至り、端部をやや下に拡張して肥厚させている。87は底部のみの破片で、器壁は厚く、体部外面はヘラケズリされ、底部はヘラおこしの痕跡がみられる。底部内面はユビナデの痕跡が明瞭に残っている。

88は白磁の椀である。華南産の舶載磁器で、口縁部が玉縁状に厚く成形されている。

89・90は土師器の椀である。相伴する須恵器椀69～77などとほぼ同形態と考えられ、ロクロ成形され、底部は糸切されている。

91～93は土師器の甕である。いずれも口縁部付近の破片である。91は、体部から短く外反して口縁部に至り、体部外面にはタタキの痕跡が明瞭に残っている。92は、頸部が断面「く」字形に折れ、短い口縁へと至る。93は、厚めの口縁部をもち、端面は平坦に調整され、内面には横方向のハケメが明瞭に観察できる。

94は土師器の鍋である。内面は横方向、外面は縦方向のハケ調整がされている。外面にユビオサエの痕跡が多く残る。

95は土師器の羽釜である。鏝付近の破片で、鏝は低く、口縁部は内傾している。

96は土師器のイダコ壺破片である。釣鐘形の天井部付近で、吊手と胴部は欠損している。

97～109は平瓦である。97～108は凹面に布目圧痕が残り、98・101～103・106・107は凸面に縄目叩きがみえる。凸面は叩き後ナデ調整されているものが多く、99・100・104・105・108はナデにより叩きの痕跡は消されている。端面もケズリの後ナデ調整されているものが多い。109は、凸面に布目圧痕が残り、凹面はナデにより叩きの痕跡が消されている。側面もナデ調整されている。

110は軒丸瓦である。軒部の破片で、瓦当文様は三巴文である。左巻きの巴文で、各巴は他の巴と接続していない。また、周縁に珠文帯等をもたない。

111は丸瓦である。やや薄手で、凸面は縄目叩き、凹面は布目圧痕が残る。側面はケズリの痕跡がみられる。

112はサヌカイト製の石鏝である。凹基無茎鏝で、背面の右側縁を中心に調整が不十分なことから、未成品と考えられる。他の遺物と時期的に大きな隔りがあるため、混入品と考えられる。

遺構時期：主体となる遺物の年代観や主軸方位から、遺構の時期は12～13世紀頃と判断した。

### ■溝3（第72・85図、表5、写真169・170・196）

位 置：調査区③のJ・K・L10グリッドに位置する。溝の両端は調査区外へ続いている。遺構確認面の高さは標高37.9mで、現地表面から約0.2m下に位置する。主軸方位はN-1°-Eを示す。

形 態：南北方向に延びる溝状遺構である。幅は、南側がやや太く、北側が細い。断面形は浅い皿状で、底面は緩やかに湾曲している。周辺は水田造成の際に上部を大きく削平されており、底部付近での検出と考えられる。

規 模：検出した範囲での長さ10.0m以上、最大幅は1.66mを測る。深さは0.18mを測る。

土 層：2層に区分できる。黄褐色シルトを主体とし、第1層から複数の遺物や礫が出土した。

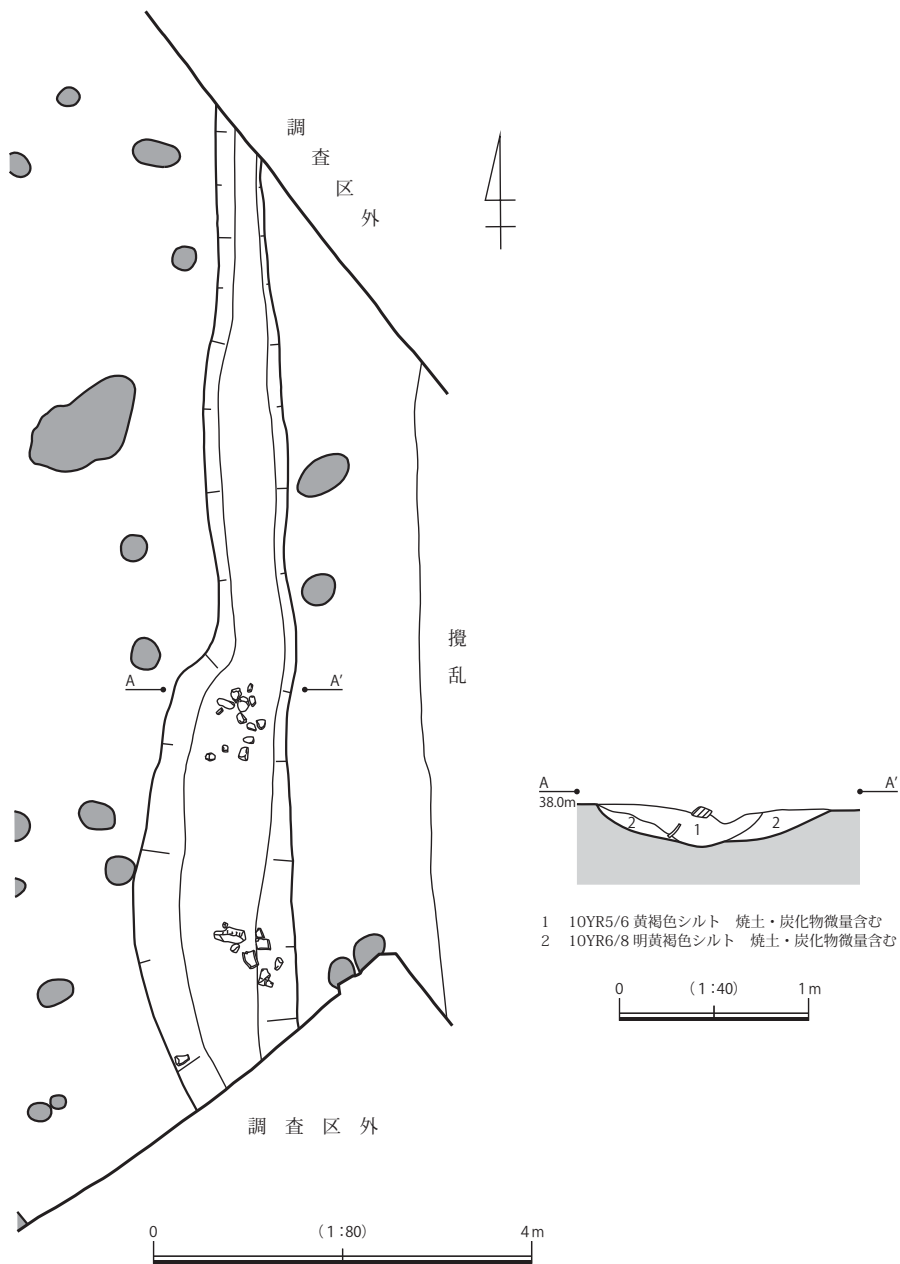
出土遺物：須恵器杯・壺・甕、土師器甕、瓦などが出土した。

113は須恵器の杯である。底部はやや丸みを帯び、ヘラ切り後ナデ調整されている。

114～117は平瓦である。いずれも軟質で調整は不明瞭であるが、114の凸面には縄目叩きが、114～116の凹面には布目圧痕が確認できる。

118は丸瓦である。凸面は縄叩き後ナデ調整され、凹面は布目圧痕が残る。側面はケズリ後ナデ調整されている。

遺構時期：出土遺物から、遺構の時期は8世紀前半頃と判断した。



第72図 溝3

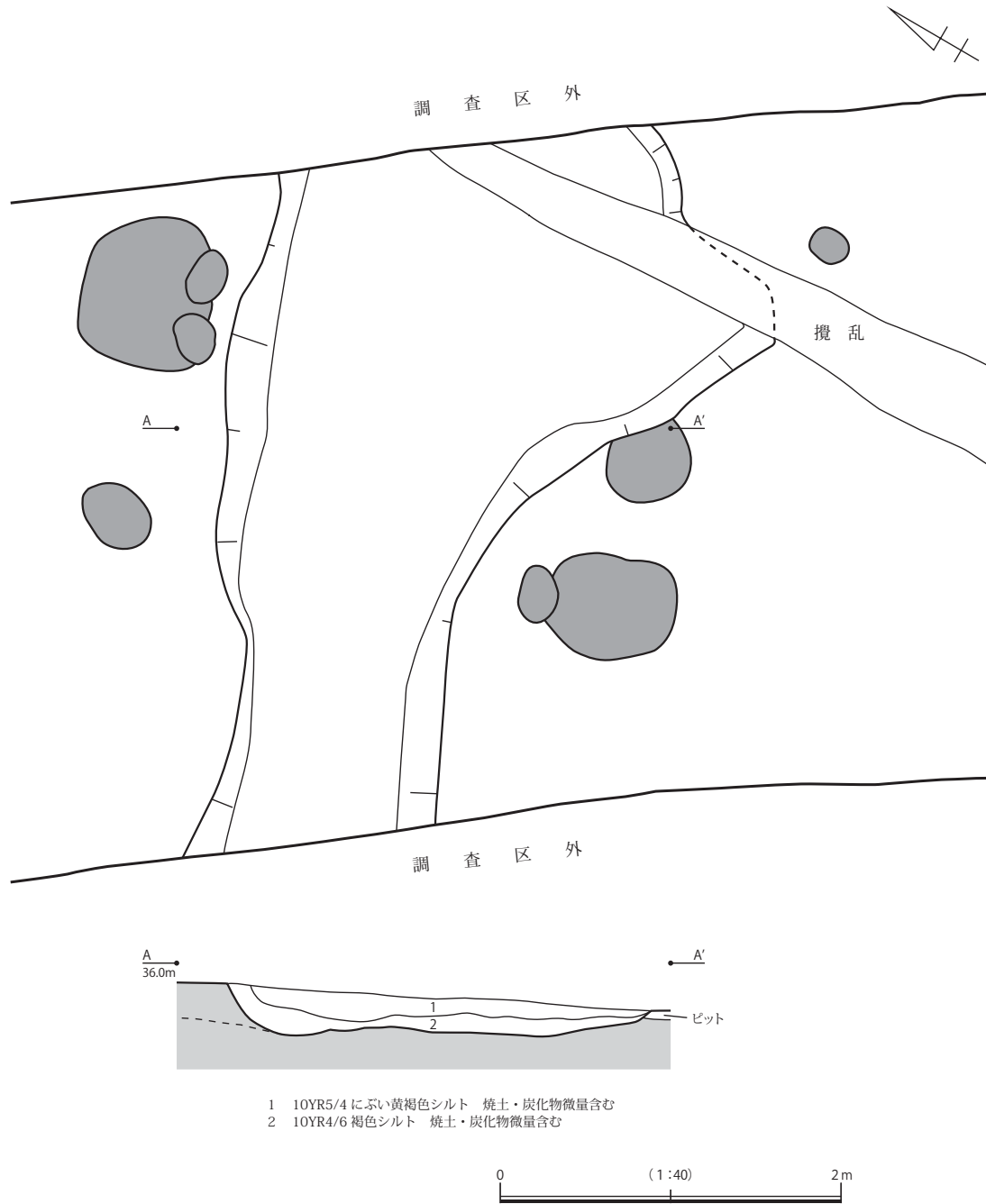
■溝4（第73・86図、表5・6、写真171・172・197）

位置：調査区③のV18・19グリッドに位置する。溝の両端は調査区外へ続いている。遺構確認面の高さは標高35.9mで、現地表面から約0.7m下に位置する。主軸方位はN-77°-Eを示す。

形態：東西方向に延びる溝状遺構である。幅は、東側が太く、西側が細くなっている。断面形は浅い皿状で、底面はおおよそ平坦である。

規模：検出した範囲での長さは4.13m以上で、幅は東側で約1.3m、西側で約2.2mを測る。深さは0.27mを測る。

土層：2層に区分できる。黄褐色や褐色のシルトを主体としている。



第73図 溝4

出土遺物：須恵器杯・椀・甕・鉢・提瓶、土師器椀・甕、瓦、弥生土器の底部片など多様な遺物が出土した。

119は須恵器の椀である。平高台をもち、底部はヘラ切後ナデ調整されている。

120は土師器の椀である。外側に張り出す高台を付け、体部は外上方へ直線的に立ち上がっている。

121・122は土師器の甕である。両者とも外面はタタキ成形され、121は丸みのある体部から厚手の口縁部をもち、口縁端部は上方に少しつまみ上げられている。122は、頸部断面が「く」字形に折れ、体部はやや直線的である。

123・124は平瓦である。両者とも凸面は縄目叩きされ、凹面には布目圧痕が残る。

遺構時期：主体となる遺物の年代観から、遺構の時期は12～13世紀頃と判断した。

## 第8節 墓墳

### ■墓墳1（第74・86図、表6・8、写真13・14・173～176・197・198）

位 置：調査区③のE・F5グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高38.1mで、現地表面から約0.2m下に位置する。長軸方向を基準とした方位はN-7°-Wを示す。

形 態：平面形は長方形で、断面形は凹字状をしている。底面は平坦で、北側がやや高くなっている。

規 模：長軸1.65m、短軸0.86mを測る。深さは0.19mであるが、遺構上部は水田開発の際に削平されているため、本来の深さは不明である。土層断面の観察において掘り込みのひと回り内側から木質の痕跡を確認しており、木棺墓であった可能性がある。

土 層：4層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体とする。第2層と第3層の境において木質の痕跡を確認し、第2層の下部から副葬品と考えられる遺物が複数出土した。また、平面四隅と西側の中央付近において10～20cm大の岩石が出土した。

出土遺物：青磁椀、須恵器甕、土師器皿、金属製品などが出土した。

125は青磁の椀である。龍泉窯系の舶載磁器で、内面全体に草花文が片切彫りされた劃花文椀である。

126～130は土師器の小皿である。すべて手づくね成形で、器高は低く、底部から口縁部にかけて緩やかに立ち上がっている。

131は板状の鉄製品である。断面L字形に曲がる板状をしており飾金具の一部と考えられるが、破片のため詳細は不明である。

遺構時期：副葬品の年代観から、遺構の時期は13世紀前半頃と判断した。

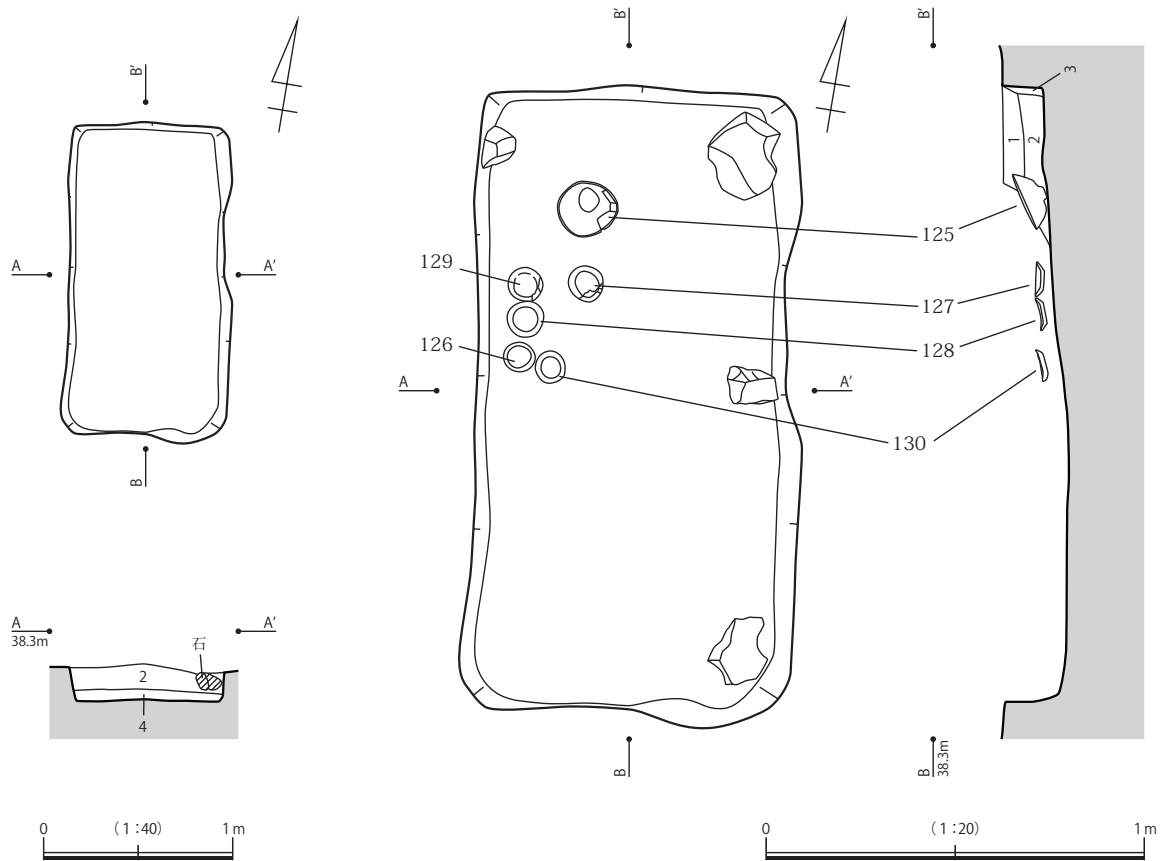
## 第9節 その他の遺構

### ■粘土採掘坑1（第75図、写真177・178）

位 置：調査区②のC・D7・8グリッドに位置する。遺構南側は調査区外へ及んでおり、北側の一部は水田の畔のため掘削できなかった。遺構確認面の高さは標高37.2mで、現地表面から0.5～0.6m下に位置する。長軸方向を基準とした方位はN-23°-Eを示す。

形 態：大部分が調査区外にあるため、平面形は不明である。断面形は凹字状で、部分的にオーバーハングして袋状を呈する。

規 模：検出した範囲での長軸3.51m以上、短軸2.47m、深さ1.08mを測る。



- 1 10YR5/8 黄褐色シルト 地山ブロック微量含む
- 2 10YR4/6 褐色シルト 炭化物・地山ブロック微量含む
- 3 10YR5/6 黄褐色シルト 地山ブロック微量含む、第二層との境に黒褐色の木質痕を筋状に残す
- 4 7.5YR5/8 明褐色シルト 炭化物微量、地山ブロック中量含む

第74図 墓墳1

**土 層**：6層に区分できる。黄褐色シルトを主体とし、各層に粘土ブロックが含まれる。遺構の壁面を観察すると、上端付近は砂質シルトの地山だが、遺構底面付近は灰白色の粘土層となっている。

**出土遺物**：須恵器碗や土師器の小片などが出土した。

**遺構時期**：出土遺物から、遺構の時期は12～13世紀頃と判断した。

#### ■性格不明遺構1 (第76図、写真179・180)

**位 置**：調査区③のI・J9グリッドに位置する。遺構北側の一部は調査区外へ及んでいる。遺構確認面の高さは標高37.9～38.0mで、現地表面から約0.2m下に位置する。長軸方向を基準とした方位はN-17°-Eを示す。

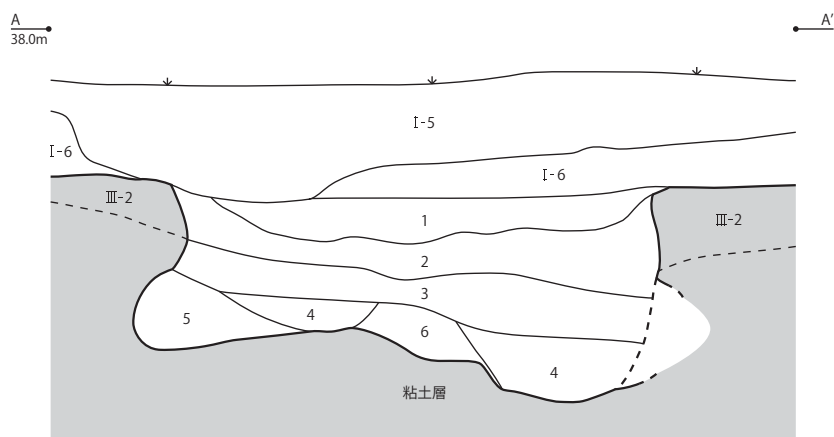
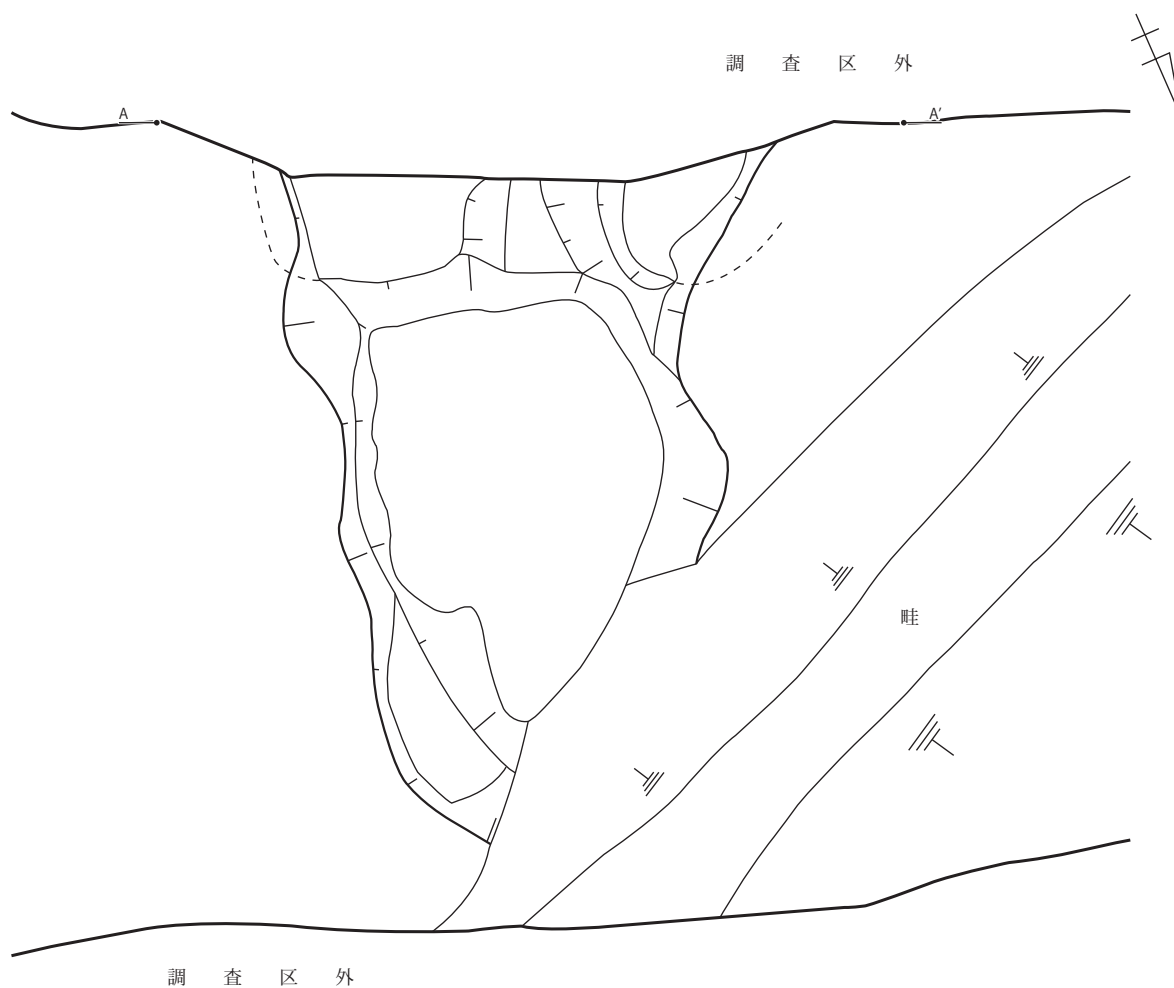
**形 態**：一部が調査区外に及んでいるものの、平面形は不整な楕円形で、中央部分が島状に掘り残されている。断面形は、島状部分の両側に凹字状の掘り込みが認められる。底面はおおむね平坦で、西側が一部深くなっている。

**規 模**：検出した範囲での長軸3.56m以上、短軸2.66mを測る。島状部分の規模は、長軸1.65m、短軸0.25mを測る。深さは、西側で0.42m、それ以外の場所は0.27～0.35mを測る。

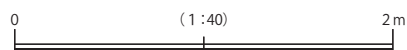
**土 層**：5層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

**出土遺物**：土師器の小片が出土した。

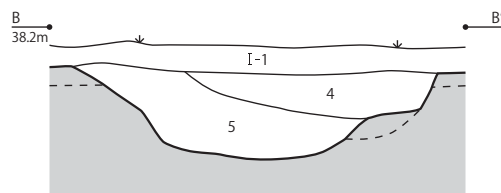
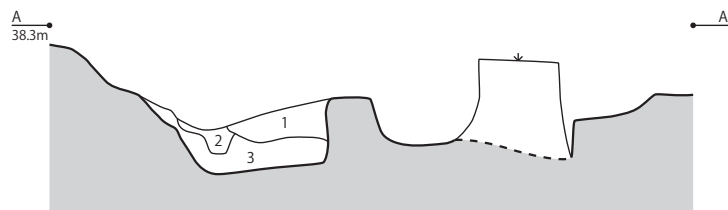
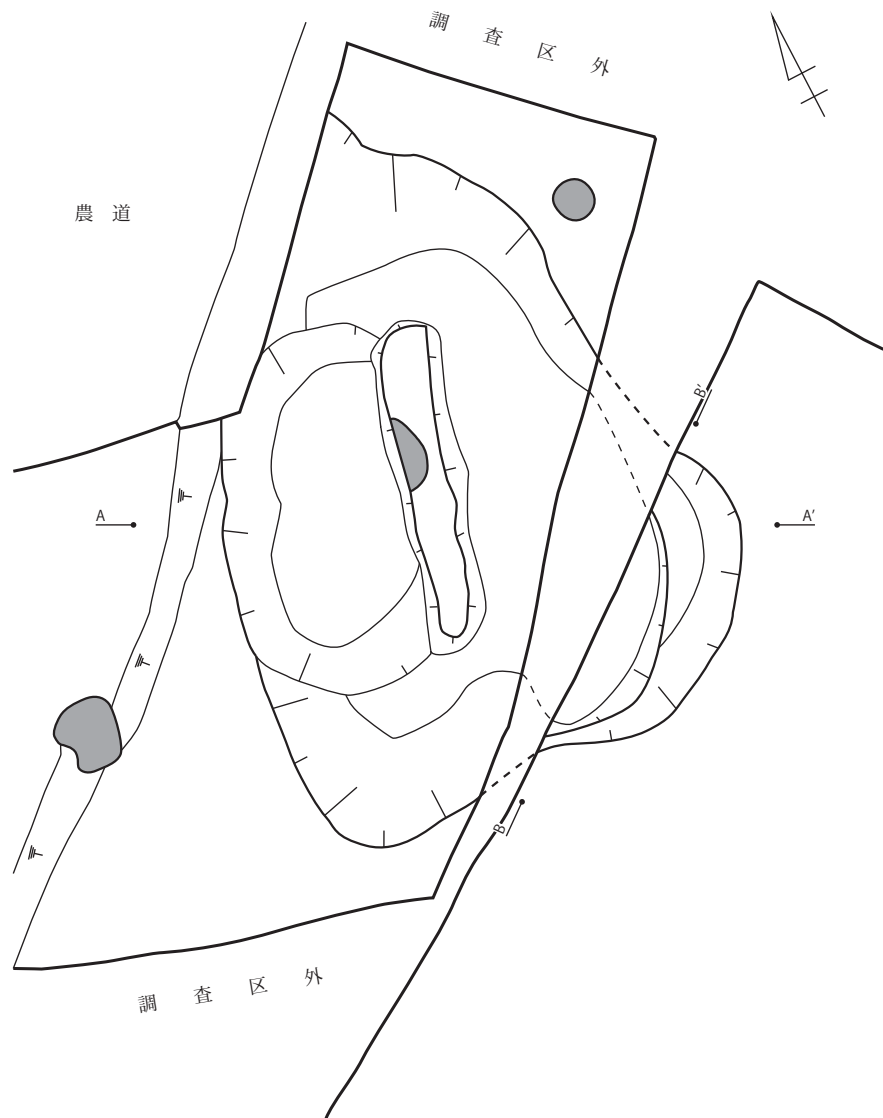
**遺構時期**：不明。



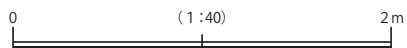
- 1 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土・炭化物微量含む
- 2 10YR5/6 黄褐色シルト 焼土・粘土ブロック微量含む
- 3 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土・粘土ブロック少量含む
- 4 10YR6/6 明黄褐色シルト 粘土ブロック少量含む
- 5 10YR6/6 明黄褐色シルト 焼土・炭化物微量、マンガング粒少量含む
- 6 10YR7/8 黄褐色シルト 粘土ブロック中量含む



第 75 図 粘土採掘坑 1



- 1 10YR5/8 黄褐色シルト 炭化物微量、地山ブロック中量含む
- 2 10YR6/6 明黄褐色シルト 地山ブロック微量含む
- 3 10YR5/6 黄褐色シルト 炭化物・地山ブロック微量含む
- 4 10YR5/8 黄褐色シルト 焼土・炭化物微量、地山ブロック少量含む
- 5 10YR4/6 褐色シルト 焼土・地山ブロック微量、小礫少量含む



第 76 図 性格不明遺構 1

■性格不明遺構 2 (第 77・86 図、表 6、写真 181・182)

位 置：調査区③の L・M8・9 グリッドに位置する。遺構確認面の高さは標高 37.9 m で、現地表面から約 0.3 m 下に位置する。長軸方向を基準とした方位は N-62° -E を示す。

形 態：大部分が調査区外に及んでいるため平面形・断面形ともに不明である。底面は、北東から南西へ緩やかに下るスロープ状となっている。

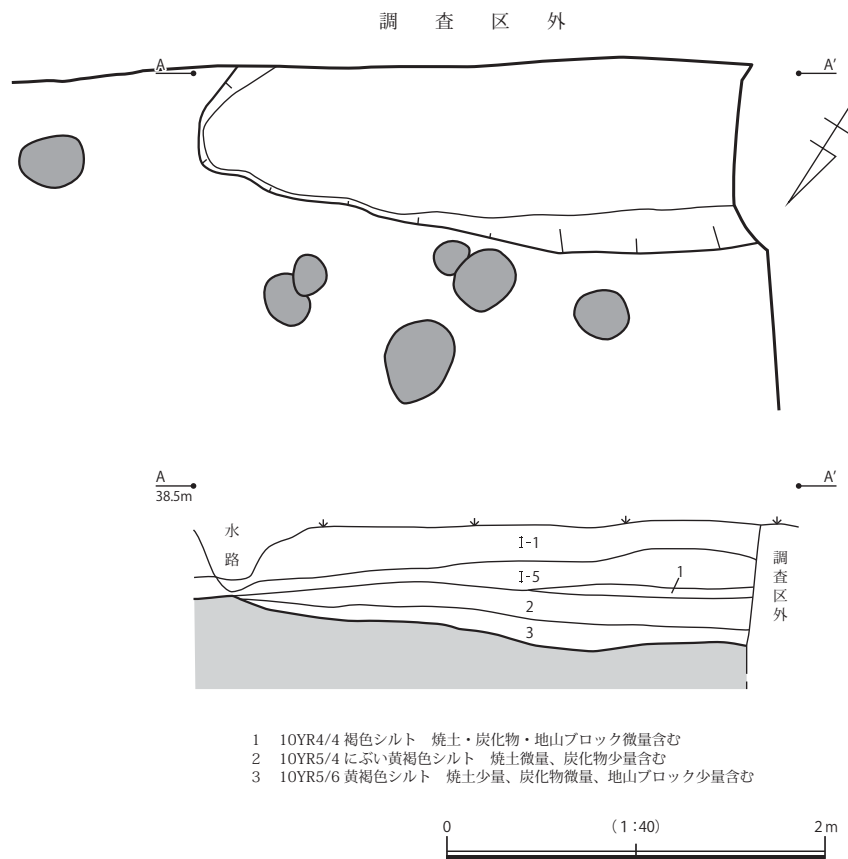
規 模：検出した範囲での長軸 2.84 m 以上、短軸 1.01 m 以上を測る。深さは、北東側で 0.17 m、南西側で 0.35 m を測る。

土 層：3 層に区分できる。褐色や黄褐色のシルトを主体としている。

出土遺物：弥生土器の底部片 1 点が出土した。

132 は弥生土器の甕もしくは壺の底部である。表面の磨滅が著しく調整は不明である。

遺構時期：出土遺物が 1 点のみのため、時期は不明である。



第 77 図 性格不明遺構 2

第 10 節 包含層・表土出土遺物

今回の調査では、遺物包含層や表土・攪乱層において縄文時代から中世にかけての遺物が出土した。以下に、出土遺物のうち図化可能なものを選定して報告する (第 86～90 図、表 6・7、写真 198～200)。

133・134 は縄文土器の深鉢である。両者とも調査区①の包含層中から出土した。133 は、頸部付近



の破片で、外面に貝殻条痕が認められ、外面全体に煤が付着している。134は、口縁部付近の破片で、器壁は薄く、口縁側へ向けて緩やかに外反している。内外面に輪積痕が残る。両者とも縄文時代後期末から晩期前半の滋賀里式と考えられる。

135～139は須恵器の杯蓋である。135は杯Hの蓋で、天井部にはヘラ切りの痕跡が残っている。136～139は、つまみのあるタイプの蓋で、136・137は器高がやや高く、天井部まで丸みがある。138・139は、器高が低く、天井部は平坦である。136にはボタン形の、138には宝珠形のつまみが付いている。

140～144は須恵器の杯である。140～142は平底の杯Aで、140の底部はヘラケズリされ、141・142はヘラ切りの後ナデ調整されている。141・142は内面や外面に火襻が認められる。143・144は杯Bで、底部はヘラケズリされた後に高台が貼付されている。

145は須恵器の椀である。底部は糸切りされ、体部はやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は丸くおさめている。

146・147は須恵器の壺である。146は頸部片で、上部に2条の凹線が巡っている。外面に自然釉が付着している。147は底部片で、外側に広がる高台をもつ。底部から体部にかけての外面に自然釉が付着していることから、焼成時は伏せて置かれていたことがわかる。

148・149は須恵器の甕である。148は小型の甕で、口縁端部は拡張して肥厚させている。149は口縁部の破片で、口縁端部を僅かに肥厚させている。口縁直下に櫛描波状文が施文されている。

150は土師器の甕である。いわゆる長胴甕で、内外面ともハケ調整されている。口縁部は磨滅や剝離が著しく、本来の形状は不明である。

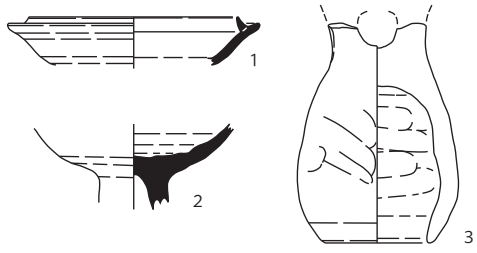
151は土師質の棒状土錘である。径9mmほどの穿孔が1箇所あり、片側は欠損のため穿孔は確認できない。また、上端面及び欠損している下面側に径3mmほどの未貫通孔が認められる。

152～161は平瓦である。152は凸面を格子叩きしており、それ以外はすべて縄目叩きである。縄目叩きのものには部分的に叩き後ナデ調整したものがある。凹面はすべての個体に布目圧痕がみられる。端面や側面はケズリの痕跡を残すものと、ケズリ後ナデ調整されたものがある。

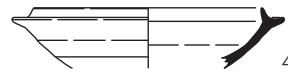
162・163は丸瓦である。いずれも凸面は縄目叩き後ナデ調整され、凹面には布目圧痕がみられる。端面や側面にはケズリの痕跡が残っている。

註1) 登録遺跡名は「白沢放山遺跡」。

豎穴建物 1



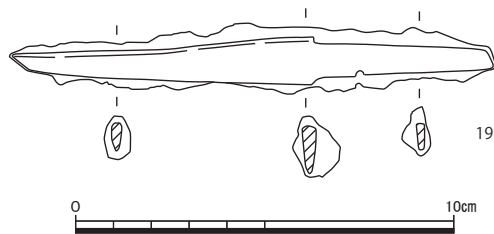
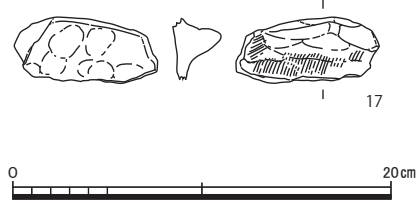
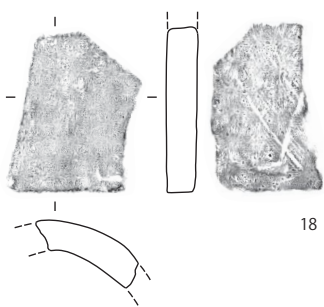
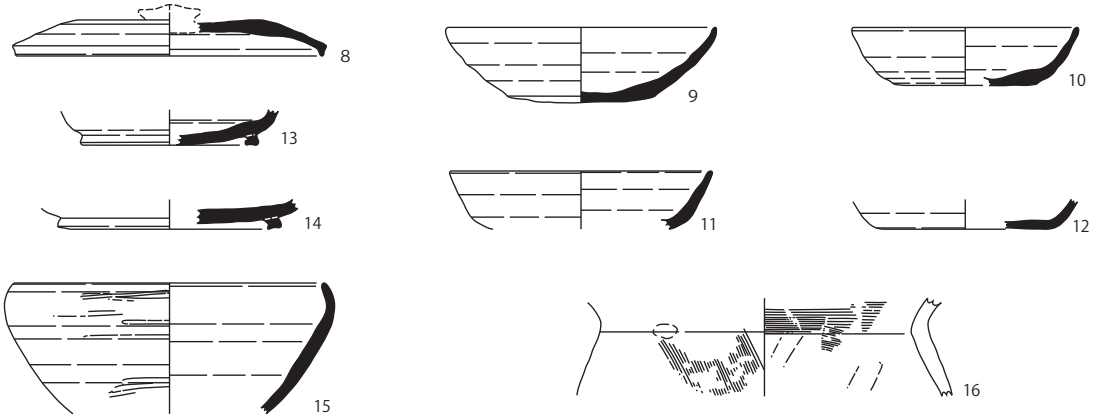
掘立柱建物 1



掘立柱建物 2

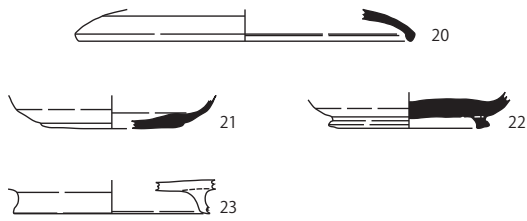


掘立柱建物 3

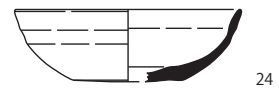


第 78 図 豎穴建物 1・掘立柱建物 1～3 出土遺物

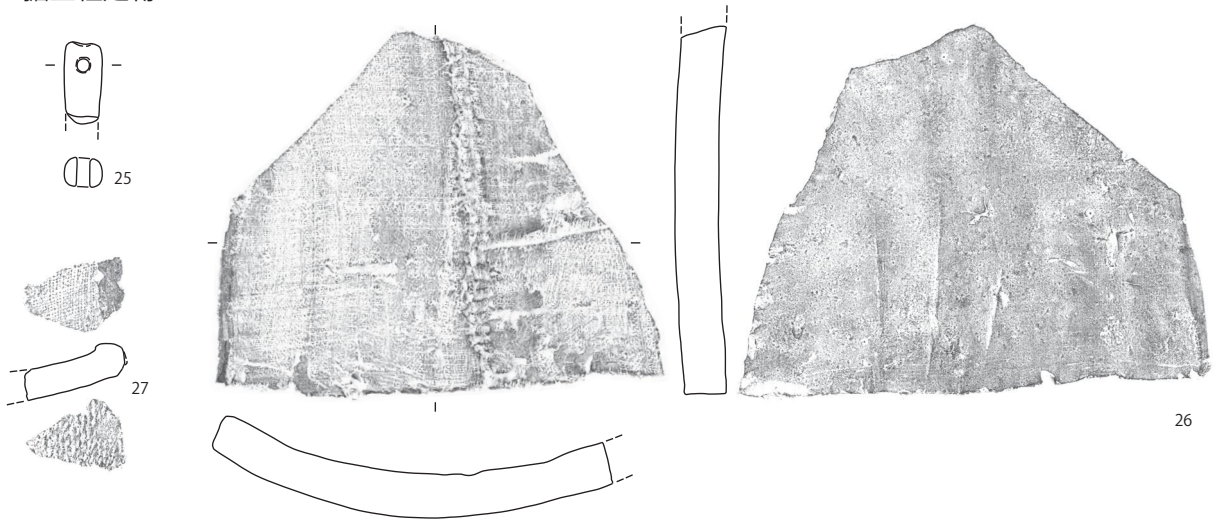
掘立柱建物 4



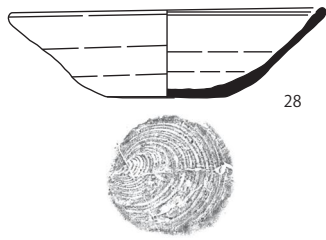
掘立柱建物 12



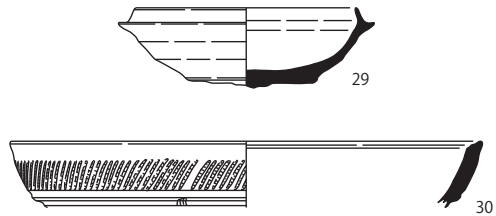
掘立柱建物 17



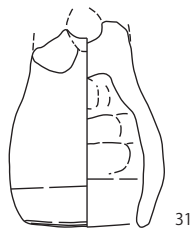
掘立柱建物 20



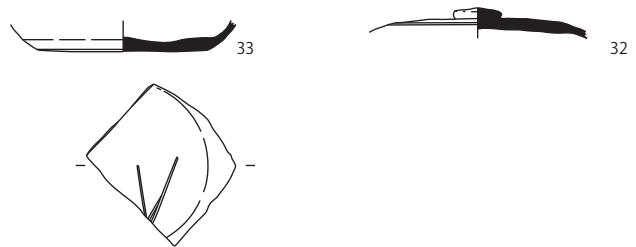
土坑 1



土坑 2

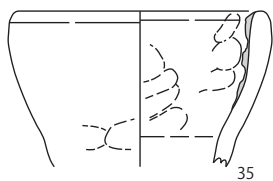
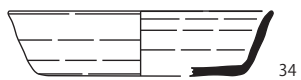


土坑 3

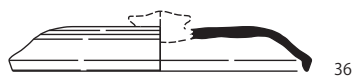


第 79 図 掘立柱建物 4・12・17・20・土坑 1～3 出土遺物

土坑4



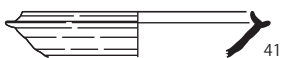
土坑5



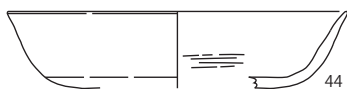
土坑6



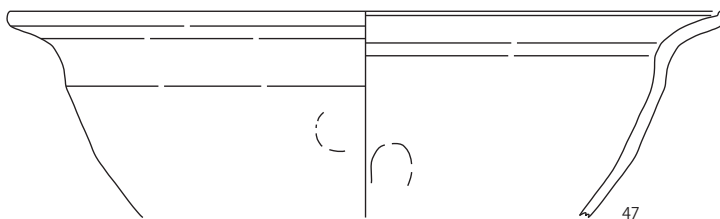
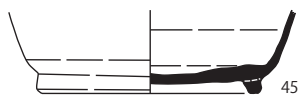
土坑7



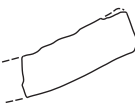
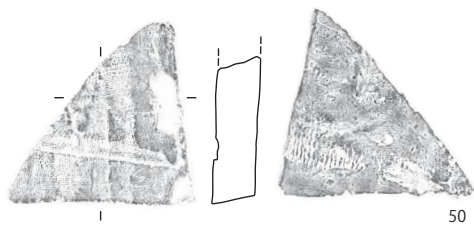
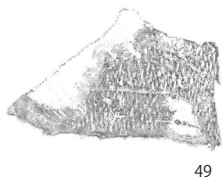
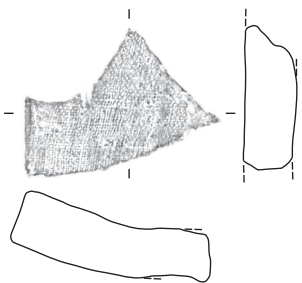
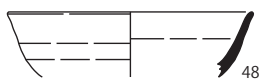
土坑8



土坑9



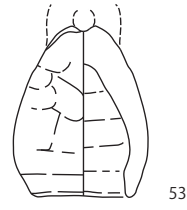
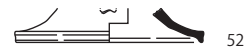
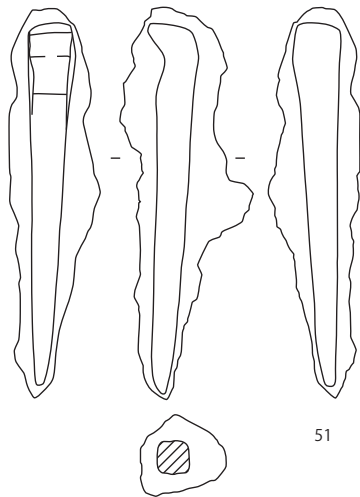
土坑12



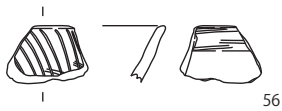
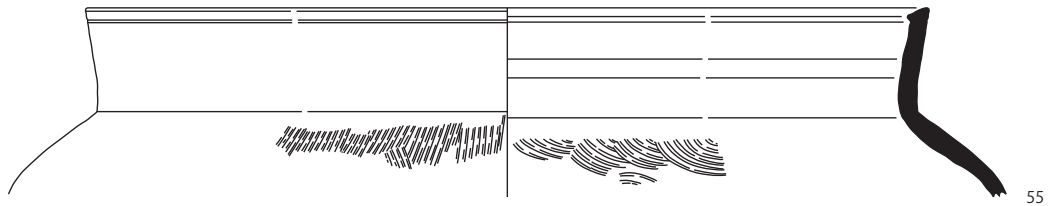
第80図 土坑4~9・12出土遺物

土坑 13

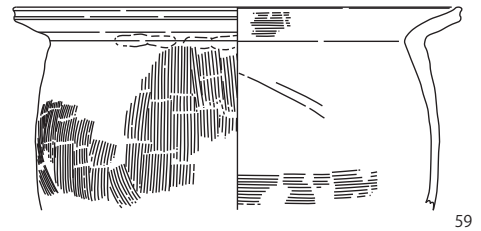
ピット 1



ピット 2



ピット 4



ピット 3



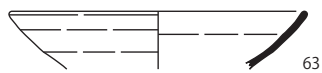
ピット 5



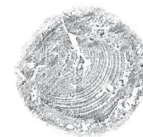
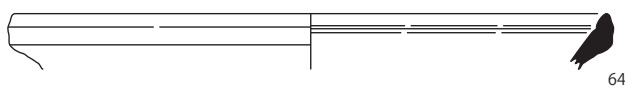
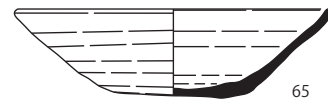
ピット 6



ピット 7

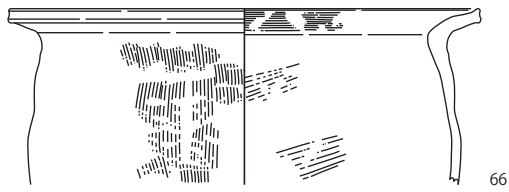


ピット 8

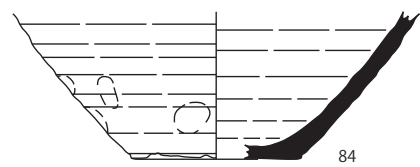
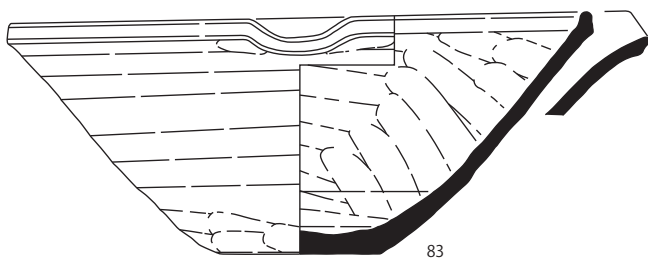
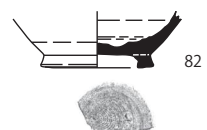
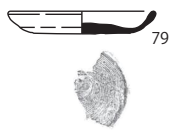
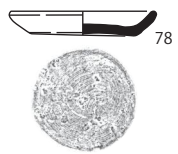
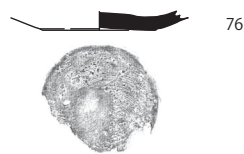
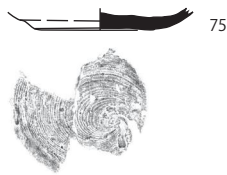
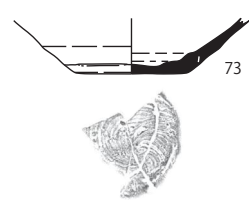
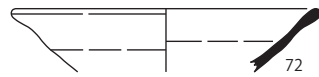
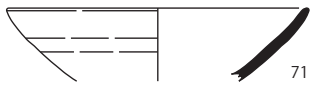
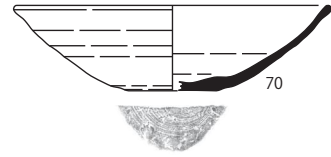
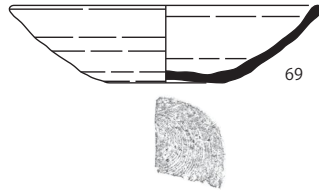


第 81 図 土坑 13・ピット 1～8 出土遺物

溝1

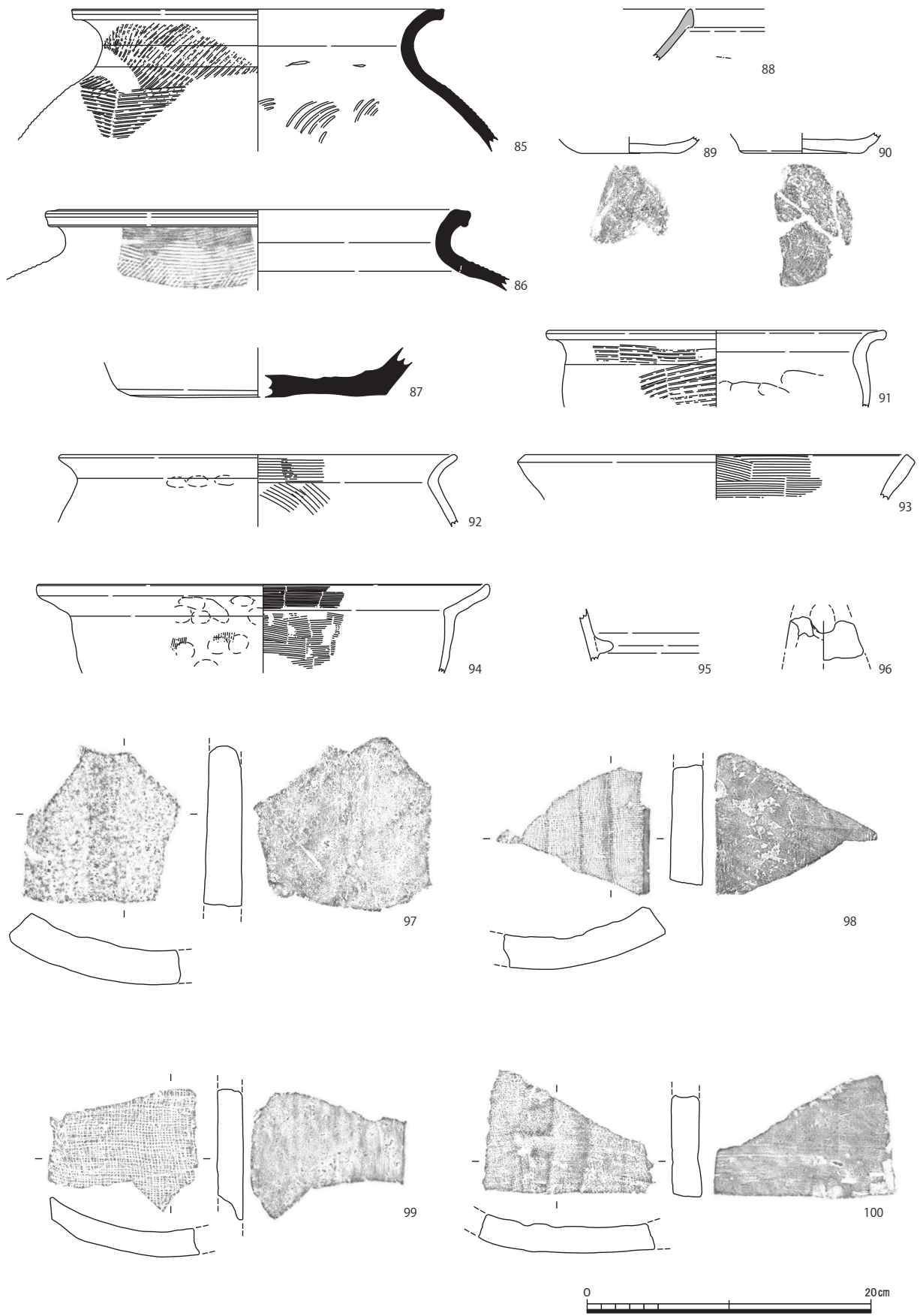


溝2-①



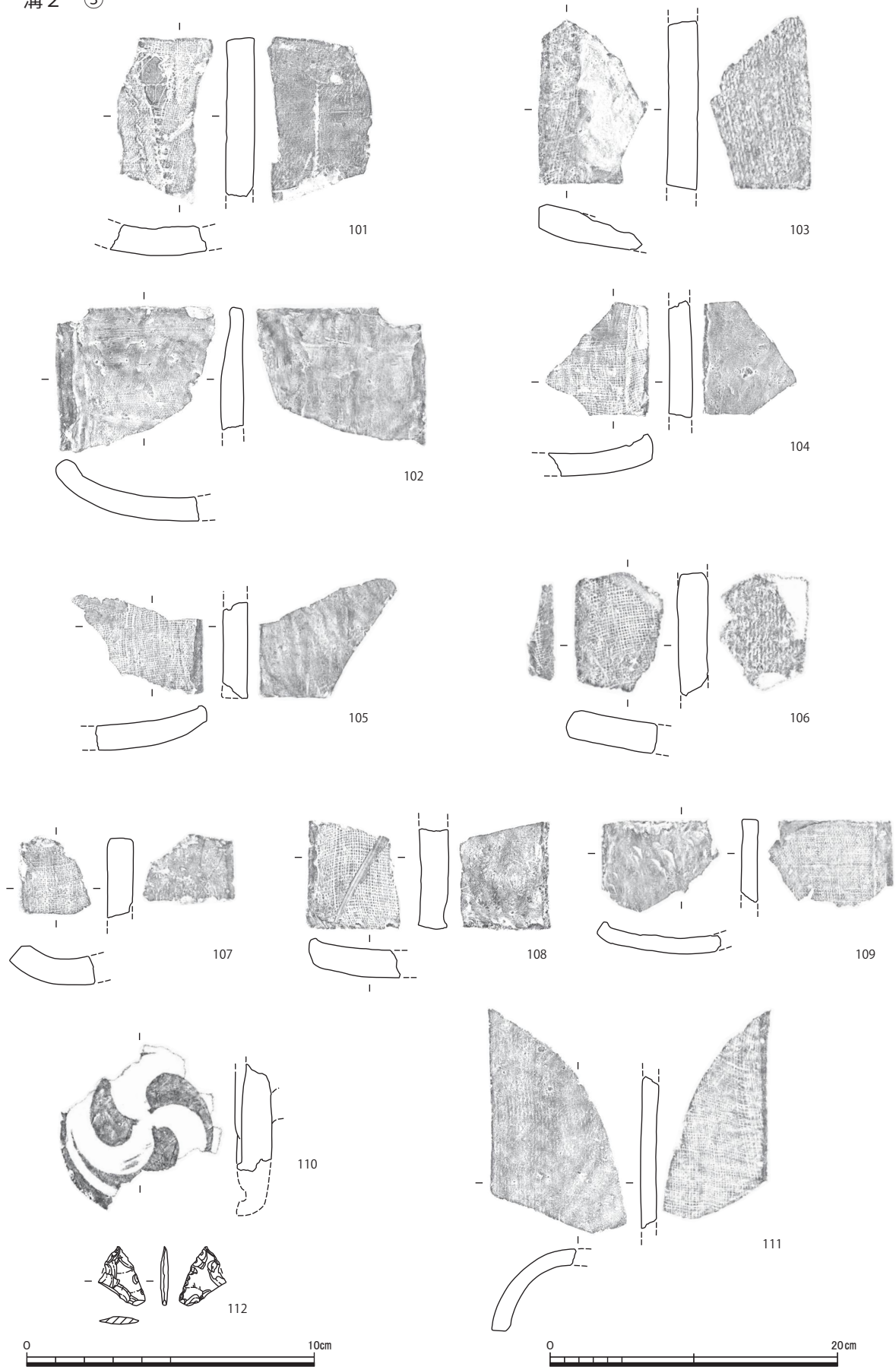
第82図 溝1・2-①出土遺物

溝2-②



第83図 溝2-②出土遺物

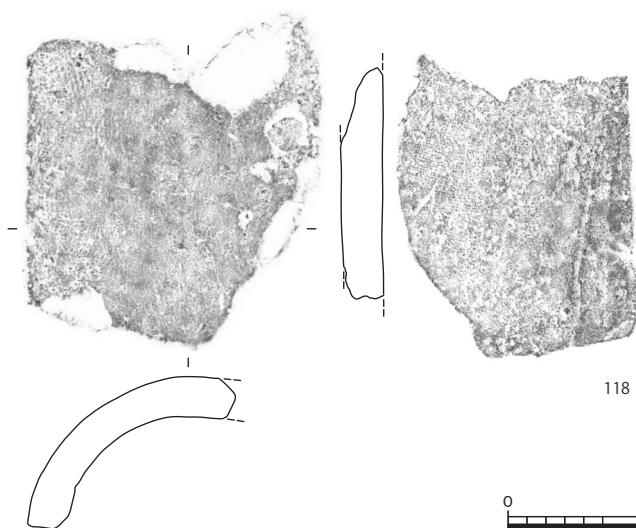
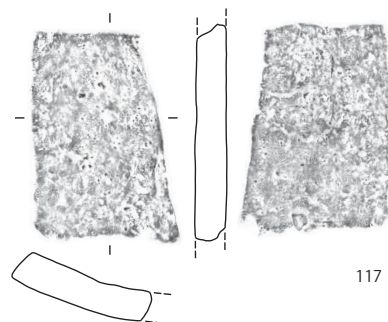
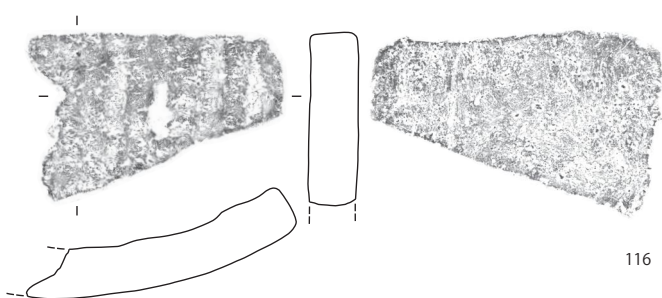
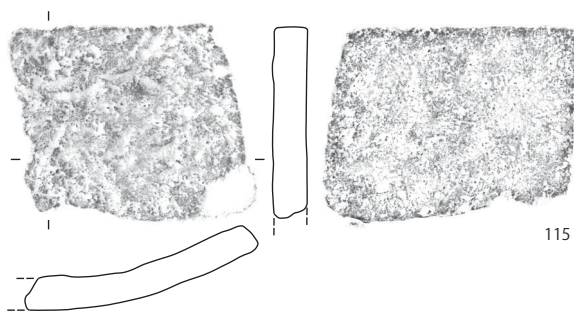
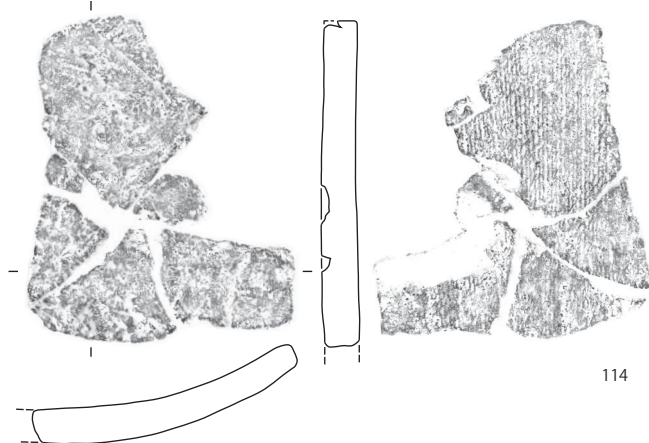
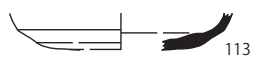
溝2-③



第84図 溝2-③出土遺物

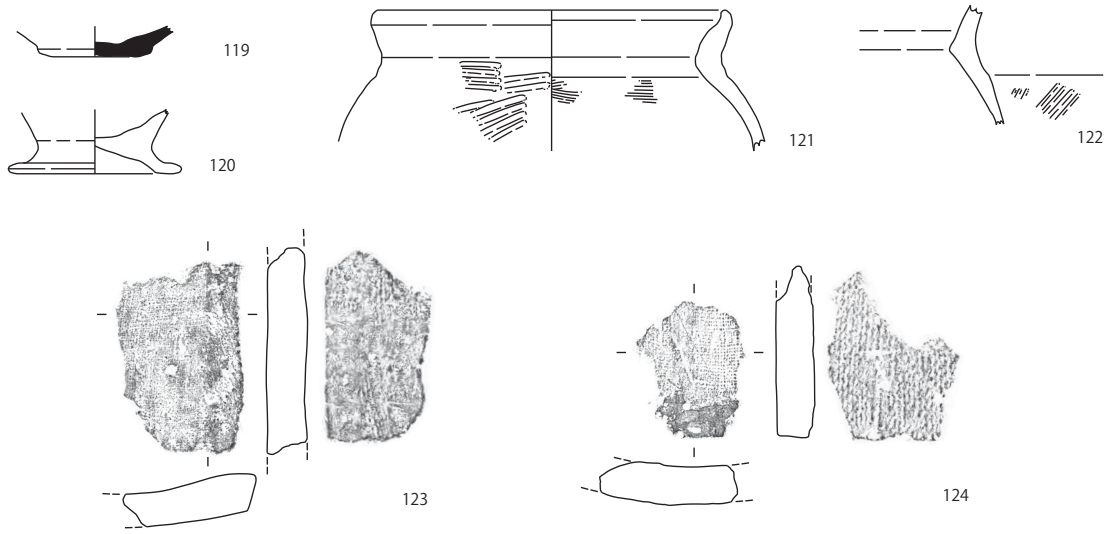


溝3

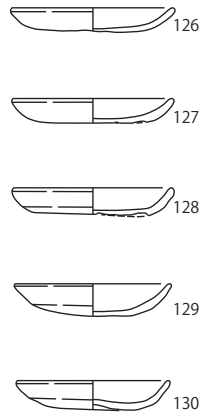


第 85 図 溝 3 出土遺物

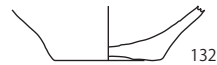
溝4



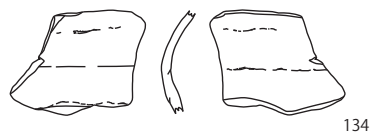
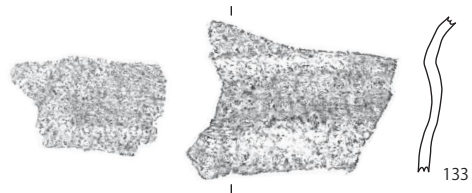
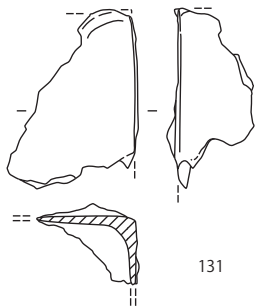
墓壙1



性格不明遺構2

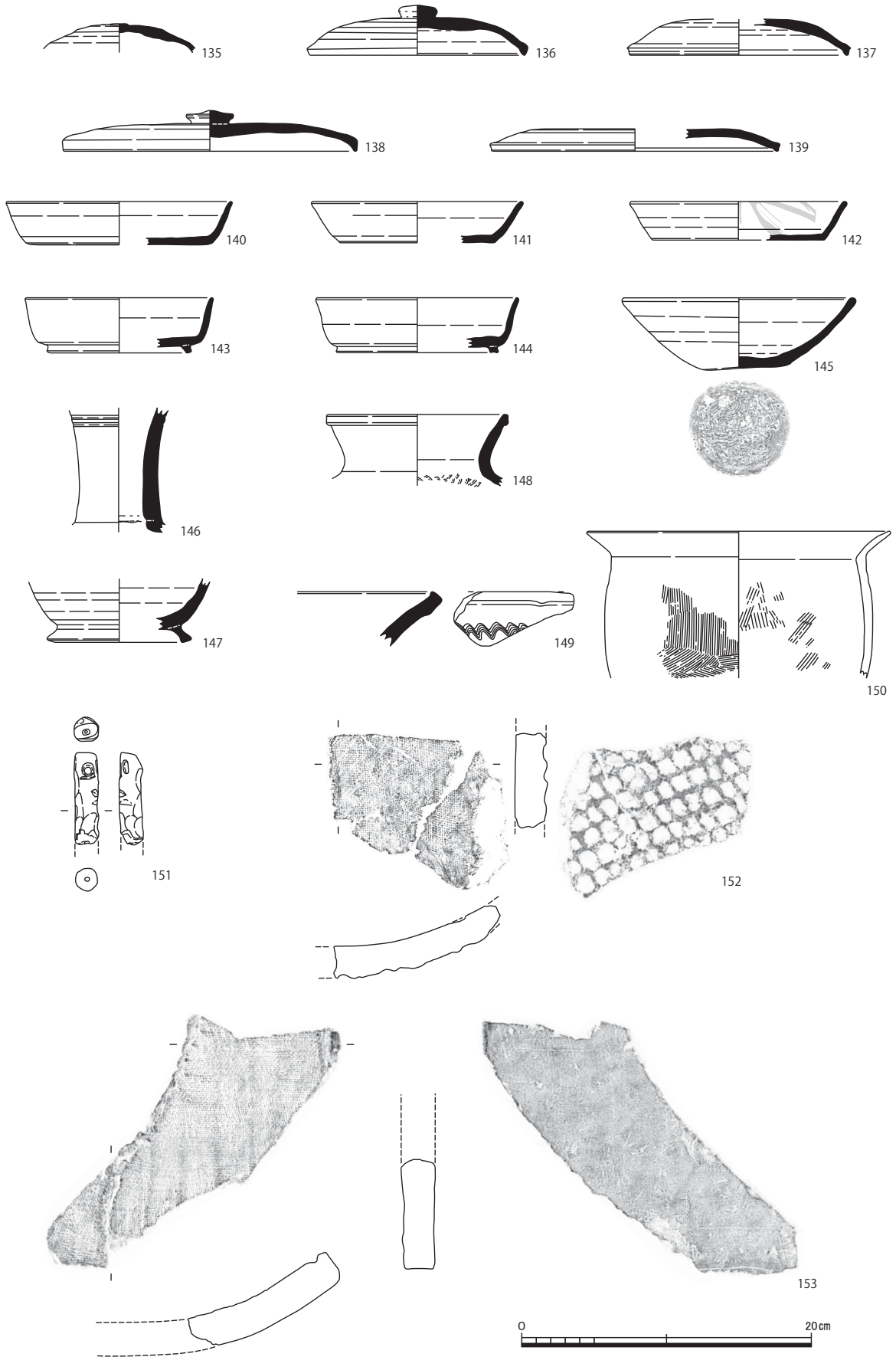


包含層・表土-①



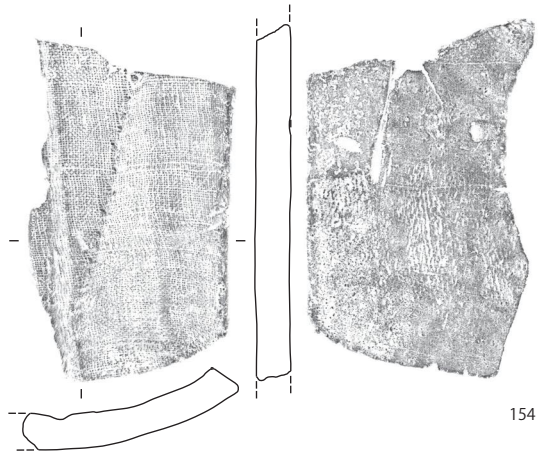
第86図 溝4・墓壙1・性格不明遺構2・包含層・表土-①出土遺物

包含層・表土一②

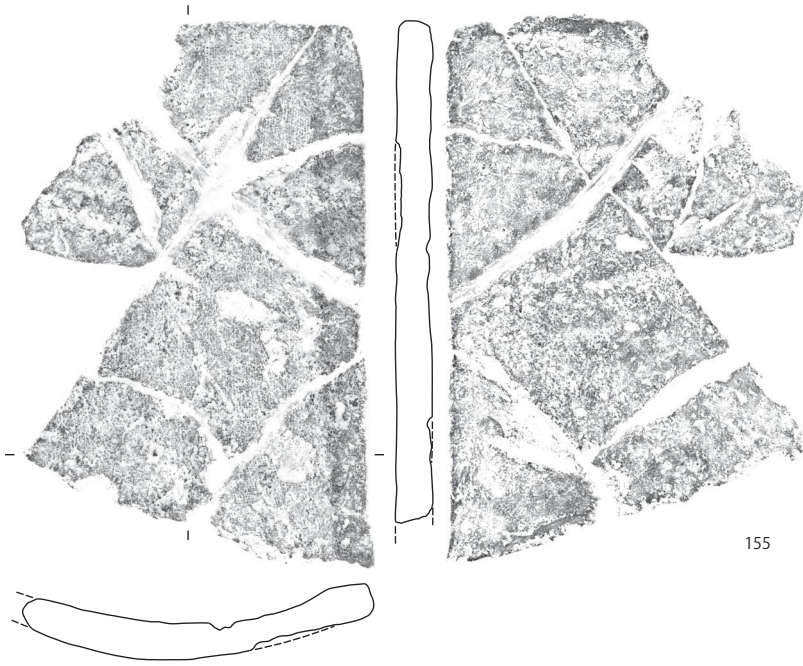


第 87 図 包含層・表土 - ②出土遺物

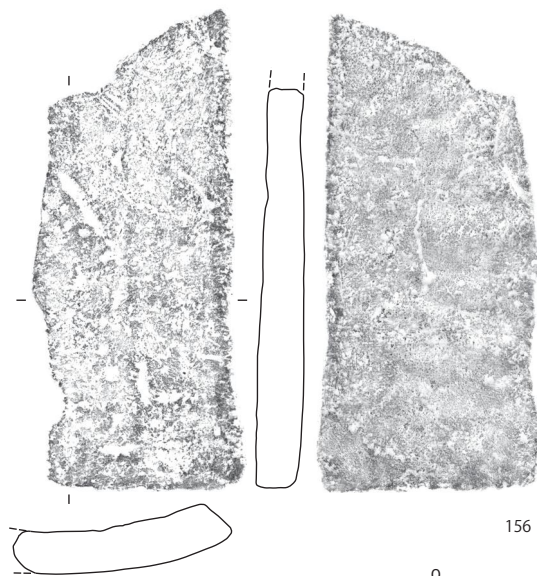
包含層・表土-③



154



155

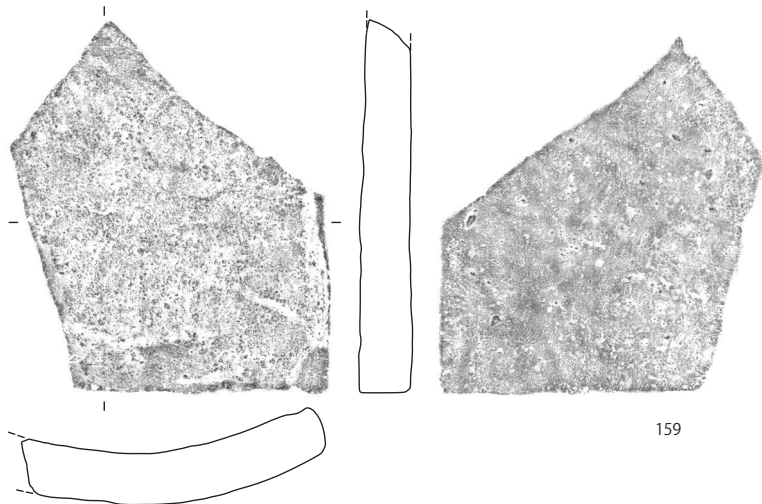
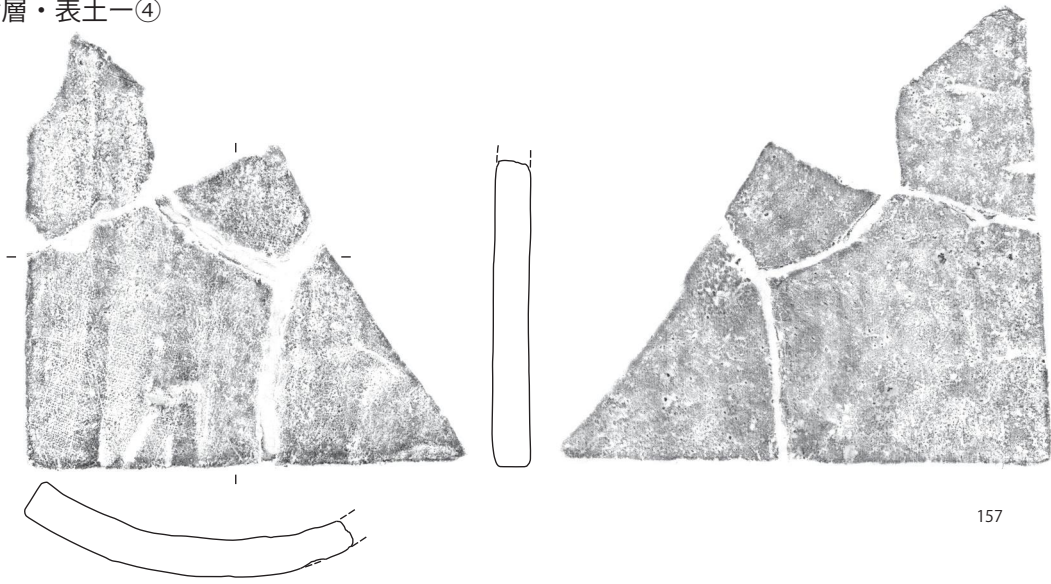


156



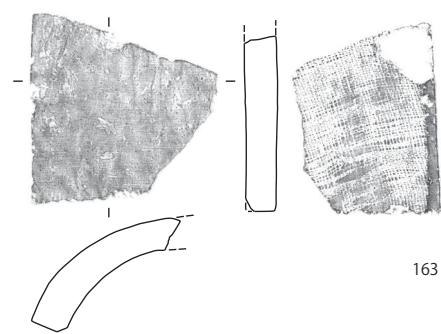
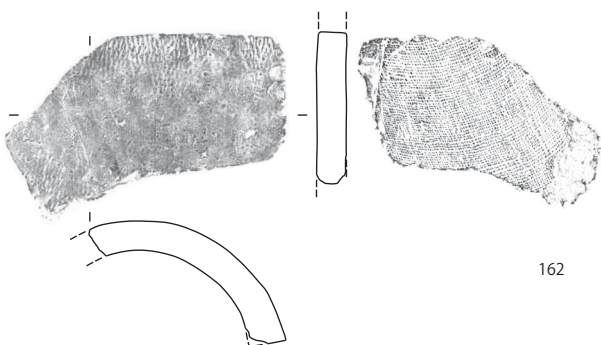
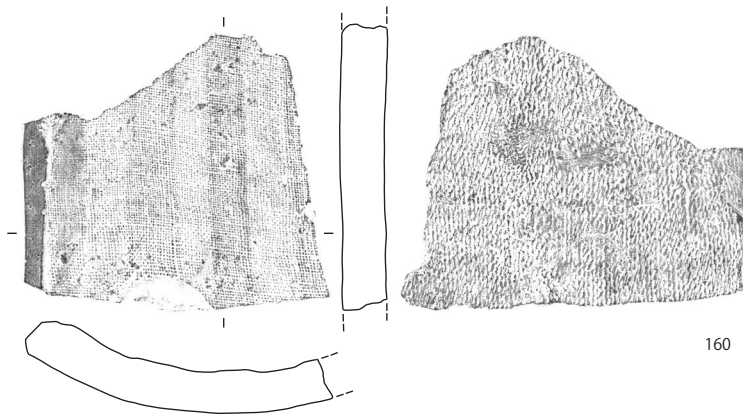
第 88 図 包含層・表土 - ③出土遺物

包含層・表土一④



第 89 図 包含層・表土 - ④出土遺物

包含層・表土-⑤



第 90 図 包含層・表土 - ⑤出土遺物

報告 番号	出土 遺構	種別	器種	法量 (cm)				所見	
				口径	器高	底径	腹径		
1	竪穴建物 1 一括	須恵器	杯	* 10.7	> 2.8			内外面ともに回転ナデ	
2	竪穴建物 1 竈内	須恵器	高杯		> 4.7			杯部から脚部にかけての破片 内外面ともに回転ナデ 脚部内面ナデ	
3	竪穴建物 1 上層	土師器	飯埴壺	6.0	> 11.5			外面：口縁部付近ヨコナデ 体部ユビオサエ・ナデ 吊手部一部破損 内面：口縁部付近ヨコナデ 体部横方向ナデ	
4	掘立柱建物 1 P1	須恵器	杯	* 12.2	> 3.2			外面：回転ヘラケズリ・ナデ 受け部付近に重ね焼きの痕跡あり 内面：回転ナデ	
5	掘立柱建物 2 P1	須恵器	杯蓋	* 17.0	> 2.8			外面：回転ヘラケズリ・ナデ つまみ欠損 内面：回転ナデ後、一部ナデ	
6	掘立柱建物 2 P1	須恵器	杯蓋	* 19.0	> 1.9			外面：ヘラ切り後、ナデ 回転ナデ つまみ欠損 内面：回転ナデ後、一部ナデ	
7	掘立柱建物 2 P1	須恵器	杯	* 13.0	3.5			外面：ヘラ切り後、ナデ 回転ナデ 重ね焼きの痕跡あり 内面：回転ナデ後、一部ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり	
8	掘立柱建物 3 P1	須恵器	杯蓋	* 16.6	> 1.9			外面：ヘラ切り後、ナデ 回転ナデ つまみ欠損 内面口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり 内面：回転ナデ・ヘラケズリ・ナデ	
9	掘立柱建物 3 P7	須恵器	杯	* 14.3	4.0	7.8		外面：底部ヘラ切り後、ナデ 体部回転ナデ 内面：回転ナデ・ナデ	
10	掘立柱建物 3 P8 最下層	須恵器	杯	* 12.0	3.1	* 7.8		外面：底部ヘラ切り 体部回転ナデ 内面：回転ナデ・ナデ	
11	掘立柱建物 3 P9	須恵器	杯	* 14.0	> 3.1			内外面ともに回転ナデ	
12	掘立柱建物 3 P6	須恵器	杯		> 1.7	* 9.0		外面：底部ヘラ切り後、ナデ 体部回転ナデ 内面：回転ナデ	
13	掘立柱建物 3 P7	須恵器	杯		> 1.8	* 9.4		外面：回転ナデ 高台貼り付け 内面：回転ナデ	
14	掘立柱建物 3 P5	須恵器	杯		> 1.6	* 11.8		外面：回転ナデ 高台貼り付け 内面：回転ナデ	
15	掘立柱建物 3 P6	須恵器	鉢	* 16.6	> 6.9			外面：横方向ミガキ 内面：回転ナデ	
16	掘立柱建物 3 P5	土師器	甕		> 5.2			外面：口縁部ヨコナデ 口縁部～胴部付近ユビオサエ 胴部ハケ 口縁部から胴部に付着物 内面：口縁部横方向ハケ 胴部板ナデ	
17	掘立柱建物 3 P6	土師器	甕	長さ 33	幅 > 7.6	厚さ 25		甕の把手片 手づくね成形 外面：把手接合後、ハケ ナデ 把手接合痕あり 内面：ユビオサエ	
18	掘立柱建物 3 P8	瓦	丸瓦	長さ > 8.8	幅 > 5.4	厚さ 16		凸面：ナデ 凹面：布目痕 糸切痕あり	
19	掘立柱建物 3 P7 中層	金属製品	表 8 参照						
20	掘立柱建物 4 P1	須恵器	杯蓋	* 17.6	> 1.7			外面：回転ヘラケズリ後、ナデ 回転ナデ 内面：回転ナデ	
21	掘立柱建物 4 P3	須恵器	杯		> 1.8	* 7.5		外面：底部ヘラ切り 磨滅のため調整等不明 内面：回転ナデ後、一部ナデ	
22	掘立柱建物 4 P4	須恵器	杯		> 1.9	* 8.5		外面：底部ヘラ切り後ケズリ 体部回転ナデ 高台貼り付け 内面：回転ナデ後、一部ナデ	
23	掘立柱建物 4 P1	土師器	杯		> 1.8	* 10.4		内外面ともに磨滅のため調整等不明 高台貼り付け	
24	掘立柱建物 12 P2	須恵器	杯	* 12.0	> 3.8			外面：回転ヘラ切り・ナデ 内面：回転ナデ	
25	掘立柱建物 17 P1	土製品	土錘	長さ > 4.3	幅 2.0	厚さ 1.8		棒状土錘の小破片 ナデ	
26	掘立柱建物 17 P2 下層	瓦	平瓦	長さ > 20.0	幅 > 24.0	厚さ 2.3		凸面：ナデ 凹面：布目痕 側面、端面ともにケズリ	
27	掘立柱建物 17 P1	瓦	平瓦	長さ > 4.7	幅 > 5.4	厚さ 1.1		凸面：縄タタキ 凹面：布目痕 側面：ケズリ ナデ	
28	掘立柱建物 20 P2	須恵器	椀	16.8	> 4.8	6.3		外面：底部回転糸切り 体部回転ナデ後、一部ナデ 内面：回転ナデ後、一部ナデ	
29	土坑 1 上層	須恵器	杯	* 11.9	> 4.3	* 6.9		外面：底部ヘラ切り 体部回転ナデ 内面：回転ナデ	
30	土坑 1 一括	須恵器	甕	* 25.0	> 3.5			外面：口縁部回転ナデ 口縁部直下に右斜め方向櫛描列点文 内面：口縁部回転ナデ	
31	土坑 2 下層	土師器	飯埴壺	6.5	> 10.9			外面：口縁部付近ヨコナデ 体部ナデ 吊手部一部破損 内面：口縁部付近ヨコナデ 体部ユビオサエ	
32	土坑 3 一括	須恵器	杯蓋		> 1.6			外面：回転ヘラケズリ・ナデ 擬宝珠形つまみ貼り付け 内面：回転ナデ ナデ	
33	土坑 3 一括	須恵器	杯		> 1.7	* 8.8		外面：底部ヘラ切り 体部回転ナデ ヘラ記号あり 内面：回転ナデ	

表 2 遺物観察表 (1)

報告 番号	出土 遺構	種別	器種	法量 (cm)				所見	
				口径	器高	底径	腹径		
34	土坑 4 一括	須恵器	杯	* 14.0	3.5	* 11.1		外面：底部ナデ 体部回転ナデ 内面：回転ナデ・ナデ	
35	土坑 4 一括	土師器	製塩 土器	* 13.5	> 8.2			外面：ユビオサエ・ナデ 内面：ユビオサエ 口縁部直下に付着物	
36	土坑 5 一括	須恵器	杯蓋	* 16.0	> 2.4			外面：回転ヘラケズリ・ナデ つまみ欠損 内面：回転ナデ後、一部ナデ	
37	土坑 5 一括	須恵器	杯		> 2.8	* 7.7		外面：底部ヘラ切り 高台貼り付け 内外面とも調整不明瞭	
38	土坑 6 最下層	須恵器	杯蓋	* 17.0	> 1.6			内外面ともに回転ナデ	
39	土坑 6 一括	須恵器	杯		> 2.0	* 8.1		外面：底部ヘラ切り後、ナデ 体部回転ナデ 内面：回転ナデ	
40	土坑 6 最下層	須恵器	杯		> 1.8	* 10.3		外面：底部ヘラ切り後、ナデ 体部回転ナデ 高台貼り付け 内面：回転ナデ後、一部ナデ	
41	土坑 6 最下層	須恵器	杯	* 12.1	> 2.4			外面：回転ヘラケズリ・ナデ 内面：回転ナデ	
42	土坑 7 一括	須恵器	杯		> 1.4	* 13.0		外面：底部ヘラ切り後、一部ナデ 体部回転ナデ 高台貼り付け 内面：回転ナデ	
43	土坑 8 一括	須恵器	杯	* 9.8	> 3.1			内外面ともに回転ナデ	
44	土坑 8 最下層	土師器	杯	* 18.0	> 4.2			内外面ともにミガキか	
45	土坑 9 一括	須恵器	杯		> 4.4	* 11.8		外面：底部ナデ 体部回転ナデ 高台貼り付け 内面：回転ナデ・ナデ	
46	土坑 9 一括	須恵器	杯		> 1.6	* 10.4		内外面ともに回転ナデ 高台貼り付け	
47	土坑 9 一括	土師器	鍋	37.8	> 10.9			内外面ともに口縁部ヨコナデ 体部ユビオサエ・ナデ	
48	土坑 12 一括	須恵器	杯	* 13.0	> 3.5			内外面ともに回転ナデ	
49	土坑 12 一括	瓦	平瓦	長さ > 8.0	幅 > 11.6	厚さ 2.7		凸面：縄タタキ 凹面：布目痕 側面：ケズリ後、ナデ	
50	土坑 12 一括	瓦	平瓦	長さ > 10.2	幅 > 10.1	厚さ 2.3		凸面：縄タタキ後、ナデ 凹面：布目痕 側面：ケズリ・ナデ 端面：ケズリ	
51	土坑 13 一括	金属製品	表 8 参照						
52	ビット 1 一括	須恵器	高杯		> 1.8	* 9.9		脚部片 内外面ともに回転ナデ 透かし孔があるものの詳細不明 外面に自然釉葉付着	
53	ビット 1 一括	土師器	飯蛸壺	5.5	> 8.9			外面：口縁部付近ヨコナデ 体部ユビオサエ・ナデ 吊手部破損 内面：口縁部付近ヨコナデ 体部横方向ナデ	
54	ビット 1 一括	土製品	土錘	長さ > 2.5	幅 > 2.2	厚さ > 1.5		棒状土錘の小破片 ナデ 孔内に付着物	
55	ビット 2 最下層	須恵器	甕	* 44.6	> 10.0			外面：口縁部回転ナデ 胴部平行タタキ 内面：口縁部回転ナデ 胴部タタキ（当て具痕）後、ヨコナデ	
56	ビット 2 一括	土師器	杯		> 3.1			外面：口縁部ヨコナデ 口縁部直下横方向ミガキ 体部ヘラケズリ？ 内面：口縁部端ヨコナデ 体部ハケ後、暗文	
57	ビット 3 一括	須恵器	杯蓋		> 1.5			外面：回転ナデ 擬宝珠形つまみ貼り付け 内面：回転ナデ	
58	ビット 3 一括	須恵器	杯		> 1.7	* 6.6		外面：底部ヘラ切り 体部回転ナデ 内面：回転ナデ	
59	ビット 4 一括	土師器	甕	* 23.8	> 10.7			外面：口縁部ヨコナデ 口縁部～胴部付近ユビオサエ 胴部縦方向ハケ 内面：口縁部横方向ハケ 胴部上半ナデ 胴部下半横方向ハケ	
60	ビット 5 一括	須恵器	杯	* 15.0	3.2	* 12.1		内外面ともに磨滅のため調整等不明	
61	ビット 5 一括	土師器	皿		> 1.6			内外面ともに口縁部付近ヨコナデ？ 内外面ともに磨滅のため調整等不明瞭	
62	ビット 6 一括	須恵器	杯		> 1.4	* 12.3		外面：底部回転ヘラ切り 体部回転ナデ 火襷あり 内面：回転ナデ 火襷あり	
63	ビット 7 一括	須恵器	椀	* 15.8	> 3.1			内外面ともに回転ナデ	
64	ビット 7 一括	須恵器	鉢	* 32.0	> 3.0			口縁部片 内外面ともに回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり、自然釉付着	
65	ビット 8 一括	須恵器	椀	16.8	4.7	6.0		外面：底部糸切り 体部回転ナデ ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり 内面：回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり	
66	溝 1 一括	土師器	甕	* 24.8	> 9.3			外面：口縁部ヨコナデ 胴部縦方向ハケ 内面：口縁部端付近ヨコナデ 口縁部横方向ハケ 胴部ハケ	

表 3 遺物観察表 (2)



報告 番号	出土 遺構	種別	器種	法量 (cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径	
67	溝2 一括	須恵器	杯		> 1.7	* 12.0		外面：底部へら切り後、ナデ 体部回転へラケズリ 高台貼り付け 内面：ナデ ヨコナデ 使用による磨減あり
68	溝2 一括	須恵器	椀		> 2.0	* 9.7		外面：底部回転へラケズリ後、ナデ 体部回転ナデ後、ナデ 高台貼り付け 高台付近に自然釉付着 内面：回転ナデ後、ナデ
69	溝2 下層	須恵器	椀	* 16.5	4.1	* 6.6		外面：底部回転糸切り 体部回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり、 自然釉若干付着 内面：回転ナデ
70	溝2 一括	須恵器	椀	* 16.8	4.6	* 5.0		外面：底部回転糸切り 体部回転ナデ 内面：回転ナデ
71	溝2 一括	須恵器	椀	* 15.8	> 3.9			内外面ともにナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり
72	溝2 下層	須恵器	椀	* 16.4	> 3.4			内外面ともに回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり
73	溝2 下層	須恵器	椀		> 2.9	* 6.0		外面：底部回転糸切り 体部回転ナデ 底部～体部付近に接合痕あり 内面：回転ナデ
74	溝2 一括	須恵器	椀		> 1.8	4.7		外面：底部回転糸切り 体部ナデ 内面：回転ナデ
75	溝2 一括	須恵器	椀		> 1.2	7.0		外面：底部回転糸切り 体部回転ナデ 内面：回転ナデ
76	溝2 一括	須恵器	椀		> 1.0	6.2		外面：底部回転糸切り後、ナデ 体部ナデ 内面：ナデ 使用による磨減あり
77	溝2 一括	須恵器	椀		> 1.1	6.2		外面：底部回転糸切り 体部ナデ 底部～体部付近に接合痕あり 内面：ナデ
78	溝2 一括	須恵器	皿	7.8	1.3	5.4		外面：底部回転糸切り 体部～口縁部回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの 痕跡あり 内面：回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり
79	溝2 一括	須恵器	皿	* 7.8	1.2	* 5.1		外面：底部回転糸切り 体部～口縁部回転ナデ 内面：回転ナデ・ナデ
80	溝2 一括	須恵器	皿	* 8.0	1.7	* 5.4		外面：底部回転糸切り 体部～口縁部回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの 痕跡あり 内面：回転ナデ・ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり
81	溝2 一括	須恵器	皿	* 9.3	1.6	* 5.4		外面：底部回転糸切り 体部ユビオサエ・回転ナデ 口縁部回転ナデ 口縁 部付近に重ね焼きの痕跡あり 内面：回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり
82	溝2 一括	須恵器	壺		> 3.0	* 6.0		外面：底部回転糸切り 胴部回転ナデ 高台貼り付け 内面：回転ナデ
83	溝2 一括	須恵器	片口鉢	30.8	12.8	8.5		外面：底部薬圧痕？ 体部板ナデ・回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あ り 内面：体部板ナデ・ナデ 口縁部回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あ り
84	溝2 下層	須恵器	鉢		> 7.8	* 9.0		外面：底部へら起こし 体部回転ナデ後、ユビオサエ 内面：回転ナデ後、ナデ
85	溝2 下層	須恵器	甕	* 26.3	> 10.0			外面：口縁部ヨコナデ 口縁部～胴部平行タタキ後、ヨコナデ 内面：口縁部ヨコナデ 胴部当て具痕・ナデ 口縁部～胴部付近に接合痕あり
86	溝2 一括	須恵器	甕	* 30.0	> 5.7			外面：口縁部回転ナデ 口縁部～胴部回転ナデ後、タタキ 内面：口縁部回転ナデ 胴部ユビオサエ・ナデ
87	溝2 一括	須恵器	甕		> 3.5	19.1		外面：底部へら起こし後、ナデ 体部へラケズリ 内面：ナデ
88	溝2 一括	白磁	椀		> 3.6			内外面ともに回転ナデ後、施釉 玉縁状口縁
89	溝2 下層	土師器	椀		> 1.2	* 7.0		外面：底部糸切り 体部回転ナデ 内面：回転ナデ・ナデ
90	溝2 一括	土師器	椀		> 1.1	* 9.0		外面：底部糸切り 体部回転ナデ 内面：回転ナデ
91	溝2 一括	土師器	甕	* 24.0	> 5.4			外面：口縁部ヨコナデ 口縁部～胴部タタキ後、一部ユビオサエ 内面：口縁部ヨコナデ 胴部ナデ
92	溝2 一括	土師器	甕	* 28.1	> 5.1			外面：口縁部ヨコナデ 口縁部～胴部付近ユビオサエ 胴部ナデ 内面：口縁部横方向ハケ 胴部ハケ
93	溝2 下層	土師器	甕	* 28.0	> 3.2			外面：口縁部ヨコナデ 内面：口縁部横方向ハケ
94	溝2 一括	土師器	鍋	* 32.0	> 6.3			外面：口縁部ヨコナデ 口縁部ヨコナデ後、ユビオサエ 体部ハケ後、ユビ オサエ 内面：口縁部横方向ハケ 胴部ハケ
95	溝2 下層	土師器	羽釜		> 3.7			羽釜の鈔部片 内外面ともにハケか 鈔貼り付け
96	溝2 一括	土師器	飯蛸壺		> 3.1			飯蛸壺の吊手部片 外面：ナデ
97	溝2 一括	瓦	平瓦	長さ > 11.7	幅 > 12.5	厚さ 2.4		凸面：ナデ 凹面：布目痕 側面：ナデ

表4 遺物観察表(3)

報告 番号	出土 遺構	種別	器種	法量 (cm)				所見	
				口径	器高	底径	腹径		
98	溝2 一括	瓦	平瓦	長さ > 8.5	幅 > 11.4	高さ 2.3		凸面：縄タタキ後、ナデ 凹面：布目痕 側面：ケズリ	
99	溝2 一括	瓦	平瓦	長さ > 9.2	幅 > 10.5	高さ 1.8		凸面：ナデ 凹面：布目痕 側面：ケズリ 一部凸面に及ぶ	
100	溝2 一括	瓦	平瓦	長さ > 7.2	幅 > 12.4	高さ 1.8		凸面：ナデ 凹面：布目痕 端面：ケズリ後、ナデ	
101	溝2 下層	瓦	平瓦	長さ > 11.1	幅 > 6.7	高さ 2.0		凸面：縄タタキ後、ナデ 凹面：布目痕 端面：ナデ	
102	溝2 一括	瓦	平瓦	長さ > 8.5	幅 > 10.2	高さ 1.6		凸面：ナデ 凹面：布目痕・一部ナデ 側面：ケズリ後、ナデ 端面：ナデ	
103	溝2 一括	瓦	平瓦	長さ > 12.3	幅 > 7.2	高さ 2.1		凸面：縄タタキ 凹面：布目痕 側面：ケズリ 端面：ケズリ後、ナデ	
104	溝2 一括	瓦	平瓦	長さ > 8.1	幅 > 7.3	高さ 1.6		凸面：ナデ 凹面：布目痕・一部ナデ 側面：ナデ	
105	溝2 一括	瓦	平瓦	長さ > 6.7	幅 > 7.7	高さ 1.7		凸面：ナデ 凹面：布目痕 側面：ナデ 端面：ケズリ	
106	溝2 一括	瓦	平瓦	長さ > 8.6	幅 > 6.3	高さ 2.0		凸面：縄タタキ 凹面：布目痕 一部側面に及ぶ	
107	溝2 一括	瓦	平瓦	長さ > 5.5	幅 > 5.9	高さ 1.7		凸面：縄タタキ 凹面：布目痕 側面：ケズリ 端面：ナデ	
108	溝2 下層	瓦	平瓦	長さ > 7.0	幅 > 6.6	高さ 2.0		凸面：ナデ・ユビオサエ 凹面：布目痕 側面：ナデ 端面：ケズリ	
109	溝2 一括	瓦	平瓦	長さ > 5.8	幅 > 8.6	高さ 1.1		凸面：布目痕 凹面：ナデ 側面：ナデ 端面：ケズリ	
110	溝2 一括	瓦	軒丸瓦			高さ > 2.4	径 12.5	軒部のみ 三巴文	
111	溝2 一括	瓦	丸瓦	長さ > 10.5	幅 > 5.9	高さ 1.1		凸面：縄タタキ 凹面：布目痕 側面：ケズリ	
112	溝2 一括	石器	表9参照						
113	溝3 一括	須恵器	杯		> 2.0			外面：底部ヘラ切り ナデ 内面：回転ナデ後、一部ナデ	
114	溝3 一括	瓦	平瓦	長さ > 17.8	幅 > 14.5	高さ 1.9		凸面：縄タタキ 凹面：磨滅のため調整等不明 端面：ケズリ後、ナデか	
115	溝3 一括	瓦	平瓦	長さ > 10.9	幅 > 12.7	高さ 1.8		凸面、凹面ともに磨滅のため調整等不明 端面：ケズリか	
116	溝3 一括	瓦	平瓦	長さ > 9.5	幅 > 14.2	高さ 2.6		凸面、凹面、側面、端面ともに磨滅のため調整等不明	
117	溝3 一括	瓦	平瓦	長さ > 12.5	幅 > 8.2	高さ 1.6		凸面、凹面ともに磨滅のため調整等不明	
118	溝3 一括	瓦	丸瓦	長さ > 18.0	幅 > 11.8	高さ 2.1		凸面：縄タタキ後、ナデ 凹面：布目痕 側面：ケズリ後、ナデか	
119	溝4 一括	須恵器	椀		> 1.7	* 4.6		外面：底部ヘラ切り後、ナデ 体部回転ナデ・ナデ 内面：ナデ	
120	溝4 一括	土師器	椀		> 3.4	9.2		外面：脚端部ナデ 体部ナデ 高台貼り付け 内面：ナデ	
121	溝4 一括	土師器	甕	* 19.2	> 7.5			外面：口縁部ヨコナデ 胴部タタキ 内面：口縁部ヨコナデ 口縁部～胴部付近ナデ 胴部ハケか	
122	溝4 一括	土師器	甕		> 6.3			外面：口縁部～胴部付近ヨコナデ 胴部タタキ 煤付着 内面：口縁部ヨコナデ 胴部ナデ	

表5 遺物観察表(4)

報告 番号	出土 遺構	種別	器種	法量 (cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径	
123	溝 4 一括	瓦	平瓦	長さ > 10.9	幅 > 7.0	厚さ 2.1		凸面：縄タタキ 凹面：布目痕 側面：ケズリ
124	溝 4 一括	瓦	平瓦	長さ > 9.1	幅 > 7.3	厚さ 2.0		凸面：縄タタキ 凹面：布目痕 端面：ナデ
125	墓壇 1 一括	青磁	椀	15.8	6.8	5.5		外面：施釉 削り出し高台 底部に付着物（トチン痕か） 内面：口縁部直下に沈線文 劃花後、施釉
126	墓壇 1 一括	土師器	皿	8.7	1.3			内外面ともに器壁の大部分が剥離のため調整等不明 口縁部ヨコナデか
127	墓壇 1 一括	土師器	皿	8.6	1.3			外面：底部ユビオサエ 体部ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ
128	墓壇 1 一括	土師器	皿	8.6	1.6			外面：底部ユビオサエ 体部ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ
129	墓壇 1 一括	土師器	皿	8.3	1.7			外面：底部ユビオサエ 体部ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ
130	墓壇 1 一括	土師器	皿	8.1	1.6			外面：底部ユビオサエ 体部ヨコナデ 内面：ヨコナデ・ナデ
131	墓壇 1 一括	金属製品	表 8 参照					
132	性格不明 2 一括	弥生土器	壺・甕		> 2.9	* 5.9		外面：底部ナデ？ 器壁の大部分が剥離 内面：ユビオサエ？ 器壁の大部分が剥離
133	包含層・表土	縄文土器	深鉢		> 5.0			外面：胴部条痕文 煤付着 内面：ナデ？
134	包含層・表土	縄文土器	深鉢		> 5.4			内外面ともに磨滅のため調整等不明 接合痕あり
135	包含層・表土	須恵器	杯蓋		> 2.0			外面：ヘラ切り 回転ナデ 内面：回転ナデ後、一部ナデ
136	包含層・表土	須恵器	杯蓋	15.0	3.5			外面：回転ヘラケズリ・ナデ 擬宝珠形つまみ貼り付け 内面：回転ナデ
137	包含層・表土	須恵器	杯蓋	* 15.2	> 3.5			内外面ともに回転ナデ
138	包含層・表土	須恵器	杯蓋	* 20.3	2.8			外面：回転ヘラケズリ後、ナデ 回転ナデ 擬宝珠形つまみ貼り付け 内面：回転ナデ後、一部ナデ
139	包含層・表土	須恵器	杯蓋	* 19.7	> 1.6			外面：回転ヘラケズリ・ナデ 重ね焼きの痕跡あり 内面：回転ナデ後、一部ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり
140	包含層・表土	須恵器	杯	* 15.6	> 3.0	* 12.2		外面：底部回転ヘラケズリ 体部回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり 内面：回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり
141	包含層・表土	須恵器	杯	* 14.6	2.8	* 10.8		外面：底部ヘラ切り後、ナデ 体部回転ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり 火襷あり 内面：回転ナデ後、一部ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり
142	包含層・表土	須恵器	杯	* 15.0	> 2.7	* 11.9		外面：底部ヘラ切り後、ナデ 体部回転ナデ 内面：回転ナデ ナデ 火襷あり
143	包含層・表土	須恵器	杯	* 13.0	3.8	* 10.0		外面：底部回転ヘラケズリ 体部回転ナデ 高台貼り付け 内面：回転ナデ後、一部ナデ
144	包含層・表土	須恵器	杯	* 14.0	3.8	* 11.2		外面：底部回転ヘラケズリか 体部回転ナデ 高台貼り付け 内面：回転ナデ後、一部ナデ
145	包含層・表土	須恵器	椀	15.8	5.0	5.6		外面：底部糸切り 体部回転ナデ後、一部ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり 内面：回転ナデ後、一部ナデ 口縁部付近に重ね焼きの痕跡あり
146	包含層・表土	須恵器	壺		> 8.6			壺の頸部片 外面：回転ナデ 現状で口縁部側に凹線 2 条 自然袖付着 内面：回転ナデ 頸部～胴部の一部に接合痕あり 口縁部側に自然袖付着
147	包含層・表土	須恵器	壺		> 4.6	* 10.0		外面：回転ヘラケズリ ナデ 高台貼り付け おもに高台付近に自然袖付着 内面：回転ナデ
148	包含層・表土	須恵器	甕	* 12.6	> 5.0			外面：口縁部回転ナデ 胴部タタキか 自然袖付着 内面：口縁部回転ナデ 胴部当て具痕
149	包含層・表土	須恵器	甕		> 3.8			甕の口縁部片 外面：回転ナデ後、櫛描波状文 内面：回転ナデ 口縁部付近に自然袖付着
150	包含層・表土	土師器	甕	* 21.0	> 10.2		* 18.5	外面：口縁部ヨコナデ？ 胴部ハケ 磨滅のため調整等不明瞭 内面：口縁部ヨコナデ？ 胴部ハケ？ 磨滅のため調整等不明瞭
151	包含層・表土	土製品	土錘	長さ > 6.4	幅 1.7	厚さ 1.7		棒状土錘の破片 ナデ 穿孔部内に付着物あり
152	包含層・表土	瓦	平瓦	長さ > 10.3	幅 > 10.7	厚さ 2.2		凸面：格子タタキ 凹面：布目痕
153	包含層・表土	瓦	平瓦	長さ > 18.2	幅 > 20.8	厚さ 2.4		凸面：縄タタキ後、ナデ 凹面：布目痕 側面、端面ともにケズリ
154	包含層・表土	瓦	平瓦	長さ > 19.3	幅 > 11.0	厚さ 1.9		凸面：縄タタキ後、ナデ 凹面：布目痕 側面：ケズリ ナデ

表 6 遺物観察表 (5)

報告 番号	出土 遺構	種別	器種	法量 (cm)				所見
				口径	器高	底径	腹径	
155	包含層・表土	瓦	平瓦	長さ > 26.4	幅 > 18.5	厚さ 1.9		凸面：縄タタキ後、ナデ 凹面：布目痕 側面：磨滅のため調整等不明 端面：ナデ
156	包含層・表土	瓦	平瓦	長さ > 21.1	幅 > 11.6	厚さ 2.3		凸面：縄タタキ後、ナデ 凹面：布目痕 側面、端面ともに磨滅のため調整等不明
157	包含層・表土	瓦	平瓦	長さ > 16.2	幅 > 17.4	厚さ 2.1		凸面：縄タタキ後、ナデ？ 凹面：布目痕 側面：ケズリ後、ナデ 端面：ケズリ
158	包含層・表土	瓦	平瓦	長さ > 18.0	幅 > 13.8	厚さ 1.8		凸面：縄タタキ後、ナデ？ 凹面：布目痕？ 側面、端面ともにナデ
159	包含層・表土	瓦	平瓦	長さ > 19.7	幅 > 16.1	厚さ 2.6		凸面：縄タタキ後、ナデ？ 凹面：布目痕 ナデ？ 側面、端面ともにナデ
160	包含層・表土	瓦	平瓦	長さ > 15.1	幅 > 16.2	厚さ 2.3		凸面：縄タタキ 凹面：布目痕 側面：ケズリ
161	包含層・表土	瓦	平瓦	長さ > 16.3	幅 > 22.3	厚さ 2.6		凸面：縄タタキ後、ナデ 凹面：布目痕 側面、端面ともにケズリ
162	包含層・表土	瓦	丸瓦	長さ > 8.7	幅 > 10.4	厚さ 1.6		凸面：縄タタキ後、ナデ 凹面：布目痕 側面：ケズリ
163	包含層・表土	瓦	丸瓦	長さ > 10.2	幅 > 7.9	厚さ 1.8		凸面：ナデ 凹面：布目痕 側面、端面ともにケズリ

表7 遺物観察表 (6)

報告 番号	出土 遺構	種別	器種	法量				備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	
19	掘立柱建物 3 P7 中層	鉄器	刀子	12.7	1.3	0.4	27.8	両関
51	土坑 13 一括	鉄器	釘	9.8	1.25	1.0	57.6	
131	墓壇 1 一括	鉄器	飾金具	4.2	3.1	0.5	19	

表8 金属製品観察表

報告 番号	出土 遺構	種別	器種	法量				石材	備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
112	溝 2 一括	石器	石鏃	> 2.05	> 1.65	0.25	0.7	サヌカイト	凹基式、未成品

表9 石器観察表

### 第三章 まとめ

今回の発掘調査は、ほ場整備事業における水路工事等によって遺跡が破壊されてしまう範囲について、3か所に分かれる調査区を設定し合計約1,500㎡を調査した。その結果、飛鳥・奈良時代と平安・鎌倉時代を中心とする遺構を合計409基検出した。また、それらの遺構を覆う遺物包含層中からは、上記の時期の遺物のほか縄文時代や弥生時代の遺物なども出土した。

本稿では、今回検出した遺構のうち、出土遺物や遺構の軸方位などから時期の検討が可能と判断したものを対象に検討を行い、上村池遺跡における今回調査地点の土地利用の変遷について述べてまとめとしたい。

遺構の時期を検討する材料として、主に遺構埋土から出土した遺物を基準とした。しかし、集落を構成する中心の遺構が掘立柱建物であることや、後世の水田開発により元々緩斜面だった土地が棚状に削平されていることなどのため、遺物を伴わない遺構が多く存在していた。そのため、補助的な検討材料として建物の軸方位からのアプローチを取り入れ、遺物を伴う建物跡と近似する軸方位を持つ建物は同時期のものと判断して分類を行った。そうした検討により、今回調査における遺構の時期は、7世紀代（飛鳥時代）、8世紀代（奈良時代）、12世紀後半～13世紀前半（平安時代末頃～鎌倉時代初頭）の3時期を中心としていることがわかった。

**7世紀代（飛鳥時代）** 竪穴建物1、掘立柱建物1・2、土坑1・2、ピット1の6基をこの時期の遺構と判断した（第91図）。このうち竪穴建物1、掘立柱建物1、土坑1からは神野大林古窯跡2号窯の製品と類似する須恵器が出土しており、7世紀前半頃に当該地に初めて集落が営まれたと考えられる。後続する遺構として掘立柱建物2があり、7世紀後半から末頃とされる白沢6号窯の古い段階のものと類似する須恵器が出土している。この時期の6基の遺構はすべて今回調査範囲の西側エリアにあたる調査区①から検出されており、この段階ではまだ小規模な集落といえる。

特徴的な遺物として、6基の遺構のうち竪穴建物1・土坑2・ピット1の3基から出土したイイダコ壺や、ピット1から出土した棒状土錘がある。両者とも海での漁労活動に用いる道具であることから、小規模な集落とはいえ、加古川や草谷川を介して海浜部の集落と交流を持っていたものと考えられる。

**8世紀代（奈良時代）** 7世紀代の集落を継続する形で8世紀前半の遺構が展開する。掘立柱建物3・4・12、土坑3・5・6・12・13、ピット2～5、溝1・3の合計14基が該当し、遺構数が増え、遺構が展開する範囲が調査区①から150mほど東にある調査区③まで広がり、集落の最盛期と考えられる（第92図）。また、出土遺物から8世紀代の遺構と考えられる掘立柱建物5、土坑4・7～9、ピット6や、遺物は乏しいものの建物の方位からこの時期に該当すると判断した掘立柱建物6・7・11・15～18などがあり、これらを含めると遺構数は27基となり、この時期の集落の充実ぶりが感じられる。

建物の特徴としては、7世紀代にみられた竪穴建物は姿を消し、掘立柱建物の軸方位N-15°-WやN-54°-Wと、それに直行する方位を持つ建物群の構成が中心となる。中でも調査区①の南側に位置する掘立柱建物3は、方形の柱掘方の一辺が1mを超え、官衙建物に匹敵する大型の建物であり、今回の調査範囲では全容を明らかにできなかったものの、桁行6間、梁行2間以上と規模も今

回検出の建物では飛び抜けて大きい。各柱穴の柱掘方の深さをみると、斜面の上方にあたる北側は浅く、南側に行くほど深くなっている。官衙建物の柱掘方の深さは一般的に0.8 m以上とされており、同様の平面規模を持つ今回検出の柱穴は、後世の水田開発等で大きく削平を受けた状態で検出されていることが明らかな上、柱掘方底面の標高が斜面の傾斜に対応していることから、建物建築時には元々の斜面を平坦にすることなく柱を立て並べ、床面で水平を調節していたものと考えられる。これは他の掘立柱建物にもおおむね共通しており、地形に合わせた工夫をしながら集落を営んでいた様子が看取される。

掘立柱建物3は、軸方位N-15°-Wを示し、7世紀後半～末頃とした掘立柱建物2を切って建てられている。建物2と直行する配置となることから、7世紀末の軸方位を引き継いで8世紀の比較的早い段階に建てられたものと考えられる。一方、本遺構は軸方位N-54°-Wの掘立柱建物4に切られており、8世紀前半のうちに軸方位に変化があり、建物3は姿を消したようである。上記のことから、今回8世紀前半とした遺構群は、方位の異なる建物3の段階と建物4の段階の2時期に分けられると言えそうである。建物3と同軸または直行する建物には掘立柱建物5・6・7・11・15・16・18があり、建物4と同軸または直行する建物には掘立柱建物12・17がある。調査範囲の制約もあり比較は難しいが、前後半とも、それぞれの建物は掘立柱建物3を除いては桁行3間、梁行2間の一般的な建物が中心とみられ、いずれも柱間が狭く方形の柱掘方を採用している例が多い。また、斜面に建物を建て、床面で水平を調節する場合、床を支えるための床束柱が必要になるはずであるが、今回の調査地は全体的に削平が著しく、掘立柱建物3のP7でわずかに痕跡を確認できた程度である。なお、今回調査で検出された建物はすべて側柱建物で、倉庫になるような総柱建物は検出されていない。ほかに、掘立柱建物5では、東面の中央に配置された柱穴(P2)から礫やスサ混じりの焼土塊が出土しており、屋内の東面に竈が設置されていた可能性がある。

建物以外の遺構では、土坑3・12が注目される。両者とも一辺1 mを超える方形様の大型土坑で、断面観察や遺構の形状から建物の柱穴であることはほぼ確実である。今回の調査では、調査範囲が狭く対応する柱穴を検出できなかったことから土坑として報告しているものの、付近に同規模の柱穴が残されているものと考えられ、掘立柱建物3と同規模の建物が複数存在した可能性がある。特に土坑3は建物3に近く、関連性が注目される。

遺物を見ると、出土する須恵器は白沢6号窯の新しい段階のものや、同3号窯、志方窯跡群の中谷古窯跡4号窯に類似するものなどが確認でき、7世紀代から引き続き近在の窯から入手したものが中心と言えそうである。ほかに、この時期の出土品として特徴的なものに瓦がある。掘立柱建物3・17、土坑12、溝3から平瓦や丸瓦が出土しており、量的には少ないものの、付近に瓦葺きの建物が存在した可能性がある。当該地は、古くから古代瓦が拾えるとして上村池遺跡とともに「古堂廃寺」という遺跡が登録されているが、今回の調査では古代寺院を想定できるような遺構は見つかっていない。しかし、今回調査前に実施した試掘調査や過去の地元研究者による表面採集においても瓦が採取されており、中には当地から西へ0.9kmの場所に位置する西条廃寺の軒丸瓦と同文、同範の瓦も含まれることから(今里1989、村上2002)、今後の調査の進展によって古代寺院の痕跡が発見される可能性もある。なお、古代寺院を想定する以外に、当地の斜面を利用して瓦を焼成していた可能性も指摘されたことがあるが(村上2002)、今回出土瓦を窯跡研究者の森内秀造氏に確認していただいたところ、地勢的に斜面も緩く、瓦をみても窯跡を想定できるような出土のあり方は見られないとの見解であった。

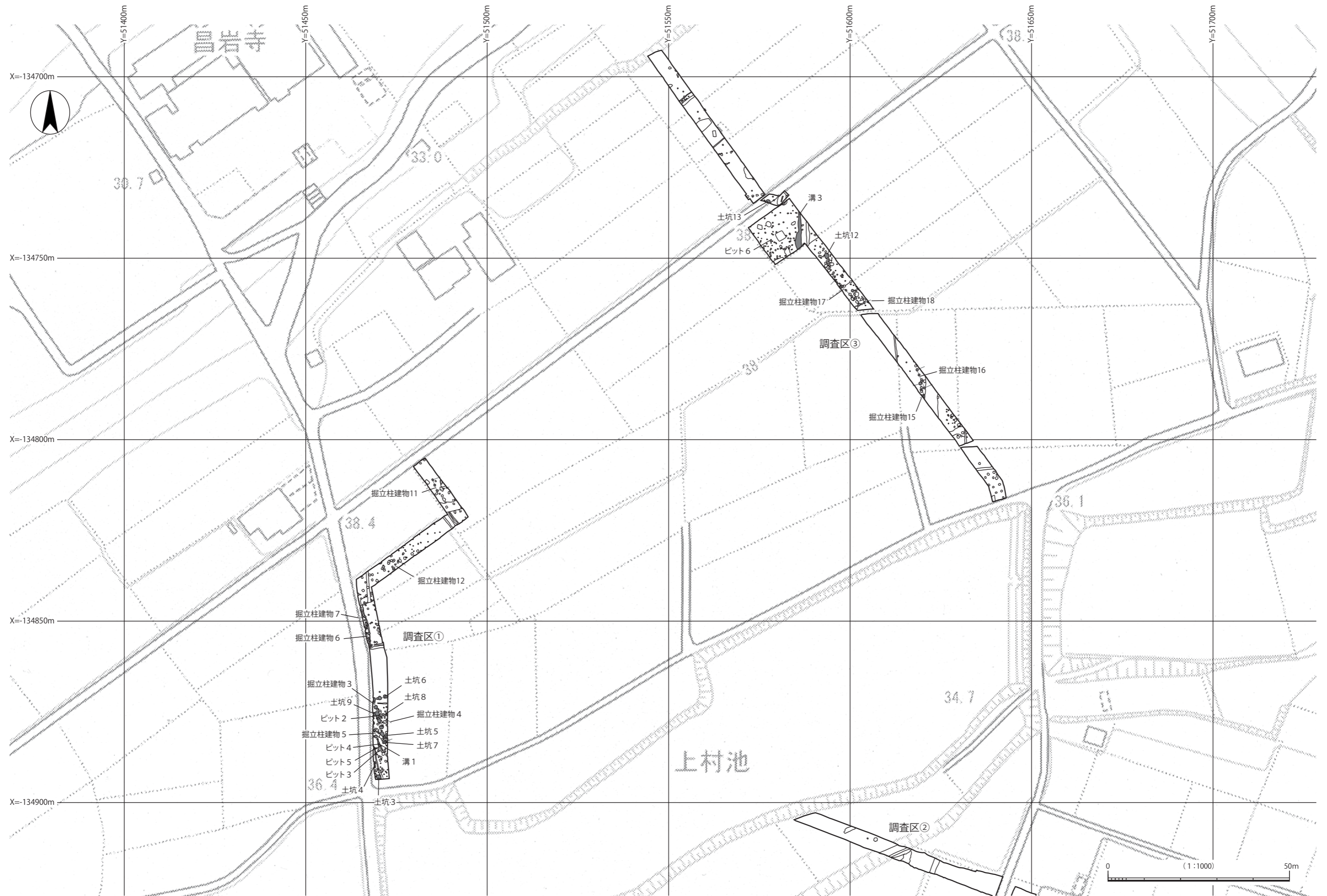
その他の遺物としては、土坑4から焼塩工程で用いる製塩土器や、ピット2から暗文の施された土



第91図 遺構配置図（7世紀代）







第92図 遺構配置図(8世紀代)



師器が出土するなど、官衙関連遺跡で報告例の多い遺物が少量ながら認められ、大型建物の存在や瓦の出土も含め、当該時期の集落の様相を慎重に検討していく必要がある。

**12世紀後半～13世紀前半（平安時代末頃～鎌倉時代初頭）** 8世紀前半に最盛期を迎え、一般集落ではみられないような大型の建物が建てられた上村池遺跡は、その後集落が消滅したか別の場所に移動したらしく、しばらくは目立った土地利用が見られなくなる。しかし、12世紀の後半になって再び当地において広範囲にわたる活動の痕跡が認められるようになる。この時期の遺構と判断したものは、掘立柱建物20～30、柱穴列2・3、ピット7・8、溝2・4、墓壇1、粘土採掘坑1の合計19基である（第93図）。

この時期の建物はすべてN-80°～90°-Eかそれに直行する軸をもち、東西南北を強く意識していることがわかる。建物の特徴は8世紀代のものと大きく異なり、柱間が広いわりに各柱穴は小さく、簡素な小屋程度の建物で、所々に柵の痕跡と考えられるような柱穴列が配置されている。

建物以外では、調査区③の北側で検出された墓壇1が目される。長方形の遺構内床面に龍泉窯系青磁碗や土師器皿5枚が副葬されており、埋土の断面観察から木棺墓であったと考えられる。副葬品は北側に集中しており、遺骸の頭を北側へ向けて埋葬されたものと判断できる。中世の遺跡で確認される屋敷墓と考えられるが、今回調査ではこの遺構の周辺は他と比べ特に建物跡が少ない。当時の景観としては、斜面北側の最上位に墓が築かれ、南側の斜面上に小規模な建物群が並ぶ状況である。いずれにせよ、この被葬者は大陸からの舶載磁器を保有する当地の有力者と考えられ、付近の荘園管理に関わるような地位にあった人物かもしれない。また、この時期になるとこれまで遺構の確認されていなかった谷（現在の池）向かいの調査区②で粘土の採掘活動を行った痕跡も確認されている。調査区②は、今回調査区のうち最も高低差のある斜面上に立地しており、斜面上方は凝灰岩質の岩盤を基盤とし、下方は粘性シルトを基盤としている。その境付近に粘土帯があり、粘土採掘坑1が掘られている。上層の埋土から遺物がわずかに出土し、平安時代後期以降の須恵器が出土したことから当該時期の遺構と判断した。墓壇1の被葬者の活動の一端を示すものとして興味深い。

ほかに、遺物を多く出土した遺構として溝2がある。深さ0.2mほどの浅く平らな溝であるが、底面付近から今回調査で最も多くの遺物が出土した。遺物には8世紀代のものや弥生時代と考えられる石鏃なども含まれるが、12～13世紀のものを主体としている。須恵器は底部を糸切りされたものを中心とし、兵庫県明石市に所在する魚住古窯跡群の製品が多い。土師器にも糸切りされたものが含まれている。また、第83図88は華南産の舶載白磁碗で、墓壇1の青磁碗を含め、改めて舶載磁器を複数所有できる力を持っていた集団であることがわかる。ほかに、瓦の出土も多くみられ、今回調査で唯一出土した軒瓦として、周縁に珠文帯を持たない左巻きの三巴文軒丸瓦（第84図110）が出土している。8世紀前半の遺構から出土した瓦と同様に、総瓦葺きの建物を想定するには量的に少ないといえるが、他の集落遺跡において軒部周辺のみ瓦を葺いた建物などの報告例があることから、付近に瓦葺きの建物が存在した可能性は否定できない。

**その他の時代** 今回の調査では、これまで述べた時代以外の遺物も数点確認している。調査区①南側の遺物包含層中から出土した縄文土器（第86図133・134）については、縄文時代後期末～晩期前半に比定される滋賀里式と考えられ、本遺跡から北東0.6kmの尾根先端に位置する宮山遺跡との関連が目される。宮山遺跡は、縄文時代から平安時代の集落跡として周知されており、調査年次が古くて詳細はよくわからないものの、縄文時代後期の竪穴建物等が検出されている。今回出土土器は、そ

の同時期か後続する時期にあたりと考えられ、市内全体でも出土例の少ない縄文時代遺物の貴重な出土例となった。

弥生時代の遺物は、遺物包含層と遺構埋土に混入する形で土器や石器が確認されている。図化できたものは溝2から出土した石鎌（第84図112）と性格不明遺構2から出土した土器（第86図132）のみであるが、水稲耕作に適した低地周辺に集落を営む傾向の強い弥生時代の人々が何らかの理由で高台にあたる当該地において活動した痕跡といえるかもしれない。付近には、弥生時代後期の甕棺墓として登録のある播磨堂遺跡などもあり、当該地も含めた周辺地に母体となる集落が存在するものと考えられる。

以上、今回調査における遺構の変遷と、調査から読み取れた遺構の展開状況等について解釈を試みた。その結果、7世紀代に成立した集落が、8世紀前半に最盛期を迎え、その後一旦途絶えたものの、12・13世紀になって舶載磁器を保有する有力者の集落として再び土地利用されるようになる様子を捉えることができた。

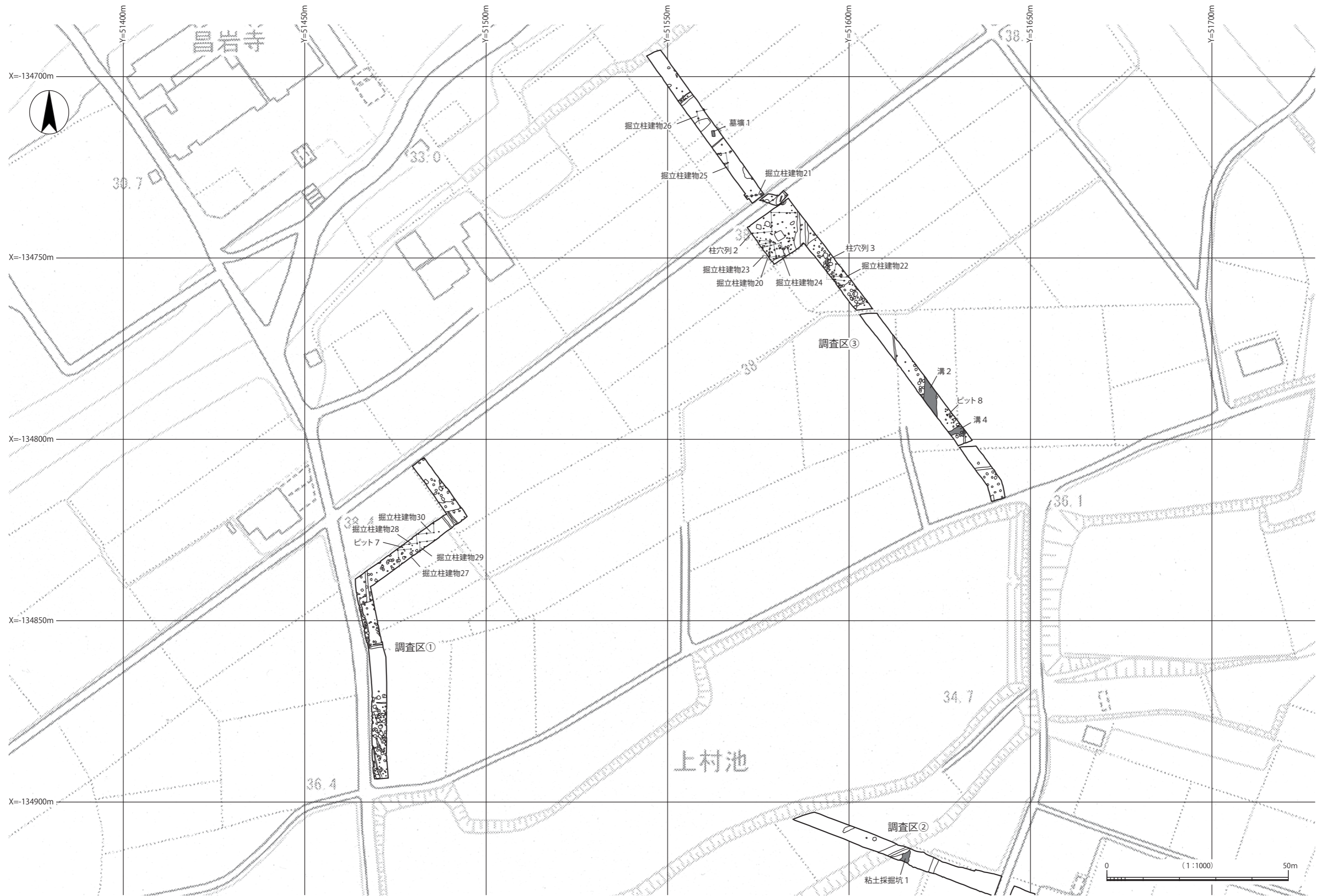
今回の調査は、ほ場整備事業に伴って水路工事が行われる範囲を主な対象としていたため、3か所に分かれる細長い調査区での調査となった。そのことで、広範囲に及ぶ遺構の展開状況のある程度把握できる調査成果が得られたと言える。一方で、8世紀頃の一般集落にはみられないような大型の建物を伴う集落が、水の得にくい高台で、土地利用のしづらい斜面地であるこの地になぜ成立したかなど、今回調査の成果だけでは解決できないような新たな検討材料も多く生まれた。『播磨国風土記』などの文献史料を参考にすると、当該地は「賀古郡望理里」に含まれると考えられ、今後そうした文献史料からのアプローチも含めて上村池遺跡の性格を検討していく必要がある。

上村池遺跡では、今後もほ場整備事業に伴う発掘調査が予定されており、その際に改めて今回の調査成果とともに本遺跡の集落像に迫っていきたいと思う。

最後に、調査と整理に助力と援助をくださった多くの方々と、調査へ参加したすべての皆さまに心よりお礼申し上げます。また、今回の調査では発掘調査から報告書作成に至るまで、森内秀造氏から多くのご教示を賜りました。末筆ながら感謝の意を申し上げます。

#### 引用・参考文献

- 今里幾次 1989 「古代寺院とその檀越」『加古川市史第1巻』加古川市  
上田哲也 1983 「宮山遺跡」『兵庫県大百科事典下巻』神戸新聞出版センター  
置田雅昭 1989 「米作りと金属器」『加古川市史第1巻』加古川市  
岸本一宏 2011 「F地区の調査」『坂元遺跡Ⅲ』兵庫県教育委員会  
篠宮 正・森内秀造ほか 2010 『神野大林窯跡群』兵庫県教育委員会  
田中眞吾 1989 「加古川市付近の地形と地質」『加古川市史第1巻』加古川市  
新田宏子・平尾英希 2018 「志方窯跡群と東播西部の須恵器生産」『須恵器生産からみた播磨』第19回播磨考古学研究会実行委員会  
松下 勝 1984 「加古川流域の遺跡」『日本の古代遺跡3 兵庫南部』保育社  
村上 立 2002 「上村池採集の瓦について」『東播磨第9号』東播磨地域史懇話会  
森内秀造・深江英憲 1999 「白沢3・5号窯」兵庫県教育委員会  
森内秀造・岡本一秀ほか 2000 『志方窯跡群Ⅰ-中谷支群-』兵庫県教育委員会  
山田清朝 2012 「望塚について」『東沢1号墳』兵庫県教育委員会  
山中敏史ほか 2003 『古代の官衙遺跡Ⅰ』奈良文化財研究所  
山中敏史ほか 2004 『古代の官衙遺跡Ⅱ』奈良文化財研究所  
山本雅和 1983 「八幡町上西条採集の遺物」『鹿児第83号』加古川史学会  
吉井秀夫 1982 「古堂廃寺周辺の瓦・須恵器散布地」『鹿児第68号』加古川史学会  
吉識雅仁・中村 弘 1998 「白沢放山遺跡（白沢6号窯）」兵庫県教育委員会  
渡辺 昇 2009 「おわりに」『坂元遺跡Ⅱ』兵庫県教育委員会



第93図 遺構配置図（12世紀後半～13世紀前半）